

文化庁委託事業報告書

危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究
(八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言)

2014年3月

琉球大学
国際沖縄研究所

危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究
(八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言)

目 次

本事業の概要	石原昌英	1
第1部 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究		
東京都伊豆諸島八丈方言	金田章宏	3
鹿児島県沖永良部方言	木部暢子	15
鹿児島県与論方言	木部暢子	29
沖縄県幸喜方言	かりまたしげひさ	47
沖縄県首里方言	當山奈那	57
沖縄県奥武方言	中本 謙	71
沖縄県久米島方言	仲原 穰	83
沖縄県宮良方言	クリストファー・デイビス	93
沖縄県黒島方言	荻野千砂子	103
第2部 危機的な状況にある言語・方言の保存継承に関するインタビュー調査		
しまくとぅば復興に向けた取組と課題	親川志奈子	117
第3部 危機的な状況にある言語・方言に関する文献資料		
危機的な状況にある言語・方言に関する文献資料一覧	石原昌英	129
—八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言—		
あとがき	石原昌英	178

本事業の概要

石原昌英

1. 事業の目的

本事業は、我が国における言語・方言のうち、消滅の危機にあるものについて、ユネスコが平成21年に発行した“Atlas of the World’s Languages in Danger”の内容及び、文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書」（平成23年2月・国立国語研究所）を参照の上、消滅の危機にある言語・方言のうち、八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言について、当該方言の特徴、地域での伝承の在り方、危機の程度等の実態に関する調査及び分析を行うものである。また、当該地域における消滅の危機にある言語・方言の実態把握のために必要な調査及び分析を行う。

2. 実施内容

上記の事業目的にしたがい、消滅の危機に瀕しているとされる八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言について、以下の調査を実施した。なお、当該方言の調査については、文化庁委託事業『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』（平成23年2月・国立国語研究所）に記載された内容及び方法に準じておこなった。調査期間は、平成25年7月24日から平成26年3月25日の間の7ヶ月間であった。

東京都の八丈島（八丈方言）、鹿児島県の沖永良部島と与論島及び沖縄県の名護市幸喜（国頭方言）、沖縄県的那覇市首里・南城市奥武島・久米島（沖縄方言）及び沖縄県の石垣市宮良・竹富町黒島（八重山方言）において、方言話者をインフォーマント（情報提供者）として当該方言の言語的な特徴（音声、語彙、文法等）及び方言教育等の保存・継承に向けた取組について調査した。これらの地域を選定した理由は、研究分担者がこれまで方言調査を実施した経験があり、与論島のように保存・継承活動が盛んに行われているからである。また、下記の「言語の活力と危機度」の参考となるよう、当該地域の人口資料を調べ、現地調査との対照比較を行った。

ユネスコの消滅危機言語に関する専門家グループ(UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages)が2003年に発表した「言語の活力と危機度」(Language Vitality and Endangerment)で提唱された9項目からなる基準を適用し、当該調査地域で話されている方言の活力と危機度を分析した¹。なお、当該地域の言語の活力と危機度については、調査を行った担当者が分析した。

琉球大学国際沖縄研究所が平成24年度に実施した『危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業（奄美方言・宮古方言・与那国方言）』では、八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言が話されている地域においてもアンケート調査を行った。その調査で明らかとなった事項について、沖縄島中南部で話される沖縄方言の話者にインタビュー調査（追加調査）を実施し、沖縄方言の活力と危機度に関する参考データ（復興活動に関する課題など）を入手した。

¹ 「言語の活力と危機度」は、2011年の時点で、評価され、見直しが進められているようであるが（UNESCO 2011）、本事業では2003年に提唱された基準を用いた。

国立国語研究所が平成22年度に実施した調査及び琉球大学国際沖縄研究所が平成24年度に実施した調査を踏襲し、八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言に関する研究文献・資料等を調査した。

現地調査の結果等に基づいた言語の活力と危機度や言語・方言の危機については、平成26年2月23日に沖縄県立博物館・美術館講座室において、シンポジウム「シマのことばの危機」を開催し、研究者だけでなく一般市民への周知を図った。

3. 業務実施体制

本事業の実施体制は下記の通りであった。

課 題 項 目	実 施 場 所	研 究 分 担 者
方言の実態に関する現地調査	東京都八丈町、鹿児島県沖永良部島・与論島、沖縄県名護市・那覇市・南城市・久米島・石垣島・黒島	金田章宏、木部暢子、狩俣繁久、當山奈那、仲原穰、中本謙、クリストファー・デイビス、荻野千砂子
文献リスト・話者人口の調査	沖縄県西原町（琉球大学）・当該調査地	石原昌英、金田章宏、木部暢子、狩俣繁久、當山奈那、仲原穰、中本謙、クリストファー・デイビス、荻野千砂子
保存・継承の実態に関するインタビュー（平成24年度実施事業の追加調査）	那覇市、沖縄市、浦添市、他	石原昌英、親川志奈子
危機的な状況にある言語・方言の実態に関するシンポジウム	那覇市	石原昌英、金田章宏、木部暢子、狩俣繁久、中本謙、荻野千砂子（発表者等のみ）

注：親川志奈子と當山奈那は琉球大学人文社会科学研究所博士課程後期の学生である。

参考文献

UNESCO (2011) UNESCO'S Language Vitality and Endangerment Methodological Guideline: Review of Application and Feedback since 2003. (http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CI/CI/pdf/unesco_language_vitaly_and_endangerment_methodological_guideline.pdf)アクセス：2014年1月31日

第 1 部

危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究

東京都伊豆諸島八丈方言

東京都伊豆諸島八丈方言

金田章宏

1 八丈町、青ヶ島村の概要

八丈島は東京から南に約 290 キロのところにある、面積約 68 平方キロの島(一島一町)で、伊豆諸島では大島について大きい。八丈富士(西山)と三原山(東山)という新旧二つの山がくっついたひょうたん型をしていて、三原山をとりかこむように旧 5 ヲ村が点在する。二つの山のあいだの平坦地である坂下地区の大賀郷(おおかごう)と三根(みつね)に人口の大半が集中し、島外からの移住者も少なくない。かつての難所である大坂トンネルを越えた坂上地区にある檜立(かしたて)、中之郷(なかのごう)、末吉(すえよし)の 3 地区は、海岸からの急斜面をあがった比較的緩やかな傾斜地を中心に集落を形成している。かつては島内で稲作もおこなわれていたが、現在では学校教育の一環で実施する程度で、フェニックスロベレニーなどの切り葉や観葉植物が産業の中心となっている。

八丈島では、縄文時代前期の遺跡が 2 ヲ所、弥生時代後半からの遺跡が 1 ヲ所発見されているが、その間をつなぐような遺跡は発見されていない。八丈島は伊豆小笠原諸島における縄文文化の最南端の地である。また、八丈島からさらに 700 キロ南の、これまで考古遺跡の存在が確認されていなかった小笠原諸島でも、近年になって 2 千年ほどまえとみられる遺跡が発見されていて、南方の島じまとの交通ルートが存在が指摘されている。これに連続するとみられる南方系の磨製石器が八丈島にもみられることから、八丈島は南方文化の北限の島でもあったことがわかる。

八丈島が歴史にあらわれるのは鎌倉時代の東鑑で、1186 年に相模の国に属し、鎌倉幕府の支配下にあったことがしるされている。以後、貢絹や支配の記録などがみえ、17 世紀にはいと、宇喜多秀家を記録の初めとする、流人の島としての歴史がはじまる。また、西日本や中国大陸からの漂着の記録も少なからずあることは、南北の島づたいのルートにくわえ、黒潮の流れも、文化をつたえる古くから重要なルートであったことをしめすものである。

青ヶ島は八丈島からさらに南に 70 キロのところにある面積約 6 平方キロの島(一島一村)である。世界的にもめずらしい、整った二重火山の島で、中央の噴火口の周囲にはいくつもの噴気孔があり、地熱を利用したサウナが設置されている。活発な火山の島であったため、考古学的な資料はいまだ確認されていない。

青ヶ島は 1785 年の大噴火で全島民が八丈島に避難移住したが、その約 40 年後に帰還を果たして現在に至っている。

青ヶ島では、八丈島では消滅してしまったようなさまざまな行事や神事が生活のなかでおこなわれてきたが、それを受け継いできた高齢者たちがここ数十年のあいだに他界することにより、その種類も激減している。

2 八丈方言の概要

八丈町と青ヶ島村の方言は、UNESCO の Atlas of the World's language in Danger にあげられた八丈語と同義である。八丈語は、UNESCO のリストにより「危険」と判定されている。

八丈島と青ヶ島の方言はともに<八丈方言>として、方言人口千人台とわずかではあるがその内容としてはきわめて特徴的な方言圏を形成している。日本語の方言の下位分類には研究者によっていくつかあるのだが、本稿担当者は琉球方言をさしおいて、まっさきに八丈方言とそれ以外で二分してもいいとさえ考える。実際、最近の研究では、琉球方言は従来いわれていたほどには古くないのでは、という意見が、地元の研究者からも出はじめている。

2. 1 八丈方言の位置

・八丈方言圏

八丈方言は、伊豆諸島南部の八丈島(八丈町)と青ヶ島(青ヶ島村)で使用される方言である。かつては八丈小島でも使用されていたが、昭和 44(1969)年に町の方針によって全員が八丈島に移住した結果、現在では旧八丈小島島民は分散状態にある。このほかに、小笠原諸島や沖縄の南北大東島に戦前からの移住者がいて、体系的ではないにしろ、古い語形などを確認することができる。南大東島では、ドンゴメ(ばか)のように、八丈方言と意識されずに沖縄系の若者たちのあいだでもすっかり定着している例や、空港や店舗などにあいさつ言葉のオジャリヤレ(いらっしゃい)が積極的に使用されている例もみられる。

・八丈方言の位置

八丈方言は、青森から沖縄までつづく伝統方言の連続帯の途中から枝分かれして、その先にさらに接ぎ木をしたような位置にあり、内容的に隣接し類似する方言をもたない孤立的な方言である。そうした特徴のもとになっているのは、万葉集の東歌、防人歌にみられる上代東国方言の特徴を色濃く保持しているという点である。

八丈島が琉球の島じまと大きく違うのは、琉球のそれが基本的には九州と台湾、大陸をつなぐ海洋交通の大きなルート上にあり、島と島との往来がそれほど困難ではなかった、という点だろう。一方で、八丈島は北側の島じまを経由する本州からのルートがあるとはいえ、それはまさに八丈島そのものを目指して来る以外に、その目的はなかったわけである。黒潮に乗る南西からのルートにいたっては、まさにルートをあやまった船だけが、その結果として偶然にたどり着くことができたのである。こうした状況がかさなって、奈良時代の関東とその周辺の方言の特徴という、この方言のきわだった古さが保存されてきたものと思われる。

・八丈方言の下位区分

八丈方言は全体でひとつにまとまって、少なくとも琉球方言をのぞく本土諸方言と対立するほどの特徴を有するが、内部がひとようなわけではない。語彙的、文法的な差異はあるていどみられるが、特筆するほどのものではなく、ちがいを特徴づけるのは音韻、とくに長母音、二重母音のあらわれかたや口蓋化の有無である。

八丈島には旧 5 ヲ村があつて、距離的に近い坂下の 2 地区と坂上の檜立・中之郷が、そ

それぞれひとつの小グループをつくり、のこる末吉と青ヶ島がそれぞれ単独でそれらに対立する。青ヶ島は相対的に古い特徴をたもっているが、かつて火山噴火のために全島民が40年間ほど八丈島に避難していたという歴史的な事情もあって、比較的坂下地区と類似した面がある。坂下2地区のあいだや、檜立と中之郷のあいだにも若干の相違点がみられ、地区ごとのアイデンティティーをささえる要素のひとつにもなっている。さらに、各地区の内部においても微妙な地域差があったようだが、現代方言では確認することが難しい状況にある。

2. 2 八丈方言の音声・音韻の特徴

八丈方言の母音のうち短母音は、基本的に標準語と同じ a、i、u、e、o の5母音である。長い母音には、地区の違いにより長母音のみ、または長母音と二重母音がある。そこにあられる長母音や二重母音は、地区ごとに規則的な対応関係にある。また、音韻的な解釈では同じものとされても、音声的に明確に異なる場合がある。このような長い母音の地区ごとの違いが、この方言圏の下位分類の目安となっている。

表1 三根地区、中之郷地区、末吉地区の、長い母音の基本的な対応関係

三根	末吉	中之郷	変化まえのおもな音連続と例
i:	i:	i:	ie ue ui usi
kuni:	kuni:	kuni:	クニ(kuni ; 東京など)へ
e:	e:	ja:	ie ei ee eo oi osi oe
jame:	jame:	jamja:	ヤマ(jama ; 畑)へ
ei	i:	e:	ai asi aju ae ae ase ame
mei	mi:	me:	目(me)を
o:	a:	oa	aa awa ama ao awo aro ako oa owa
ito:	ita:	itoa	板(ita)を
ou	o:	o:	owo omo oho awo amo
tou	o:	o:	戸(to)を
u:	u:	u:	uwo usu
saru:	saru:	saru:	サル(saru)を

このなかで特徴的なのはとくに中之郷の長母音で、e:は三根の(標準語的な)e:よりも狭く、聞こえとしてはかなりi:に近い。おなじく中之郷のo:は三根の(標準語的な)o:よりも狭く、聞こえとしてはかなりu:に近い。

八丈方言の子音は地区によって音素が異なるので、以下では、文法や語彙に関する記述も含めて、基本的に三根地区のものを代表としてあげる。

三根地区の子音には、p、t、k、b、d、g、c、z、s、h、m、n、r、j、w、N、qがある。さらに、口蓋音化した子音と口蓋音化しない子音の音韻的対立がある。口蓋音化した子音にはpj、kj、bj、gj、cj、zj、sj、hj、mj、nj、wjがある。このうちwjは一部の老年層にのみ保存されている。

なお、中之郷地区にはこのほかに長母音でのみあらわれる、tj、dj、それに口蓋化したnj(庭のnja:)と対立する口蓋化しないnj(強調の結びのnja:)が存在するが、どれも口蓋化したcj、zj、njに合流する方向に向かっている。

音声・音韻では、古くは清音で発音されていたものが、のちに濁音になって現在にいたるものがあるが、そのいくつかは八丈方言では清音のまま保たれている。たとえば、ヌク(ぬぐ・奈良まで清音、平安末には濁音)、カシク(かしぐ・米麦などを蒸す。奈良から室町まで清音)、マクサ(まぐさ・牛の餌のススキ。平安末期は清音、室町ごろから濁音)、アサケ(あさげ・朝食。室町時代まで清音)、ヘイラク(ひひらく・ひりひり痛む。室町時代にはひびらく)などである。

また、億劫のいまの発音はオククーだが、八丈方言では鎌倉時代中期の発音オクコフが変化したとみられるオッコウであるとか、唾・オシも平安時代中期の発音オフシに対してオウシであるというように、古い発音が保たれたとみられる例がある。

2. 3 八丈方言の文法の特徴

文法の特徴としては、奈良時代の東国方言にみられる動詞のオ連体形(イコ時[行く時])、形容詞のケ連体形(アカケ花[赤い花])、推量ラムの方言形であるナム推量形(フルノウワ[降るだろう])などの存在があげられる。この方言の終止語形のおおくは連体形がもとになっているが、推量形などにあらわれるフルは、古い終止形の残存とみられるもので、単独の叙述終止用法はもたない。

人やものの存在にはすべてアルが使用され、アスペクト形式を構成する材料にもなる。存在のヲルは死語化したアスペクト形式に残存するのみで、イルは[すわる]の意味でしか使用されない。動詞のテンス・アスペクト形式には、テンス・アスペクトの未分化な古いタイプの[のむ・のんだ]に対応する総合形ノモワ・ノマラと、[のんでいる・のんでいた]に対応する標準語タイプの分析形ノンデ アロワ・ノンデ アララとがある。総合形のノマラは、強変化動詞では*ノミアリ、弱変化動詞では*ミテアリの連体形に由来するもので、現在の結果の継続の意味をうしなっていない。強変化動詞に古代語のノミタリに対応するノミタラのような語形はないが、のちの移入形とみられる東北方言的なノンダ・ノンダッタは存在する。在来型の動詞のタイプにおけるリとタリのこうした相補分布は奈良時代のノメリ・ノミタリ共存以前の段階をおもわせる。

古代語のアスペクト的意味は動詞の感情表出文によく保存されていて、目の前に存在する動作や変化の進行(ノモウ!<*ノモヲ[飲んでる!])と結果の状態(ノマロウ!<*ノミアロヲ[飲んでる!] 瓶が空になっている、顔が赤くなっている、など)とを、発見や気づきなどのニュアンスをとめないながらあらしわける。また、属性形容詞の表出文には第1形容詞はサ名詞形、第2形容詞は語幹の、それぞれ〜ヲに相当する語形(シーマソー! [おいしい!]、ゲンキョ! [元気だ!])が使用される。これらはゲンキョ[元気を]のように名詞対格形と同音である。感情や感覚をあらわす動詞や形容詞のこの用法

では、独自に第2中止形（～シテや～クテ）が使用されるが、一方で感情・感覚の動詞には進行と結果をあらわしわけの語形がない。

連用形にはいくつかの終止用法がみられ、助辞などのつかない語形が、疑問詞の有無にかかわらず過去の質問や、直前過去にかかわる表出や独話などに使用されるが、古代語でわずかに確認できる連用形の終止用法との関連で興味深い。

古代語の用法に類似した仮定条件のノマバと確定条件のノメバの区別が動詞にみられる。また、打消のズ以前の段階にさかのぼりうる否定形式（フリンジャララ<*フリニシアリアロワ [降らなかった]）が、より古い語形を保存する坂上地区や青ヶ島で使用されるが、人口の集中する坂下地区では新語形（フリンナララ）に移行している。

第1形容詞の語幹のいくつか（ナガ、フカ、フト、など）はそのままで名詞として使用され、また、そのままで連体的に使用されることもある。さらに、サ型の準体形のほかにミ型の準体形が標準語以上にみられ、サ型と同様に程度の意味で使用される。

敬語においても古層がたもたれていて、身内のことであってもソトに対して尊敬語を使用する絶対敬語的な使用がみられる。また、敬意の程度の異なる複数の敬語述語にあわせて2人称代名詞にも最上級のオメーから、オミ、オマイ、ウヌ、最下級のナレ（一般には3段階程度）までが使い分けられる。1人称代名詞には個にかかわりやすいア系と、イエにかかわりやすいワ系とがあるが、これらに待遇差はない。

また、強調と疑問の係り結びがみられる。コソに由来するカおよびコーで強調されると、述語は已然形（コーでは断定ナリの已然形ナレが変化したネー）になる。疑問のカによる係り結びでは推量ナムをもつ語形の連体形が結びとなり、おもに答えを義務としないうたがいの用法に使用される。

動詞の活用や敬語表現などにおいて古い特徴を保存している一方で、名詞の格変化ではコイガカ [これがこそ]、コレイモ [これをも] などのように主格と対格の明示の義務性が高いという、新たな側面もみられる。

2. 4 八丈方言の語彙の特徴

中央語で初出(日本国語大辞典および岩波古語辞典による)が奈良時代であるとみられる八丈方言の語彙につきのようなものがある。

名詞では、アセイ(あせを・兄)、ナレ(なれ・おまえ)、オトゴ(おとご・末っ子)、シタダミ(しただみ・小さな巻貝類の総称)、ヘイルメ(ひひる・蛾)、タナシネ(たなしね・種籾)、ハンノー(はななは・牛の鼻縄)、カコー(かかふ・ぼろ布)、ウケ(うけ・釣りの浮き)、ヨー(いはほ・巖、高く大きな岩)、ウショ(うしほ・潮、海水)、トナカ(となか・海の沖)、ママ(まま・崖)、テイ(ひとひ・いちにち)など。また、一人称のア系とワ系があるのも奈良時代的である。

動詞では、イエム(ゑむ・ほほえむ)、ウラナゲル(うらなく・嘆く)、ニョウ(によふ・うなる)、マバル(まばる・じっと見る)、マル(まる・大便をする)、ナベル(なぶ・並べる)、モウ(もふ・思う)、ヨム(よむ・数える)、ノゴウ(のごふ・ぬぐう)などである。

動詞ホウム(口に含む)は、ハラ(腹)ムやハ(歯)ムなどと同様に、頬を動詞化したホホムからの変化だが、奈良時代には奈良中央でも東国でも、頬という原義はうしなわれ、<つぼみがふくらむ>といった意味でしか使用例がみられない。また、サシアグの変化したササ

グも、敬語ではなく原義の<上へ高く上げる>がたもたれているが、これはこの方言のアゲルがれっきとした敬語語彙であることとかかわる。

形容詞では、ウレシイ(うれし・体調がよくて気持ちがいい)が奈良時代の意味を保存している。副詞には、ハー(はや・さっさと、もう)などがある。

同様に、初出が平安時代とみられる語では、名詞にオマー(おまへ・あなた)、メナラベ(めのわらは・若い娘)、オウジ(おほぢ・祖父)、タロウ(たらう・長男)、ジョウ(じらう・次男)、サボウ(らぶらう・三男)、ショウ(しらう・四男)、ドンゴ(どんごん・愚か者)、タコウナ(たかむな、たかんな・筍)、モチイ(もちひ・餅)、ヨッダリ(よだり・よだれ)、クモノイエ(くものいへ・蜘蛛の巣)、トンメテ(つとめて・早朝)、ベチ(べち・同じでないこと)などがある。

動詞には、トギル(とぐ・誘う、同伴させる)、ネブル(ねぶる・居眠りする)、ホトウル(ほとほる・暑い)など、形容詞には、ハジガマシイ(はぢがまし・恥ずかしい)など、副詞には、ヨーラ(やをら・おとなしい状態)、イトド(いとど・ますます)、カメーテ(かまへて・心して)、コトト(ことと・とくに、はっきり)、アンセイ(なにしに・なぜ)などがある。

もちろん、文献での初出とその語彙がいつまで存在したかとは無関係なのだが、奈良時代や平安時代に中央で使用され、現代の中央語では失われてしまった語彙が、この方言で少なからず生きて使用されている点は重要である。

八丈方言ではまた、古いタイプの敬語語彙がかなりの程度に保存されている。以下に例をあげる。

・ 尊敬語

tamourowa くれる：上代、中古、中世「たまふ」、中世「たまはる」

tabowa くれる：上代、中古、中世「たぶ」

gouzirowa みる：中古「ごらんず」、中世「ごらうじる」

wasowa いく、くる、いる：中古、中世「おはす」

ozjarowa いく、くる、いる：中世「おぢやる」

osjarowa いう：中世「おしゃる」

osunarowa いう：中世「おしなる」

me:rowa 飲食する：中世「まゐる」

ojorowa ねる：中世「およるになる」

・ 謙譲語

me:rowa いく：上代、中古「まゐる」、中世「参る」

mo:serowa やる：中世「まゐらす」「まらす」「まゐする」

siitasowa する：中世「いたす」

・ 補助動詞

ozjarowa (で) ございます：中世後期「(で) おぢやる」

(関連する古代語の単語の出典は佐々木峻 1984「敬語法の変遷」『研究資料日本文法 9』)

3 人口構成からみた八丈方言

八丈町の人口は2014年1月現在8016人、男3960人、女4056人。世帯数約4000世帯。青ヶ島村の人口は2014年1月現在170人、男98人、女72人。世帯数109世帯。

八丈島は地理的に大きくふたつ—ふたつの山に挟まれた平坦地である坂下地区（三根、大賀郷）と東側の三原山の南側斜面を中心とする坂上地区—に分かれるが、これは方言においてもあてはまる。坂下地区には都の八丈支庁や町役場などが集まり、人口が集中するが島外からの流入も多い。一方、坂上地区は人口は少ないがむかしからの住民が中心である。その結果として、坂下地区ではより変化した語形などが使用され、方言使用者の年齢が相対的に高くなっている。坂上地区はより古い語形などを使用し、相対的に低い年齢でも方言を保持している。

各地区の人口は以下のとおり。（2014年1月1日現在）

三根	； 3748 人
大賀郷	； 2638 人
檜立	； 546 人
中之郷	； 733 人
末吉	； 351 人
計	； 8016 人

上記のような状況を踏まえ、坂下と坂上に分けて方言保持者の推計を算出する。10歳ごとに区切り、坂下と坂上の組み合わせでいくつか単純に人口を計算すると以下のようになる。

1. 坂下 80歳以上+坂上 70歳以上；約 1200 人
2. 坂下 80歳以上+坂上 60歳以上；約 1500 人
3. 坂下 70歳以上+坂上 60歳以上；約 2300 人
4. 坂下 70歳以上+坂上 50歳以上；約 2600 人

このうちのどれが実際の方言保持者数に近いと推測できるか、ということで、複数の地元在住者に質問したところ、いずれも3が妥当ではないか、とのことであった。さらに、このうちの2～3割程度は、人口の多い坂下を中心とする島外からの移住者（いわゆる「クニの人」）とみられるようなので、その分を差し引くと1600～1800人ほどになる。しかしこれは、「それなり」に方言を所有している人数とみるべきで、伝統方言の濃厚な所有者となるとこの半数程度（あるいはそれ以下）かもしれない。

青ヶ島の方言保持者についてはおそらく人口の1割以下、多くても十数人かと思われる。

このほか、沖縄の南大東村、北大東村、小笠原村にも八丈系の人住んでいるが、八丈語を多少なりとも保存しているのは現在ではそれぞれ1桁程度とみられる。それも、たとえば南大東村ではかれらの親世代が日常よく使用したような表現などにかぎられ、きわめて断片的である。一方で、かれらと同世代で沖縄国頭東村出身の両親を持ち、八丈大賀郷出身者の家に嫁いだ南大東村の女性は、夫の祖母が話す古い八丈語を日常生活のなかで覚えた結果、八丈系の人たちよりも濃厚な八丈語の多様な表現を過去において使用し、いまでも鮮明に記憶して、ときに使用もしているという例もある。

4 共通語教育と方言教育

かつて方言が学校教育の現場で否定される対象であったことは、八丈島においても同様だった。八丈町の佐藤誠教育長は、かつて島内の学校で教鞭をとり、生徒たちに方言を使わないよう指導していたという。そして時は流れ、現在は教育長という立場で先頭に立ち、方言の保存継承活動を積極的にすすめるようとしている。

そうしたさまざまな取り組みについては、茂手木清(2013)「八丈町の「八丈方言」継承の取り組み」に詳しいので、ここでは茂手木(2013)を中心に、いくつかコメントしたい。

2009年2月のユネスコ発表以降、町では学校教育のなかに方言を取り入れるさまざまな取り組みをつづけている。とくに2011年度からは研究指定校制度が発足し、2012年度は坂上地区の町立三原小学校が取り組みをおこなった。さらに2013年度は町立三原中学校(全校生徒32名)が教育研究指定校となって「郷土愛に富む生徒の育成を目指して～八丈方言に関する学習活動の創造～」という研究主題でさまざまな課題に取り組み、2月5日にその発表会を行った。

第1学年(16名)は総合学習のなかで「地域と共に生きる」のテーマのもと「八丈島の方言調べ」をおこなった。4人ずつ4班に分かれ、言語班は「八丈方言の言語的特徴」、歴史・現状・未来班は「八丈方言の使われた歴史と現状」、三区班は「八丈方言の三地区の違い」、使おう班は「八丈方言を使ってみよう」を調べ、それぞれユニークな発表をおこなった。

第2学年(2名)は技術・家庭科のなかで、島に伝わる「八丈凧(為朝凧)の製作」を地元の凧作り名人から学んだ。

第3学年(14名)は総合学習のなかで「方言による意見発表」をおこなった。テーマは教育問題や原子力政策、震災や地球温暖化など多岐にわたる。標準語でまとめた意見を、地域の人たちの協力を得て方言になおし、方言で意見発表するというものである。

このほかにも、国語科では方言で百人一首を作ったり、音楽科では島の民謡であるショメ節について勉強したうえで新しく歌詞を方言で作ったり、美術科では方言を取り込んだ島の刊行ポスターを作ったりと、多様な取り組みをおこなった。また、生徒会活動でも地域との交流を積極的にはかるなど、さまざまな角度から方言と向き合っている。

今年度の三原中学校の取り組みは相応の効果をあげたように思われる。その理由として、学校や町教委の努力はもちろんであるが、学校が地域とのつながりを持ちやすい坂上地区である点があげられるだろう。しかし、今後この成果を生徒も島外出身者も多い坂下地区の学校に効果的に取り入れるためには、相応の工夫が求められるだろう。

町教委ではまた、2009年度から学校教員を対象に夏期教員研修として方言講座を開き、2010年度には方言カルタを作成して翌年度に小学校の全家庭に配付、さらにその翌年度には改訂5地区版を再配布した。これをもとにした方言カルタ大会が毎年おこなわれている。また島民向けの講演会として、八丈方言講座が2009年度からこれまで7回ほど開かれている。このほかにも、「今週の島ことば」としてこれまでに100回以上、毎週ひとつずつ方言を町内各所に掲示するなど、さまざまな活動を活発に継続している。

南大東村については、八丈方言だけでなく沖縄の方言についても、学校などでの特段の取り組みなどはみられなかった。

おじゃりやれ、島ことばカルタ大会

保育園児・小・中学生用お知らせ
平成25年11月25日 八丈町教育委員会

2学期もあと1ヶ月で終わり、冬休みも近づいてきました。クリスマスやお正月を楽しみにしている人も多いことでしょう。さて、今年度も次のように第3回の「島ことばカルタ会」を行います。子どもたちから高齢者も一緒に集まって、カルタで遊びましょう。カルタ会の方法は、昨年度と同じですが、今年は保育園の年長組の部をつくりました。多くの方々の参加をお待ちしています。

■日にち 平成26年1月13日(月)成人の日
■時間 午前9時30分～11時30分 ■ルールは、八丈島特別ルールです
■場所 大賀郷公民館 1階集会室
■内容 ★年齢別の部 (保育園年長組、小学校低学年、中学年、高学年、中・高校生、一般(65歳未満)、高齢者の部(65歳以上))

*各部門には、賞品が 있습니다ので、ふるって参加してください。
*ミックスの部 (年齢に関係なく交流してカルタを行う)

■参加募集について
①保育園児、小・中学生は、園や学校からのお知らせを配布しますので、園や学校を通じて提出してください。
②学校・保育園の締め切りは1月8日(水)船業式の日です
③その他 *バスの運行はしませんので、各自会場においでください。
*今年の読み札は、中之瀬地区のことばで読みます。
*連絡先 八丈町教育委員会 電話2-7071(担当 林、茂手木)

切り取り線

氏名(ふりがな)	性別	学 年	電話(連絡先)	保護者名
男・女		年		
学校名・保育園名			(小・中) 学校	保育園

あやこ

今週の島ことば NO.2 (12/11)

○意味・・・親戚
○使い方・・・わい(われ)とあの子はおやこだら(私とあの子は親戚だよ)

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

これについても茂手木清(2013)「八丈町の「八丈方言」継承の取り組み」に詳しいので、これをもとにいくつかコメントしたい。

地域における活動でユニークなのは、地元の劇団「かぶつ」による方言劇の公演である。これまでに、2009年度には「大きなカブ」をすべての小学校と保育園で、2011年度以降は「ベニジャラとカケジャラ」をすべての小中学校と保育園で公演するなど、活発な活動をつづけている。「ベニジャラとカケジャラ」は日本の各地にある継子いじめ型の民話をもとにしたもので、日本版のシンデレラである。

方言の継承に熱心な個人も少なくない。つぎの「6 方言資料の作成」にもあるように、何人もの人たちが、自作の方言談話や方言劇の脚本などを作成し、機会あるごとに発表したりしている。そうした資料は教育委員会でも保存している。

6 方言資料の作成

★方言集等

- ・浅沼良次(1999)『八丈島の方言辞典』朝日新聞出版サービス
- ・山田平右エ門(2010)『消えていく島言葉 ～八丈語の継承と存続を願って～』郁朋社
- ・『八丈島の言語調査』(1950)の「語い集」を電子化データした資料(金田研究室；
<http://www.akaneisc.com/Default.aspx>)

★談話資料

- ・鶴窓帰山(1848)『やたけの寝覚草』
- ・保科孝一(1900)「八丈島方言」『言語学雑誌』1巻10号
- ・上村幸雄(1975)「八丈島の方言 東京都八丈島中之郷」大石初太郎、上村幸雄編『方言と標準語-日本語方言学概説』筑摩書房「第4部 各地方言のテキスト」3
- ・金田章宏(1998)『八丈方言談話資料(1) 青ヶ島方言』千葉大学留学生センター 130頁
- ・金田章宏(1999)「八丈方言談話資料(2) 中之郷方言」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究 周辺諸方言との比較研究も含めて』千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 第2集 pp.129-159
- ・金田章宏(2002a)「八丈方言の談話資料と文法解説」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(1)』真田信治編：文部省特定領域研究(A)報告書 pp.115-226
- ・町民自作の方言談話等；町教委保存文字化資料（未公刊）

★民話資料

- ・金田章宏(2002b)「八丈方言の民話資料と文法解説」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(2)』真田信治編：文部省特定領域研究(A)報告書 pp.195-264
- ・町民自作の新規脚色民話；町教委保存文字化資料（未公刊）

★談話と民話の資料

- ・金田章宏(1992)「八丈島の民話と談話」『国文学解釈と鑑賞』
- ・金田章宏(2002c)『八丈方言のいきたことば』笠間書院 109頁
- ・金田研究室；<http://www.akaneisc.com/Default.aspx>（民話12話の映像と文字化資料のほかに、談話の音声と文字化資料などを公開）

7 危機の度合いの判定

表2 八丈方言の危機の度合いの判定

	八丈方言
(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	2～3
(2) 母語話者数	2～3
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	2
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	2～3
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	2
(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか	2～3
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	3～4
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	3～4
(9) 言語記述の質と量	3～4
平均	2.1～3.1 > 2.3～3.1

判定の理由

(1) 「その言語がどの程度次の世代に伝承されているか」については、「2. その言語は祖父母の世代以上で使用されており、親、子の世代は使用していない」～「3. 親の世代以上で使用されており、子どもたちは使用していない」状況であると判断した。

(2) 「母語話者数」について、1600～1800人とした。これは八丈在住者の印象である「坂下70歳以上+坂上60歳以上；計約2300人」から、坂下に多い2～3割ていどの島外出身者を引いた数字である。坂下では「2. 使用している者は少数派である」とみてよいが、坂上ではこれよりも多少「3. 使用している者が大半を占める」に近い。全体として多少3寄りの2ということで2～3とした。

この数は、1言語の話者数としてはけっして多くはない。しかし、八丈語とおなじように危機言語に数えられた、たとえば八重山語と比較すると、その違いはかなり大きいように見える。というのは、八重山語は石垣市と竹富町で話される言語であるが、たとえば人口約4000人の竹富町にはおもな有人の島が6島あり、これが島ごとに、互いに通じにくい程度にことなる方言を使用している。そのなかの人口約2000人の西表島の西部では祖納、干立、舟浮という、あわせても人口数百人の3集落が一つの方言圏を形成しているが、その方言話者は多く見積もっても数十人である。もちろん、石垣市や沖縄本島、首都圏などに居住する西表出身者も少なくはないが、八重山語圏にあって一部の文法的側面にきわめて特徴的な様相をしめす西表方言にとっては、行政的な取り組みがきわめて困難であることも考え合わせると、これがきわめて深刻な状況であることにまちはない。そうした状況と比較するかぎりにおいて、文法的な差異をほとんどたない、かつ町が積極的に保存継承に取り組もうとしている八丈方言圏の現状は、けっして悪いとはいえない。

(3) 「コミュニティー全体にしめる話者の割合」については、方言の使用が高齢者同士の会話や、祖父母がいる家庭の一部に限られると判断されるので、2とした。

(4) 「どのような場面でその言語が使用されているか」については、坂上では「2. 限られた場面、いくつかの目的のために使用されている」に近い「3. 家庭の場面では使用されているが、支配的言語が家庭でも使われ始めている」状態、また坂下ではほぼ2であるとみられるので、2～3とした。

(5) 「伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか」については、島内の新聞にときおり方言文が掲載されたり、学校教育などでも方言を取り上げる方向にあるので2とした。

(6) 「教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか」については、この方言の書記法自体はない（2以下と判断される）のだが、かな表記やカナ表記、ローマ字表記による言語資料が一定以上あるといえるので、2～3と判断した。

(7) 「国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）」については、ユネスコの発表以降、国レベルで「八丈語」をふくむ危機言語の保存継承問題が取り上げられるようになり、それをうけて八丈町でも積極的に八丈方言の保存継承に取り組むようになってきているので3～4とした。

(8) 「コミュニティ内でのその言語に対する態度」については、表だって見えるような状況としてはおおむね「4. ほとんどの者が言語が次世代にも使われることを支持している」に近いとみられるが、潜在的にはそれほどでもない印象もあるので「3. 多くの者が言語が次世代にも使われることを支持している。その他の者は無関心であるか、言語が使用されなくなることを望んでいる」～4とした。

(9) 「言語記述の質と量」については、一定水準以上の文法書とあるていどの辞書や音声資料、文字資料が存在し、新たに文字資料が作られてもいるが、けっして十分ではないので、「4. よい文法記述が一つある他にも、文法資料、辞書、文字資料、文学、それに定期的に更新される日常言語使用の資料が存在する。一定の質の録音、録画資料が存在する」寄りの「3. 一定の文法資料、辞書、文字資料が存在するが、日常言語使用の資料はない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものやされていないものもある」、すなわち3～4とした。ただし、文法書が一つでいいという意味でのまとまりのある方言圏で、この程度の資料がある地点は多くはないだろう。方言を保存継承していくための言語資料的な条件としては、けっして悪いとはいえない。

引用文献（本文で取り上げたものは除く）

- 金田章宏(1995)「保科孝一著『八丈島方言』をよみなおす(1)」『千葉大学留学生センター紀要』1: 41-74
- 金田章宏(2000)「保科孝一「八丈島方言」の百年」『国文学解釈と鑑賞』1: 72-84
- 金田章宏(2001)『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 金田章宏(2002d)「東国方言の文法と八丈方言」『国文学解釈と鑑賞』11: 94-104
- 金田章宏(2004)『奥山熊雄の八丈島古謡』笠間書院発売 289 頁
- 金田章宏(2007)「八丈方言の電子化資料の作成と文法書の編纂」金田章宏編 平成 16～18 年度科学研究費補助金(基盤研究 C)研究成果報告書(八丈方言の文法 pp.1-42、八丈方言電子化資料 71 頁)
- 金田章宏(2009)「八丈方言にみる古典語文法“以前”」『国語と国文学』東京大学国語国文学会」86 卷 11 (1032) 号 pp.121-131
- 金田章宏(2011)「八丈方言——古代東国方言のなごり」呉人恵編『日本の危機言語 言語・方言の多様性と独自性』北海道大学出版会 pp.153-169
- 金田章宏(2012)「八丈方言における新たな変化と上代語」『言語研究』142 号 pp.119-142
- 金田章宏(2013)「危機言語としての八丈方言」『日本語学』8 月号 pp.48-60
- 保科孝一(1900)「八丈島方言」『言語学雑誌』1: 171-182, 293-300, 441-451, 744-769, 1161-1168
- 茂手木清(2013)「八丈町の「八丈方言」継承の取り組み」『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 八丈方言調査報告書』pp.77-88

鹿児島県沖永良部方言

鹿児島県沖永良部方言

木部 暢子

1 沖永良部島の概要

沖永良部島は奄美群島の南部に位置し、鹿児島本土から南へ536km、沖縄本島から北へ約60km、面積93.65km²の島である。沖永良部島には、和泊町と知名町の2町がある。集落の数は、和泊町が21（和泊、和、皆川、杏里、与論浜、玉城、内城、後蘭、谷山、仁志、内喜名浜、半崎、畦布、伊延、出花、西原、国頭、美瀬浜、喜美留、手々知名、長浜）、知名町が21（知名、屋子母、大津勘、徳時、住吉、正名、田皆、下城、上城、新城、久志検、赤嶺、竿津、余多、上平川、下平川、屋者、芦清良、黒貫、瀬利覚、小米）、人口は、和泊町が7,113人、知名町が6,806人、合計13,919人である（2010年国勢調査による）。

温暖な気候を利用して、ジャガイモやサトウキビなどの農作物の他、テッポウユリ（エラブユリ）やフリージアなどの花の栽培、牛の飼育が盛んである。

島への交通手段は、飛行機が鹿児島空港から1日3便、那覇空港から1日1便、奄美大島空港から2日に1便、与論空港から2日に1便運航している。フェリーは、鹿児島港から和泊港へ1日1便、那覇港から和泊港へ1日1便、鹿児島港から知名港へ月9便ほど運行している。



図1 沖永良部島の位置



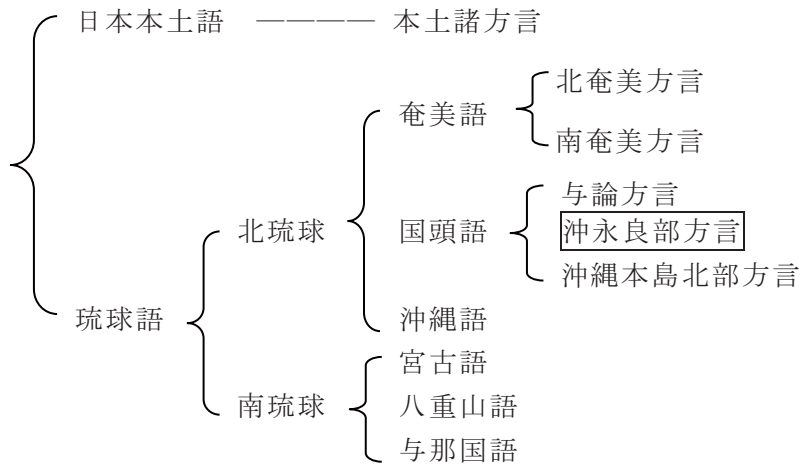
図2 沖永良部島の集落図

2 沖永良部方言の概要

2.1 沖永良部方言の位置

沖永良部は奄美群島の南部に位置し、行政上は鹿児島県の奄美群島に位置づけられるが、言語上は琉球方言のうちの国頭語に位置づけられる。図示すると、以下のとおりである。

図3 沖永良部方言の位置



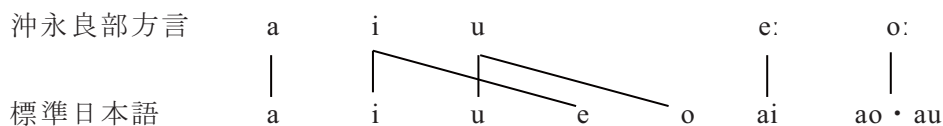
沖永良部島の内部にも、ことばの違いがある。以下では、沖永良部方言の語彙の紹介も兼ねて、和泊方言と知名方言の音韻について概観する。用例は、平山輝男著（1966）『琉球方言の総合的研究』と上野善道（1999）「沖永良部島諸方言の体言のアクセント資料」から引用する。

2.2 沖永良部方言の音声・音韻の特徴

(2.2.1) 母音

母音の種類は、基本的に a、i、u の3つである。長母音ではこれに加えて e: と o: がある。標準語との対応関係と用例を以下に挙げる（[]内は音声記号表記。地点により発音に違いがある場合は、地点名を【 】に入れて示す）。

図4 沖永良部方言と標準日本語の母音の対応



a : ア'シ[ʔaci](汗)

e: : ケー[ke:](粥)

i : イ'シ[ʔici](石), イビ[ibi](海老)

o: : オ'ー[ʔo:](泡)

u : ウ'シ[ʔuei](牛), ウ'ニー[ʔuni:](鬼)

(2.2.2) 半母音 j、w

ja : ヤー[ja:](矢)

ji : イー[ji:](柄)

ju : ュ[ju:](湯)

ʔju : ュ'ー[ʔju:](魚)

wa : ワター[wata:](腹)

ʔwa : ワ'[ʔwa](豚)

wu : ウイ[wui](桶)

(2.2.3) 子音

(2.2.3.1) ʔ (グロッタルストップ)

ʔa : ア'ミ[ʔami](飴)

ʔi : イ'チャ[ʔitea](烏賊)

ʔu : ウ'シ[ʔuei](牛)

ウ'ニー[ʔuni:](鬼)

(2.2.3.2) k

ka : カヤ[kaja](茅)【和泊】*1

ki : キジ[kizi](傷)

サキ[saki](酒)

ku : クニ[kni](国)

ククルー[kukuru:](心)

ʔku : ク'イグシ[ʔkuigui](杭)【和泊】*2

(クイ[kui](杭)【知名】)

ke : ケー[ke:](粥)

ko : コイ[koi](鋏)【知名】

ʔko : コ'ーイ[ʔko:i](鋏)【和泊】*2

kwa : クワー[kwa:](子)【知名】

ʔkwa : ク'ワー[ʔkwa:](子)【和泊】*2

kja : ミキヤ[mikja](三日)【知名】

(ミチャ[mita](三日)【和泊】)

kju : チッキュ[teikkju](月)【知名】

(チチュ[teiteu](月)【和泊】)

kjo : ジッキョ[zjikkjo](瀬利覚、地名)

(2.2.3.3) g

ga : ガニ[gani](蟹)

gi : ミギ[migi](右)【知名】

(ミジ[mizi](右)【和泊】)*3

サギ[sagi](鷺)【知名】

(サジ[sazi](鷺)【和泊】)*3

gu : グシャニ[gueani](杖)

ge : ヒゲー[çige:](左)【知名】

(ヒジェイ[çize:](左)【和泊】)

go : ダンゴ[daŋgo](団子)【知名】

(ダーゲー[da:gu:](団子)【和泊】)

*1 沖永良部方言の ka は、ごく少数の語にしか現れない。その理由は、(2.2.3.12)で述べられるように、沖永良部方言では、標準語の「カ」に ha が対応しているからである。

*2 和泊方言では、標準語の「クイ」「クワ」にグロッタルストップを伴った[ʔku]、[ʔkwa]、[ʔko]が対応しているが、知名方言では、グロッタルストップがない形が対応している。

*3 和泊方言では、標準語の「ギ」に zji[zi]が対応している。

(2.2.3.4) s

sa : サジ[sazi] (鷺) 【和泊】
 サギ[sagi] (鷺) 【知名】
 si : シマー[eima:](島)
 シー[ei:](酔)
 シミー[eimi:](炭) 【知名】
 su : スミー[sumi:](炭) 【和泊】 *4
 so : ソー[so:](竿)
 sja : グシャニ[gueani](杖)
 sju : ミシュー[micɯ:](味噌)
 sjo : ショーガチ[co:gatei](正月)

(2.2.3.5) z

za : ア'ザ[ʔaza](痣) 【和泊】
 (ア'ザ[ʔada](痣) 【知名】)
 zji : ジン[zin](銭)
 zu : アズキ[azuki](小豆)
 zja : ミミンジャ[miminza] (ミミズ)【和泊】
 (ミミンダ[mimindha] (ミミズ)【知名】)
 zju : ニジュ[nizu](溝)

*4 標準語の「ス」には、普通、si が対応するが、和泊方言では「炭」などの少数の語で su が対応している。

(2.2.3.6) t

ta : ター[ta:](鷹)
 ti : ティダ [tida](太陽)
 ティーチ [ti:tei] (一つ) 【知名】
 ʔti : テ'イーチ [ʔti:tei] (一つ) 【和泊】
 tu : トウイ[tui](鳥)
 te : ハテ[hate] (畑) 【和泊】
 ファテ[ɸate] (畑) 【知名】
 to : トーラー[to:ra:](俵)

(2.2.3.7) d

da : ナーダー[na:da:](涙)
 di : ディルー[diru:] (泥) 【知名】
 du : ドゥルー[duru:] (泥) 【和泊】
 de : デー[de:](竹)

(2.2.3.8) c

cja : チャー[tea:](茶)
 ci : チ[tei](血)
 チム[teimu](肝) 【和泊】 *5
 (キム[kimu](肝) 【知名】) *5
 cju : チュー[teu:](人) 【知名】
 ʔcju : チ'ュー[ʔteu:](人) 【和泊】 (人)

*5 和泊方言では、標準語の「キ」に ci が対応しているが、知名方言では ki が対応している。(2.2.3.2)のミチャ[mitea](三日) 【和泊】 とミキヤ[mikja](三日) 【知名】、チチュ[teiteu](月) 【和泊】 とチッキュ[teikkju](月) 【知名】 の地域差もこれと同じである。

(2.2.3.9) n

na : ナー[na:](名)
 ni : ニー[ni:](胸)

(2.2.3.10) m

ma : マチ[matei](火)
 ʔma : マ'ー[ʔma:](馬)

- nu : ヌヌー[nunu:](布)
 no : ノージ[no:zi](虹)【和泊】
 ノーギ[no:gi](虹)【知名】
 nja : タンニャ[tannja](田皆、地名)
 nju : ニューミ[nju:mi](蚤)【知名】
 (ヌミ[numi](蚤)【和泊】)
 njo : ニョーサ[njo:sa](蓑)【知名】
 (ノーサー[no:sa:](蓑)【和泊】)
- mi : ミー[mi:](目)
 mu : ムシ[muei](虫)
 me : メーラビ[me:rabi](娘)
 ?mja : ミ'ヤー[?mja:](猫)

(2.2.3.11) φ

- φa : ファー[φa:](葉)
 ファク[φaku](箱)【知名】
 (ハク[haku](箱)【和泊】)*⁶
 ファナ[φana](鼻)【知名】
 (ハナ[hana](鼻)【和泊】)*⁶
 φu : フタ[φuta](蓋)
 フー[φu:](帆)
 φo : フォー[φo:](皮)
 φo: : フォーラ[φo:ra](川)【和泊】

(2.2.3.12) h

- ha : ハジ[hazi](風)【和泊】
 ハディ[hadi](風)【知名】
 hi : ヒル[çiru](昼)
 ヒラ[çira](籠)【知名】
 ヒブシ[çibuei](煙)
 ho : : ホー[ho:](川)【知名】
 hja : ヒャクー[çaku:](百)
 hju : ヒュー[çu:](今日)*⁷
 hje : ヒェー[çe:](南)

*6 沖永良部方言の φa は標準語の「ハ」に、φu は標準語の「フ」と「ホ」に、φo は「カウ」に対応している。ただし、和泊では標準語の「ハ」に ha が対応することがある。

*7 沖永良部方言の ha は標準語の「カ」に、hi は標準語の「ヒ」と「へ」と「ケ」に、ho は標準語の「カウ」に対応している。「今日」は古語の「けふ」に遡るため、沖永良部方言では hju となる。以下に、対応関係を挙げておく。

沖永良部方言の φ、h、k と標準語のカ行、ハ行

標準語	カ	キ	ク	ケ	コ	ハ	ヒ	フ	へ	ホ
知名方言	ha,ka	ki	ku	hi	φu,ku	φa	hi	φu	hi	φu
和泊方言	ha,ka	ci	ku	hi	φu,ku	φa,ha	hi	φu	hi	φu

(2.2.3.13) r

- ra : トーラー[to:ra:](俵)
 ri : フリ[φuri](これ)
 ru : シルシ[çiruei](印)

(2.2.3.14) b

- ba : スバー[suba:](側)【和泊】
 シバー[eiba:](側)【知名】
 bi : タビ[tabi](足袋)
 bu : ヒブシ[çibuei](煙)
 bo : ボー[bo:](棒)

(2.2.4) 特殊音 以上のほか、特殊音として撥音と促音がある。

3 人口構成からみた沖永良部方言

和泊町の2010年から2040年までの、年齢別推計人口統計のグラフを図5に挙げる（国立社会保障・人口問題研究所による）。

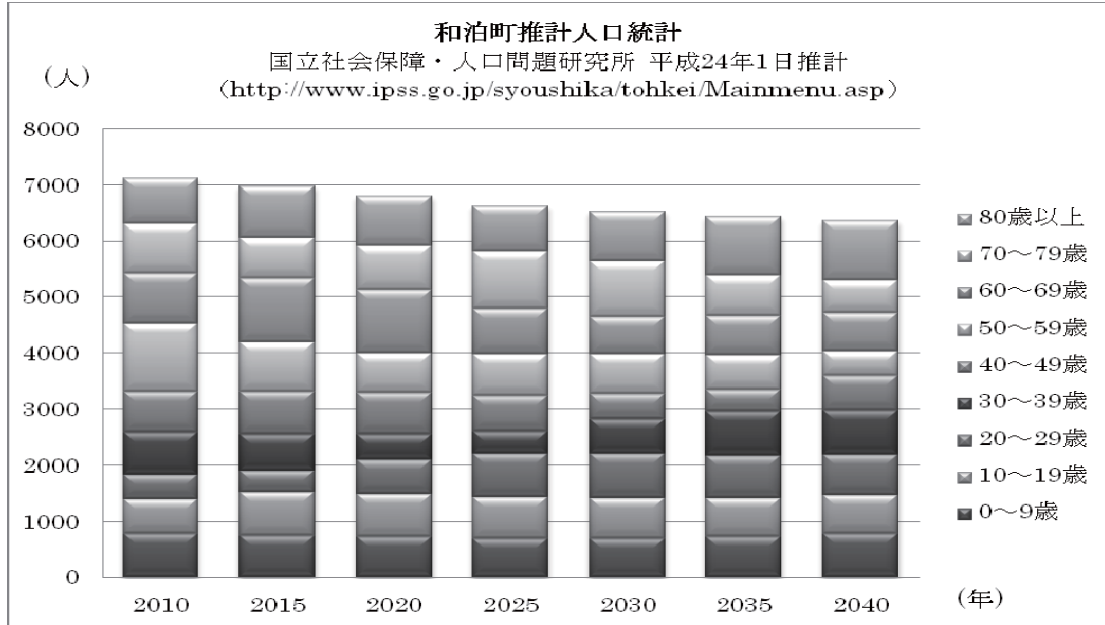


図5 和泊町年齢別推計人口統計（2010年～2040年）

国立社会保障・人口問題研究所では、2040年の和泊町の人口を6,346人と推計している。2010年から2040年までの30年間の人口減少率は-11%、60歳以上の総人口に占める割合は、2010年が36.5%、2040年が36.5%で、30年間でほとんど変わらない。沖永良部島は、子どもの出生率が高い島として、全国的に注目されている。そのことが人口推計にも現れている。

次に、知名町の2010年から2040年までの、年齢別推計人口統計のグラフを図6に挙げる（国立社会保障・人口問題研究所による）。

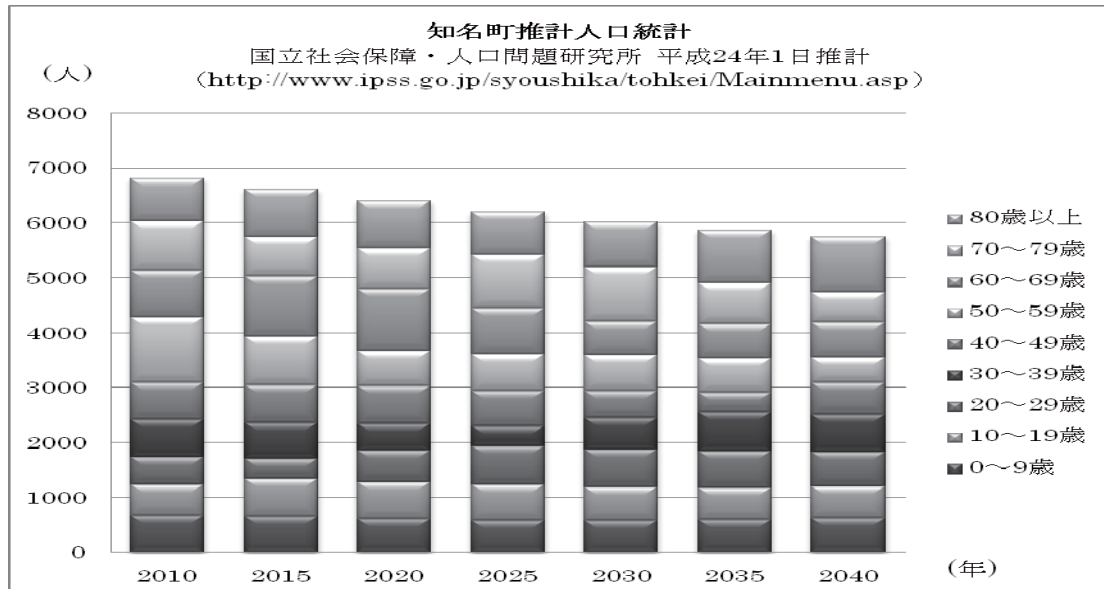


図6 知名町年齢別推計人口統計（2010年～2040年）

2040年の知名町の総人口は、推定5,734人である。2010年から2040年までの30年間の人口減少率は-16%、60歳以上の総人口に占める割合は、2010年が37.1%、2040年が38.1%で、知名町でも30年間でほとんど変わらない。与論町の60歳以上の総人口に占める割合は、2040年推定で43.9%であるから、和泊町、知名町の数値は、与論町に比べてかなり低い値を示している。

4 共通語教育と方言教育

(1) 共通語教育

奄美が日本に復帰したのは、昭和28（1953）年12月である。この時期は、日本経済の高度成長の始まりに当たる。沖永良部でも中学校を卒業すると、集団就職で島を出る子ども

もが多かった。そのため、島外へ出ても困らないように、共通語教育と方言の矯正指導が行われた。前田(2004)「離島における地域の間人形成と学校ー沖永良部島・国頭小学校の1970年代ー」によると、島に残るのは長男一人ぐらいで、二男以下はみな島外へ出るのが普通だったので、共通語が話せるように、というのは、学校の任務であると同時に、親の要求でもあったという。また、1960年以降、鹿児島本土から赴任した先生が増えたことも、島の方言を使わないことに影響していると思われる。

共通語教育、および方言矯正の方法としては、学校で方言を使った場合に罰を与えるという方法だった。罰の内容はクラスによって違っており、たとえば、方言を使った回数を黒板に「正」の字で書く、立たされる、叩かれる、などの罰があった。「方言札」については、沖永良部では使われなかったようである。

(2) 方言教育

(2.1) 和泊町

前田(2004)によると、和泊町の国頭小学校では、復帰後の1960年代から、郷土に誇りを持つようと学校教育に郷土教育が取り入れられたという。しかし、方言については、前述のように、使用禁止の教育が行われた。

方言が郷土教育の一環として、学校教育の中に取り入れられるようになったのは、平成になってからである。和泊町教育委員会では平成2(1990)年、島の格言をもとにした「方言カルタ」を作成した。このカルタは現在、和泊町の4つの小学校(和泊小学校、大城小学校、内城小学校、国頭小学校)で、「郷土で育てる肝心(チムグクル)の教室」の事業の一環として活用されている。その方法は、総合的な学習の時間に地元の方言話者を講師として招き、「方言カルタ」を使った方言学習を行うというもので、平成25年度は年間6時間の授業時間が組まれている。

また、平成6(1994)年から、町主催のシمامニ大会(島ことば大会)が始まった。これについては、次の項目で詳しく述べる。

(2.2) 知名町の取組

知名町でも平成以降、方言学習が学校教育の中で実施されるようになった。方言学習の中心に置かれているのは、「島唄大会・島ムニ(島ことば)大会」である。知名町の5つの小学校(知名小学校、住吉小学校、田皆小学校、上城小学校、下平川小学校)では、この「島唄大会・島ムニ大会」の出し物として、方言劇を発表している。学校では、地域の年配者の協力を得ながら、方言劇の練習を行う形で方言学習を実施している。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

(1) 和泊町

- ・シمامニ大会(島ことば大会)、島唄大会、子ども芸能大会

和泊町では、平成6(1994)年から「シمامニ大会」を始めた。平成11年以降はシمامニに限定しない、「島唄大会」(平成11~12年)、「なちかしゃぬ島あそび」(平成13~15

年)、「えらぶ芸能あしび」(平成16～18年)、「子ども芸能大会」(平成19～25年)を開催している。その中で、集落に伝わる物語の方言劇や島唄、伝統芸能等を高校生以下の子どもたちが披露している。

- ・ 畦布(あぜふ)の島ムニ劇

畦布集落では、平成6年から毎年、元小学校教師の中村スエ氏の指導のもと、畦布集落の子どもたちが島ムニ劇を練習し、「子ども芸能大会」で発表している。もともと、「シママニ大会」に出場することが目的で始まったものだが、それが平成25年の現在まで、恒常的に続いている。脚本は第2回目以降、すべて中村スエ氏が作成し、劇に使う小道具等は、父兄が協力して作成するなど、地域の協力体制が整っている。

- ・ 奄美群島日本復帰60周年記念「和泊町文化と福祉の祭典」

奄美群島日本復帰60周年に当たり、平成25年11月3日(日)に和泊町民体育館で「和泊町文化と福祉の祭典」が開催された。その中で、畦布地区の人たちが日本復帰運動当時の様子を表現した島ムニ劇を上演した。中村スエ氏指導の畦布の島ムニ劇を、青壮年にまで広げたものである。このときの上演内容は、地元のFM放送局サンサンテレビにより、11月3日と10日の2回、放映された。

(2) 知名町

- ・ 島唄、島ムニ大会

知名町では平成8年から毎年1回、「島唄大会・島ムニ大会」を開催している。内容は、子どもたちによる島ムニ劇、島唄の発表などで、平成25年度の「島唄大会・島ムニ大会」(第17回、平成26年3月2日開催)の方言劇の内容は、「かぐやひめ」(知名小)、「住吉トラベラ」(住吉小)、「おむすびころりん」(田皆小)、「世之主むんがたい」(上城小)、「桃太郎」(下平川小)(平成23年度)である。

- ・ 中央公民館特別講座

平成25年度は、中央公民館特別講座として「沖永良部島方言の魅力」(平成26年1月19日)を開催した。

- ・ 学童クラブ「ティダッ子」の活動

芦清良(アシキョーラ)の学童クラブ「ティダッ子」では、幼稚園から小学校3、4年までの子どもを対象として、方言を教える活動を行っている。

- ・ 方言による昔話の読み聞かせ

知名町立図書館では、学童クラブの指導員と協力して、子どもたちに方言による民話の読み聞かせを行っている。また、民話や紙芝居を方言で子どもたちに読み聞かせるボランティア活動を行っている人たちもいる。

6 方言資料の作成

地域コミュニティーの出身者が作成した方言の資料に、次のようなものがある。これらは貴重な記録であるが、これらが方言学習に利用されることは、あまりない。また、方言学習に利用されることを目的として作られたものではない。録画資料、録音資料もほとんどない。

- 安藤住翠(1934)『南島方言えらぶ語の研究』自費出版
柏常秋(1954)『沖永良部島民俗誌』弘凌霄文庫刊行会
甲東哲(1955)『沖永良部民俗語彙』
永吉毅(1970)「沖永良部島方言の口蓋化について」『奄美郷土研究会報(11)』奄美郷土研究会
先田光演(1971)「沖永良部の神話」『沖繩文化(33・34)』沖繩文化協会
宗岡里吉(1971)「沖永良部島の伝説」『沖繩文化(35)』沖繩文化協会
永吉毅(1976)「沖永良部島方言の口蓋化について」『奄美の文化総合的研究』法政大学出版会
知名町教育委員会(1977)『えらぶのてーき』
宗岡里吉(1983)『知名町瀬利覚における昔ばなし』南日本開発センター
東條恒雄(1984)『沖永良部方言考』青葉印刷
東條恒雄(1986)『沖永良部方言地図』自費出版
高見栄沖(1986)「沖永良部知名町の諺と農家の歩み」『南島研究(26)』南島研究会
永吉毅(1986)「馬鹿村から正名村へ(地名をあらためねばならない場合もある)」『奄美郷土研究会報(26)』奄美郷土研究会
甲東哲(1987)『島のことば—沖永良部—』三笠出版
東野東風盛(新城老人クラブ)編(1989)『ニシミの話』安田印刷(共通語)
和泊町老人クラブ連合会(1990)『むんがたい』安田印刷(共通語)
永吉堅吾代表 畦布字有志(1992)『畦布誌ふるさとあぜふ』安田印刷
永吉敏人編(2005)『いらぶぬくとうば』トモエ
福島光義(2010)『なちかしや国頭の方言(しまヌムニ)』
和泊町歴史民俗資料館作成(2013)『畦布島ムニ劇台本集 平成6~24年度』

7 危機の度合いの判定

以下では、木部他(2011)にならい、沖永良部方言の危機の度合いについて判定する。

概要を述べると、沖永良部方言の危機の度合いは、平均2.25~2.38で、かなり危機的な状況にある。方言が話せる世代は50歳より上の人で、それより下の世代は聞いて理解できる程度だが、下の世代に方言を伝えようという活動が、あまり盛んでない。中には、子どもたちにムニ(方言)劇を恒常的に指導している例や、昔ばなしを方言で語る活動をしている例があるが、個人的な活動にとどまっており、地域、学校、家庭の連携体制が整備されていない。

判定の理由

(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか：3

和泊町では、方言が話せるのは45歳以上の人である。20代、30代は聞いて理解することができる程度、10代になると、方言の挨拶や少数の単語くらいしか理解できない。知名

町では、方言が話せるのは50歳以上の年齢の人である。ただし、知名小校区（知名町の中心地）では、それより5歳くらい年齢が上がり、方言が話せるのは55歳より上の人となる。それ以下の世代は、聞いて理解することはできるが、自分で話すことはできない。10代以下になると、聞いても理解するこがほとんどできない。したがって、「3. その言語は親の世代以上で使用されており、子どもたちは使用していない」と判断した。

(2) 母語話者数：7,092人

方言が話せるのは、和泊町では45歳以上の人、知名町では50歳～55歳以上の人である。この人たちを母語話者と考えると、平成22年度におけるこの世代の人数は、

和泊町 362(40代) + 1,207(50代) + 894(60代) + 879(70代) + 822(80以上) = 4,164

知名町 1,194(50代) + 850(60代) + 888(70代) + 784(80以上) = 3,716

合計 7,880人

となる。このうち、島外出身者や方言話せない人が約10%いるとして、この数を除くと、

$7,880 \times 0.9 = 7,092$ 人

となる。

(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合：3

(2)の7,092人を平成22年度の総人口13,919人（7,113人+6,806人）で割ると、51%となる。したがって、「3. その言語を使用している者が大半を占める」と判断する。

(4) どのような場面でその言語が使用されているか：3

家庭では、方言がまだ使われている。3世代同居の家庭では、祖父母同士の会話は方言で行われる。父母同士の会話は、父母が50代より上なら方言だが、それ以下の年齢では標準語が使われる。祖父母が50代以下の父母や孫に向かって話すときは、方言を使用せず、共通語を使用する。また、職場では基本的には共通語が使用される。地域コミュニティの会議等でも基本的に共通語が使用されるが、55歳以上の人の集まりでは、方言が使用されることもある。したがって「3. その言語は家庭では使用されているが、支配的言語が家庭でも使われ始めている」と判断した。

(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか：1

伝統的な場面以外の新たに加わった場面で、方言が使用されることはほとんどない。和泊町には地域のFMテレビ局、サンサンテレビがあり、地域の情報や催し物を放映している。催し物の中で、方言劇等が上演された場合、この録画を放送することはあるが、方言のために番組を新たに制作することはない。また、放送で使用される言語も共通語である。知名町には地域のFM局がなく、放送等の新たに加わった場面で方言が使用されることはない。したがって、「1. その言語は新たに生活に加わった場面ではほとんど使用されていない。」と判断した。

(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか：2

コミュニティの出身者が作成した沖永良部方言の辞書や文法書がいくつかある。しか

し、これらは限られた者にしか利用されておらず、教育に利用されることは、ほとんどない。したがって、「2. 文字資料は存在するが、コミュニティー内の限られた者にしか利用されていない。あるものにとって文字使用は象徴的意味を持つことがある。その言語の使用は学校教育には取り入れられていない」と判断した。

(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）：2

昭和50年代まで、学校で方言の使用が禁止されていた。現在では、方言が禁止されることはないが、学校では、もっぱら共通語が使用される。現在は、総合的な時間を使って、方言の学習が行われている。ただし、方言の保護（方言が話せるようになる活動）は、政策としては実施されていない。したがって、「2. 政府は支配的言語の使用を勧めている。その言語に関する保護政策は施行されていない」と判断した。

(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度：2～3

コミュニティーの全員に調査を行ったわけではないが、個別のインタビューによると、「方言を次世代に残したい」と思っている人が多く、「方言はなくなった方がよい」と思う人は少ない。昭和50年代までの共通語教育、方言禁止教育の中で生まれた「方言は悪いもの」という感覚は、現在では薄れている。

しかし、(4)で述べたように、家庭内であっても、祖父母は父母や子どもに対して方言を使用していない。また、積極的に方言を残す活動をしている人は少ない。したがって、「3. 多くの者がその言語が次世代にも使われることを支持している。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる」、ないし「2. その言語が次世代にも使われることを支持している者もいる。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる」と判断した。

(9) 言語記述の質と量：2

沖永良部には、地域の人の手になる資料がいくつか存在する。しかし、これらは日常言語使用の資料として体系的に作成されたものではなく、教育に使われることもほとんどない。したがって、「2. 限られた言語学的目的に利用可能な簡単な文法記述、語彙集、文字資料が存在するが、総括的なものはない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものやされていないものもある」と判断した。

以上の判定結果を表にまとめておく。

沖永良部方言の危機の度合いの判定

	沖永良部方言
(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	3
(2) 母語話者数	7,092人
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	3
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	3
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	1
(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか	2
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	2
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	2～3
(9) 言語記述の質と量	2
平均	2.25～2.38

引用文献

上野善道（1999）「沖永良部島諸方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』27、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛（2011）『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』（文化庁委託事業報告書）133頁

平山輝男著（1966）『琉球方言の総合的研究』明治書院

前田晶子（2004）「離島における地域の人間形成と学校－沖永良部島・国頭小学校の1970年代－」『AMAMI News Letter』No.8

鹿児島県与論方言

鹿児島県与論方言

木部 暢子

1 与論島の概要

与論島は奄美群島の最南端に位置する島で、鹿児島新港から 594 km、沖縄本島の本部港から 85 km のところに位置する。周囲 23.65 キロメートル、面積 20.49 平方キロメートル、集落の数は 9（茶花、立長、城、朝戸、西区、東区、古里、叶、那間）、人口は 5,327 人（平成 2010 年国勢調査による）である。隆起珊瑚礁で形成された島で、行政上は島全体が一つの与論町を形成している。

島への交通手段は、飛行機で与論空港へ入る方法と、船で与論港へ渡る方法がある。飛行機は、鹿児島空港から 1 日 1 便、那覇空港から 1 日 1 便、奄美大島空港から 1 日 1 便の運航があり、フェリーは鹿児島港から 1 日 1 便、那覇港から 1 日 1 便が運行している。

主な産業は農業と観光で、農業ではサトウキビの栽培、畜産（子牛、成牛、山羊）が主な産業である。サトウキビの平成 23 年度生産量は、約 1800 トン、販売額は約 3 億 7000 万円、畜産の生産量は約 2400 頭、販売額は約 8 億 3500 万円にのぼる。



図 1 与論島の位置

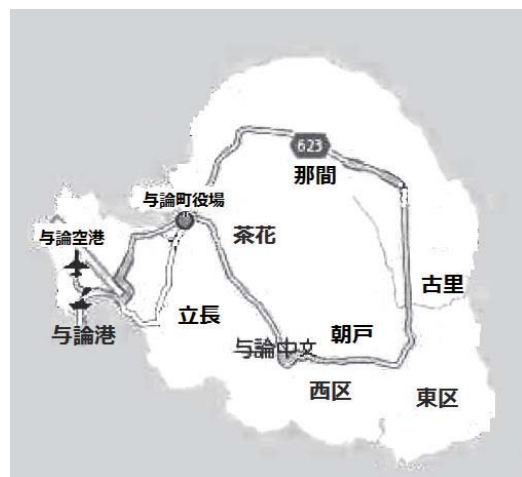


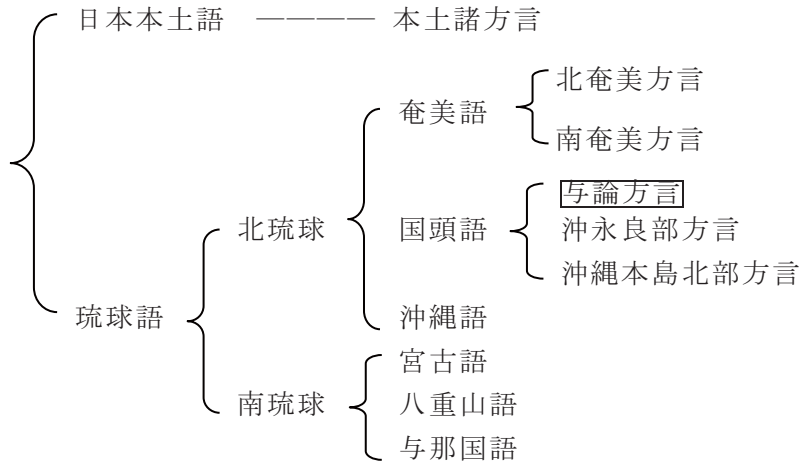
図 2 与論島の集落図

2 与論方言の概要

2.1 与論方言の位置

与論方言は奄美群島のいちばん南に位置し、行政上は鹿児島県に属するが、言語上は琉球語のうち、国頭語に位置づけられる。図示すると、以下のとおりである。

図3 与論方言の位置



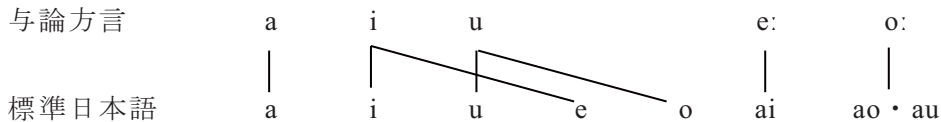
与論島の中には、大きく分けて、茶花の方言、朝戸・立長・叶・那間の方言、麦屋西区・東区・古里の方言の3つの方言がある。以下では、『与論方言辞典』を参考にしながら、麦屋東区の方言の特徴を述べる。

2.2 与論方言の音声・音韻の特徴

(2.2.1) 母音

母音の種類は、基本的に a、i、u の3つである。長母音ではこれに加えて e: と o: がある。e: は je: と発音されることもある。標準語との対応関係と用例を以下に挙げる（[]内は音声記号表記）。

図4 与論島方言と標準日本語の母音の対応



a : アシ[aei] (汗)

e: : チケー[teike:] (使い)

i : イシ[iei] (石), イビ[ibi] (海老)

o: : オークサ[o:kusa] (青草)

u : ウイギ[uiji] (泳ぎ), ウシ[uci] (牛)

(2.2.2) 半母音

j と w の2つである。以下に用例を挙げる。

ja : ヤイ[jai] (槍)	ji : イドゥンチュ[jiduntɕu] (亥年の人)
ju : ユ[ju:] (湯)、ユミ[jumi] (嫁)	jo : ヨー[jo:] (用)
wa : ワレーグイ[ware:gui] (笑い声)	

(2.2.3) 子音

(2.2.3.1) ? (グロッタルストップ) は、声門をいったん閉じてから、勢いよく開くときの音である。? は半母音 j と w の前に現れる。

?ja : ヤ'ーブジ[?ja:puzi] (先祖)	?ju : ユ'ー[?ju:] (魚)
?je : イェ'ーダ[?je:da] (間)	?jo : ヨ'ー[?jo:] (岩)
?wa : ワ'ンカ[?waŋka] (豚)	

(2.2.3.2) k は次のような音節を作る。

ka : カンゲー[kaŋge:] (考え)	ki : キー[ki:] (霧)
ku : クビ[kubi] (首)	ke : チケー[teike:] (使い)
ko : コー[ko:] (井戸(川))	kja : キャースン[kja:sun] (消す)
kju : チッキュー[teikkju:] (月)	kjo : キョーシュン[kjo:ɕun] (壊す)
kwa : クワーシ[kwa:ɕi] (菓子)	

(2.2.3.3) g は次のような音節を作る。

ga : ガンク[gaŋku] (頑固)	gi : ムギ[mugi] (麦), ピギ[pigi] (髭)
gu : ティグシ[tiguɕi] (手ぐせ)	ge : チゲー[teige:] (違い)
ア'グミ [a:gumi] (赤米)	
go : ハニゴイ[hanigoi] (金肥)	gja : ギャー[gja:] (茅)
gju : アグユイ[agju:] (上げる)	gjo : ブギョー[bugjo:] (奉行)
gwa : ジューグワチ[zu:gwaɕi] (十月)	

(2.2.3.4) s は次のような音節を作る。

sa : サキ[saki] (先)	si : シジ[ɕizi] (筋), アシ[aei] (汗)
su : スバ[suba] (側)	se : ヤッセー[jasse:] (野菜)
so : ソー [so:] (竿)	sja : ボーシャー[bo:ɕa:] (帽子は)
sju : シュー[ɕu:] (今日)	sjo : グシヨー[guɕo:] (あの世(後生))
swa : ミスワー[miswa:] (味噌は)	

(2.2.3.5) z は次のような音節を作る。

za : ザコー[zako:] (雑魚)	zji : ジ[zi] (字)、カジ[kazi] (数)
zu : ドウルズミ[duruzumi] (泥染め)	ze : ゴゼンガナシ[gozenganaɕi] (十五夜の神)
zo : ニゾ[nizo] (女の恋人)	zja : ピジヤイ[pizai] (左)
zju : アージュー[a:zu:] (赤汁)	zjo : テインジョー[tinzo:] (天井)
zwa : チズワー[teizwa:] (唾は)	

(2.2.3.6) tは次のような音節を作る。

ta : マタ[mata] (股)
 tu : トウキ[tuki] (時)
 to : トーラ[to:ra] (俵)
 tju : テューヌ[tju:nu] (手斧)
 twa : シグトワー[eigutwa:] (仕事は)

ti : ティン[tiN] (天)
 te : テーシチ[te:sitei] (大切)
 tja : テャー[tja:] (力(たや))
 tjo : アーテョー[a:tjo:] (あれ (感動詞))

(2.2.3.7) dは次のような音節を作る。

da : ダシ[daei] (出汁)
 du : ドウル[duru] (泥) ,du:ja (牢屋)
 do : ドー[do:] (ろうそく)
 dju : ニドユイ[nidjui] (濡れる)

di : ウディ[udi] (腕)
 de : デークニ[de:kuni] (大根)
 dja : ウディデャー[udidja:] (腕力)
 dwa : ヤドワー[jadwa:] (雨戸は)

(2.2.3.8) cは次のような音節を作る。

cja : イチャ[itea] (板)
 cju : チューサン[teu:san] (強い)
 cjo : チョーミン[teo:miN] (帳面)

ci : チ[tei] (血) 、チヌ[teinu] (角)
 cje : ピッチェー[piccje:] (額)
 cwa : ピチュワー[picwa:] (人は)

(2.2.3.9) nは次のような音節を作る。

na : ナー[na:] (中)
 nu : ヌヌ[nunu] (布)
 no : ノーシュン[no:εun] (直す)
 nju : シニユイ[einjui] (死ぬ)
 nwa : ヌヌワー[nunwa:] (布は)

ni : ニー[ni:] (荷)
 ne : ネー[ne:] (苗)
 nja : ヒニャ[çinja] (貝(にな))
 njo : シニョーシュイ[einjo:εui] (調和させる)

(2.2.3.10) pは次のような音節を作る。与論方言のpは、閉鎖が弱く、両唇摩擦音のφのように発音されることもある。

pa : パナ[pana] (花)
 pu : プニ[puni] (船) ,プニ[puni] (骨)
 po : ポー[po:] (女陰)
 pju : ピューマ[pju:ma] (昼間)
 pwa : トープワー[to:pwa:] (豆腐は)

pi : ピギ[pigi] (髭) 、ピラ[pira] (篋)
 pe : ペーナー[pe:na:] (延縄)
 pja : ピラ[pja:] (坂(ひら))
 pjo : ピョーシ[pjo:εi] (拍子)

(2.2.3.11) bは次のような音節を作る。

ba : バヌ[banu] (番)
 bu : アブラ[abura] (油)
 bo : ボー[bo:] (棒)
 bju : ミジビューキ[mizibju:ki] (水疱瘡)
 bwa : クニブワー[kunibwa:](みかんは)

bi : ビン[biN] (瓶)
 be : シルベー[εirube:](2、3月頃の南風)
 bja : ハタバャー[hatabja:] (片平)
 bjo : カビョー[kabjo:] (看病)

(2.2.3.12) mは次のような音節を作る。

ma : ヤマ[jama] (山)	mi : ミチ[mitɕi] (道)
mu : ムシ[muci] (虫) , ムヌ[munu] (物)	me : : メー[me:] (前)
mo : : モーケ[mo:ke] (もうけ)	mja : : ミャーギ[mja:gi] (みやげ)
mju : ユミユイ[jumju:] (読む)	mjo : : スミョー[sumjo:] (隅を)
mwa : : キムワー[kimwa] (心(肝)は)	

(2.2.3.13) hは次のような音節を作る。

ha : ハガン[hagan] (鏡)	hi : ヒー[çi:] (木) , ヒー[çi:] (毛)
hu : フミ[ɸumi] (米) , フイ[ɸui] (桶)	he : : ヘームヌ[he:munu] (買い物)
ho : : ホー[ho:] (皮)	hja : : ムヒャー[muhja:] (六日)
hju : : ヒュー[hju:] (はい(返事))	hjo : : ヒョーチン[hjo:tein] (標陳(地名))
hwa : : パフワー[pahwa:n] (箱は)	

与論方言の ha、hi、hu は、標準語の ka、ke、ko に対応している（標準語の ka、ko は一部、与論方言の ka、ku に対応）。一方、標準語の ha、hi、hu は、与論方言では pa、pi、pu に対応している。以下に与論方言と標準語との対応関係を挙げておく。

図5 与論方言の h、k、p と標準語の h、k の対応関係

与論方言	ha,ka	ki	ku	hi	hu,ku	pa	pi	pu	pi	pu
標準語	ka	ki	ku	ke	ko	ha	hi	hu	he	ho

(2.2.3.14) rは次のような音節を作る。語頭に来ることはほとんどない。

ra : チラ[teira] (顔)	ri : メーダリ[me:dari] (前垂れ)
ru : ユル[juru] (夜)	re : : タレー[tare:] (たらい)
ro : : アロータン[aro:tan] (洗った)	rja : : アリャー[arja:] (彼は)
rju : : イリユー[irju:] (入り用)	rjo : : グリョーフガン[gurjo:ɸugan] (御魂御願)
rwa : : ユルワ[jurwa] (夜は)	

(2.2.4) 特殊音

(2.2.4.1) 撥音

撥音ン (n) は、鼻にかかる音（鼻音）である。後ろに両唇音の[p]、[b]、[m]が来るときには両唇の鼻音[m]に、歯茎音の[t]、[d]、[n]が来るときには歯茎の鼻音[n]に、軟口蓋音の[k]、[g]が来るときには軟口蓋の鼻音[ŋ]になる。語末では口のどこも閉じない鼻音の場合が多い。上の例では、これを[n]で表記している。

カカンボー[kakambo:] (書かなかつたら)	イドウンチュ[jidunteu] (亥年の人)
ワンカ[ʔwaŋka] (豚)	キヤースン[kja:sun] (消す)

(2.2.4.2) 促音

促音ッ (Q) は、k、s、z、t、c、pの前に現れる。

チッキュー[teikkju:] (月)
 イッティ[itti] (いつ)

ヤッセー[jasse:] (野菜)
 ピッチェー[piccje:] (額)

2. 3 与論方言のアクセントの特徴

与論方言のアクセントは、従来、N型アクセントと言われてきたが、上野(1999)により、東区のアクセントは昇り核による多型アクセントであることが明らかとなった。上野(1999)からアクセント体系を以下に引用する。

/!パナ/(鼻)	/!タタミ/(畳)	/!アマグチ/(甘口)	/!パナバイヤ/(鼻筋)	①
/「プニ/(舟)	/「ウイビ/(指)	/「ミーチキ/(目付き)	/「カーラヤー/(瓦葺家)	①
/パ「ナ/(花)	/ワ「ラビ/(子供)	/ア「ニンカ/(姉)	/チ「ブルバチ/(大蜂)	②
	/アブ「ラ/(油)	/メー「ラビ/(娘)	/ウブ「ウイビ/(親指)	③
		/ナマグ「ミ/(生米)	/ウイビ「ガマ/(小指)	④
			/チクイサ「バ/(島草履)	⑤

! : 中 「 : 上昇 (上げ) ˊ : 下降 (下げ) ˆ : モーラ内上昇 ˋ : モーラ内下降

2. 4 与論方言の文法の特徴

(2. 4. 1) 動詞の特徴

(2. 4. 1. 1) 終止の形

終止の形には -jui と -jun の 2 種類がある。-jui は「目の前で見ている」ことの報告を表し、-jun はそうでないことの報告を表す。主語が一人称の場合は、-jun を使う。

アリヤー ジー カキュイ [arja: zi: kakjui] (彼は字を書いている) (見ている)

アリヤー ジー カキュン [arja: zi: kakjun] (彼は字を書く) (見ていない)

パッティカチャー ワーガ イキュン [pattikatja: wa:ga ikjun] (畑へはおれが行く)

また、取り立ての助詞 (係り助詞) の du を受ける場合は、連体形で文が終止する。

ジードゥ カキュル [zi:du kakjuru] (字をこそ書く)

(2. 4. 1. 2) 連体の形

標準語では、終止の形と連体の形が同形だが、与論方言では、終止の形は -jui、-jun、連体の形は -juru である。

ワーガ ティガミ カキュル ナゲー [wa:ga tigami kakjuru nage:] (私が手紙を書いている間)

コーリユル ムナー ムール コータン [ko:rjuru muna: mu:ru ko:tan] (食べられるものは全部食べた)

(2. 4. 1. 3) 疑問の形

Yes/No 疑問文には、語幹に -mi: を付ける。

アリヤー カキュミー [arja: kakjumi:] (彼は書くか)

ウロー フヌ ユ'ーヌ ナーインチャン シツチュミー[uro: ɸunu ʔju:nu na:intɛan
cittɛumi:] (おまえはこの魚の名まえを知っているか)

WH 疑問文には、-jun 形に ga を付ける。

ティガミヤー イッチ カキユンガ[tigamja: ittei kakjuŋga] (手紙はいつ書くのか)

ウマガヤ イッチ トーキョーカラ ムドウンガ[umagaja ittei to:kjo:kara muduŋga]
(孫はいつ東京から帰るか)

(2.4.1.4) 命令の形

命令の形は-i である。少し丁寧な命令には、-ija: を使う。

ペーク カキ[pe:ku kaki] (早く書け)

ウラガ パツティカテヤー イキ[uraga pattikatja: iki] (おまえが畑へ行け)

カキヨー[kakija:] (書きなさいね)

(2.4.1.5) 条件の形

確定条件には-kutu、仮定条件には-ba、-bo:、逆接条件には-n、-eiga を使う。

ウラガ カキユクトウ ワナー カカンヌ[uraga kakjukutu wana: kakannu] (あなたが
書くから私は書かない)

ワーガ カカバ ミーヨー[wa:ga kakaba mi:jo:] (私が書いたら見よ)

ワヌン ジー カキボー エータン[wanun zi: kakibo: e:tan] (私も字を書いたらよかつ
たのだ)

イシャヌ タバーチャル クスイ ヌミボー ノーユルパジ[icanu taba:tearu kusui
numibo: no:jurupazi] (医者がくれたくすりをめばなおるだろう)

ウロー カチン ワナー カカンヌ[uro: katein wana: kakannu] (あなたは書いても私は
書かない)

アリヤー ジーンチャン ペーク カキューシガ ヤブリサン[arja: zi:ntɛan pe:ku
kakju:eiga jaburisan] (彼は字を速く書くが、下手だ)

(2.4.1.6) 準体の形

準体(名詞)の形は-eiga である。

ワヌン ジー カキューシガ マシ[wanun zi: kakjueiga maɛi] (私も字を書くのがよい)

以上の諸用法をまとめておく。

終止の形	カキューイ[kakjui](書いている)、カキユン[kakjun](書く)
連体の形	カキユル ムヌ[kakjuru munu](書くもの)
疑問の形	カキユミー[kakjumi:] (書くか) カキユンガ[ittei kakjuŋga] ((いつ) 書くか)
命令の形	カキ[kaki] (書け)
条件の形	カキユクトウ[kakjukutu] (書くから) カカバ[kakaba] (書いたら) カキボー[kakibo:] (書いたら)

	カチン[katein](書いても)
準体の形	カキューシガ[kakju:eiga](書くのが)

(2.4.1.7) 否定の形

否定の形は、-nnu である。以下に否定の用法を挙げる。

否定の終止	カカンヌ[kakannu](書かない)
否定の疑問	カカンヌイ[kakannui](書かないか) ヌー カカンヌガ[nu: kakannuga](なぜ書かないのか)
否定命令(禁止)	カクンナ[kakunna](書くな)
否定の条件	カカンクトゥ[kakankutu](書かないから) カカダナ[kakadana](書かないので) カカンボー[kakambo:](書かないと) カカンダリボー[kakandaribo:](書かなかったら) カカンダラボー[kakandarabo:](もし書かなかったら) カカンバ[kakamba](書かなくても) カカタンチン[kakantantein](書かなくても)
否定の準体	カカンシガ[kakaneiga](書かないのが)

(2.4.1.8) 過去の形

過去の終止	カチャン[katean](書いた)
過去の疑問	カチャミー[kateami:](書いたのか) ターガ カチャガ[ta:gakateaga](誰が書いたか)
過去の条件	カチャクトゥ[kateakutu](書いたから) カチャンボー[kateambo:](書いたのなら) カチャンチン[kateantein](書いても)
過去の逆接	カチャシガ[kateasiga](書いたが)
過去の準体	カチャシガ[kateasiga](書いたものが)

(2.4.2) 形容詞の特徴

(2.4.2.1) 普通体

与論方言の形容詞には、語尾が-サ (-sa) のものと-シャ (-ea) のものがある。-sa のものは標準語のク活用形容詞に対応し、-ea のものはシク活用形容詞に対応する。これらは、「語幹+さ+あり」に由来する。

-sa のもの、-ea のもの、いずれも終止の形には -i と -N の 2 種類がある。-i は 1 回的で、そのときに感じたことや現前の状態・性質を言うときに使い、-N は一般的な状態・性質を言うときに使う。たとえば、食べものを口にして「美味しい」と感じたときにはマサイ [masai] を使い、自分の漬けた漬け物は「美味しい」というときにはマサン [masan] を使う。

過去形にも -tai と -tan の 2 種類があり、やはり、-tai は 1 回的で現前性の状態・性質や感情を表し、-tan は一般的、継続的な状態・性質や感情を表す。たとえば「昨日見た映画は面白かった」のように、映画の内容について言うときにはミジラシャタン [miziracatan] を使

い、「昨日見た映画は面白かったか」と聞かれて、「面白かった」と答えるときのように、昨日の1回の感想を言うときにはミジラシャタイ[miziraçatai]を使う。

形容詞の普通体の用法を以下に挙げる。

-sa 形容詞	終止	ターサイ [ta:sai](高い)
		ターサン [ta:san](高い)
	連体	ターサル ヤマ [ta:saru jama](高い山)
	疑問	ターサミ [ta:sami](高いか)
		ターサガ [ta:saga]((どっちが)高いか)
	条件	ターサヌ [ta:sanu](高くて)
		ターサリボー [ta:saribo:](高ければ)
	否定	タークネン [ta:kunen]
	過去	ターサタイ [ta:satai](高かった)
		ターサタン [ta:satan](高かった)
-ca 形容詞	終止	ミジラシャイ [miziraçai](面白い)
		ミジラシャン [miziraçan](面白い)
	連体	ミジラシャル ムヌ [miziraçaru munu] (面白いもの)
	疑問	ミジラシャミ [miziraçami](面白いか)
		ミジラシャガ [miziraçaga](どっちが面白いか)
	条件	ミジラシャヌ [miziraçanu](面白くて)
		ミジラシャリボー [miziraçaribo:](面白ければ)
	否定	ミジラシクネン [miziraçikunen](面白くない)
	過去	ミジラシャタイ [miziraçatai](面白かった)
		ミジラシャタン [miziraçatan](面白かった)

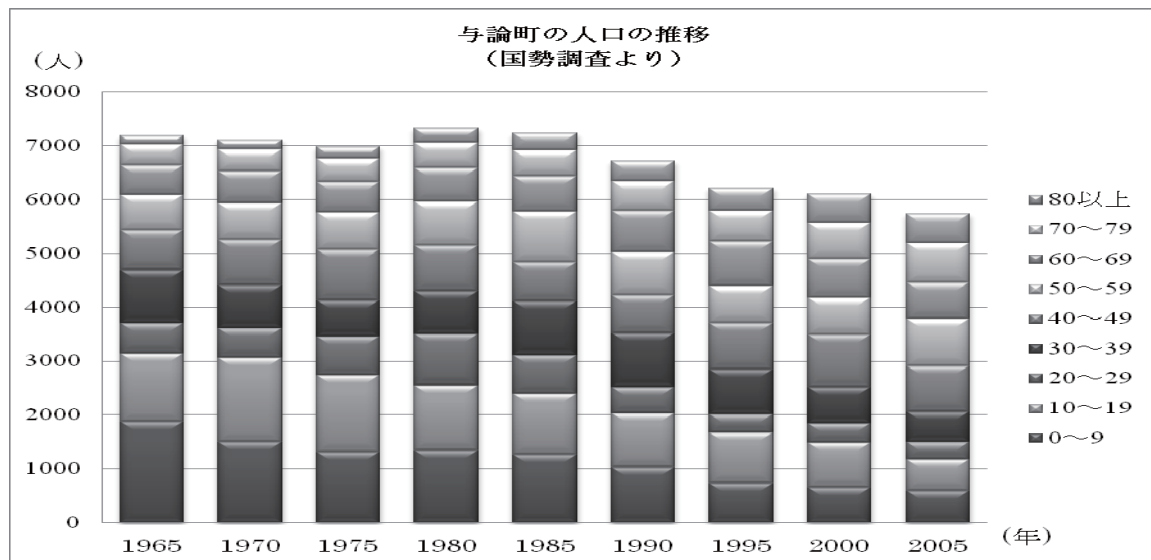
(2.4.2.2) 丁寧体

形容詞の丁寧体は、語幹に-jabjun (肯定) や -ajabirannu (否定) を付ける。以下に丁寧体の用法を挙げる。

-sa 形容詞	終止	ターサヤビュン [ta:sajabjun](高いです)
	過去	ターサヤビュータン [ta:sajabju:tan](高かったです)
	否定	タークヤ アヤビランヌ [ta:kuja ajabirannu](高くないです)
	否定過去	タークヤ アヤビランタン [ta:kuja ajabirantan](高くなかったです)
-ca 形容詞	終止	ミジラシャヤビュン [miziraçajabjun](面白いです)
	過去	ミジラシャヤビュータン [miziraçajabju:tan](面白かったです)
	否定	ミジラシクヤ アヤビランヌ [miziraçikuja ajabirannu](面白くないです)
	否定過去	ミジラシクヤ アヤビランタン [miziraçikuja ajabirantan](面白くなかったです)

3 人口構成からみた与論方言

1965年から2005年までの与論町の人口推移のグラフを図6に挙げる（国勢調査より）。20歳以下の人口が急速に減少し、60歳以上の総人口に占める割合は、1965年が15.2%であるのに対し、2005年は34.0%で、40年間に18.8ポイント上昇している。高齢化が急速に進んだ時代である。



年	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
80歳以上	166	171	214	266	316	375	422	529	546
70～79歳	383	409	433	464	485	546	565	667	737
60～69歳	544	585	577	632	654	762	837	734	667
50～59歳	661	678	683	813	931	797	676	683	868
40～49歳	740	840	935	840	729	713	873	974	846
30～39歳	981	796	669	802	990	999	824	663	575
20～29歳	567	561	726	953	734	475	338	370	320
10～19歳	1259	1557	1424	1211	1123	1006	940	829	588
0～9歳	1880	1498	1310	1339	1260	1031	735	648	584
合計	7,181	7,095	6,971	7,320	7,222	6,704	6,210	6,097	5,731

図6 与論町の人口推移（1965年～2005年）

次に、2010年から2040年までの与論町の年齢別推計人口統計のグラフを図7に挙げる（国立社会保障・人口問題研究所 平成24年1月推計による）。国立社会保障・人口問題研究所では、2040年の人口を4,355人と推計している。2010年から2040年までの30年間の人口減少率は-18%、また、60歳以上の総人口に占める割合は、2010年が37.4%、2040年が43.9%で、30年間に6.5ポイント上昇することになる。高齢化がさらに進むという推定である。

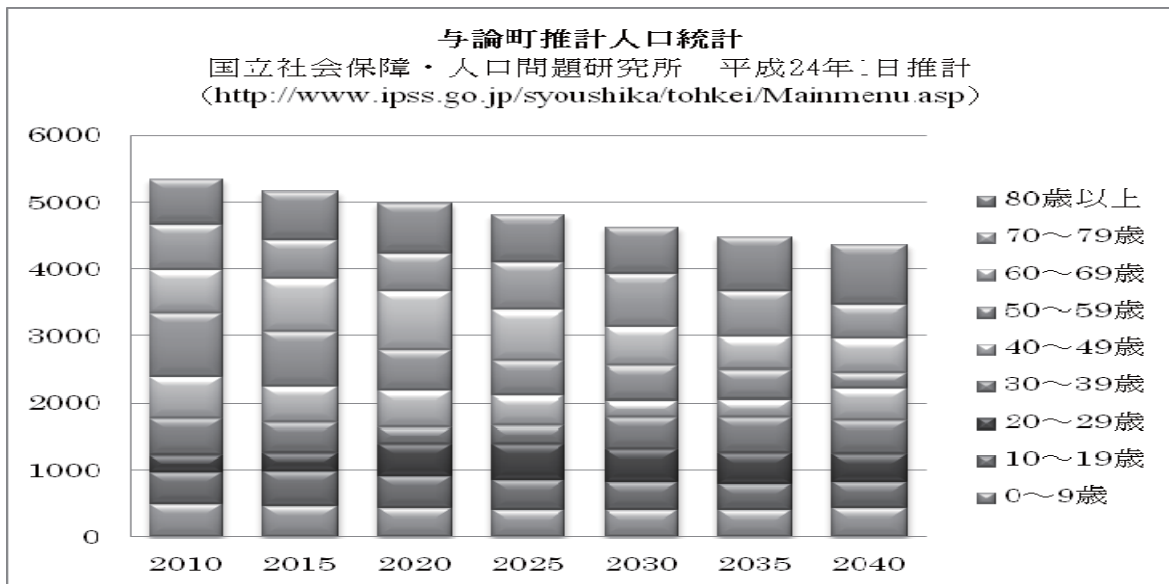


図7 与論町年齢別推計人口統計（2010年～2040年）

4 共通語教育と方言教育

(1) 共通語教育

昭和40年代まで、与論の3つの小学校（茶花小学校、与論小学校、那間小学校）では、共通語の励行と方言禁止の教育が行われていた。方言禁止の方法は、「方言札」による罰が主流である。方言札の形態は、学校によって異なっていた。与論小学校の方言札は、「方言」と書かれた札で、クラスに1枚だった。方言を使った子どもは、これを首から掛けさせられ、別の子どもが方言を使うと、今度はその子がこの札を掛けるという方式だった。わざと、別の子どもが方言を使うように仕向けることもあったという。那間（なま）小学校の方言札は、スチール製の赤く丸い札に紐が付いたもので、クラスに何枚もあり、方言を使った子は、この赤い札を一日中、首に掛けて授業を受けた。一週間のうちに5枚以上、こ

の札をもらった子どもは、罰として廊下の拭き掃除をさせられた。

このように、与論における共通語教育は、方言札の罰により方言の使用を禁止するという形で進められた。その成果、及びテレビの普及により、現在は与論の全世代の人が共通語を上手に話すことができるようになった。しかし、方言札による方言禁止の教育を受けた世代には、「方言は悪いもの」という意識が植え付けられた。この意識が変わるのは、1990年以降のことである。

(2) 方言教育

1980年ごろになると状況が一変し、方言が郷土教育の一環として取り入れられるようになった。その背景には、子どもたちが共通語を上手に話せるようになり、学校で方言を禁止する必要がなくなったという状況がある。しかし、逆にいうと、子どもたちが方言を話せなくなったということの意味する。それに伴い、1990年ごろから、方言や地域の文化が消滅するのではないかという危機感が地域コミュニティの中に生まれ、2000年ごろから方言や地域文化の学習が学校教育に取り入れられるようになった。

(2.1) 菊千代氏、菊秀史氏の取組

与論における方言教育は、与論民俗村経営の菊千代氏と菊秀史氏の活動によるところが大きい。菊千代氏はまだ、共通語教育が盛んだったころから与論の民話や方言、民具の採集を始め、与論民俗村を設立した。方言に関しては、1985年に与論の民話集『与論のしまがたり（ユンヌ・ヌ シمامヌガッタイ）』（はる書房）を、2005年には『与論方言辞典』（武蔵野書院、高橋俊三氏と共著）を刊行した。

菊秀史氏の活動は、平成10（1998）年ごろに始まった。国立国語研究所第3回国際学術フォーラム「日本の方言の多様性を守るために」（平成22年12月18日）の発表資料から、菊氏の方言指導の歩みを簡単に引用する（詳しくは、国立国語研究所(2011)『日本の方言の多様性を守るために』を参照）。

平成10年 (1998)	ユンヌフトゥバ(与論のことば)の危機を感じ、町政懇談会で学校での方言授業を提唱。
平成13年 (2001)	集落の子ども会育成会長となり、月1回公民館で集落の子どもたちを対象にユンヌフトゥバの勉強会を始める。
平成14年 (2002)	1学期は月2回与論小学校図書室にてユンヌフトゥバの授業(希望者のみ)を実施。2学期からは月1回「総合的な学習の時間」でユンヌフトゥバの授業を実施(現在まで続く)。各学年、年間10時間。
平成15年 (2003)	「総合学習」に与論中学校でユンヌフトゥバの授業を実施。与論民俗村で年3回、1回2時間、ユンヌフトゥバの勉強会を実施(現在まで続く)。
平成18年 (2006)	与論町文化協会で2月1 ^フ 8日を「ユンヌフトゥバの日」に決定。『与論の言葉で話そう1』（挨拶、名詞、こそあど言葉・感動詞・副詞）出版。
平成19年 (2007)	奄美大島地区文化協会で2月18日を「方言の日」に決定。『与論の言葉で話そう2』（動詞の文型・文法）出版。

平成 20 年 (2008)	公民館でユンヌフトゥバ講座開講。1 回 2 時間、20 回実施。第 1 回ユンヌカルタ大会開催（以降、毎年開催）。与論町で「ユンヌフトゥバの日に関する条例」制定。
平成 21 年 (2009)	『与論の言葉で話そう 3』（活用種類別動詞単語集）出版。
平成 22 年 (2010)	茶花小学校にて「ユンヌに学ぼう（家族で出来る方言教育）」始まる。与論小学校PTAによる「ユンヌフトゥバ学習の成果を上げるための取組み」始まる。
今後	『与論の言葉で話そう 4』（形容詞・助詞・助動詞など）出版予定。

菊秀史氏の活動を受けて、与論小学校では総合学習の時間に全学年、ユンヌフトゥバ（与論ことば）の授業を体系的な教育カリキュラムを組んで実施している。以下に与論小学校の取り組みを紹介する。

(2.2) 与論小学校の取組

与論小学校では平成 19 年度に鹿児島県へき地・小規模校研究連盟の研究指定を受けて、「郷土の文化を生かした教育活動の展開～ユンヌフトゥバ学習を中心に～」を実施した。内容は、家庭や地域と連携を深めることによりユンヌフトゥバを生活に即した会話型として学習に取り入れ、ユンヌフトゥバを使う機会を増やそうというものである。与論小学校では、平成 20 年度以降もこの教育を継続し、全学年を対象に年間 10 時間の方言指導を実施している。その特徴を以下に挙げる。

- ①体系的なカリキュラム：「ユンヌフトゥバで会話ができるようになること」を目的として、第 1 時から第 10 時まで、体系的なカリキュラムを組んでいる。
- ②家庭や地域との連携：「ユンヌフトゥバの日（毎月 18 日）音読カード」により、親子でユンヌフトゥバの上達状況をチェックするようにしている。
- ③教材のデジタル化：ユンヌフトゥバ学習で用いている教材をデジタル化し、パソコン操作によって、子どもが自分で知りたいユンヌフトゥバを選んで聞くことができるようにしている。

（与論小学校「郷土愛を深め、『話す力・聞く力』を高めるユンヌフトゥバ学習の取組」から抜粋）

与論小学校の方言学習の特徴は、「ユンヌフトゥバで会話ができるようになること」を目的としている点である。方言の単語の学習や挨拶ことばの学習を授業に取り入れている学校は全国に多いが、会話ができるようになることを目的としている学校は、ほとんどない。また、与論小学校では、外部の補助金を獲得して教材のデジタル化を行うなど、学校全体でユンヌフトゥバ教育に取り組んでいる。与論小学校の方言学習は、地域コミュニティーの指導者、学校、家庭の連携がうまくいった事例である。

与論小学校の取組を参考にして、学校における方言学習の問題点を考えると、次の 2 つを指摘することができる。

(1) 学校側の問題として、教員の異動を考慮して、取組を計画する必要がある。鹿児島県では、小学校の教員は5年を周期として異動する。そうすると、方言教育に熱心な教員がいる間はよいが、その教員が異動したあとは、方言指導が下火になるという事態が起きる。これに対応するためには、方言学習を特定の教員に頼るのではなく、多くの教員が関わるという環境を日常的に作っておく必要がある。また、地元出身の教員でなくても方言学習に携わることができるカリキュラムが必要である。

(2) 地域コミュニティの指導者についても、同じことが言える。熱心な指導者がいる間はよいが、その人が何らかの理由で協力できなくなると、学校での方言学習がとたんに成り立たなくなる。これについても、一人の人に頼るのではなく、地域の組織的な取組が必要である。



図8 与論小学校の玄関前の階段



図9 与論小学校の方言教育風景

(与論小学校提供資料より)

(2.3) その他の小学校、及び中学校の取組

那間小学校では、与論小学校のような体系的なカリキュラムは組まれていないが、総合的な学習の時間に「桃太郎」の方言劇や方言のことわざを使った学習を行っている。方言劇は、総合的な学習の時間だけでは練習が足りないので、授業時間以外を使って練習を行っている。茶花小学校でも体系的なカリキュラムを組んでいないが、「ユンヌに学ぼう 家族で出来る方言教育」を実施している。

中学校では、学期ごとに年3回、与論の文化について学習する時間を設け、民俗村等での学習を行っている。また、生徒は卒業時に与論の文化について調べ、レポートを作成している。

高校では、ユンヌ学の講演が年に数回、開催されている。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

地域コミュニティでは、年間行事として、以下のような活動を行っている。

- ・ 2月18日（ユンヌフトゥバの日）の近隣の日曜日に、3つの小学校が合同でカルタ大会を開催。
- ・ 12月19日（25年度は10月19日）に「19の春」大会を開催。「19の春」の歌詞の替

え歌を共通語、与論方言、英語などで作って発表する。子どもから大人まで参加する。介護施設で働く若い看護師が積極的に参加しているという。

- ・夕方6時（冬は午後5時15分）から毎日、有線放送で方言による帰宅の案内を流している。放送の内容は以下のようなもので、小学5・6年生の子どもがこれを読みあげる。読み上げる子どもは、3つの小学校から輪番で選ばれ、1つの小学校が1年間、担当する。

ユネーヌ6時エイドー。ヤーカティ ムデュウル時間エクトウ アシドウルワラビンチャーヤ 車ナガナイ キーチキティ ムテューシドー。（午後6時、おうちに帰る時刻になりました。遊んでいる子どもたちは、車などに気をつけて帰りましょう。）

この放送は、6～7年前から始まった。それ以前は鹿児島県における朗読活動「朝読み、夕読み運動」の一環として、標準語で教科書の朗読を行い、有線で放送していた、これを6～7年前から上記のような方言による放送に変えたものである。

6 方言資料の作成

地元の人で作成した与論方言として、先に挙げた民俗村経営の菊千代氏、菊秀史氏による次のような資料がある。

菊千代(1985)『与論のしまがたり』はる書房

菊千代・高橋俊三(2005)『与論方言辞典』武蔵野書院

菊秀史(2006)『与論の言葉で話そう(1) 挨拶、名詞、こそあど言葉・感動詞・副詞』
与論民俗村

菊秀史(2007)『与論の言葉で話そう(2) 動詞の文型・文法』与論民俗村

菊秀史(2009)『与論の言葉で話そう(3) 活用種別動詞単語集』与論民俗村

菊秀史(近刊)『与論の言葉で話そう(4) 形容詞、助詞・助動詞』与論民俗村

『与論の言葉で話そう(1)～(4)』は、子どもたちに与論方言を教えることを目的として作られた与論方言の文法書で、現在、与論小学校の方言学習の授業で使用されている。現在も継続的に作成中で、(4)が近刊の予定である。録画資料や録音資料は、あまりない。『与論方言辞典』には、菊千代氏による録音音声が存在するが、未編集である。

7 危機の度合いの判定

与論方言は、奄美地域の中では危機の度合いが比較的低い。平均値は2.88～3.13である。その理由は、45歳くらいの人でもかなり流暢に方言を話すことができ、職場や地域の会合で方言が使われていること、地域コミュニティーの出身者、菊千代氏、菊秀史氏が作成した与論方言の辞書や文法書があり、小学校の方言学習で子どもたちがこの文法書を使って

方言を学習していること、また、現在も継続的に文法書が作成されていること、方言を次世代に残したいという意識が高く、学校、家庭、地域コミュニティの連携体制が整備されていること、などによる。

判定の理由

(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか：3

与論方言を話すことができるのは、45歳以上の人たち、すなわち、親世代より上の人たちである。これより下の世代（子ども世代）は、与論方言を聞いて理解することはできるが、自分で話すことはあまりできない。10代以下の子どもでは、聞いて理解することができるが、話すことはできない。したがって、「3. その言語は親の世代以上で使用されており、子どもたちは使用していない」と判断した。

(2) 母語話者数：2,923人

与論方言が話せるのは、45歳以上の人である。この人たちを母語話者と考える。平成22年における45歳以上の人数は、

$315 (45\sim 49) + 942 (50代) + 643 (60代) + 677 (70代) + 671 (80以上) = 3,248$
である。このうち、島外出身者や方言話せない人が約10%いるとして、この数を除くと、
 $3,248 \times 0.9 = 2,923$

となる。

(3) コミュニティ全体にしめる話者の割合：3

(2)の2,923人を平成22年度の総人口5,327人で割ると、54.9%となる。したがって、「3. その言語を使用している者が大半を占める」と判断する。

(4) どのような場面でその言語が使用されているか：3

家庭では、与論方言がまだ、使われている。3世代同居の家庭では、祖父母同士の会話、父母同士の会話、祖父母と父母との会話は方言で行われるが、祖父母や父母が子どもに向かって話すときは、方言を使用せず、共通語を使用する。したがって「3. その言語は家庭では使用されているが、支配的言語が家庭でも使われ始めている」と判断した。

なお、「子どもに対してなぜ、方言で語りかけないのか」という問いに対しては、「子どもに方言で語りかけても、子どもが理解できないのではないと思うから」という回答が得られた。

(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか：2

伝統的な場面以外の新たに加わった場面で、与論方言が使用されることはほとんどない。与論には地域のFM放送局がなく、与論方言を使った番組が作成されることもない。ただし、上記のように、有線放送で夕方6時（冬は午後5時15分）から毎日、方言による帰宅の案内を流している。したがって、「2. その言語は新たに生活に加わったいくつかの場面で使用されている」と判断した。

(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか：3

上に述べたように、コミュニティーの出身者が作成した与論方言の辞書や文法書がある。これらの資料では、方言がカタカナで表記されている。与論小学校の方言学習では、子どもたちはこの書記法で方言を学習し、自分たちもこの書記法で方言を書いている。ただし、与論小学校以外では、この書記法はまだ浸透していない。また、行政文書や公式な場では、方言の使用は推奨されていない。したがって、「3. 文字資料が存在し、子どもたちは学校でそれに触れる機会がある。その言語の使用は推奨されていない」と判断した。

(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）：3

昭和50年代までは、学校で方言の使用が禁止され、使用した場合は「方言札」の罰が与えられていた。現在では、禁止されることはないが、学校教育を始めとする公的場面での使用言語は、現代日本共通語である。また、方言の保護は、政策としては施行されていない。したがって、「3. その言語に関する保護政策は施行されていない。公的場面では支配的言語が使用される」と判断した。

(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度：3～4

コミュニティーの全員に調査を行ったわけではないが、個別のインタビューの結果では、「方言を次世代に残したい」と思っている人がほとんどで、「方言はなくなった方がよい」と思う人は少ない。昭和50年代までの共通語教育、及び方言禁止教育の中で生まれた「方言は悪いもの」という感覚は、現在では薄れている。

しかし、このような意識とは逆に、(4)で述べたように、祖父母や父母は、家庭で子どもに対して方言を使用していない。また、「子どもの使う方言は、敬語の使い方が間違っていることが多い。間違った方言を話すよりも、方言でなく共通語で話す方がよい」などの意見もあった。したがって、「3. 多くの者がその言語が次世代にも使われることを支持している。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる」、ないし「4. ほとんどの者がその言語が次世代にも使われることを支持している」と判断した。

(9) 言語記述の質と量：3～4

与論方言には、菊千代氏、菊秀史氏による上記のような与論方言の資料が存在する。これらは、子どもたちに方言を教えることを目的として作られたもので、継続的に内容の修正や追加が行われている。ただし、録画資料や録音資料は、あまりない。したがって、「3. 一定の文法資料、辞書、文字資料が存在しうるが、日常言語使用の資料はない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものやされていないものもある」、ないし「4. よい文法記述が一つある他にも、文法資料、辞書、文字資料、文学、それに定期的に更新される日常言語使用の資料が存在する。一定の質の録音、録画資料が存在する」と判断した。

以上の判定結果を表にまとめておく。

与論方言の危機の度合いの判定

	与論方言
(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	3
(2) 母語話者数	2,923 人
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	3
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	3
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	2
(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか	3
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	3
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	3～4
(9) 言語記述の質と量	3～4
平均	2.88～3.13

引用文献

- 上野善道(1999) 「与論島東区方言の多型アクセント体系」『国語学』199 集
- 木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛(2011) 『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』(文化庁委託事業報告書) 133 頁
- 国立国語研究所(2011) 『日本の方言の多様性を守るために』国立国語研究所第3回国際学術フォーラム報告書
- 西村浩子(1998) 「奄美諸島における昭和期の『標準語』教育－方言禁止から方言尊重へ－」『松山東雲女子大学人文学部紀要』6
- 前田晶子(2004) 「離島における地域の人間形成と学校－沖永良部島・国頭小学校の 1970 年代－」『AMAMI News Letter』No. 8

沖縄県幸喜方言

沖縄県幸喜方言

かりまたしげひさ

1 沖縄県名護市幸喜の概要

名護市幸喜集落は、名護市の東シナ海側の集落で、名護市の南側に位置する集落である。恩納村の境界近くには喜瀬集落があり、その喜瀬集落の北隣の集落である。幸喜川が集落内を流れ、水に恵まれた土地で、かつては水田も多く、コメ作りが盛んであったが、ほとんどの田んぼは砂糖黍畑に変わっている。2013年12月末現在の集落の人口は291人、男161人、女131人。世帯数は132世帯である。

2 幸喜方言の概要

名護市幸喜集落の方言は、UNESCOのAtlas of the World's language in Dangerにあげられた国頭語のなかの一つの下位方言である。国頭語は、UNESCOのリストによると、「危険」と判定されている。国頭語と一口にいても、伊江島方言のように本格的な辞典と豊富な談話資料と文法記述を有し、保存・継承に財政的な支援をおこなっている自治体もあれば、方言母語話者は存在するが、隣接する中南部方言の圧倒的な影響をうけて変容し、伝統的方言の固有の言語的特徴を失いつつある恩納村恩納方言や話者人口が激減して集落の維持そのものが困難になりつつある国頭村内の下位方言もあって、その下位方言のおかれている状況は下位方言ごとに異なる。

2.1 幸喜方言の位置

名護市幸喜方言は、北琉球諸語の下位言語の沖縄語北部方言のうちの中央山原方言に属する¹。他の中央山原方言と同じく、幸喜方言も日本祖語のpを保持し、*a、*oと結合する*kをhに変化させている。語中bをwに変化させたり、脱落させたりする音韻変化がみられるが、この変化は、他の沖縄語に見られない幸喜方言の特徴である。中央山原方言は、喉頭音化した無声破裂音と喉頭音化しない無声破裂音が音韻的に対立することを特徴とするといわれるが、幸喜方言のばあい、その音韻的対立を失っている。喉頭音化した接近音も喉頭音化しない接近音に統合され、語頭の母音と結合する喉頭破裂音も失なわれている。

¹ 沖縄語北部方言の下位区分については、かりまたしげひさ(2006)「第1章 山原方言の概観」『名護市史言語編』pp3～29を参照。

2. 2 幸喜方言の音声・音韻の特徴

幸喜方言の母音は、a、i、u、e、oの短母音5個と音色を同じくする長母音/a:、i:、u:、e:、o:/の5個が存在する。一部の感動詞と終助詞に限定してあらわれる鼻母音/ǝ、ĩ/が存在する。鼻母音はĩ、ǝは擬音語と終助詞にあらわれる。

mi:hiĩ (ヒヒン、馬のいななき)

joNna: ke:re:hi: (ゆっくり帰ってね [同年の者への別れのあいさつ])。)

joNna: ke:iNsorehǝ: (ゆっくりお帰りなさいね [目上の者への別れのあいさつ])。)

幸喜方言の子音は、p、t、k、b、d、g、ts、dz、s、h、m、n、r、j、w、N、Qがある。口蓋音化した子音と唇音化した子音と口蓋音化も唇音化もしない子音の音韻的対立がある。口蓋音化した子音にはpj、kj、bj、gj、hj、mj、njがあり、唇音化した子音にはkw、gwがある。無声破裂音p、t、kと接近音w、jに喉頭音化したアロフォンがある。現在の話者は、喉頭音化したアロフォンと喉頭音化しないアロフォンを音韻論的に区別しないが、親世代では音韻論的な対立があった可能性がある。

pa: (葉、歯)、pana (花)、japarahaN (柔らかい)、puni (骨)、pusi (星)、pizi (肘)、upohoN (多い)などの語例にみられる幸喜方言のpは、日本祖語のpを保持するものである。このpは他の名護市方言にも共通するものである。

hazi (風)、naha (中)、humi (米)、huzu (去年、こぞ)などのように母音a、oに先行するkが摩擦音化してhであられる。これも他の名護市の方言と共通の特徴である。

nawi (鍋)、tawaku (煙草)、warawi (子供・童)、kuwaiN (配る)、tuuN (飛ぶ)などのように語中の両唇破裂音が接近音化してwであられる語形がある。b>wの変化は他の沖縄北部方言や沖縄方言にもみられない幸喜方言固有の現象である。

形容詞の語尾にはtakahaN (高い)、sikahaN (小心だ)のように-ha-があらわれるが、一部に、ubohoN (重い)、upohoN (多い)、du:gorohoN (心苦しい)、nokohoN (温い)などのように、hoがあらわれる。これはubuhaN>ubohoN、upuhaN>upohoN、du:guruhaN>du:gurohoN>du:gorohoN、nukuhaN>hukohoN>nokohoNのような遠隔相互同化によって発生したものである。なお、pata (蓋)は、puta>pataのように遠隔逆行同化によって語頭音節の母音uがaに変化したものである。poro (畑)もparu>poroのように遠隔相互同化によって変化してできた語形である。幸喜方言には母音調和に似た遠隔同化の現象がみられる。この母音の遠隔同化母音は、幸喜方言の母音の特徴であるといつてよいだろう。

2. 3 幸喜方言の文法の特徴

幸喜方言の名詞は-ga(が)、-nu(の)、-ni(に)、-Nti(で)、-ci(で)、-Ngati(へ)、-ra(から)、-madi(まで)、-tu(と)、-jakoN(より)の格助辞を後接させた形式および格助辞のつかないハダカの形式が文中での他の単語との関係をあらわす。-ga(が)も-nu(の)も主格も属格もあらわすことができるが、-gaは主格に、-nuは属格に特化する傾向がある。

ko:cjo:siNsi:ga basura uriti cjaN.

(校長先生が バスから おりて きた。)

hanakoga ciraja ha:pani ju: nicjuN.

(花子の 顔は 祖母に よく 似ている。)

kurumanu waQtamikaci cja:tu, tamasu nugitaN.

(車が 飛び出して きたので、驚いた。)

kadzukonu udu ja:nu uini pucjesa.

(かず子の 布団(が) やねの 上に ほしてアルよ。)

-Nti を後接させた名詞は動作の行われる場所をあらわし、-ci を後接させた名詞は道具、手段、および行く先をあらわす。道具、手段をあらわす形式が行く先をもあらわすことができるのは、中南部方言にはみられない、北部方言の特徴である。なお、-Ngati(へ)も行く先をあらわす。

unu uwa:gija to:kjoNti niseNeNci ho:taN.

(この 上着は 東京で 二千円で 買った。)

hamadu waritutu, mu:cici wa:nui suN.

(籠が われているので、漆喰で 上塗り する。)

gakko:ci pe:ku izjaN.

(学校に 早く 行った。)

jakubaNgati izi turasje:.

(役場に 行って くれ。)

幸喜方言の名詞も連用的な格形式がとりたての形を分化させている。とりたての形は、名詞の格形式のうしろにとりたて助辞-ja (は)、-N (も)、-ru (ぞ)、-ga (か)、-Nka (ばかり)、-madi (まで)、-Ncjo: (さえ) をつけることによってあらわされる。とりたて助辞は、格助辞のさらにうしろにくっつけるのである。ru は、古代日本語の焦点化助辞「ぞ」に対応し、文末の述語に強調形のあらわれるが、必ずしも強調形でないことも少なくない。ga は、推量形を述語にもつ文において、話し手が確信できない疑わしい文の部分に焦点をあてて差し出す。

ha:paja nibaNzjaNti terebiru miQcjuru.

(祖母は 二番座で テレビを みている。)

wa:nu hi: kikaisuga, wa:nuga uira.

(豚の 声が 聞こえるが、豚が いるのだろうか。)

主格をあらわす-ga、-nu に主題・対比をあらわすとりたて助辞-ja を後接させることができる。

zini: neNtatu wa:gaja aNbaki:saNtaN.
(金ガ 無かったので、私ガは 弁償できなかつた。)

形容詞の語尾が h であらわれる。

aQkizju:hanu pisa ubohoN.
(歩き過ぎて足が重い。
ku:nu asabaNnu me:ja upohoN.
(今日の 昼食の 飯は 多い。)

連体形の語尾は、nu で、属格をあらわす格助辞 nu と同音である。

ka:inu munuja muru ka:taN.
(食べられる ものは 全部 食べた。)
isanu turacjanu kusui numine: no:isa.
(医者 of くれた 薬を 飲めば、治るよ。)

幸喜方言の中心的なアスペクトは、完成相、継続相の2項対立である。完成相も継続相も uN (居る) を文法化させているが、完成相は動詞第一中止形に uN が融合し、継続相は動詞第二中止形に uN が融合している。完成相には過去形が2系列あり、第二過去形は直接証拠性を明示する。継続相には直接証拠性を明示しない第一過去形しか確認できていない。完成相も継続相も uN を語彙的資源にしているので、活用形の作り方は、uN に似る。

kjo:sitsuNgati iraNkui asiduN.
(教室に入らずに遊んでいる。)
nu:gara ku:ja du:ubohonu asara niNtuN.
(何だか今日は怠くて、朝から寝ている。)

aQkuN (歩く) を文法化させた第二継続相がある。uN を文法化させた第一継続相のあらわすアスペクト的な意味と基本的には同じで、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞は、主体の動作の継続をあらわし、主体変化動詞は、主体の変化結果の継続をあらわす。反復習慣を表わすのも第一継続相と第二継続相は共通である。

anu cju:ja wa: janaguciNka icjakuN.
(あの人は私の悪口ばかり 言っている。)
akadunu tomatoNka tutakuN.
(赤くなったマンゴだけ 取っている。)

ne:N (無い) を語彙的資源にした終結相 nudi ne:N (飲んでしまっている) は、結果

相の否定形式 *nudi ne:N* (飲んでない) とホモニムである。

kinunu wa:sija kamaraNtatu sititi neN.

(昨日の豚肉は食べられなかったので、捨ててしまっている。)

否定動詞の連用形の語尾に *-gutu* があらわれる。この *-gutu* は様態をあらわす「如し」に関連するもので、九州方言の影響をうけてできたものである。

kaNge:Qkwa saN-gutu utisici kaNge-re:.

(考え過ぎないで落ち着いて考えろ。)

2. 4 名護市幸喜方言の語彙の特徴

kimu-gunahaN (小心だ、<肝・小さい)、*ti:gupahaN* (不器用だ、<手・固い)、*ti:nagahaN* (盗癖のある、<手・長い)、*du:gaQsaN* (すばしこい、<胴・軽い)、*du:gorohoN* (心苦しい、きまりが悪い、<胴・苦しい) などのように身体名詞と形容詞を組み合わせた派生形容詞をつくる。

ma:maja ti:gupahaN.

(姉は、不器用だ。)

maNgu:suja du:gaQsaN.

マンガースはすばしこい。

taNki-ra:haN (短気だ)、*siNzici-ra:haN* (正直だ) のようなのように日本語のナ形容詞の語幹を語彙的資源にして接辞 *-ra:haN* (らしい) を後接させた形容詞や *pigai-ra:haN* (不器用だ) のような名詞 *pigai* (左) を語彙的資源にした派生形容詞をつくっている。

arija nu: simitiN pigaira:haN.

(彼は、何をさせても不器用だ。)

また、*asarahaN* (浅はかな) のように、物の特性をあらわす形容詞 *asahaN* (浅い) の語尾を *-rahaN* にかえて、人の特性をあらわす形容詞を派生させたものもある。

anu cju:ja asarahaN.

(あの人は浅はかだ。)

3 人口構成からみた幸喜方言

幸喜集落の平成 25 年 12 月末現在の年代別人口は以下のとおりである。

90 歳以上	8 人
80 歳～89 歳	13 人
70 歳～79 歳	24 人
60 歳～69 歳	38 人
19 歳～59 歳	213 人
18 歳以下	32 人
計	291 人

複数の人の話から、伝統的幸喜方言の話者は 60 歳以上であろうとのことである。60 歳以上の方は、83 人である。他地域に移住した高齢者の中に幸喜方言を保持する方もいらっしゃるであろうと推測されるが、その実数はつかめない。また、方言を話せたとしても他地域での言語接触によって、日常的に話す方言の伝統的幸喜方言の保持度は低いものとかんがえる。

4 共通語教育と方言教育

幸喜区内に瀬喜田小学校があるが、幸喜集落の両隣の喜瀬集落、許田集落と幸喜集落の児童生徒が在籍している。瀬喜田小学校（戦前は瀬喜田尋常高等小学校）における言語教育に関する資料はないが、沖縄県全体でみられた、方言使用を否定する教育が戦前からあり、戦後もしくはは続いていたものとおもわれる。

現在は、方言使用も推奨されるようになってきているが、瀬喜田小学校での具体的な取り組みについての報告はない。もし仮に方言教育がなされたとしても、適切な教材の存在しない現状では、教師の手作り教材による散発的な指導、もしくは祖父母世代の協力を得て行なわれる導入的な総合的な学習になると考える。なお、許田集落は、首里や那覇からの移住者によって形成された集落で首里那覇系の中南部方言が話されている。喜瀬集落で話されている方言は、幸喜方言と同じく沖縄北部方言に属するが、音韻的な特徴が幸喜方言とは異なる。親族名称など、複数の語彙の語形が異なっている。幸喜方言、喜瀬方言、許田方言の方言差を考慮しながら語学としての方言教育を行なうのは容易ではないだろう。中学校、高等学校での方言教育についての情報はないが、伝統的幸喜方言継承のための方言教育はなされていないと考える。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

幸喜集落では区民総会で『名護市幸喜方言辞典（仮称）』の刊行を決定し、現在、幸喜区で『名護市幸喜方言辞典（仮称）』の刊行をめざした取り組みがすすめられている。幸

喜集落在住、幸喜生まれ育ちで、両親も配偶者も幸喜出身者の M. Y. 氏 (1916 年～2012 年)、M. H. 氏 (1920 年生)、O. E. 氏 (1917 年) の三人伝統的幸喜方言話者から聞き取り調査を 2000 年 4 月からおこなっている。聞き取り調査と原稿整理は、狩俣繁久 (琉球大学・教授) と仲間恵子 (琉球大学・非常勤講師) があたっている。

6 方言資料の作成

上の方言保存活動の項で述べた辞典刊行にむけた作業の過程でえられたデータをもとに書かれた以下のものがある。幸喜方言の記述文法をまとめる作業も並行しておこなわれている。

かりまたしげひさ (2014) 「名護市幸喜方言の可能表現の文」琉球大学法文学部紀要、『日本東洋文化論集』第 20 号。

かりまたしげひさ・仲間恵子。宮城萬勇 (2014) 「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語－和琉辞典のこころみ」『琉球の方言』38 号、法政大学沖縄文化研究所。

かりまたしげひさ (2013) 「沖縄北部名護市幸喜方言の格形式」琉球大学国際沖縄研究所『人文社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成研究推進成果報告書』第 2 号。

かりまたしげひさ・仲間恵子 (2013) 「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」『琉球の方言』37 号、法政大学沖縄文化研究所。

かりまたしげひさ (2012) 「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」『日本東洋文化論集』第 18 号。

かりまたしげひさ (2008) 「名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたて－ga 格、nu 格、ハダカ格、ja のとりたて形－」『日本東洋文化論集』第 14 号。

7 危機の度合いの判定

幸喜方言について UNESCO の Language Vitality Assessment (言語の体力測定) に基づき、項目ごとに判定の根拠をあげながら危機の度合いを判定する。評価には幅をもたせた。まず幸喜方言の危機の度合いの判定をあげ、そののちに判定の理由を述べる。

表 幸喜方言の危機の度合いの判定

(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	2
(2) 母語話者数	83/291 人
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	2
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	2～3

(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	0
(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか	1
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	1～3
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	4
(9) 言語記述の質と量	3～4
平均	2.25

判定の理由

(1) 「その言語がどの程度次の世代に伝承されているか」の問いには「2. その言語は祖父母の世代以上で使用されており、親、子の世代は使用していない」とした。厳密な統計調査を行ったわけではないが、複数の人に確認したところでは、親の世代で方言を使用するものはいるが、判定の対象になっている「その言語」を伝統的幸喜方言としたばあい、親世代の話す方言は、伝統的幸喜方言ではなく、中南部方言である可能性がたかい。90歳代の話者から方言調査を13年間継続的に行なっているが、その話者たちの方言の中にも中南部方言が混じっている。その点を話者に指摘すると、「土族語」であるとの認識は持っている。なお、60歳以上の祖父母世代の人に占める女性の割合は高いが、他地域から嫁に来た方と移住者が含まれ、伝統的幸喜方言話者は、統計人数より少ない。

(2) 母語話者数

幸喜集落の平成25年12月末現在の年代別人口は以下のとおりである。

90歳以上	8人
80歳～89歳	13人
70歳～79歳	24人
60歳～69歳	38人
19歳～59歳	213人
18歳以下	32人
計	291人

複数の人のお話から、伝統的幸喜方言の話者は60歳以上であろうとのことである。60歳以上の方は、83人である。

(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合

上の(2)でも述べたように、60歳以上であっても、若いころ集落を長期間離れて仕事

をした方の場合、使用する方言には中南部方言の語彙や文法形式が多く混じっている。伝統的幸喜方言の残存率がどの程度なのか不明であるが、それを混淆方言とみることができる。それも幸喜方言とみると、幸喜方言の母語話者の数は、全体の29パーセントであるが、上の(1)にも述べたように、60歳以上の83人の中には他地域出身者も含まれるので、実際には若干下回ると考える。

(4) どのような場面でその言語が使用されているか

個人の生育環境、職場環境によって、場面を構成する人々の出身地等によって状況は大きく異なるが、全体を「2. その言語は限られた場面、いくつかの目的のために使用されている」から「3. その言語は家庭では使用されているが、支配的言語が家庭でも使われ始めている」と判定した。

「2. 限られた場面」として想定しているのは、幸喜方言母語話者同士の会話の場面である。幸喜集落以外の人と混じると、中南部方言あるいは中南部方言混じりの幸喜方言あるいは日本語混じりの幸喜方言になる。

家庭であっても幸喜方言母語話者の祖父母でも子や孫に幸喜方言を話せないものが混じると、支配的言語（日本語）になる。

(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか

「0. その言語は新たに生活に加わった場面では使用されていない」と判定した。幸喜方言を使用するテレビ・ラジオ等の放送、新聞や広報などは存在しない。文芸などの等の生産も行なわれていない。ラジオやテレビから流れてくる首里那覇方言、あるいは、それを基盤にした中南部方言は、伝統的幸喜方言の存在・継承を脅かす脅威ともなっている。

(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか

ここは、「1」と判定した。厳密な意味で書記法は存在しない。また、書記法を考案したものがあるが、現在のところ一部研究者の間でしか知られていない。しかし、幸喜方言を日本語表記に使用する仮名文字を使用してある程度表記することは可能である。仮名文字を使用して、幸喜方言辞典を作成するための原稿を作成した母語話者の宮城萬勇（1983年没）がいる。現在、公刊に向けた作業が進められており、近い将来、1万8千語の単語を収録した『名護市幸喜方言辞典（仮称）』の刊行が予定されている。また、公刊作業を助ける研究者が文法記述を行っており、これも近い将来公刊される可能性がある。辞書と記述的な文法書を基にして教育、継承のための教材などが整備される可能性もある。

(7) 国の言語政策

ここは、「1～3」と幅をもたせて判定した。伝統的幸喜方言、あるいは、幸喜方言を含む個々の下位方言を対象にした国の言語政策はない。その意味で個々の下位方言が認知されていない可能性がある。沖縄県が「しまくとぅば条例」を制定したが、あいまいな“しまくとぅば=方言”の使用を奨励するもので、個々の弱小方言の保護継承を明示していないし、拘束力も予算的裏付けもない。名護市にもそのような政策もない。公用語としての日本語を明示していないが、教育現場での使用言語は日本語だけであり、幸喜方言のみを使

用した裁判陳述も不可能であると考え。その意味で限りなく「1」に近いと考える。

(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度

ここは、「4. ほとんどの者がその言語が次世代にも使われることを支持している」と判定した。幸喜集落では区民総会で『名護市幸喜方言辞典（仮称）』の刊行を決定し、区長をはじめ多くの区民が辞典の刊行を望んでいる。しかし、母語話者の数は減少しているし、家庭での幸喜方言使用は増えていない。辞典の刊行以外に方言継承にむけた具体的な取り組みは無いようにみうけられる。方言辞典の刊行が方言継承の取り組みを誘発することを期待したい。

(9) 言語記述の質と量

ここは、「4. よい文法記述が一つある他にも、文法資料、辞書、文字資料、文学、それに定期的に更新される日常言語資料が存在する。一定の質の録音、録画資料が存在する」から「2. 限られた言語学的目的に利用可能な簡単な文法記述、語彙集、文字資料が存在するが、総括的なものはない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものやされていないものもある」まで幅をもたせて判定した。

いま辞典や文法書は刊行されておらず、公開できる録音資料も録画資料もなく、体系的ではなく、文字化もされていないが、近い将来に刊行予定の辞書、文法資料があり、いずれも例文が豊富にある。辞典刊行に向けた調査で得られた録音資料は、音声付の辞典にするために活用可能である。

まとめ

幸喜方言の危機の度合い評価判定の平均は、2.25 である。中年層、若年層の伝統的幸喜方言の保有度と優勢な中南部方言の浸透をかんがえると、伝統的幸喜方言の危機的な状況は深刻である。しかし、幸喜区民が『名護市幸喜方言辞典（仮称）』の刊行を支持、期待していること、それに付随して刊行されるであろう記述文法、辞典編集作業の過程で残される録音資料などを考慮すると、幸喜方言は良質な資料がのこされた継承可能な方言とみることができる。伝統的幸喜方言の継承は、辞典と文法書を刊行したのちの取り組みにかかっている。

8 引用文献

かりまたしげひさ(2006)「第1章 山原方言の概観」『名護市史言語編』

沖縄県首里方言

沖縄県首里方言

當山 奈那

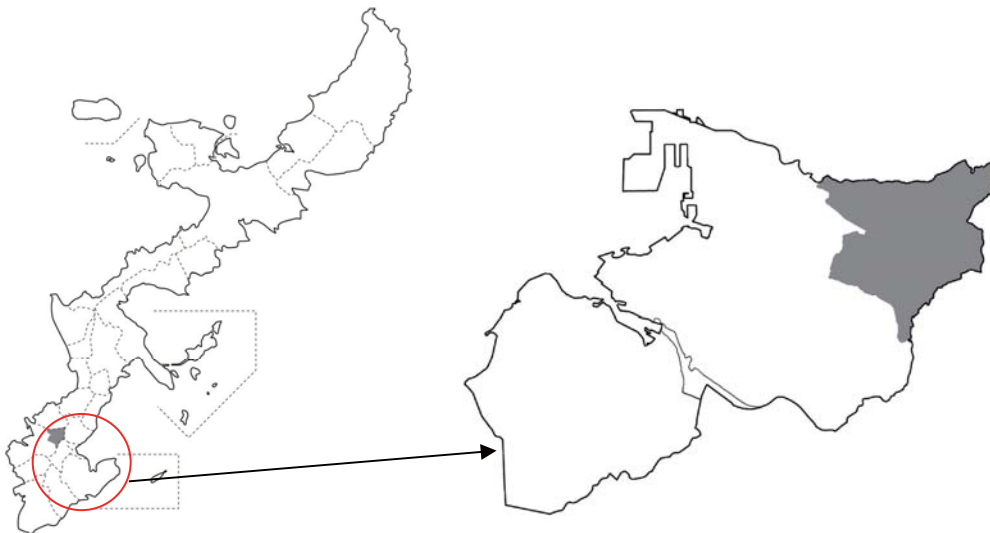
1 首里の概要

「首里」は沖縄島の一地域であり、那覇市の北東に位置し、西原町、南風原町、浦添市と隣接している。沖縄島は、14世紀まで「按司」「世の主」と称された群雄の割拠の時代がつづき、14世紀から15世紀のはじめにかけて北山、中山、南山の王が対立する三山対立時代となった。1406年に中山に属する佐敷按司、尚巴志が首里に攻め入って中山をのっとり、1416年に北山、1429年に南山を滅ぼして沖縄島を統一した。以後、首里は琉球列島全体の政治と文化の中心地となった。尚真王（1477～1526年）の時代に中央集権制がととのい、首里は名実ともに琉球王府の首都となった。

1629年に島津の琉球入りがおこり、琉球は事実上、島津の属国となった。明治維新により、1829年に那覇に置かれた内務省出張所が県庁となることにより、1879年に沖縄県がもうけられ、那覇が首里にとってかわり政治の中心地となった。首里は、首里市や首里区という行政区として存在していたが、1954年（昭和29年）に那覇市の一部となった。

また、現在の首里の町には、真和志町、池端町、山川町、寒川町、金城町、汀良町、赤平町、儀保町、久場川町、桃原町、大中町、当蔵町、赤田町、崎山町、鳥堀町、平良町、大名町、末吉町、石嶺町が存在するが、このうち、平良町、大名町、末吉町、石嶺町は旧西原村に属していた。1906年（明治39年）に平良町が、1934年（大正9年）に字石嶺、字末吉、字大名が当時の首里区に編入され、現在に至っている。

【図1】沖縄島における首里の位置と、那覇市における首里の位置¹



¹ 白地図専門店 (<http://www.freemap.jp/>)、ちずびと (<http://chizubito.com>) より加工して掲載。

2 首里方言の概要

首里方言の研究は1895年（明治28年）のチェンバレンにはじまり、琉球諸語のなかではこれまでに多くの研究がなされている。本節では、「首里方言」について2つのことをのべる。はじめに、これまでの研究のなかから、あるいは、首里方言話者、首里方言の周辺方言の話者の語りにより、「首里方言」は、「首里階層方言」「首里地域方言」「首里（那覇）共通語」の3つに分類できることをのべる。筆者は社会言語学の専門ではないが、社会言語学の用語を援用して説明する。次に、首里方言のバリエーションとしての屋取方言について、特に沖縄島中南部において優勢言語としてはたらいっている可能性を指摘する。

（1）「首里方言」をめぐる語りのなかにみる3つの「首里方言」

上村幸雄（1963）によれば、尚真王時代にしかれた中央集権制によって、首里には「大名（デーミヨー）」、「侍（サムレー）」あるいは「ユカッチュ」とよばれる士族階級と、「百姓（ヒャクショー）」とよばれる平民階級が存在するようになった。この階級の区別は厳重であり、「言語も階級ごとに違いがあり、ことに士族と平民の間には目立った差異があった²」。上村は、士族の男子は成年になると、音素体系や親族呼称（、名称）、敬語表現を獲得したとのべている。また、加治工晋市（1983）では、「首里方言は平民語の音韻体系を基盤として、それに意図的に学習して獲得された士族語の音韻が乗りかかり、音の張りあい関係が統一されていたのである³」とのべる⁴。

『言語学大辞典』では、「方言」は「一般に地域差を伴っているので、単に方言といえは通常は「地域方言（regional dialect）」をさす⁵」と定義されている。また、「言語学においては、「方言」をある地域の言語体系ととらえ⁶」ることによって、「地域語（regional speech）」、「地方語（vernacular）」という用語を用いることもあるとしている。この定義にしたがって、方言の定義を地域的なことばの違いであるととらえた場合、加治工（1983）のいう首里方言の「士族語」は「地域方言（regional dialect）」にはあてはまらない。通常の「方言」ではないのである。

一方で、「階級方言（class dialect）」という用語が存在する。「地域差ではなく、社会階級ないし社会階層による言語差にも方言という用語を拡張して用いたときに、階級方言とよぶ。社会方言（social dialect）ともよぶが、後者はより広い概念で用いられる。その場合「階級方言」は、社会的に明確に分けられ、身分的に固定している「階級」による差に限定して用いるのに対し、もっと連続的で流動的な「階層」による差や男女差など、

² pp.19

³ pp.33

⁴ 『那覇市史 那覇の民俗』（pp.849）では、首里方言を「上流語」「中流語」「庶民語」の3つに分けることができるとし、それぞれの親族名称のちがいや、敬語表現のちがいについて例をあげている。上流語は尚家（琉球王家の子孫）とその一族、中流は士族、庶民語は一般の平民が話すことばであるという。

⁵ pp.1268

⁶ 同上。

さまざまな成員差をも含めていうときは社会方言という⁷⁾と定義されている。この定義から検討すると、尚真王時代にしかれた階級制度にもとづき、個人の成長過程において訓練をうけ、一般の人々や士族の女性とは異なる発音を自らの階級の目印として習得することで他の身分に属する人々と区別する首里の士族語は、「階級方言 (class dialect)」の特徴を備えているといえよう。服部四郎 (1955) によれば、(音韻的) 区別は長ずるに及んで後から習得するものであるために、高齢になってその区別を失ってしまい、幼児期に習得した平民と同じタイプにもどっている人もいるという。このことは、発音や親族名称など、一定の知識さえあればある程度の士族語を習得することが可能であることと、「士族語」が「地域方言」ではないことを示すものである。このように、これまで「士族語」「貴族語」や「士族方言」「貴族方言」ととらえられてきたことばを以降「首里階層方言」とよぶことにする⁸⁾。中松竹雄 (2004)、比嘉成子 (1987)、伊豆山敦子編 (2006) のような談話資料がこれにあてはまると思われる。

首里における「地域方言 (regional dialect)」は、「ヒャクショー」とよばれる平民階級が使用していた言語の後継である。しかし、首里の「地域方言」の研究はこれまでほとんどなされていない。上述した 19 の町によって地域差も存在している (していた) 可能性もあるが、これまでの研究からは方言差をうかがいしることはできない。王府から泡盛の製造を許された赤田・崎山・鳥堀の三箇と称される地域の方言が他の地域の方言とどのように違っているのかも不明である。もとは西原村に属していた平良・石嶺・末吉・大名は、首里の他の地域とはかなり異なっていると聞くが、どのように異なっているのか先行研究からはみえてこない。これらの方言は、「美しい」「純粋な」「標準的な」「共通語的な」「規範的な」方言であると研究者に語られてきた首里階級方言によって、地域的な差異も「平民語」「平民方言」「庶民語」の名称のもとにくられ、おおいかくされてきた「地域方言」ととらえられる。このような首里のことばを以降「首里地域方言」とよぶことにする。

最後に、「共通語」として語られる「首里方言」について整理する。「首里方言」は沖縄方言、あるいは琉球諸語において「共通語的」「標準語的」な存在であり、「規範性」をもつとされる (加治工 (1983)、中松 (2010)、比嘉 (1987)、津波古 (1997))。このような表現は首里方言が語られる際にはよくみられる。まず、ここでは「標準語」と「共通語」とを区別することにする。

『現代言語学辞典』では、「標準語」を次のように定義している。少し長くなるが引用する。

「ある国において全国的に用いられ、洗練された規範的なものとして広く認められる言語。一般に方言に対すると考えられ、その国の政治、経済、文化の中心で使われる言語変種 (variety) であることが多い。標準語は、主に書きことばとして法令・公文書・教科書・新聞などに用いられるが、ラジオやテレビのニュース、公式の場における講演な

⁷⁾ 『言語学大辞典』(pp.179)

⁸⁾ 首里階層方言には、「サムレー」「ユカッチュ」の成人男性が用いた士族方言のほかに、「デーミョー」すなわち、首里王家や地方から集められた按司とその家族たちが用いた貴

どにおいても使われ、いわゆる「正しい」または「よい」言語と考えられている。」

「共通語」は、次のように定義される。

「言語を異にする人たちの間で、互いの意思疎通のために共通に用いられる言語のこと。一つの言語内でも、方言（*dialect*）の話し手の間で意志疎通のできることばを、方言に対して共通語という。」

このように、「標準語」と「共通語」は異なる概念をあらわしている。日本語標準語は沖縄県内においても「標準語」であるが、首里方言や那覇方言は「標準語」ではない。かりまた（2013）は、沖縄地方において通用する共通はなしことばとしての共通語を「リンガフランカとしての共通語」とよぶ。戦前から戦後にかけて、都市化の進んだ首里那覇の方言は他の地域方言に対して高い威信をもっていた。周辺の地域方言の話し手らが就職や進学のために那覇に移住した場合、彼らの方言は首里那覇方言の話し手にとって「変わっていることば」とみなされた。あるいは、大都市に対して小都市出身である周辺方言の話し手たちが「自分たちの方言は変だ」という認識をもたされた。首里那覇方言の話し手は自分たちの話すことばを「変」と思うことはない。一方で、劣等感をかかえた周辺方言の話し手は自分たちの話すことばを「首里那覇方言」に修正しようと努力する。沖縄島北部方言に属する奥方言の話者、島田隆久さんは次のように述べている。「高校から村外に出た。奥の方言は独特で恥ずかしいと思って、また共通性が低いから使わなくなった。かといって完全な那覇の言葉も使えない（沖縄タイムス 2013 年 9 月 8 日掲載）」。「共通語」としての首里方言や那覇方言は、各地の地域方言に対する威信的な地域の方言の不均衡な関係から生じてきたものと考えることができる。共通語的な方言の存在とは、諸方言のなかにおいても、マジョリティの方言とマイノリティの方言が存在し、マジョリティの方言が威信的にはたらくことを意味している。このような個人や個性がみえない「首里那覇共通語」は、首里や那覇の地域方言を土台として作り出されたものであったとしても、地域方言とはみなせない。「首里那覇共通語」の「規範」ということばは奥方言のような地域方言との関係のなかから構築された方言間の権力関係をまさにあらわすものと思われる。

以降、このような首里方言を「首里那覇共通語」とよび、首里階層方言とも首里地域方言とも区別する。どこの集落のことばともいいがたい「沖縄口（うちなーぐち）」や「沖縄語」「沖縄方言」は「首里那覇共通語」とみなせる。中松竹雄（2010）『沖縄口さびらー沖縄語を話しましょう』や、那覇市教育委員会学校教育課が 2013 年に副読本として発行した『使って遊ぼうしまくとうば』のようなテキストに用いられていることばも「首里那覇共通語」とみなしていいだろう。

（2）屋取集落の方言にみる優勢言語としての首里方言

首里階級方言のバリエーションとして、屋取集落の方言をあげることができる。屋取集落は、18 世紀のはじめから 19 世紀にかけて、首里・那覇の士族が沖縄島の農村地域各地

族方言がある。士族や貴族の女性が用いた方言もここに分類されうる。

に帰農することによって形成された集落のことをさしている。沖縄島のなかには約 600 の集落があるが、そのうちの 150 近くが屋取起源の集落であるといわれている⁹。これら屋取集落の方言の実態についても不明であるが、周辺の地域方言との接触によって変容していると思われる。特に現うるま市具志川（元具志川市）や、宜野湾市などは屋取集落がかなり多い。このような地域において、屋取集落の方言が周辺の地域方言に対して優勢言語としてはたらいっている可能性がある。田代竜也（2012）は、旧具志川市の方言において与格のあらわれ方のちがいについて、屋取集落と具志川の伝統的な集落にわけて分析を行ったものである。そのなかで、伝統的な集落の方言が屋取集落の方言の影響をうけて、nakai 格を使用するようになった可能性を指摘している。また、宜野湾市の大山集落は伝統的な集落であるが、まわりに屋取集落が多く存在することによって、「大山集落の方言は宜野湾の方言のなかで変わっている」としばしばいわれることがある。

2. 1 首里方言の位置

琉球語は日本語の本土方言と同じく日本語族に属する言語である。琉球語は北琉球方言と南琉球方言に大きく区分することができる。首里方言は北琉球方言のなかの沖縄中南部方言に属している。首里方言のなかでも特に首里階級方言は、支配階級の方言として明治時代の廃藩置県までは有力な位置をしめていた。宮廷芸能である組踊りや琉歌は首里階級方言が用いられた。しかし、廃藩と身分制度の廃止以降は、この方言は時代にあわなくなり、失われつつある。ただし、今でも老人の話し方を観察すると親族名称など一部の語いのなかにみることができる。また、首里と隣接する那覇の方言は、アクセントと一部音韻、語いなどをのぞけば首里方言とよく似ている。このことと相まって、首里を吸収合併し、今日では都市化がもっとも進んだ那覇市を中心に「沖縄方言」「沖縄語」や「うちなーぐち」とよばれる地域方言の特徴をうしなつた首里那覇共通方言というべき方言が形成され、テキスト化の作業やそれを用いた教育現場、普及活動などのなかで規範化しつつある。

2. 2 首里方言の音声・音韻の特徴

（1）母音

ここでは、上村（1963）を参考にして首里方言の音声・音韻の特徴を簡単に整理する。首里方言の母音フォネームは、/i, e, a, o, u/の 5 個の短母音と /i:, e:, a:, o:, u:/の 5 個の長母音がある。e と o の短母音の例はオノマトペや感動詞、借用語にみられるが、きわめて少ない。標準語の /e, o/ がそれぞれ /i, u/ に対応する。

（2）子音

子音フォネームには次の 30 個がみとめられる。

/h, ʔ, ʼ, k, g, p, b, m, s, c, z, n, r, t, d, ʔj, j, ʔw, w, hj, pj, bj, mj, nj, hw, kw, gw, Q, N, ʔN/

首里階層方言には、さらに次の 3 個のフォネームがくわわることになる。

⁹ 田里友哲 pp.730

/s, C, z/

/S/は母音 i, e を後接させ [si]、[se] になる。/C/は [t̥]、/Z/は [ɬ] である。これらのフォネームは、かつては、/s, c, z/とは区別して発音がなされていた（方言のかな表記については小川晋史編（2014）に準拠する）。

	首里階層方言	那覇方言
砂	すいな /Sina/	しな /sina/
品	しな /sina/	しな /sina/
月	ついち /Cici/	ちち /cici/
水	みじ /miZi/	みじ /mizi/

（3）音節構造とモーラ

首里方言のはねる音/?N, N/とつまる音/Q/は日本語とくらべると成節的である。これらのフォネームは語頭にたつことができる。

例) ゝんま（馬）、っちゅ（人）

ただし、はねる音は語末にたつことができるが、つまる音は語末にたつことはできない。

また、首里方言には1モーラの自立語はなく、標準語の1モーラの自立語はすべて首里方言では2モーラになる。

例) みー（目）、たー（田）、ふー（帆）

各フォネームの組み合わせによって、129個のモーラ（短母音）を構成することができる。

（4）アクセント

首里方言のアクセントは平板型と下降型の2つに分かれる。平板型のアクセントをもつ単語は、はじめ中程度のあるいはやや低い高さではじまり、おわりまでだいたい同じ高さを保つ。下降型のアクセントをもつ単語は、平板型の単語よりも高くはじまり、かつ第1モーラは第2モーラ以下とくらべてやや強く発音される。3モーラ以上の下降型の単語では、ふつう、第2モーラまでが高く、以下のモーラは低くおわりまで平らにつづく。

首里方言のアクセントは、九州西南部の二型アクセントとにている。金田一晴彦の類別法にしたがえば、1, 2類の名詞は下降型であらわれ、3, 4, 5類の名詞は平板型であられる。

2. 3 首里方言の文法の特徴

日琉祖語から分岐した琉球諸語は、文法においても日本語と多くの共通点がある。首里方言も同様である。首里方言の品詞は名詞、動詞、形容詞、副詞の主要な品詞と、繋詞、接続詞、感動詞などの周辺的な品詞がある。文を構成する文の部分の語順や文法的なカテゴリーも日本語と同じとみなせる。

名詞、動詞、形容詞は語形変化し、文法的な形をつくる。名詞は助辞を後接させ、動詞や形容詞は語尾をとりかえることで文法的な意味に応じて変化する。動詞のような文法的

な意味がきわめて複雑に発達している品詞では、文法的な意味は文法的な形の変化だけでなく、接尾辞を後接させる単語の文法的な派生や、補助動詞との文法的なくみあわせによる手続きも利用される。これらの形式も、日本語と共通するところが多いが、日本語には存在している形式が欠けていたり、逆に日本語には欠けている形式を首里方言がもっていることもあり、全体として首里方言に特徴的な文法体系をつくり出している。形式は同じであっても、文法的な意味が異なっていることもある。このことは琉球諸語内においても同様で、琉球諸語全体に共通する文法上の特徴もあれば、差異もある。特に首里方言が属する北琉球諸語と南琉球諸語との違いは大きい。

(1) アスペクト・テンス・エヴィデンシャルティ (工藤真由美・他 2007)

首里方言の述語構造はアスペクト・テンス・ムードやヴォイスの研究にみられるように形式が多く、発達しており、現実の複雑な出来事をあらわしわけることができる。工藤真由美他(2007)では、首里方言の動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティについて動詞の語法的なタイプから各形式が述語にすえられた文の体系的な分析がなされている。首里方言をふくむ北琉球諸語では動詞の完成相の直説法非過去形(検定教科書の「終止形」にあたる。現代日本語のスル形)は、連用形に存在動詞「居り」が融合して成立しており、これは、形式的には西日本方言の進行相非過去形「シヨル」と対応している。西日本方言と形式的に対応するところの首里方言の完成相非過去形はかつて進行の意味もあらわすことができたが、今は失われつつある。ただし、北部方言では進行の意味はよく残っている。

また、直接的エヴィデンシャルティをあらわすシヨッタ相当形式の他に、日本語のシテアル形式に相当する「セーン形式」が存在する。この形式は、「'あや=が ふしむん ふちえーん (お母さんが洗濯物を干してある)。」のように使われる。日本語なら「洗濯物が干してある」のように、変化する客体(洗濯物)を主語の位置にすえながら、客体(洗濯物)に生じた変化の結果的な状態が継続していることをあらわす。動作主体の存在は問題にされない。しかし、首里方言では、動作主体(お母さん)を主語に据え、客体(洗濯物)を補語にして差し出しながら変化の結果的な状態が継続していることを表す。標準語とはヴォイス的な構造がことなるのである。日本語は、「開ける」「置く」などの客体に変化をひきおこす客体変化の他動詞しかシテアル形式をとれないが、首里方言では「'あみ=ふてーん (雨が降ってある)」や「なちえーん (泣いてある)」のように、多くの動詞がセーン形式をとることができる。そのセーン形式は、動作や変化の結果として残された「痕跡」や「効力」をあらわしたり、結果や痕跡などから動作主体を推論する間接的エヴィデンシャルティをあらわす。標準語のシテアル形式(結果相)は、運動の時間的展開の様態をあらわすアスペクト形式であるのに対して、首里方言のセーン形式は、パーフェクトを含むアスペクトをあらわす形式(結果相)から痕跡に基づく推論をあらわす間接的エヴィデンシャルティをあらわす文法的意味を派生させている。

(2) ヴォイス (當山奈那 2013)

首里方言はヴォイスにおいても興味深い特徴がみられる。首里方言にはアスン形式の第一使役、アシミュン形式の第二使役、アシミラスン形式の第三使役が存在する。自動詞、

他動詞から第一使役と第二使役を派生させるとき、自動詞と他動詞の派生の仕方によって第一使役と第二使役の派生に制限が存在し、それぞれを述語にもつ使役構文の意味構造に相違がある。首里方言において、対をなす自動詞をもたない無対他動詞（例：ぬむん（飲む））は第一使役（例：ぬますん（飲ます））と第二使役（例：ぬましみゆん（飲ませる））を派生することができる。一方で、自動詞（例：わちゅん（沸く））に接尾辞アスンを後接させて派生した他動詞（例：わかすん（沸かす））は、第一使役動詞を派生することはできず、第二使役（例：わかしみゆん（沸かさせる））しか派生させることができない。第一使役生成の制限は、自動詞から他動詞を派生させる接尾辞アスンと第一使役を派生させる接尾辞アスンが同じものであることに由来する可能性がある。

首里方言の使役動詞の派生の制限は、それぞれの使役動詞を述語にもつ使役構文の実現する意味にも違いをもたらす。「ぬむん（飲む）」のように第一使役、第二使役の両方を派生することができる無対他動詞の場合、第一使役を述語にもつ文は〈指令〉をあらわし、第二使役を述語にもつ文は〈許可〉をあらわす。一方、有対他動詞「ワカスン（沸かす）」のように第二使役のみ派生させる場合、第二使役を述語にもつ文が〈指令〉と〈許可〉の両方をあらわす

使役構文（例 2）は、他動詞構文（例 1）を内に含みながら他動詞構文に存在しなかった使役主体（'あんまー）を主語にする。首里方言には使役構文（例 2）を内に含んで派生した二重使役構文（例 3）が存在する。二重使役構文（例 3）では新たな使役主体（すー）が主語になり、元の使役構文の主語（'あんまー）に指令をだし、動作主体（つくわ）に動作を実現するよう働きかける。二重使役構文の使役相手（'あんまー）は使役主体（すー）からの指令を受け取って動作主体に働きかける使役主体でもある。使役主体（すー）は使役相手（'あんまー）を介して動作主体に間接的に働きかける。第三使役は二重使役構文の専用形式である。

1. つくわ=が みじ ぬむん（子供が水を飲む）。
2. 'あんまー=が つくわ=んかい みじ ぬますん（母が子供に水を飲ませる）。
3. すー=が 'あんまー=んかい いち つくわ=んかい みじ ぬましみらすん（父が母に言って子供に水を飲ませる）。

首里方言では標準語に見られない使役形式と文法的意味を発達させ、二重使役という言語類型論的にも興味深い現象がみられる。二重使役の存在は北部方言でも報告されているが、奄美以北の方言や南琉球諸語でどのようにあらわれるかは不明である。

2. 4 首里方言の語彙の特徴

（1）首里階級方言の語い

まず、首里階級方言特有の語いについてふれる。上村（1963）によれば、親族名称（呼称としても用いられる）が階級方言と地域方言とでは次のように全く異なっている。この区別は、筆者の観察のかぎりにおいて、首里士族の後継のなかで 70 代後半以上の方に残存している。

【表 1】首里階級方言の語い（上村 1963）

	祖父	祖母	父	母	兄	姉
階級方言	たんめー	'んめー	たーりー	'あやー	やっちー	'んみー

地域方言	'うすめー	はーめー	しゅー	'あんまー	'あふいー	'あんぐわー
------	-------	------	-----	-------	-------	--------

(2) 中国語からの借用語

14世紀の後半から明治の初期まで、琉球王朝と中国は交流があった。そのため、中国語から直接借用された語が散見される。上村(1963)の指摘するように、食品、衣料関係、文化的な語がほとんどである。

例) さーくー(沙鍋・土鍋)、しゃんぴん(香片・茶の一種)、たうちー(鬪鶏・しゃも)、りとーぺん(李桃餅・菓子名)、まーくわー(馬掛・着物の名)

(3) 九州方言からの借用語

また、比嘉正範(1983)によれば、次のように九州方言から借用された語もある。()内に薩摩方言と対応する標準語をあげる。

例) さむれー(サムレー・さむらい)、たーれー(タレ・たらい)、どうし(ドシ・同志)、びんだれー(ビンダレ・洗面器)、にーせー(ニセ・青年)

3 人口構成からみた首里方言

首里は、現在までに人の出入りが激しく、人口における年輩の方の割合と首里方言話者の割合はかならずしも一致しない。首里各地域出身の75歳以上の方であれば首里方言を使用できると思われる。しかし、75歳以上でも、年齢の差によって敬語を使い分けなければならないという考えが話者らにあり、この区別が難しいため、標準語を日常的に使用することのほうが多いという方もいる。また50代後半から60代以上なら方言を聞いておおむねその内容を理解することができる。2010年国勢調査結果を参考にして、首里の地域別の人口と75歳以上の人口、および人口総数における75歳以上の割合を表に示す。旧西原村と三箇に属する地域はわけた。上述したように、表における75歳以上の方すべてが首里各地域の出身とはいえないし、それぞれの地域出身の方が戦後、別の首里の地域や那覇市、他の市町村に移住した可能性もある。

【表2】首里地区における人口(2010年国勢調査結果を参考に作成)

町名	総数 (人)	75歳以上 (人)	75歳以上の割合		町名	総数 (人)	75歳以上 (人)	75歳以上の割合
赤平町	1134	127	11.19%	旧 西 原 村	石嶺町	18759	1565	8.34%
池端町	182	36	19.78%		大名町	4556	474	10.40%
大中町	720	98	13.61%		末吉町	4048	329	8.12%
金城町	2178	235	10.78%		平良町	1384	120	8.60%
儀保町	1388	181	13.04%	三 箇	赤田町	956	104	10.87%
久場川町	3321	340	10.23%		崎山町	1885	213	11.29%
寒川町	1448	134	9.25%		鳥堀町	4558	408	8.95%

汀良町	2070	222	10.72%					
当蔵町	1280	149	11.64%					
桃原町	825	92	11.15%					
真和志町	313	54	17.25%					
山川町	2434	265	10.88%					

4 標準語教育と方言教育

1880年、師範学校用の日本語の会話の教科書『沖縄対話』が発行されたのを機に、沖縄における日本語化政策がはじまったとみなすことができる。第二次世界大戦前には、学校ぐるみ、村ぐるみの標準語励行がおしすすめられた。戦後もうけつがれ、昭和22年の学習指導要領国語科編の国語科学習指導の目標では、地域の方言は「なまり」「舌のもつれ」ととらえられ、矯正すべきものとされた。方言を話した生徒が罰として首にかけられた「方言札」の話は、方言調査の際には「こどもの頃は話すなと言われて罰せられたものだが、今は逆に話せと言われる」と困惑をともないながら誰もがかならずおっしやる。1940年におこった柳宗悦と沖縄県学務課との間の方言論争、山之口漢の詞「弾を浴びた島」の一節、「ウチナーグチマディン ムル イクサニ サツタルスパイ（沖縄の方言までも みんな戦に やられたのか）」は沖縄における言語問題を象徴する有名な出来事や作品である。本土からの差別問題、また、戦時中は方言を話した者をスパイとみなすという軍命もでており¹⁰、標準語教育は生存にもかかわる重要な問題であり、方言を圧迫し標準語を選択せざるをえなかった当時の状況がうかがえる。

戦後、1972年以降、沖縄が日本に復帰してから、しだいに方言や文化の重要性がさげられるようになった。特に平成18年に沖縄県が制定した「しまくとぅばの普及促進に関する県条例」及び「しまくとぅばの日」から、教育現場において、方言大会や、総合学習に方言をとり入れるなどの取り組みが盛んになった。県は復帰50年に「しまくとぅばの話者」を現在より30%増やすことをめざしており、方言教育を重要視している。沖縄県立博物館では定期的に方言講座が催されている。「ハイサイ・ハイタイ運動」に加え、今年度は教育委員会が市内の小中学校に副読本を配布した。9月に「島々ぬくとぅば 語やびら大会」を開催した。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

石原昌英（2013）「行政機関、NPO法人、マスコミ等での取組」にくわしいので、これをもとにまとめる。

平成18年の「しまくとぅば」による喜劇『ウチナーグチ万歳』の上演や「しまくとぅば語やびら大会」などのイベントの開催がなされた。沖縄県文化協会主催による「しまくとぅば語やびら大会」は平成24年の大会で18回目をむかえた。また、平成18年以降には9月18日の「しまくとぅばの日」の前後にはしまくとぅばの保存・継承に関するシンポジウムが開催されている。

¹⁰ 1945年4月「球軍会報」。

民間団体による方言保存活動については、方言の保存継承の取組を行う民間の組織の事業を沖縄県が平成24年度から支援しはじめている。

行政機関では、平成24年度の4月に「ハイサイ・ハイタイ運動」を実施し、那覇市の職員が市役所をおとずれる市民に「ハイサイ」「ハイタイ」と挨拶をするようになった。同じく平成24年度的那覇市役所の採用試験では、面接に「うちなーぐち」での自己紹介をとりくみをおこなっている。

市内の公民館や図書館においても近年、方言講座の開設などさまざまな試みがみられる。

6 方言資料の作成

紙幅の都合上、全てをあげることができないため、主要な資料のみをとりあげることにする。

- ・『沖縄語辞典』国立国語研究所編（1963）

約1万5000語の語彙が収録されている。アクセント記号も付されている。解説編、本文編、索引編からなり、解説編は、首里方言の音声・音韻・文法について記述がなされている。解説や本文の例は、首里階級方言を主としているが、丁寧によみこむと首里地域方言の輪郭もみえる。

- ・「首里那覇方言音声データベース」

『沖縄語辞典』のすべての語いと例文が首里方言話者の音声とともに琉球大学附属図書館HP上で公開されている。

- ・『沖縄語の入門ーたのしいウチナーグチー』西岡敏、仲原譲（2006）

7 危機の度合いの判定

首里那覇共通語について UNESCO の Language Vitality Assessment（言語の体力測定）に基づき、項目ごとに判定の根拠をあげながら危機の度合いを判定する。評価には幅をもたせた。首里地域方言はその実態が不明であったため、基本的には共通語で危機度を判断するしかなかったが、判断に困る部分があった。この判定の対象がおそらく地域方言を前提としたものであるからだと思われる。まず、首里那覇共通語の危機の度合いの判定をあげ、そののちに判定の理由をのべる。

【表3】首里方言の危機の度合いの判定

	首里方言
(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	2
(2) 母語話者数	不明
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	不明
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	2
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	3

(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか	4 - 5
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	4
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	3 - 4
(9) 言語記述の質と量	3 - 4
平均	3.2

判定の理由

(1) 「その言語がどの程度次の世代に伝承されているか」については、「2. その言語は祖父母の世代以上で使用されており、親、子の世代は使用していない」状況であると判断した。

(2) 「3 人口構成からみた首里方言本文」に上述したとおり、首里は人の出入りが激しく年輩の方の割合と首里方言話者の割合が一致するとはいえない。そのため、「不明」とした。

(3) 首里方言の母語話者は、(2) にのべたとおり、不明である。そのため、「不明」とした。

(4) 「2. その言語は限られた場面、いくつかの目的のために使用される」と判断したが、UNESCO の基準にうまくあてはまらない。次の(5)以降でのべるように、現在、首里那覇共通語は家庭内で使用されるというよりは、テレビやラジオなどのメディア、公共機関、行政機関などでよく聞いたり見かけられる存在になっている。

(5) 「3. その言語は新たに生活に加わった多くの場面で使用されている」状況であると判断した。首里那覇共通語によるラジオやテレビ番組がいくつか存在している。例えばラジオ沖縄で放送されている「方言ニュース」は代表的なものである。琉球新報の記事をもとに沖縄県内のニュースや話題についてキャスターが方言で語るものである。2004年からはインターネット上の配信がはじまり、ポッドキャスト配信もはじまっている。最近ではテレビのバラエティ番組で首里那覇共通語を積極的にとりいれる試みもみられる。また、沖縄タイムスによる方言新聞「うちなあタイムス」がある。モノレールの改札フロアやJTAの機内では、日本語のアナウンスと併用して首里那覇共通語のアナウンスを流すという試みもなされている。

(6) 「4. 文字資料が存在し、子どもたちは学校でその言語の使用を学んでいる。行政の書き言葉ではその言語は使用されていない」「5. 確立された書記法と、伝統的な文法記述、辞書、文字資料、文学が存在する。行政、教育で使われる書き言葉がある」。現在の首里那覇共通語における状況は5に着実とむかっている4であると判断した。那覇市内の小学校では副読本として首里那覇共通語のテキスト『使って遊ぼうしまくとうば』が配布されている。このようなとりくみをはじめ、授業のなかで方言教育をとりいれようというさま

さまざまな活動がみられる。行政側もその取り組みを推奨しており、書記法をつくろうとする動きもみられる。いずれつくられ、行政のなかでも取り入れられることになるだろうと予想される。

(7) 平成18年に沖縄県が「しまくとぅばの普及促進に関する県条例」及び「しまくとぅばの日」を制定した。県は10年後の復帰50年に「しまくとぅばの話者」を現在の30%増をめざす「普及促進行動計画」を策定している。那覇市は自治体にたいして「ハイサイ・ハイタイ運動」を実施し、今年度は教育委員会が市内の小学校に副読本を配布した。那覇市役所の採用試験では「うちなーぐち」の挨拶をとり入れるなど、県が主体になったさまざまなとりくみがみられる。首里那覇共通語の普及においては効果的なとりくみであるといえよう。

(8) 「コミュニティー内でのその言語に対する態度」については、表だって見えるような状況としてはおおむね「4. ほとんどの者が言語が次世代にも使われることを支持している」に近いとみられるが、潜在的にはそれほどでもない印象もあるので「3. 多くの者が言語が次世代にも使われることを支持している。その他の者は無関心であるか、言語が使用されなくなることを望んでいる」～4とした。

(9) 「言語記述の質と量」については、一定水準以上の文法書が存在し、辞書や音声資料、文字資料が存在している。新たに文字資料が作られつつもある。けっして充分とはいえないため、「4. よい文法記述が一つある他にも、文法資料、辞書、文字資料、文学、それに定期的に更新される日常言語使用の資料が存在する。一定の質の録音、録画資料が存在する」寄りの「3. 一定の文法資料、辞書、文字資料が存在しうるが、日常言語使用の資料はない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものやされていないものもある」、すなわち3～4とした。

引用文献

- 石原昌英（2013）「行政機関、NPO法人、マスコミ等での取組」『危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業（奄美方言・宮古方言・与那国方言）』p87-p140
- 伊豆山敦子編（2006）『放送記録テープによる琉球・首里方言：服部四郎博士遺品』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 上村幸雄（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 上村幸雄（1997）「琉球列島の言語（総説）」『言語学大辞典セレクション日本列島の言語』p311-p354
- 小川晋史（2014）『琉球のことばのかきかた（仮）』くろしお出版（予定）
- 加治工真市（1983）「首里方言入門」『月刊言語（第12巻4号）』p33-p42
- 亀井孝・他編（1996）『言語学大辞典第6巻術語編』三省堂
- かりまたしげひさ（2013）「琉球方言とその記録、再生の試みー学校教育における宮古方言教育の可能性ー」『琉球列島の言語と文化ーその記録と継承ー』p21-p44

- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美（2007）「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデ
ンシャルティ」『大阪大学大学院文学研究科紀要 47』 p151-p183
- 田代竜也（2012）「沖縄中南部方言における与格のあらわれ方の差異」『日本方言研究会
第 95 回研究発表会発表原稿集』 p35-p42
- 田中春美他編（1988）『現代言語学辞典』成美堂
- 當山奈那（2013）「沖縄県首里方言における使役文の意味構造」『日本語文法 13-2』
p105-p121
- 津波古敏子（1997）「琉球列島の言語（沖縄中南部方言）」『言語学大辞典セレクション
日本列島の言語』 p369-p388
- 中松竹雄（2010）『沖縄口さびらー沖縄語を話しましょう』琉球新報社
- 中松竹雄（2004）『沖縄県首里のことば』沖縄言語文化研究所
- 那覇市企画部市史編集室（1979）『那覇市史資料篇 2 中の 7 那覇の民俗』
- 西岡敏・仲原譲（2006）『沖縄語の入門ーたのしいウチナーグチー』白水社
- 服部四郎（1955）「琉球語」『世界言語概説下巻』 p307-p356
- 比嘉成子（1987）「<資料紹介>首里方言自由会話「旧正月と大晦日の思い出」『琉球方
言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』 p73-p91
- 比嘉正範（1983）「沖縄の外来語」『月刊言語（第 12 巻 4 号）』 p76-p82

・白地図は次のサイトのものを加工して掲載しました。地図をみやすく加工してくださっ
た當銘千怜さんにこの場を借りてお礼申し上げます。

白地図専門店 (<http://www.freemap.jp/>)

ちずびと (<http://chizubito.com>)

沖縄県奥武方言

沖縄県奥武方言

中本 謙

1 奥武島の概要¹

南城市奥武島は、沖縄本島南部、志堅原の沖合 150 メートルに位置する亀甲型の風光明媚な小さな島である。琉球石灰岩からなる島の面積は 0.25 平方キロメートル、周囲 1.7 キロメートル、幅 500 メートル、最高標高は約 16 メートルである。

奥武島に人間が居住するようになったのは、今から 650 年ほど前とされている。玉城若按司兼松金の長男玉城大屋子（玉城門中の始祖）と次男新垣大屋子（大屋門中の始祖）が奥武島に移り住んだことによるという伝承があるとのことである。

本島との交通手段は、1936 年に初代の奥武橋（木造）が架かるまでは、渡し船が利用されていた。このように離島であったが故に、沖縄本島中南部の中でも周辺言語とは、やや異なった言語として独自に発達したものと考えられる。

架橋されてからは、車両の出入りも可能になり、陸続き同様となった。そして、これまでの半農、半漁の生活から次第に第 2 次、第 3 次産業へと移っていった。この結果、本来の奥武方言的特徴は、近隣方言の影響などによって失われていく傾向にある。

本来漁業が盛んな奥武島の主な祭祀は、旧暦の 5 月 4 日に行われる海神祭（ハーリー）である。この日は豊漁を祈願するとともに、爬竜船競漕が開催され、多くの来島者で賑わいをみせる。また、島の中央に位置する観音堂には今から約 400 年前に遭難した唐船を助けた謝礼として、唐より送られた観音像が祀られており、5 年に 1 度、観音堂祭がおこなわれている。



(奥武島の航空写真)

¹ 字誌編集委員会(2011)『奥武島誌』を参考にした。



2 奥武方言の概要

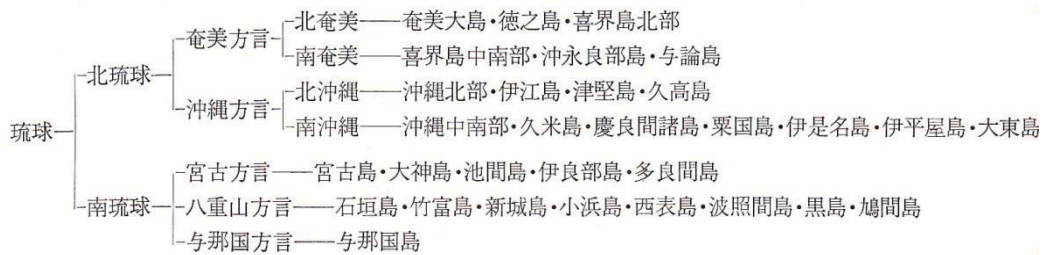
奥武方言は、離島であったが故に、周辺の言語とは異なった特徴を有する。例えば、本来の奥武方言では、 $ti > tʃi$ の変化により $[tʃida]$ (太陽) $[tʃi:]$ (手) のような語がみられた。また、この変化と平行的に $di > dʒi$ の変化もあり $[dʒiki:N]$ (できる) $[nuʒi:]$ (喉) のような語もみられた。しかし、1936年の架橋に伴い、本島と陸続き同様になると、奥武方言独自の特徴は次第に失われていくこととなる。現在、 $[tʃi:]$ (手) $[nuʒi:]$ (喉) のような発音は老年層においてもなされておらず、周辺方言と同様に $[ti:]$ (手) $[nudi:]$ (喉) となっている。以下、現在の80代以上²で使用されている奥武方言の特徴について示すこととする。

2. 1 奥武方言の位置

琉球方言は大きく北琉球と南琉球に分かれ、前者には奄美方言、沖縄方言が属し(「奄美徳之島方言」「沖永良部与論沖縄北部方言」「沖縄中南部方言」の三つに区分する見方もあ

² 敢えて80代以上とするのは、70代以下は近隣方言の影響等により変化がみられるからである。奥武方言にみられる世代差についての研究としては中本謙(1997)がある。

る)、後者には宮古方言、八重山方言、与那国方言が属する。これら5大方言は、以下のよ
うにさらに下位分類される。



中本(1981)より引用

奥武方言は、琉球方言区画上、沖縄中南部方言に属するが、形容詞語尾が[takahaN] (高い)のように- haNとなる等、音声的には沖縄北部方言的要素もみられる。

2. 2 奥武方言の音声・音韻的特徴

(1) 音素

①母音音素

奥武方言の母音音素は / i, e, a, u, o / の5個である。

②半母音音素

奥武方言の半母音音素は共に / j, w / の2個である。

③子音音素

奥武方言の子音音素は / ' , ʔ, h, k², k, g, t², t, d, c², c, s, z, n, r, p, b, m², m / の19個である。

④拍音素

奥武方言の拍音素は / N, Q / の2個である。

(2) 音韻的特徴

① /ʔ/が音素として認められる。

奥武方言の/ʔ/は語頭の母音、半母音、撥音の前であられる。

[ʔita] (板) [ʔadzi] (味) [ʔafi] (汗) [ʔutu] (音)

[ʔja:] (お前) [ʔwa:] (豚)

[ʔnni] (稲) [ʔmmi] (梅)

ʔは、[ʔutu] (音) と[wutu] (夫/をひと) のようにア行とワ行の区別をする音素でもある。

② /c²//t²//k²//m²/が音素として認められる。

/c²/

/c²aa/ [tʃ²:] (常に)

/caa/ [tʃa:] (茶)

語例 [tʃ²e:naraN] (来てはならない) [tʃ²aN] (来た) [tʃ²a:] (常に) [tʃ²u] (人)

/t²/

/t²a' i/ [t²ai] (二人)

/ta' i/ [tai] (垂れ)

語例 [t²i:tʃi] (一つ) [t²ai] (二人) [t²a:tʃi] (二つ)

/k²/

/k²a' i' N/ [k²aiN] (食う)

/ka' i' N/ [kaiN] (刈る)

語例 [k²iraN] (あげない) [k²wa] (子) [k²wahaN] (堅い)

/m²/

/m²o:ri/ [m²o:ri] (いらっしゃい)

/moori/ [mo:ri] (踊れ)

語例 [m²e:nse:N] (いらっしゃる)

③ /h/の/s/音化がみられる。

沖縄中南部方言の多くは、形容詞語尾が[takasaN] (高い) のように[-saN]であるが、奥武方言では、促音直後を除き[-haN]となる。

語例 [ʔamahaN] (甘い) [ʃiruhaN] (白い) [he:haN] (早い) [tu:haN] (遠い)
[ʔassaN] (浅い) [wassaN] (悪い)

形容詞語尾の他にも終助詞の[sa] (よ) は、[ha]となる。

例 [ʔan jaha] (そうだよ)。

また、動詞[suN] (する) の活用においても[ha] (しよう)、[haN](しない)のように h 音化がみられる。

例 [maʒo:n ʃigutu ha] (一緒に仕事しよう)
[wanne: hando:] (今日はしないよ)

(3) 音韻対応

① 母音

奥武方言の母音は多くの沖縄中南部方言と同様に共通語と次のように対応している。

共通語	ア	イ	ウ	エ	オ
奥武方言	a	i	u	i	u

語例 [ʔadʒi] (味) [ʔami] (雨) [kagaN] (鏡)
 [ʔita] (板) [ʔifi] (石)
 [ʔufi] (牛) [kubi] (首) [nunu] (布)
 [ʔibi] (海老) [mi:] (目) [ni:] (根)
 [ʔutu] (音) [ʔitu] (絹糸)

これも多くの沖縄中南部方言と同様であるが、c, s, z の直後の u は i となる。

語例 [tʃina] (綱) [tʃitʃi] (土) [ʃimi] (炭) [ʃini] (脚、すね) [kiʒi] (傷)
 [mizi] (水)

② カ行子音の対応

共通語	カ	キ	ク	ケ	コ
奥武方言	ka	ci	ku	ki	ku

語例
 [kami] (神) [wakamuN] (若者)
 [tʃitʃi] (時) [ʔitʃi] (息) [tʃimu] (肝)
 [kubi] (首) [kʉtʃi] (口)
 [ki:] (毛) [taki] (竹)
 [haku] (箱) [kʉkuru] (心)

2. 3 奥武方言の文法的特徴

(1) 動詞終止形の成立

奥武方言の動詞の終止形は、中央語の連用形に「居る」が結合して成立しているところに特徴がある。例えば、カチュン (咲く) は「kaki (書き) + wori (居り) + mu (む)」(「む」以外に推量の助動詞「も」説、「もの」説がある) から成っている。これは、多くの沖縄中南部方言に共通する特徴である。

(2) 形容詞

奥武方言の形容詞の終止形は、タカハン（高い）ミジラハン（珍しい）のように語尾が「-ハン」となる。これは「sa(さ)+ari(有り)+mu(む)」の融合した形であるとされる。また連用形をみるとタカク（高く）、ミジラシク（珍しく）であり、いわゆるク活用とシク活用の区別があることがわかる。

「さ+有り」の融合した形は、多くの沖縄中南部方言に共通する特徴である。

(3) 係結び

奥武方言では、ジー カチュン〈終止形〉（字を書く）のジー（字）を強意の du（係り助詞「ぞ」）でとりたてると、ジードゥ カチュル〈du 結び形〉（字ぞ書く/字を書くのだ）のようになる。奥武方言では、カチュヌ ツチュ（書く人）のように連体形と du 結び形は、形が異なる。

またジー（字）のあとに疑問のガ（係助詞「か」）がくると、ジーガ カチュラ（字を書くだろうか）のようになる。このカチュラは、カチュラン（書き居らむ）のンが脱落した形であると考えられる。

(4) 助詞ガ（が）ヌ（の）の使い分け

奥武方言では、多くの沖縄中南部方言と同様に、主格、連体用法ともに承ける体言による助詞ガ（が）、ヌ（の）の使い分けがみられる。例えば主格用法では、ワーガ イチュン（私が行く）、トゥイヌ トゥブン（鳥が飛ぶ）のように、人名、人称代名詞など身近に捉えている人間関係をあらわす語は、ガで受け、それ以外の一般名詞はヌで承けるという使い分けがみられる。

しかし奥武方言では、主格用法においてガ（が）の領域が拡大していく傾向がみられる。そして、一般名詞を承ける場合には、次のような新たな意味区別が本来の奥武方言話者の内省によって確認される（中本謙 2007）。

チクラガ トゥドーン「ボラ（魚）が（離れたところを）飛んでいる。」（遠距離）
チクラヌ トゥドーン「ボラ（魚）が（すぐ傍を）飛んでいる。」（近距離）

2. 4 奥武方言の語彙的特徴

(1) 奥武方言特有の語

奥武方言の多くの語は、沖縄中南部方言に共通するが、次のような語もみられる。

[go:re:]（走る）[ko:tʃa:]（ゴキブリ）[hanaburaɸutʃuN]（いびきをかく）

[musa]（高波）

また、人間関係を表す語において、[ɸa:kanda]という「祖父母の一人と孫一人」の関係をあらわす語も見られる（ただし奥武方言以外でもみられる地域がある）。共通語には「親子」のような語はあるが、このような概念をあらわす語はない。

(2) 日本語の古層に繋がる語

奈良朝期の古語と対応する語がみられる。奥武方言の例を示すと、[waN]（私、和奴）[ʔa:ke:zu:]（蜻蛉、阿岐豆）[tuʒi]（妻、刀自）等がある。また[ʃitimiti]（早朝、つとめて）のように平安時代以降に入った語もある。

3 人口構成からみた奥武方言

奥武島は、南城市玉城に属するが、離島であったが故に玉城の中でも独自性の強い方言となっている。奥武方言は、基本的に奥武島内のコミュニケーションで用いられる傾向にあるので、奥武島内の人口から奥武方言話者数を推定する。

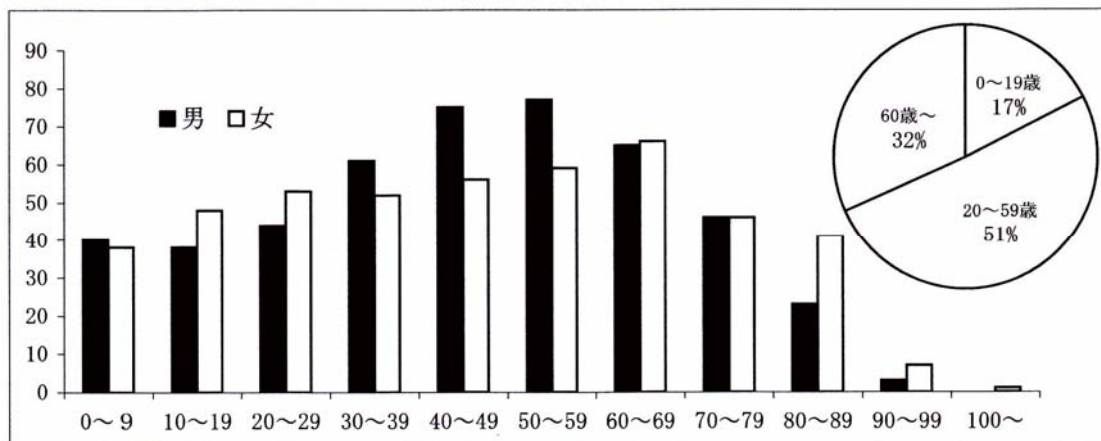
まず、明治期からの人口と世帯の移り代わりを示す。

年度	1880年 明治13年	1903年 明治36年	1921年 大正10年	1947年 昭和22年	1948年 昭和23年	1953年 昭和28年	1960年 昭和35年	1980年 昭和55年	1990年 平成2年	2000年 平成12年	2010年 平成22年
男	209	275					508	574	551	552	474
女	200	331					584	614	564	537	473
計	409	606	800	960	1,004	1,054	1,092	1,188	1,115	1,089	947
世帯数	96	128	140			206	191	255	270	309	321

字誌編集委員会(2011)より引用

次に2010年現在の男女別、年齢別の人口構成を示す。

年齢	0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100～
男	40	38	44	61	75	77	65	46	23	3	0
女	38	48	53	52	56	59	66	46	41	7	1
計	78	86	97	113	131	136	131	92	64	10	1



字誌編集委員会(2011)より引用

最後に 2014 年現在の男女別、年齢別の人口構成³を示す。

年齢	0～9	10～ 19	20～ 29	30～ 39	40～ 49	50～ 59	60～ 69	70～ 79	80～ 89	90～ 99
男	30	26	26	48	53	82	61	56	26	7
女	39	27	42	42	42	52	57	56	43	12
計	69	53	68	90	95	134	118	112	69	19

この表から奥武区民のうち 50 歳以上は、452 人であることがわかる。従って奥武方言話者は 452 人ということになる。このうち、周辺方言の影響を受けていない本来の奥武方言話者を 80 代以上とすれば、その数は 88 名となる。

4 共通語教育と方言教育

沖縄では、明治期から「罰札制度」を用いた「標準語励行」が推進されてきた。奥武区の人々は、島内に小学校がないため対岸の玉城小学校へ現在も通学している。奥武区の人々の話では、玉城における「罰札制度」は、戦時中（太平洋戦争）が最後ということであった。

「罰札制度」が廃止されても共通語化の波は止まらない。1980 年代には、沖縄県教育庁によって「学力向上対策主要施策」⁴が打ち出された。これによって、学校、地域、家庭が一丸となって日常生活における共通語使用が進められたようである。つまり、児童生徒の学力の低さの要因の一つとして、共通語を十分に使いこなせない言語生活にあるとみたのである。このような施策やマスメディアの発達等の影響もあり、沖縄では、奥武区もそうであるが多くの 40 代以下は、方言を聞き取ることすらままならない状況にある。

現在、沖縄では「しまくとうばの日」が制定され、小学校でも方言に親しみを持たせようという方向になっている。玉城小学校では年に 2 回くらい地元のお年寄りを招いて方言を習うという取組がなされている。また、年に 1 回は「しまくとうば校内お話し会」が開催されている。ここで選出された学校代表は、次に「南城市しまくとうば大会」に出場するとのことである。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

方言のイベントは、奥武区民も通学している玉城小学校で年 1 回「しまくとうば校内お話し会」が開催されている程度で、奥武島内での方言大会等は開催されていない。

このように方言保存としての活動は、積極的になされていないが、奥武島には、奥武青年会や奥武女性会（旧婦人会）が組織されており、青年会主催のエイサーやハーリー、観音堂祭等で親睦を深め、地域の文化を盛り上げている。

³ 奥武区民として登録されている人口である。奥武島対岸の小港に在住する 17 人も含む（奥武区自治会より資料提供）。

⁴ 藤原(1996)が詳しい。

しかし、2012年には奥武方言を保存し、後世に残したいという思いから、『奥武方言』編集委員会が組織され、毎月1回、本来の奥武方言を保持している老年層からの聞き取り調査が公民館で実施されている。

6 方言資料の作成

方言のみの資料ではないが、2011年3月に『字誌』編集委員会による『奥武島誌』が刊行された。10年以上及ぶ月日をかけて大著である。方言については、親族語彙をはじめ、ウミンチュ（海人）の集落らしく魚名や漁業関連の語彙等がカタカナを工夫した表記で記載されている。また本書は、奥武島の昔の子供の遊びや口承文芸、民俗芸能なども豊富に記載されている。

現在、5. で示したようには『奥武方言』の刊行に向け作業が進められている。また、言語研究者による資料等については、7. (9) で示す。

7 危機の度合いの判定

表 奥武方言の危機の度合いの判定

	奥武方言
(1) 奥武方言がどの程度次の世代に伝承されているか。	3
(2) 母語話者数	
(3) コミュニティー全体に占める奥武方言話者の割合	2
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	2
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	0
(6) 教育に利用される言語資料がどの程度あるか	1～2
(7) 国の言語施策（明示的、非明示的態度を問わず）	3
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	3
(9) 言語記述の質と量	2
平均	1.8

判定の理由

(1) 2014年現在、奥武方言は40代以下では、体系的にほとんど継承されていないのが現状である。また、50代か70代の多くは体系的に方言を継承しているが80代以上が使用している本来の奥武方言とは異なりをみせる。家庭内の日常会話では、祖父母世代と親世代は、方言を用いるが、祖父母世代と孫世代、親世代と孫世代のコミュニケーションは、共通語が用いられている。ただし、すべての世代で部分的に奥武方言語彙が混ざることがある。

(2) 奥武方言の母語話者数を断定的に示すことは難しい。しかし世代によって方言がどの程度用いられているかという傾向は示すことができる。奥武方言は、(1)で示したように本来の奥武方言は80代以上、近隣方言の影響を受けた奥武方言は50代以上の多くで話されている。2014年現在、50代以上は452人、そのうち80代以上は88人である。また、人数的には30人程度であるが、20代～40代でも漁業従事者は方言を話せる。

(3) (2)で示したように方言の母語話者の数は、452人である。全島の人口が827人なので、全体の約半数である。しかし、このうち本来の奥武方言話者、つまり近隣方言の影響を受けていない母語話者数(80代以上)は88人である。

(4) 基本的に50代以上同士であれば、島内のコミュニケーションは、方言が用いられることが多い。ただし、40代以下に対しては、方言が通じないので共通語が中心に用いられる。島外においては、すべての世代でほとんど方言を使用しない。島内の公の行事の挨拶などは基本的に共通語が用いられるが、司会進行が方言で行われることもある。

(5) 奥武方言によるテレビ、ラジオ放送などは存在しない。また、確立された書記法もないため方言で書かれた新聞なども存在しない。ただし、奥武方言で作詞された歌などはカタカナやひらがなを用いた個々の工夫された表記で書かれることがある。

(6) 平山・大島・中本(1966)、中本(1976)等による体系的な記述があるが、IPA(国際音声字母)で表記されているため教育の場で用いるのは難しい。

2011年3月に発行された『奥武島誌』の「第5章 文化」では、方言や口承文芸等について記述されている。カタカナやひらがなを工夫した表記となっており、親しみを持たせる程度であれば、教育の現場で利用可能である。

(7) 明治期より「標準語励行」が推進されてきたが、現在は、方言の保存、継承の運動が活発になってきている。公的場面では、基本的に共通語が用いられているが、最近では公の会議などの挨拶で方言を用いる傾向が強くなってきている。しかし、奥武方言の保護施策は施行されていない。

(8) 奥武区民全員に調査を行ったわけではないが、多くの人が次世代に方言が使われることを支持している。しかし、40代以下は方言が話せないため、老年層は若年層に対して基本的には共通語を用いている。つまり、方言を残したいという意識はあるが、実際に継承していくことは難しいという現実がある。

このような状況下で奥武方言を保存し後世に残したいという機運が高まり、区評議員会の決議のもと、2012年4月に『奥武方言』編集委員会が組織され、現在、老年層から奥武方言の聞き取り調査が行われ、編集作業が進められている。

(9) 平山・大島・中本(1966)、中本(1976)、中本(1990)、中本(1983)、中本謙(1997)中本謙(2001)等に奥武方言の音韻、文法、語彙の体系的な記述の報告がある。奥武島出身

の言語学者である中本正智による記述が多いが、これらは言語学の方法による学術書、学術論文であり、言語教育での利用は、難しいように思われる。

参考文献

- 字誌編集委員会(2011)『奥武島誌』奥武区自治会
平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』明治書院
中本謙(1997)「沖縄奥武方言の音韻 一世代別調査から一」『沖縄文化』沖縄文化協会第
33巻第1号通巻87号
中本謙(2007)「沖縄奥武方言の助詞〔ガ〕〔ヌ〕と〔ガー〕〔ノー〕」『琉球の方言』31号
法政大学沖縄文化研究所
中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
中本正智(1983)『琉球語彙史の研究』三一書房
中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店
藤原幸男(1996)「復帰後沖縄における学力問題の展開」あけもどろの会編『ことば 生活 教育』ルック

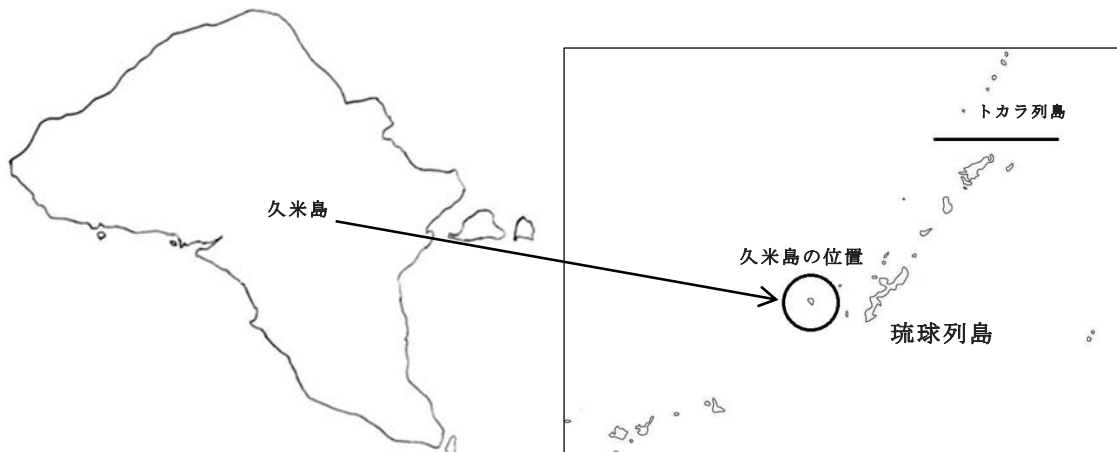
沖縄県久米島方言

沖縄県久米島方言

仲原 穰

1 久米島の概要

久米島は那覇から西へ約 100km、周囲 53.31 キロメートル、面積 55.69 平方キロメートル、経度は東経 126 度 48 分 18.2 秒、緯度は北緯 26 度 20 分 22.9 秒ルにある島である¹。那覇と久米島を結ぶ洋上には、渡嘉敷島、慶良間諸島、粟国島、渡名喜島などの島々が連なっており、久米島はその西端に位置している。



久米島の主要産業は農業（おもにサトウキビ）、織物（久米島紬）、水産業（車海老の養殖）、観光などであった。しかし、海洋深層水の施設が整い、それを生かした産業（製塩、養殖、温浴施設）なども成長しつつある。2002年4月に仲里村と具志川村が合併して久米島町となったが、かつては島の東側が仲里村、西側が具志川村であった。

2002年4月に仲里村と具志川村が合併して久米島町となったが、かつては島の東側が仲里村、西側が具志川村であった。現在、学校は小学校が6校（清水小・大岳小・久米島小・仲里小・美崎小・比屋定小）、中学校が3校（久米島西中・久米島中・仲里中²）、高等学校が1校（久米島高）ある。

2 久米島方言の概要

2.1 久米島方言の位置

久米島方言は、系統的には「北琉球諸語」の「沖縄語」と同系統であるが、細部に注目すると那覇や首里のことばと異なる点もいくつかみられる。

久米島内の言語区画は「久米島方言」と「その他」（鳥島、銭田、真我里、仲泊、大原、北原、真泊、西奥武、東奥武）に2分される。「その他」の言語のうち、鳥島方言は奄美諸

¹ 詳しくは久米島町の公式ホームページを参照されたい (<http://www.town.kumejima.okinawa.jp/index.html>)。

² 久米島西中は平成19年度に比屋定中と具志川中の統廃合により誕生した。また、久米島中と仲里中も統廃合が決まり、平成26年4月より「球美(くみ)中」が誕生する予定である。よって、平成26年度から中学校が2校になる。

島の硫黄島から移住してきた集落なので系統的には北琉球諸語「奄美語」の徳之島方言に近いとされるが、現在は島島方言の話者がほとんど見つからず、絶滅に限りなく近い方言といえる。銭田・真我里・仲泊は沖縄本島南部（那覇市など）からの移住であり、大原・北原は沖縄本島各地からの移住、真泊は糸満からの移住、西奥武・東奥武は渡名喜島・栗国島からの移住によって形成された集落である。

久米島方言の音韻を扱った研究としては嘉味田（1962a、1962b）、内間（1969）、藤原（1982）、名嘉真（1980）（1992a）、仲原（1999b、2003、2006）などがあり、文法については内間（1981）、屋比久（1982）、野原（1982、1985）、仲原（2001、2004）、高橋・砂辺・山川（2011）、平良・當山（2011）、知念・當銘・松岡（2011）、池間・前田・岡田（2011）などがある。このほか、語彙の研究に沖縄言語研究センター（1985）、仲原（1999a）、宮平（2011）などがあり、言語地図を扱ったものに高橋ゼミ（1991）や西岡・仲原（2010）などがある。語彙集については後述する。

2. 2 久米島方言の音声・音韻の特徴³

(1) 半狭母音/e/と/o/が狭母音化する。よって、久米島方言の母音のうち、基調となるのは/a,i,u/の母音である⁴。この変化は琉球諸語全体で起きている変化であり、久米島方言でも同様の変化がみられる。

- ・エ/e/→イ/i/ アミ[[?]ami]（雨）、カニ[kani]（鐘）
- ・オ/o/→ウ/u/ ユル[juru]（夜）、ユミ[jumi]（嫁）

(2) 母音が連続する環境で母音が融合し、長い母音へと変化する。いわゆる「連母音の融合」は「北琉球諸語」の特徴であり、久米島方言もその特徴を持っている。

なお、助詞「ヤ」（～は）の直前の名詞の末尾の母音が短母音や撥音の場合も、「ヤ」と直前の母音が融合し、音変化させることがあるが、首里方言や那覇方言のように規則的に毎回起こるのではなく、単にくっついて用いられることもある。

- ・アイ→エー
タレー[tare:]（鹽）、ヤセー[jase:]（野菜）
- ・アオ→オー
ソー[so:]（竿）、オールー[o:ru:]（青色）
- ・母音[u]+ヤ[ja] → [oo] / 母音[i]+ヤ[ja] → [ee]
イヨー マーハヒガ、シセー マーク ネーラン。
[[?]ijo: ma:ha:higa, eise: ma:ku ne:ran.]
（魚はおいしいけど、肉はおいしくない） ※[[?]iju]（魚）、[eici]（肉）
- ・ワノー ウキガレークトウ、クワッチーツクイヤ シユサン。
[wano: ukigare:kutu, kwattji:tsukuija cijusan.]（私は男だから、御馳走作りはできない。）

(3) 硬口蓋化がみられる。「沖縄語」と同じく、/i/や/j/の前後で子音が硬口蓋化している。

- ・チム[teimu]（肝）、サチ[satei]（先）、クジ[kudzi]（釘）、ムジ[mudzi]（麦）

³ 久米島方言の語例は、特に断らない限り久米島東部の「真謝（まじゃ）」集落を挙げる。

⁴ ただし、久米島方言は長音の短呼の現象もあるため、集落によっては/e/や/o/の短母音を頻繁に用いる方言もある。

・ヒチェー[çitce:] (額), イチャ～イツァ[?itea~?itsa] (鳥賊)

(4) ダ行/d/がラ行化/r/する傾向が強い。

那覇方言と同様に破裂音/d/が弾き音化する傾向がみられるが、集落や話者の年齢によっては/d/を持っている場合もみられる。

・ローグ[ro:gu] (道具), ルシ[ruei] (友), ルク[ruku] (毒), アル[?aru] (踵)

(5) 声門破裂音[ʔ]は母音の前で弱く発音されるが、弁別機能はみられない。また、半母音の前では観察されない。よって、「私の」と「豚」を音素的には弁別できず、文脈で判断している。なお、「沖縄語」の系統の方言のなかでは、糸満方言でも声門破裂音の対立がみられない。

・ウトゥ[?utu] (音), イリ[?iri] (西), ア[?a:tu] (跡)

・ワー[ʋa:] (私の), ワー[ʋa:] (豚), ヤー[ja:] (家) ヤー[ja:] (お前)

(6) 拗音の直音化

久米島では、拗音の直音化の傾向があり、ジャ→ザ、チョ→ツォ、チュ→ツなどのように発音する話者が多く見られる。ただし、集落や話者によっては拗音の体系がみられる場合もある。

・ヒーザー[çi:ɕa:] (山羊) ツォーレー[tso:re:] (兄弟), イツン[?itsun] (行く)

(7) サ行子音/s/がハ行子音/h/へと変化する傾向がみられる。

この現象は「沖縄語」の系統のうち、沖縄本島の南部(八重瀬町)や沖縄本島中部(石川方言など)でもみられる現象である。ただし、集落によって、名詞、動詞、形容詞などの語例が異なる。用例の真謝方言では名詞、動詞、形容詞、助詞などの/s/が/h/化するなど、変化が激しい集落の一つである。

・ヌフル[nuhuru] (盗人), ナフン[nahun] (産む), マーハン[ma:han] (旨い)

2. 3 久米島方言の文法の特徴

(1) 動詞の語尾/N/が脱落した地域がみられる。

久米島真謝方言では動詞の断定非過去形や否定形、形容詞の語尾に/N/が付く。しかし、久米島方言のうち、一部の集落(嘉手苺・西銘など)では、/N/が脱落した語形がみられる。

・/N/が脱落した例(嘉手苺方言)

ス(一)[su(:)] (する), チズ[tɕidzu] (注ぐ), ハ[ha] (しない), アチサ[[?atɕisa] (暑い)

・/N/が脱落しない例(真謝方言)

スン[sun] (する), チズン[tɕidzun] (注ぐ), サン[san] (しない),

アチハン[?atɕihan] (暑い)

(2) 動詞の連体形語尾-nuと断定形語尾-N、強調語尾-ruの区別

現代日本語の共通語では、「書く。」と「書くとき」のどちらも「かく」になり、いわゆる終止形と連体形の合一化が起きているが、久米島方言では「連体形」では/-nu/語尾になり、「終止形」では/-N/語尾で区別している。また、首里方言や那覇方言などでは、連他愛

修飾と係助詞 du/ru による「係り結び」によって「強調」を表すが、久米島方言では係助詞 ru の結びには連体形語尾の-nu ではなく、強調を示す語尾-ru が用いられている。

- ・カチュヌ バー (書く場合) ※連体形
- ・カチュン。(φ) (書く。) ※終止形
- ・ジー ル カチュル。(字をこそ 書くのだ。) ※「係り結び」

(3) 助詞「～に」の使用地域

久米島東部の集落では、沖縄本島北部地域(＝国頭語)と同系統の助詞「～カチ」を用いるところもある⁵。

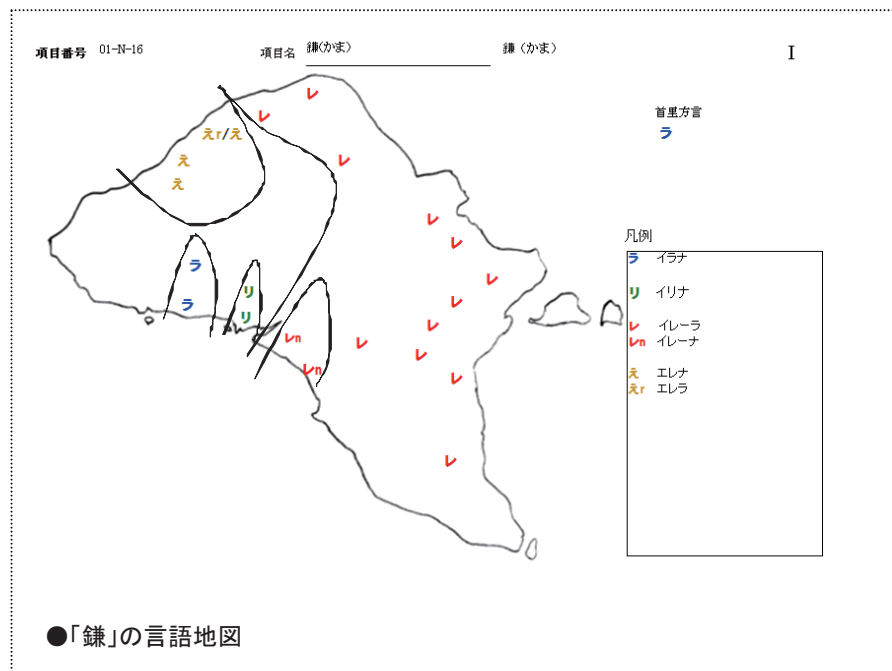
- ・ジャームカチ ンジチナ。[dza:mu katei ndzitsina.] (比嘉まで行って来たか。)

2. 4 久米島方言の語彙の特徴

(1) 地域のまとまりを示す言語地図

久米島の中央部は、山や丘が連なり、集落が形成できない。集落は島の周囲に配置されており、人々の往来は隣りの集落を介して行き来される。そのため、語彙を調べると言語の伝播状況を想定させる語彙がいくつかみつかる。西岡・仲原(2010)より「鎌」の地図を挙げる。人々の往来が激しい集落は同じ語形を用いていることがわかる。

西岡・仲原(2010)は久米島の全集落を調査し、言語地図を作成する目的で行った調査の中間報告であるが、その後の補足調査を補充し、新たに作成した言語地図が以下のものである(フィルムカー Pro で筆者が作成したもの)。



左の言語地図では、「イレーラ」が多く集落で用いられている語形である(東部全域)。

一方、「イレーナ」は儀間・嘉手苅、「イリナ」は兼城・大田、「イラナ」は仲泊・西銘、「エレナ」や「エレラ」は仲地・具志川・仲村渠で用いる語形で、集落間の人々の結びつきが読み取れる。

⁵ 野原(1982:750-751)によれば、「カチ」を使用するのは久米島東部の集落(宇江城・比屋定・下阿嘉・真謝・比嘉・嘉手苅など)である。このほか、「ンガティ」(謝名堂・島尻)や「カティ」(具志川・仲地・上江洲・太田・儀間)、「ンケ(一)」(鳥島)などが使用されている。

3 人口構成からみた久米島方言

沖縄県企画部統計課人口社会統計班が作成した「国勢調査報告」のなかの「市町村別国勢調査人口の推移」⁶（大正9年～平成17年）によると、久米島町の人口のピークは1955年の17,167人をピークに、1995年には1万人を割り込み（9,819人）、2005年では9,177になっている。なお、この減少は今も続いており、現在は8,398人である（2014年1月31日現在：久米島町役場 HP）。

ここ数年の久米島町の人口減少については、「少子化」と「転出」が主な要因だといわれている（久米島町役場「総論 第3章 子どもと子育て家庭を取り巻く現状」⁷）。久米島内の就業、婚姻、出産が少なくなると言語を継承する人口も減少していくわけである。久米島には大学や専門学校がなく、就職する企業もあまり多くないため、高等学校卒業後はほとんどが島外へ転出してしまう。その後、沖縄本島や県外などで就職し、島外の人と婚姻し、出産すると久米島へ戻ってきたくてもなかなか戻ってこられないのであろう。

一方、老年層の方は毎年老衰や病気によって自然減少があっても、大幅な減少はみられない。過去10年間の久米島の人口のうち、65歳以上の人口に着目すると、平成16年の2,204人に対して、平成25年の2,126人は約80人の減少にとどまっている（「過去10年間の年齢別人口の推移」⁸）これは、高齢者の減少が比較的ゆるやかであることを示している。

ただし、この65歳以上の人口のうち、久米島方言が用いられている集落に限定すると、久米島方言の話者になりうる人口は1,763人と推定される。さらに、このなかで伝統的なことばを伝承している75歳以上となると、さらに人口が少なくなり、約1,330人（男515人、女815人）である（平成26年1月31日現在）⁹。

久米島では、中年層までは老年層のことばをある程度理解することができ、多少の日常会話も可能であるが、老年層に比べるとやや語彙が少なく、共通語と混ぜて使用しているのが現状であるため、75歳以上のなかで久米島方言ですべて会話できるかどうかは話者により異なる。

4 共通語教育と方言教育

久米島方言の継承はあまり進んでいない。数名の聞き取り調査の情報をまとめると、現在久米島で方言のみで会話できるのは60代以上である。40～50代のなかにも方言だけで話せる人もいるが、所々に共通語を織り交ぜて会話を成立させている。しかも、自分の集落の同年配とは方言を交えて話す、他の集落出身者がいると現代日本語を中心とした会話することが多いという。そのため、その子ども世代にあたる若年層は久米島方言をほと

⁶ 「市町村別国勢調査人口の推移」（http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/pc/2/estimates_kokusei.html）

⁷ 「総論 第3章 子どもと子育て家庭を取り巻く現状」（http://www.town.kumejima.okinawa.jp/welfare/pdf/promotion_support/05.pdf）

⁸ 「過去10年間の年齢別人口の推移」（http://www.town.kumejima.okinawa.jp/townoutline/pdf/population/transition_data/05.pdf）

⁹ 久米島の集落別の人口を示す「指定区（行政区）別・年齢別人口」（http://www.town.kumejima.okinawa.jp/townoutline/pdf/population/transition_data/07.pdf）では65歳以上に集約されており、75歳以上の具体的な人数までは明示できない。よって、ここで挙げた話者数は、久米島町の「指定区別、年齢別、男女別人口調」（久米島町役場 HP）の75歳～102歳のデータを元に、これらの多くの人々が久米島方言を話すとは仮定した人数である。

んど聞き取ることができない（親が限られた場面しか方言を使用しないため、耳にする機会があまりないのが要因と考えられる）。

平成 21 年 2 月 19 日にユネスコが発表した約 2,500 の「消滅の危機」のなかに琉球列島の 6 言語が含まれていたことから、ここ数年で沖縄各地の言語継承に対する意識が高まっている。地域によっては小学校で方言クラブを作ったり、副読本を配布するなどの取り組みも始まっている。

久米島でも合併して久米島町になる前は、村ごとに言語継承の活動がみられたという。例えば旧具志川村の文化協会の取り組みとしては、特徴のある集落のことばのイントネーションを継承しようという目的で小学生に方言を実際に話させるという取り組みを行っていたという。具体的には、方言を話せる世代（当時 50 代の方）が、子どもたちの文章を集落のことばに翻訳し、それを老年層（当時 60 代、現在だと 75 歳程度の方）にイントネーションを含めて指導してもらっていた。しかし、旧具志川村文化協会も旧仲里村文化協会と合併して久米島町文化協会になり、現在はこのような取り組みは行っていない。

現在、久米島町文化協会が主催し、方言継承や普及の目的で行われているのが「久米島しまくとうば大会」である（今年度は 2013 年 7 月 28 日に開催された）。話し手のなかには小学生や中学生が含まれ、最優秀賞に選ばれた話し手は沖縄県文化協会が主催している「しまくとうば語やびら大会」に出場することもある。

このほか、学校単位の取り組みはほとんど行われていないが、地域のお年寄りとの交流のなかで簡単な単語や文を学習するという取り組みも個別的には行われている。例えば大岳小学校では学芸会の児童の挨拶に方言を取り入れている。しかし、久米島町の教育委員会が把握している限りでは、現在、授業や方言クラブなどのクラブ活動などで本格的に久米島方言の継承活動を行っている学校はないという。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

久米島では方言の保存活動に対する意欲はあるものの、具体的にどのような活動をすればよいのかわからずに手をこまねいているのが現状である。地域コミュニティの記録として、公民館に集落全戸の屋号を片仮名表記で公民館に地図化した集落¹⁰もあるが、保存活動にまではつながっていない。

久米島古典民謡大会は平成 22 年から開催されるようになったが、方言を記録する活動は研究者による一部の報告（参考文献を参照）以外はほとんどなされていない。しかし、2013 年 12 月の国立国語研究所による調査が行われたことをきっかけに島民の意識が高まったところであり、具体的にはこれからであろう。

6 方言資料の作成

久米島方言の記述文法書、辞書、教科書はこれまで刊行されていない。単語の意味を書き記した語彙集としては儀間の語彙集として波平（2004）が刊行されている。しかし、同

¹⁰ 真謝集落には「美崎小学校」があり、真謝・宇根・真泊の 3 集落の児童が通学している。このうち、真謝集落の児童らが作成した集落地図が真謝の公民館に写真付きで作成されており、番地の順番に記された屋号一覧は非常にわかりやすい。

じ単語を複数の項目として別々に挙げている点やアクセントを表す記号が付されていない点、具体例のある項目が少ない点など改善すべき点もみられる。

久米島方言の自然談話としては日本放送協会編（1972）がある。旧具志川村の仲泊集落の自然会話の資料である。掲載された分量としてはあまり多くないが、久米島の自然談話が掲載され、IPA で表記されたものであり、音源が附属してあるため、音声も聞くことができ、40年以上前の談話資料としては非常に貴重な資料である。

語彙資料としては宮平（2010）が面白い資料である。久米島紬の全行程に用いられることばを収集したものである。ただ、方言資料がもう少し挙げられていれば、なお良いものになったと思われる。

7 危機の度合いの判定

表 久米島方言の危機の度合いの判定

	久米島方言
(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	2～3
(2) 母語話者数	1,330人
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	2
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	2～3
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	2
(6) 教育に利用される言語資料がどの程度あるか	1～2
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	3
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	4
(9) 言語記述の質と量	2～3
平均	2.3～2.8

判定の理由

(1) 「その言語がどの程度次の世代に伝承されているか」については、「2. その言語は祖父母の世代以上で使用されており、親、子の世代は使用していない」から「3. 親の世代以上で使用されており、子どもたちは使用していない」と判断した。ただし、親の世代も伝承していない人も多く、また、伝承していても使用頻度が低い状況であるため、限りなく2に近い。

(2) 「母語話者数」は1,330人とした（久米島町ホームページの「指定区別年齢別男女別人口調」による〔平成26年1月31日現在〕）。なお、詳細は以下の通りである。

	男	女	計
75～79歳	175	199	374
80～84歳	157	234	391
85～89歳	125	227	352
90～94歳	37	107	144
95～99歳	20	38	58
100歳以上	1	10	11

この数は久米島町内に住む日本人のうち、75歳以上の人口の合計である。ただし、久米

島在住であっても久米島方言の母語話者ではない人が含まれており（久米島町にはもともと久米島の人々の集落とその他〔沖縄本島や周辺離島、硫黄島からの移住者系統〕の集落がある）、沖縄以外の日本各地からの移住者も含まれるため、あくまで「目安」の数である。

なお、75歳未満のうち、60代以上の老年層の大半は方言を使用できるが、久米島内の他の集落や沖縄本島方言などからの借用語を混ぜて使用したり、共通語を会話に取り込む頻度が高くなったりするなど個人差も大きいので今回は母語話者数に加えなかった。

(3) 「コミュニティー全体にしめる話者の割合」は、伝統的な母語話者（上記）の他、60歳～74歳までの老年層に限られているため、「2」と判断した。

ちなみに、久米島方言の集落でも中年層（40～50代）は「敬語が苦手なので目上（年長者）には方言を使用しない」「同輩や目下（後輩ら）との会話だけ方言を使用する」「家庭の中では親（目上）と方言で話せるが、近所の目上との会話には方言を使用しない」「同じ集落の友人とは方言で話すが、少し離れた集落だと友人でも方言を使用しない」という状況である。

(4) 「どのような場面でその言語が使用されているか」は家族構成によって異なる。家庭のなかに老年層がいる場合は「3」の「家庭の場面では使用されているが、支配的言語が家庭で使われ始めている」であるが、老年層がいない家庭では「2」の「限られた場面、いくつかの目的のために使用されている」、あるいは、親の世代が30代～10代で40代以上との同居がないという家族の場合は「1」の「ごく限られた場面で使用されるだけで、機能的に使用されることはほとんどない」になることもあるが、数はそれほど多くない。よって、今回は「2」～「3」と判断した。

(5) 「伝統的な場面以外で新たに言語が使用されている場面がどの程度あるか」は、「2」の「新たに生活に加わったいくつかの場面で使用されている」とした。久米島には「FMくめじま」というミニFMがあり、久米島出身のパーソナリティーが番組を進行し、ゲストで久米島町の職員、医師、高校生などがゲストやパーソナリティーとして加わる、という番組などを放送している。番組のなかで、リスナーからの投稿やゲストとのやりとりのなかで、ごくまれに方言が使用されることがある。また、久米島伝統民謡や沖縄民謡などを中心に流す番組もみられる。ただし、「あまみエフエム」のように方言にスポットをあてた番組はほとんどなく、島の情報発信と音楽の配信が多いのが現状である。

(6) 「教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか」は「2」の「文字資料は存在するが、コミュニティー内の限られた者にしか利用されていない。あるものにとって文字使用は象徴的意味を持つこともある」から「1」の「表記法が存在することは知られている。それで書かれた文字情報がいくつかある」の状況であると判断した。久米島方言の専用の文字はないが、「沖縄語」の系統の方言は音変化がそれほど難しくないため、日本語の文字（ひらがな・カタカナ）やアルファベットなどで代用することが可能である。例えば、波平（2007）の『しまくとぅば辞典』では方言語形が「カタカナ」と「アルファベット」で示され、単語の意味が日本語で記されている。

なお、この波平（2007）は、「儀間」集落の単語のみを集めた語彙集であるため、久米

島方言（久米島町内 23 集落）うち、主に限られた集落での使用に限られている。

また、久米島町の博物館が中心となり、島内に琉歌やオモロ、民謡などの歌碑を建立している。これらの歌詞などにも方言が記されている。

(7) 久米島方言の保護はなされていないが、政府により日本語（共通語）の使用のみを進めることはしていない。よって、「国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）」は「3」の「言語に関する保護政策は施行されていない」と判断した。

(8) 「コミュニティ内での言語に対する態度」は、久米島方言に対して否定的なコメントを聞いたことがないため、「3」ではなく、「4」の「多くの者が、言語が次世代にも使われることを支持している」と判断したが、「八重山語」の「宮良方言」などのように具体的に行動には出していないのが現状である。

(9) 「言語記述の質と量」については、2. 1で詳しく述べたように、いくつかの集落に関する論文報告はあるものの、詳細な音韻や文法の記述研究はあまりみられない。また、辞書や自然談話の資料も限定的であるため、久米島方言全体からみるとまだ不十分である。

ただし、国立国語研究所による調査結果が近く報告される予定（2014年度内）であるため、これが報告されれば、言語記述の質と量は格段に向上するとみられる。よって、現時点では「2」、将来的には「3」になると推定されるため、「2」から「3」とした。

参考文献

- 池間恵理子・前田舟子・岡田奈央美（2011）「島尻方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言（琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室）
- 内間直仁（1969）「沖縄久米島仲里村儀間方言の音韻体系」『都立大論集』第8号（東京都立大学国語国文学会）
- 内間直仁（1981）「久米島仲里村儀間方言の文法」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』（法政大学沖縄文化研究所）
- 生塩睦子（1984）「沖縄諸島（属島）の方言」『講座方言学10—沖縄・奄美地方の方言—』（国書刊行会）
- 嘉味田宗栄（1962a）「真謝・首里方言と標準日本語—比較考察の地ならしの一例として—（その1）」『沖縄文化』第6号（沖縄文化協会）
- 嘉味田宗栄（1962b）「真謝・首里方言と標準日本語—比較考察の地ならしの一例として—（その2）」『沖縄文化』第7号（沖縄文化協会）
- 平良美由紀・當山奈那（2011）「山城方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言（琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室）
- 高橋ゼミ（1991）『沖縄方言研究 第11号—久米島方言の言語地理学的研究—』（沖縄国際大学 高橋ゼミ報告書）
- 高橋ユキ・砂辺祥子・山川麻里（2011）「比屋定方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言（琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室）
- 武永睦子（1966）「沖縄久米島真謝方言の程度副詞」『方言研究年報』第9号

- 知念桃子・當銘千怜・松岡美里 (2011) 「嘉手苧方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言 (琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室)
- 仲原穰 (1999a) 「沖縄久米島真謝方言における親族語彙」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究—周辺諸方言との比較研究も含めて〈その1〉』 (千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書 第2集)
- 仲原穰 (1999b) 「沖縄久米島真謝方言の音韻研究」『沖縄文化』通巻90号 (沖縄文化協会)
- 仲原穰 (2001) 「久米島真謝方言の助詞」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究—周辺諸方言との比較研究も含めて〈その2〉』 (千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書 第3集)
- 仲原穰 (2002) 「沖縄久米島嘉手苧方言の音韻」『社会文化科学研究』6号 (千葉大学大学院社会文化科学研究科)
- 仲原穰 (2003) 「久米島真謝方言の音韻対応」『日中両言語における代名詞及び親族語彙の対照研究—琉球方言との比較研究も含めて—』 (千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書)
- 仲原穰 (2004) 「久米島真謝方言動詞の活用」『琉球の方言』28号 (法政大学沖縄文化研究所)
- 仲原穰 (2006) 「久米島真謝方言の名詞のアクセント—「類別語彙」1・2音節名詞を中心に」『琉球の方言』30号 (法政大学沖縄文化研究所)
- 西岡敏・仲原穰 (2010) 「久米島の言語地図にみる地域性—中間報告—」『久米島調査報告書(2)—地域研究シリーズ No. 37』 (沖縄国際大学南島文化研究所)
- 仲宗根政善 (1987) [1960] 「沖縄方言の動詞の活用」(『琉球方言の研究』、新泉社)
- 名嘉真三成 (1980) 「久米島真謝方言の音韻」『沖縄久米島における言語・文化・社会の総合的研究〈中間報告〉』 (法政大学沖縄文化研究所)
- 名嘉真三成 (1982) 「久米島真謝方言の音韻」『沖縄久米島』 (弘文堂)
- 名嘉真三成 (1992) 「音韻の記述的研究 9. 具志川村西銘方言」『琉球方言の古層』 (第一書房)
- 中本正智 (1981) 『図説琉球語辞典』 (金鶏社)
- 中本正智 (1982) 「沖縄久米島における国語教育」『沖縄久米島』 (弘文堂)
- 中本正智 (1990) 『日本列島言語史の研究』 (大修館書店)
- 波平憲一郎 (2007) 『しまくとぅば辞典 久米島町字儀間の言葉』
- 西岡敏・仲原穰 (2010) 「久米島の言語地図にみる地域性—中間報告—」『久米島調査報告書(2)』 地域研究シリーズ No. 37 (沖縄国際大学南島文化研究所)
- 日本放送協会編 (1972) 「3 具志川村仲泊 (久米島)」『全国方言資料』第11巻琉球編Ⅱ (日本放送出版協会)
- 野原三義 (1982) 「久米島方言の助詞」『沖縄久米島』 (弘文堂)
- 野原三義 (1985) 「久米島仲里村真謝方言の助詞・助動詞」(『琉球の方言』第9号、法政大学沖縄文化研究所)
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』 (明治書院)
- 藤原敬治 (1982) 「久米島方言の音韻—西銘方言を中心に—」『沖縄久米島』 (弘文堂)
- 法政大学沖縄文化研究所 1981 『琉球の方言—久米島鳥島—』第6号
- 宮平飛鳥 (2011) 「久米島紬と方言」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言 (琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室)
- 屋比久浩 (1982) 「久米島方言の動詞・形容詞の構造について」『沖縄久米島』 (弘文堂)

沖縄県宮良方言

沖縄県宮良方言

クリストファー・デイビス

1 宮良の概要

宮良方言は沖縄県石垣市字宮良で話されている言葉である。宮良は石垣の一番大きな都会である四箇の東側にあり、石垣島の南海岸から北へと伸びる字である。主な伝統的な職業は農業であるが、現在は農業以外にも様々職業がされている。図1は宮良の地図である。

宮良は石垣の中で伝統を守る傾向が強い評判があり、伝統的な行事の中には秘祭もあり、文化的に保守的な傾向がある。これがために、他の集落と比べて方言が使われる場面は多いが、それでも危機な状況にある。以下に宮良方言の特徴を紹介し、消滅の危機の背景を述べる。



図 1: 沖縄県石垣市字宮良の地図

2 宮良方言の概要

2. 1 宮良方言の位置

宮良方言は UNESCO の Atlas of the World's Languages in Danger に挙げられた八重山語の中の一方言である。八重山語とは、与那国を除く八重山地方で伝統的に使われている言葉であり、与那国語と宮古語で南琉球諸語をなし、北琉球諸語と対立している。これらをあわせて琉球諸語という。宮良では自らの言葉をめーらむに (me:ra-muni) という。

宮良方言は八重山語の中での歴史的な位置づけは難しい。1771年(明和8年)に起きた明和の大津波で宮良は大きな被害を受け、多くの人¹が亡くなった。大津波の後、小浜島から多くの人¹が宮良に移住したので、歴史的に小浜島との関係が深く、今でも宮良では小浜島のことを *ujazima* (親島) と呼んでいる。宮良と小浜島の関係は伝統行事からも観察できるが、言語の通時的な関係はまだ不明である。宮良の話者によると、小浜島の方言よりは、宮良の近くで話される四箇方言の方が理解しやすい。歴史的には、宮良方言はおそらく古くから使われていた「元宮良言葉」(mutu me:ra-muni) と小浜島の移住者が持ってきた言葉と地理的に近い四箇方言とが混ざっていると考えられるが、今のところはそれを解明する研究はされていない。

1 石垣(2013)によると生存者の171人に対し小浜島からの移住者は320人もいたという。

2. 2 宮良方言の音声・音韻の特徴

宮良方言で使われている母音音素は表 1、子音音素は表 2 でまとめられている。日本語共通語で区別されている 5 母音体系に対し、宮良方言は 6 母音体系を持ち、共通語にもある 5 つの母音の他に「中舌母音」と呼ばれる母音があり、その母音を *i* と表記される。以下で記述する書記法の不安定はほとんどこの母音による問題である。この母音の音声的な特徴はまだ十分に研究されていないのであるが、話者や多くの研究者の感覚ではその発音は *i* と *u* の間にあるように聞こえ、よって「中舌母音」と呼ばれる。中舌母音の音声的な表れ方は音韻環境によって摩擦音のような音になることも観察される。また、話者によってもその発音が揺れることも観察され、おそらく若い世代ではだんだん他の母音との区別が失われつつあると考えられる。例えば、「人」は宮良方言では /pĩtu/ であるものの、音声上の現れ方として、摩擦音的な発音 [pstu] もあり、中舌母音 *i* が無声音の *i* として発音される人もいる。他の母音と比べると、中舌母音が現れる環境は結構限られている。母音だけから音節（または母音で始まる音節）には *i* は現れず、常に子音の後にだけ現れる特徴がある。また、*i* が子音の一部 (p, b, k, g, s, z, ts, r) としか音節をなさない。

表 1: 宮良方言の母音音素

	前	後
狭	<i>i</i> <i>ĩ</i>	<i>u</i>
	<i>e</i>	<i>o</i>
広	<i>a</i>	

表 2: 宮良方言の子音音素

	唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p b	t d		k g	
鼻音	m	n			
摩擦音	ɸ	s z	ʃ		h
破裂音		ts	tʃ dʒ		
流音		r			
わたり音			j	w	

中舌母音は八重山語の他の方言で広く観察されるが、宮良方言における独特な音韻における特徴として以下のような母音調和がある。母音調和とは、ある母音音素が周りにある母音に影響され、それに近い発音に変化する現象である。共通日本語や八重山語の他の方言には母音調和の現象があまり指摘されていないが、宮良方言にはそのような現象が確認されている。それが一番明確に観察できるのは形容詞の語尾である。琉球諸語でよく観察される「さ形容詞」の語尾「さん」-san は宮良方言では -ha:n となり、表 3 の左側の欄のような形になる。しかし、形容詞の語尾が予測の -ha:n として現れるのは形容詞語幹が a で終わる場合だけである。語幹が u または o で終わる場合は、-ha:n が -ho:n に変化し、語幹が i または e で終わる場合は -ha:n が -he:n に変化する。また、形容詞語幹がもともと *ĩ* で終わると思われる場合（例えば、「暑い」の語幹 atsĩ や「厳しい」の語幹 kitsĩ）においては、一種の音便化が起こる。

表 3: 宮良方言における形容詞語尾 -ha:n の母音調和

mma-ha:n 美味しい	hiku-ho:n 低い	kai-he:n 美しい	/atsi-ha:n/ ⇒ [attsa:n] 暑い
katsima-ha:n 面倒くさい	piso-ho:n 広い	sane-he:n / sani-he:n 嬉しい	/kitsi-ha:n/ ⇒ [kittsa:n] 厳しい

2. 4 宮良方言の文法の特徴

宮良方言の文法における様々な特徴から、ここで2つだけを簡単に紹介する。動詞の活用は共通語と結構違う体系をなしている。文末終止の活用だけを見ると、表4でまとめたような形が存在する。この他にも文末終止の活用は存在するが、ここではこれだけの形を紹介する。

表 4: 動詞「書く」の文末終止の活用表

		進行	結果
現在終止形 1	kak-u	kak-i-ru	kak-e:-ru
現在終止形 2	kak-u-n	kak-i-n	kak-e:-n
已然形 1	kak-ja	kak-i-rja	kak-e:-rja
已然形 2	kak-ja-n	kak-i-rjan	kak-e:-rja-n
過去形	kak-ida	kak-i-da	kak-e:-da
否定形	kak-anu	kak-i-ne:nu	
過去否定形	kak-ana:-da	kak-i-ne:na:-da	
命令形	kak-i	kak-i-ri	
禁止形	kak-ina		
完了形 1	kak-ita		
完了形 2	kak-itjan		
未然形 (しよう)	kak-a		

活用表は3つの欄に分けてあり、それらの欄は動詞の相の違いを示す。左側の欄には相の無い活用がまとめられている。真ん中の欄には、動詞語幹に「進行」を表す接辞 -i が付いている動詞の活用がまとめられている。右側の欄には「結果」を表す接辞 -e: が付いている動詞の活用がまとめられている。これらの相の違いは、それぞれ共通語の「-ている」と「-てある」と訳されることが多いが、文法的かつ意味的な振る舞いは結構違う。結果接辞 -e: は得に興味深い存在である。この形は日本語共通語の「てある」形と違って、自動詞にも他動詞にも付き、過去に起こった出来事による「結果」の状態

を指す。

表 4 における活用形の中には接辞 $-n$ の有無の違いを示すものがあり、これらは古代日本語で知られている「係り結び」と似た現象を示す。焦点助辞 du が現れる文には、基本的に $-n$ で終わる動詞は現れない。焦点助辞 du は古代日本語の係助詞「ぞ」と歴史的な関係があるように思われるが、宮良方言は係り結びの研究のために大切な言葉であろう。

2. 4 宮良方言の語彙の特徴

宮良方言は琉球諸語の他の方言と同様、古代日本語の様々な語彙が残っている。1 つの例として、「奥さん」のことを $tuzi$ と言い、古代日本語の「刀自」に相当する。これと同時に、本土の日本語にも古代日本語にも全く見られない独特な語彙もたくさん存在する。例えば、海のことを $tumo:ru$ と言い、水泳のことを $onda:$ という。このような語彙に関する研究はほとんどされていないと思われるが、古い語彙が母語話者の間でも忘れつつあるのでそのための研究は緊急的である。

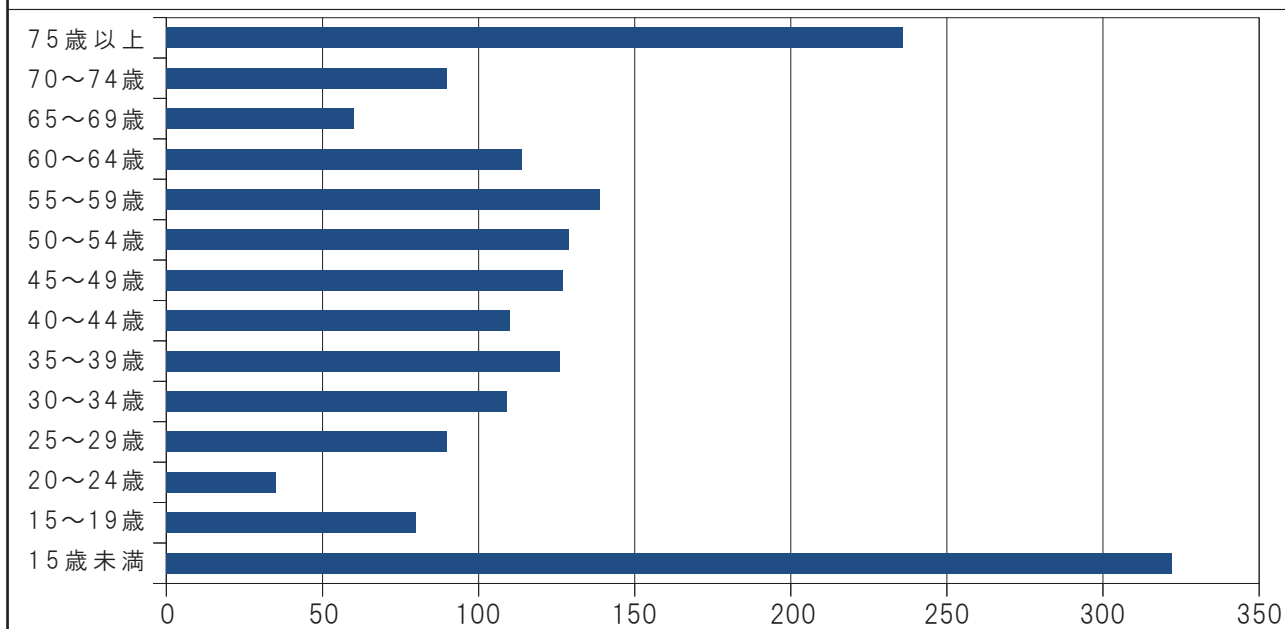
3 人口構成からみた宮良方言

石垣市役所が管理している「行政区別人口及び世帯」（12 月 31 日現在）によれば、字宮良の人口は 1789 人（男性 871 人、女性 918 人）であり、世帯数は 777 世帯である。これより細かいデータ（年齢別の人口や家族類型別の世帯数等）は平成 22 年に行われた国勢調査のデータがあり、以下のデータはすべてその調査によるものである。²

表 5 は 2010 年の宮良の年齢別の人口を示したものである。

2 人口構成のデータは平成 22 年（調査日 2010 年 10 月 1 日）の総務省統計局による国勢調査に基づき人口統計ラボのウェブサイト <http://toukei-labo.com> で公開されているデータに基いている。

表 5: 宮良の年齢別人口



この年齢別人口構成から現在の宮良方言話者を推定する。現在（2014年）のほとんどの宮良方言の母語話者が50歳以上である。調査当時（2010年）の宮良方言の母語話者のほとんどが45歳以上であったと考えられる。しかし、宮良に住んでいる50歳以上の全員が方言母語話者であるわけではない。現在の70歳以上がほとんど宮良方言が話せるのに対し、40歳以下はほとんど使えないという「話せる世代」と「話せない世代」とに2つに分けることができるが、その間にある40代から60代の世代は少し判定しにくいところがある。確実な数はなんとも言えないが、コミュニティの話者の内省によると40代後半は約5割が宮良方言を話すことができ、50代は約8割、60代はほとんど全員が話せる。その割合はもちろん移住者を除いた宮良で生まれ育った住民のことに限定する。移住者が多いため、人口から直接にこの割合に基づいて話者数を推定するのが難しい。

以上のことを考慮し、調査当時（2010年）の70歳以上をすべて「母語話者」と判定し、50歳から69歳までの半分を母語話者と判定すると、2010年当時の宮良方言の母語話者数は以下のような値になる：

70歳以上の話者：326人 + 50～69歳の話者：221 = およそ500人

しかし、以上の計算の結果は確実なものではなく、多すぎる可能性がある。移住者の割合がわからない限りこれ以上の正確な値は計りにくい。また、宮良から他地域に移住した宮良方言話者もいる。例えば、沖縄本島には宮良出身の年寄りが参加している郷友会があり、著者の知り合いの中でも沖縄本島に

暮らしながら宮良方言を日常的に使っている者は数名いる。世代に伴う言葉の変化（共通日本語や他地域語の影響も含む）もあるため、現在の 80 歳以上の世代と 60 歳以下の世代との間には言葉が少しずつ変わってきている可能性が高い。また、日常的に使っている人でも、共通日本語の語彙などを借りることが多く、昔ながらの単語が忘れられつつあることも指摘される。以上の事実を考慮して、宮良方言の話者を「500 人前後」だと推測する。少なくとも数百人はいるだろうし、多くとも 1000 人には及ばないという範囲であろう。

以上のデータから、子・親・祖父母の三世代の中で宮良方言が話せるのは、ほとんど祖父母の世代であることがわかる。世帯の家族類型別一般世帯数では、親族世帯の 479 世帯の中の 401 世帯が核家族世帯であり、核家族以外の親族世帯はわずか 78 世帯であった。このデータから推測できることは、宮良の子供のほとんどが核家族で育てられていることである。また、その核家族の両親の世代のほとんどは宮良方言が話せない世代であることも明らかである。現在の三世代（子・親・祖父母）のほとんどの家族は、下の二世代（子・親）は宮良方言を使わない（または使えない）世代であるため、親から子への宮良方言の継承はほとんどないと思われる。よって、祖父母の世代から子の世代への継承が大事であろうが、核家族化が原因で方言の継承が難しくなっていると考えられる。

4 共通語教育と方言教育

他の地域と同じく、これまでの学校教育は共通語だけで行われ、方言教育は一切行われていなかった。それどころか、他の地域と同じく一昔までは学校での方言使用は禁止されていた。この事情がやっと今年（2014 年）の 1 月から変わってきたようである。以下で紹介する宮良婦人会が作った「宝ぬ島言葉」という宮良方言の教科書が宮良の多くの家庭に配布された。しかし、教科書が配布されたものの、その内容を親が子供に教えられない状況であったため、家庭での学習ができなかったという。親の要望に応えるために宮良小学校が立ち上がり、平成 26 年 1 月から総合学習の一環として月に 2 回程度で 20 分の方言教室を始めた。教員のほとんどが宮良出身者ではなく、宮良方言の話者ではないので、方言教室の時間には婦人会の人が宮良方言を教えている。教材として、3 年次以上の学生は婦人会が作った本を使い、1・2 年次はさらに分かりやすい本を使っているという。小学校で方言教室が始められてからは、移住者を含むすべての学生の家庭に婦人会が作成した教科書が配布され、これまで宮良方言に接する機会がなかった子供とその家族にも宮良方言に接する機会を多く設けている。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

以上で紹介したように、学校における方言教育は始まってはいるものの、それ以外の保存活動はほとんどない。婦人会が若い世代（他地域からの嫁等）に宮良方言を教える教室を前に何回か行っていたらしいが、今はそういう活動はないという。

6 方言資料の作成

地域コミュニティによる方言資料として、宮良出身の石垣實佳氏が著作した「メーラムニ用語便覧」（2013 年出版）がある。この便覧には、およそ 5000 程度の用語が大和語（共通語）引きとメーラ

ムニ（宮良方言）引きの形で収録されている。ことわざも 279 ほど収録されている。その他に地域の様々な資料（年中行事や地図等）がたくさん収録されている。この本は現在一般書店から購入ができる。

以上にも書いたように、宮良婦人会が作成した「宝ぬ島言葉」という本もあるものの、この本は一般書店では購入できない。200 頁以上の結構大きな本であり、様々な単語・用語が数多く収録されていて、例文もたくさん載っている。その他に民謡（ジラバ）の歌詞、様々な場面で使われる話し言葉や対話の例文、桃太郎の宮良方言版等、幅広い内容である。本の内容の一部は二枚の CD で音声も入っている。

以上の本はいずれも仮名表記で書かれているものの、統一的な仮名書記法はまだ存在しないため、印刷物を見ただけでは発音が予測しにくい場合がある。婦人会の本には二枚の CD も付属しているため、内容の一部は直接に耳で確認できるものの、本のすべての内容が CD にも収録されているわけではない。母語話者であるかぎり、曖昧な仮名表記と日本語訳を見れば問題なく発音できるが、母語としない若い世代にとっては表記の不定着が問題である。

仮名表記で一番問題となるのは中舌母音を伴う音節であろう。中舌母音を伴う音節には pĩ、bĩ、kĩ、gĩ、sĩ、zĩ、tsĩ、rĩ があるが、表記法は様々であり、同じ書物でも統一的な表記ではなく、使い混んでいるように思われる書き方もある。八重山語の他の方言資料で使われている表記法も考慮すると、中舌母音には主に 4 つの表記法が現在使われているようである。パ行の pĩ を例にすれば、その表記が「ぷい」、「ぴう」、「ぴい」、「ぷう」となる。この 4 つの表記法は以下の表でまとめた。

表 6: 中舌母音の主な表記法

	パ行	バ行	カ行	ガ行	サ行	ザ行	タ行	ラ行
	pĩ	bĩ	kĩ	gĩ	sĩ	zĩ	tsĩ	rĩ
表記法 1	プイ	ブイ	クイ	グイ	スイ	ズイ	ツイ	ルイ
表記法 2	ピウ	ビウ	キウ	ギウ	シウ	ジウ	チウ	リウ
表記法 3	ピイ	ビイ	キイ	ギイ	シイ	ジイ	チイ	リイ
表記法 4	ブウ	ブウ	クウ	グウ	スウ	ズウ	ツウ	ルウ

表記法 1 は、各行の -u で終わる字に小さい「イ」を書くルールでできている。このような表記は他の方言の資料でもよく観察され、民謡で使われる工工四という楽譜でもよくみられる。表記法 2 は、宮城信勇氏の「石垣方言辞典」で使われている表記で、各行の -i で終わる字に小さい「ウ」を書くルールでできている。石垣方言辞典の普及とともに、この表記法が「正しい」という考え方を持っている人はいるらしいが、話者の意見ではこの表記法は読みづらいという不満もある。表記 3 は -i で終わる字に小さい「イ」を書き、表記 4 は -u で終わる字に小さい「ウ」を書くルールでできている。

7 危機の度合いの判定

危機の度合いの総合判定は、「危機」だと判定する。

判定の理由

(1) 義務教育を受けている子供を「子」だと考えたときに、そのほとんどの親は使用できない、もしくはある程度使用ができて子供に対して使わないという事情がある。しかし、他の八重山の地域と比べると使用場面も多く、著者の体験では一人の中学校の子供に対し40代後半の父親が子供に対して使っている場面を観察したことがあって、その子も自分から宮良方言での自己紹介等をする場面を見たことがあるため、子の世代に伝承が「全く」ないというわけではないようである。が、その伝承は極めて少なく、完全に母語として宮良方言を習得している子供はいないようである。

(2) 宮良出身の50歳以上の人のほとんどが宮良方言の話者であると判定する。年齢別人口には移住者も含むため、話者の人数は推定しにくい。2010年に行われた国勢調査の人口データに基づいて、70歳以上の住民をすべて「話者」と判定し、50歳から69歳までの住民の半分を「話者」と判定すると、話者数は以下のようとなる：

70歳以上の話者：326人 + 50～69歳の話者：221 = およそ547人

(3) 若い世代と他地域からの移住者の数を考慮し、「使用している者は少数派である」(2)とした。しかし、その割合は石垣の他集落と比べたらまだ高いことは明らかである。

(4) 宮良出身者の家庭では広く使われているとは思われるものの、使用者のほとんどが50歳以上であるため、家庭の中でも若い世代との会話はほとんどすべて共通語で行われているようである。しかし、石垣の他の方言と比べると、使われている場面が多いことは明らかである。日常会話の他に、様々な伝統行事でも使われている。これら「形式的」な使い方の記録は日常会話とともに宮良婦人会が作っている本に書いてある。

(5) 日常会話と伝統行事以外の場面では宮良方言の使用場面はほとんどないらしい。平成26年から始まった小学校における方言教育はその一つの新しい場面となるが、それ以外の教育やメディアにおける使用はほとんどない。

(6) 2014年1月から小学校で使い始めた婦人会が作成した200頁以上の教科書の他、用語便覧が存在する。が、どちらも仮名表記で書いてあり、中舌母音等宮良方言における独特な音声の表記法はまだ不定着である。また、音声・録画資料は婦人会の教科書の付属CDや民謡の録音以外はほとんど存在しない。

(7) 学校教育が支配的言語（現代日本語共通語）で行われるのが当たり前のようになってきている。昔のような「方言禁止」はないものの、宮良方言を話せる学生は今の時代にはいないから、その「必要性」もなくなっただけであろう。2014年からは総合学種で方言教室を始めたが、時間が非常に限られているため、その教室だけでは子供が方言の話者になることは想像しにくい。

(8) 著者の知っている宮良方言話者の多くは自らの言葉にプライドを持ち、伝統行事や民謡等と同じく村の不可欠な文化の重要な存在である認識はあると思われる。最近の小学校における方言教室からもわかるように、ある程度次の世代への伝承についても考えている人はいるものの、多くの家庭では子の世代への伝承は一切行われていないようである。

(9) コミュニティにおける資料には用語便覧と教科書はある。音声・録画の資料はほとんどない（もしくはあっても公開されていない）。伊豆山敦子による文法書（2002）以外に様々な学者向けの論文はあるものの、十分な総合的な記述がまだされていない。また、今までの学者による資料は言語学の知識があることが前提となっているものであり、その知識がない人には使いづらいと思われる。

表 宮良方言の危機の度合いの判定

	宮良方言
(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	2
(2) 母語話者数	数百人
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	2
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	2～3
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	1
(6) 教育に利用される言語資料がどの程度あるか	1
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	2
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	2
(9) 言語記述の質と量	2
平均	1.8

引用文献

石垣實佳（2013）『メーラムニ用語便覧』南山舎

宮良婦人会（2012）『宝ぬ島言葉』宮良婦人会

宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』沖縄タイムス社

伊豆山敦子（2002）「琉球・八重山（石垣宮良）方言の文法」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究（1）』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-004

沖縄県黒島方言

沖縄県黒島方言

荻野 千砂子

1 黒島の概要

八重山諸島の中心は石垣島である。八重山郡竹富町は石垣島から南西方向に大小 16 の島からなる（有人島 9、無人島 7）。黒島は竹富町の島の一つで、石垣島から南南西に約 17 km、東経約 124 度、北緯約 24 度の位置にある。石垣港からは高速船で片道 30 分ほどで着く。一日に 8～9 便出しており、比較的便利な環境にある。黒島の面積¹は 10.02 km²、島の形はハート型をしており、地形としては平坦な島である。黒島には主に 5 つの集落があり、東筋（あがりすじ）、宮里（みやざと）、仲本（なかもと）、保里（ほり）、伊古（いこ）と呼ばれている。島内の中央に、黒島小中学校と黒島保育所があり、東筋集落に、郵便局と医師常駐の診療所がある。黒島の人口は 209 名であり²、集落ごとの人数は、東筋 100 名、宮里 14 名、仲本 38 名、保里 29 名、伊古 12 名となっている（2014 年 2 月現在）³。

黒島はサンゴが隆起して出来たとされる地形のため、岩が多く表土が薄い。川がなく、土壌の保水能力も弱いいため、稲作に適していない。井戸水には塩分が混ざるので、1975（昭和 50）年に西表からの海底送水が行われるようになるまで、人々は雨水をためて生活していた。水は貴重で、常に水に苦勞をしていたという。かつては、農業生産としてサトウキビ、甘藷、タマネギなどの栽培が行われたが、現在の主要産業は畜産である。黒島全体が、牧草に覆われており、牛の放牧が行われている。島内で二ヶ月に一度セリが行われ、石垣市や他県に出荷されている。

図 1 八重山諸島の黒島の位置

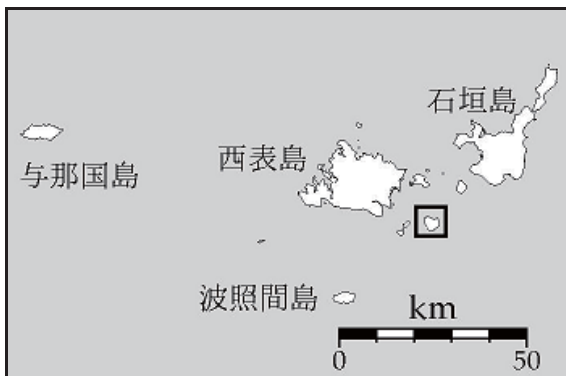
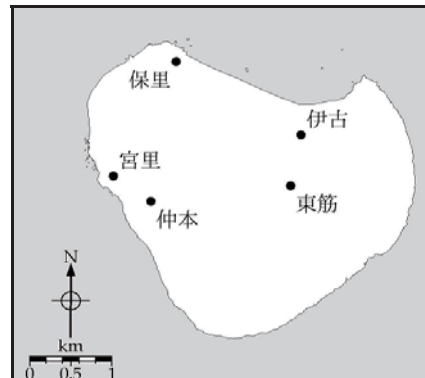


図 2 黒島の集落の位置⁴



¹ 国土地理院 HP より

² 竹富町役場からの提供資料、竹富町地区別人口動態表（平成 25 年 11 月末）より

³ 黒島公民館長集計より

⁴ 地図はトマ・ペラール氏の作成による

2 黒島方言の概要

黒島の5つの集落、東筋、宮里、仲本、保里、伊古のうち、伊古は元々糸満からの漁業関係者の居住地で、黒島方言と沖縄の糸満の言葉が混在しているとされる。また、宮里には、現在黒島出身者は住んでいない。よって、現在、黒島方言話者は、東筋、仲本、保里に居住していると言える。黒島は平坦な土地で、最も遠い集落間でも2km程度であり、徒歩での移動が十分可能であるが、話者の話では、それぞれの集落ごとに少しずつ方言が異なるという。その相違に関して未だ明確な記述はない。今回、保里集落を重点的に調べたことで、従来の東筋中心の報告と比較することができ、両者の相違点が見えてきた。活用や語彙等に関して、保里・宮里・仲本の集落間では類似点が多く、東筋とは異なる場合があることが分かってきた。

黒島方言に関しては、本格的な言語研究が進んでおらず先行論文が乏しい。特に文法に関する論文はほとんどない。今後明らかにすべき課題が山積している状況である。

2. 1 黒島方言の位置

黒島方言は、南琉球語の八重山諸方言の一つといわれる。しかし、石垣の中心部の四箇字方言とは、かなり異なる。石垣方言話者によると、黒島方言は聞いても分からないという。また、黒島方言話者の直感によると、石垣方言よりも多良間方言や宮古方言に近い感じがするという。今後、地理的に近い石垣方言だけでなく、多良間方言や宮古方言との比較研究も必要になると考える。

2. 2 黒島方言の音声・音韻の特徴

(1) 黒島方言の音素

黒島の東筋・保里方言の音素目録は以下のとおりである。15の子音、5つの母音、2つの半母音を認める。なお、長母音は同じ母音の連続と見なす。

表1 東筋・保里方言の子音

		両唇	唇歯	歯茎	軟口蓋	声門
破裂音	無声	p		t	k	
	有声	b		d	g	
破擦音	無声			c		
摩擦音	無声		f	s		h
	有声		v	z		
はじき音				r		
鼻音		m		n		

(その他)

- ・合拗音/kw/が、少数例見られる。
- ・破擦音/c/は、音声的には[ts]~[tʃ]で実現する。
子音の主要な異音は次の通りである。
- ・/s/は、/i/の前では[ʃ~ç]で実現する。
- ・/h/は、/i/の前では[ç]で実現する。
- ・/f/は、/u/の前では両唇摩擦音の[ɸ]とたびたび交替する。
- ・/z/は、語頭では[ɗ~ɗz]で実現することが多いが、語頭かつ/i/の前であれば[ɗz~ɗ]で実現する。
- ・/n/は、母音の間では[n]、軟口蓋子音の前では[ŋ]、両唇子音の前では[m]で実現する。なお、末尾位置では[n~ŋ]であることが多い。
- ・/r/は、はじき音[r]で実現することが多いが、音節末に立った場合にふるえ音[r̥]で実現することもある。

次に母音に関して述べる。短母音/a/は、前寄りの[æ~a]で実現する。これに対し、長母音/aa/は、奥寄りの[a:]で実現することがある。この長母音/aa/の奥寄りの異音を持つ話者は比較的年配の方である。

表2 東筋・保里方言の母音

	前舌	中舌	奥舌
狭	i		u
半狭	e		o
広		a	

半母音：j、w

ここで東筋・保里方言と明記する理由は、東筋や保里では音声として[f]を多用するが、仲本集落出身者は[f]ではなく[ɸ]を多用するためである。とはいえ、仲本集落の調査協力者が60代であり、方言話者としては若手であるためかもしれない。確定はできないが、仲本集落や宮里集落では、音素を[f]ではなく[ɸ]で立てる必要があるかもしれない。

(2) 黒島方言の音韻の特徴

音韻の特徴に関して、内間直仁（2004）を参考にしながら以下にまとめる⁵。黒島方言で語頭が/ha/になるのは、本土方言において、語頭が/ka/由来の語と、/a/由来の語である。ただし、すべての/a/由来の語が/ha/にはなるわけではない。また、語中の/ka/が/ha/になることもあるが、語頭の場合ほど著しくはない。/ka/のままのものもある。

/hami/（亀）、/baharun/（分かる）、/hakirun/（開ける）

⁵内間直仁（2004）「沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に—」『平成14・15年度 科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書』

/sakasiki/ (杯・保里と仲本) 〈東筋は/saasiki/となり/k/が落ちる〉、/aka/ (赤)
語頭で/ka/を持つのは、比較的新しい語ではないかと考える。

/kacu izu/ (鱧)、/kago/ (駕籠)、/kasutera/ (カステラ・保里) 〈東筋は/kyuuranku/〉

語頭が/hu/になるのは、本土方言で語頭が/ku/由来の語と/hu/由来の語と/u/由来の語である。音声的には[f]~[ϕ]で実現する。

/hubi/ (首)、/hun/ (釘)、/hun/ (来る)、/huni/ (船)、/hudi/ (筆)、/hukur/ (袋)、
/hukinaa/ (沖縄)、/hukirun/ (起きる)

また、本土方言の/k/が/v/に対応するものもある。

/viirun/ (くれる・あげる)、/yooffo/ (黒)

ところで、/ka/と/ku/はそれぞれ/ha/と/hu/になるが、/ki/の場合、子音変化を起こさない。本土方言の/h/由来の語は/p/で実現するため(/hu/以外)、/k/が/h/になっても、/h/由来の語との同音衝突は生じない。

/paa/ (歯)、/pii/ (火)、/peeri/ (日照り)、/puu/ (穂)

2. 3 黒島方言の文法の特徴

文法的な特徴として、石垣方言との違いを(1)(2)に述べる。また、保里方言の動詞活用を(3)で述べる。また、集落間の動詞活用の相違について(4)に述べる。

(1) 文末の-n

石垣方言では、①のように文末に-n が出現する。しかし、否定や過去の文では-n が出現しない。例文は、接辞境界を-で表し、接語境界を=で表している。

- ① banaa tookyoo=kai pur-un.
私=主題 東京=向格 行く-非過去
私は東京へ行く。(石垣)

石垣の宮良方言では、-n が一人称のモダリティと関係するのではないかと考えられるが、石垣方言と同じで否定や過去の文では-n が出現しない。ところが黒島方言では、②や③のように否定や過去の文でも-n が出現する。この-n の素性について、未だ明らかにはできていない。今後、石垣方言、宮良方言、黒島方言など複数の方言を比較して、八重山諸方言に見られる文末の-n が、活用語尾(接辞)なのか接語なのか検討をする必要がある。

- ② banaa tookyoo=ho par-anun.
私=主題 東京=向格 行く-否定.n
私は東京へ行かない。(保里)

- ③ psusiki mai=na tub-utan=doo.
一ヶ月 前=与格 飛ぶ-過去.n=文末詞
(鳥が)一ヶ月前に飛んだよ。(保里)

(2) 条件表現

本土方言の古語の条件表現では、「未然形+ば」が仮定条件を表し、「已然形+ば」が原因理由を表す。黒島方言では「動詞語幹+aba」が仮定条件を表し、「動詞語幹+iba」が理由を表す。黒島方言に見られる条件表現は、古語と類似した用法を持つと言える。

- ④ ami=nu ya-aba bi-i waar-i=ba.
 雨=主格 降る-仮定 植える-連用 尊敬-命令=文末詞
 雨が降ったら、(いもを) 植えなさい。(保里)
- ⑤ manuma=hara panas-iba kunzoo=ya iz-i waan-na.
 今=奪格 話す-理由 怒り=主題 言う-連用 尊敬-禁止
 今から話すから、怒らないで。(保里)

ただし仮定を表す用法は、-aba 以外にも -ukka があり、どのような違いがあるかは未詳である。原因理由を表す用法も、-iba 以外に -yunti や -turii や -taraa 等複数あり、このうち -taraa は、主文が過去のときしか使用できないというテンス上の制約があることは分かったが、それ以外にどのような用法の区別があるのか分かっていない。

(3) 動詞の活用

動詞の活用に関して山口栄臣(2004)に報告がある。変格活用動詞までいれて八類の動詞の活用に分けているが、保里方言での調査の結果、「来る」「する」の変格活用を除けば、正格活用として大きく二つのクラスに分かれそうである。一つは、否定形が -anun で終わる強変化動詞(本土方言の五段動詞に相当する)で、もう一つは否定形が -unun で終わる弱変化動詞(本土方言の一段動詞に相当する)である。本土方言の子音語幹動詞にほぼ相当する強変化動詞には、さらに「書く」(hak-)や「待つ」(mat-)などの子音語幹動詞 α グループと、「笑う」(bara-)や「漕ぐ」(ku-)などの母音語幹動詞 β グループに下位分類する。表3にいくつかの例を挙げる。s 語幹は二種類立てる。否定形・志向形・命令形・過去形の語幹末子音が異なるからである。r 語幹も過去形が異なるので二種類に分ける。/von/ (食べる)の語幹は、/va/と考えられ、辞書形は、/va-un/の/a-u/連母音が/o-o/となり、-n が付く場合に音声短縮が生じて/von/となったと考えられる。-n が付かない場合は、/voo/ (食べる)が出現する。

また、弱変化動詞では、山口栄臣(2004)では「起きる」の類しか挙げていないが、活用の種類は他にもあるため、これらを表4にまとめる。弱変化動詞では、語幹を2つ立てることにする。子音・もしくは母音で終わる語幹と r で終わる語幹である。子音語幹で終わる動詞を1(c/ir)の類とする。これは、子音で終わる語幹と、r で終わる語幹(ir)がある、という意味である。2(u/uir)は母音の(u)で終わる語幹と(uir)で終わる語幹の二つを持つことを意味する。

志向形は、/fukura/ (起きよう)のように/ra/がつく。これは、/fukur-a/のように、/fukur/を語幹とする ur 語幹を考えて/fukur-a/と形態素分析が出来る可能性もあるが、今回は/ra/が文末詞で/fuk/を語幹とする/fuk-u=ra/と考えることにした。理由は、「植える」類の語

幹との整合性である。/byuura/（植えよう）では新たに/byuur/という語幹を立てる必要が生じることになる。すると「植える」類は、/bi/と/biir/と/byuur/という語幹内で/bi/と/byu/が交替する。それよりも、語幹/bi/に形態素/u/がついて、/bi-u/が音学的に/byu-u/となり、これに文末詞/ra/がついたと考える方が、語幹の統一性が図れると考える。

表3 保里方言の強変化動詞の活用（一部）

分類	動詞	タイプ	語幹	辞書形 -un	否定形 -anun	志向形 -a	命令形 -i	過去 -utan
α (c)	書く	(k)	hak	hak-un	hak-anun	hak-a	hak-i	huk-utta
	殺す	(s1)	kuras	kuras-un	kurah-anun	kurah-a	kuraha-i	kuras-itan
	干す	(s2)	pus	pus-un	pus-anun	pus-a	pus-i	pus-utan
	言う	(z)	iz	iz-un	iz-anun	iza-a	izi-i	iz-utan
	立つ	(t)	tat	tat-un	tat-anun	tat-a	tat-i	tat-utan tats-utan
	硬くなる	(r1)	koor	koor-un	koor-anun	koor-a	koor-i	koor-utan
	見る	(r2)	mir	mir-un	mir-anun	mir-a	mir-i	mit-tan
β (v)	笑う	(a1)	bara	bara-un	bar-anun	bara-a	bara-i	bara-utan
	食う	(a2)	va	vo-n/voo	va-anun	va-a	va-i	vo-otan
	泳ぐ	(u)	u	u-n/uu	o-onun	o-o	u-i	u-utan

表4 保里方言の弱変化動詞の活用

分類	動詞	タイプ	語幹	辞書形 -un	否定形 -unun	志向形 -u	命令形 -i	過去 -itan
α (c)	起きる	1(c/ir)	fuk/fukir	fukir-un	fuk-unun	fuk-u	fukir-i	fuk-itan
β (v)	燃える	2(u/uir)	mu/muir	muir-un	mu-unun/ mu-un	*	muir-i	mu-itan
	植える	3(i/iir)	bi/biir	biir-un/bi-n	byu-unun	byu-u	biir-i	bi-itan
	覚える	4(u/uir)	ubu/ubuir	ubuir-un	ubo-onun	ub-u	ubuir-i	ubu-itan
	恐れる	5(a/air)	ba/bair	bair-un	ba-unun	ba-u	bair-i	ba-itan

(4) 集落による動詞の活用形の違い

黒島集落間で、動詞の活用形が異なることは、これまで指摘されていなかった。しかし、語幹が母音で終わる動詞に関しては、集落間で音声異なる現象が見られる。語幹が母音で終わる動詞は、強変化動詞の中の語幹末が/-a/で終わる/bara/（笑う）のような動詞と、/u/（泳ぐ）のような語幹末が/-u/で終わる動詞がある。また、弱変化動詞では、タイプ 2～5 が母音で終わる語幹を持つ。これらの中で集落間の相違をまとめた例が表5と表6である。東筋と保里とで異なる形式が出てきたので、宮里方言も気になり、急遽、宮里方言話者を石垣市在住の黒島郷友会から探し調査を行った。宮里集落は黒島の中で「親村」と

呼ばれており、かつては行政の中心地であった。予想した通り、東筋と保里とは若干異なる活用形が宮里方言で現れた。今後、集落間の相違点にも注意して黒島方言の記述を行う必要がある。

表5 集落間の動詞活用の相違（1）

	洗うな	洗ったら	洗った
東筋	アローナ	アローッカー	アロータン
保里	アラウンナ	アラウッカー	アラウタン
宮里	アラウンナ	アラウッカー	アラッタン

表6 集落間の動詞活用の相違（2）

	泳がない	泳ごう	泳いだ
東筋	ワーヌン	ワー	ウータン
保里	オーヌン	オー	ウータン
宮里	オーヌン	オー	ウイタン

2. 4 黒島方言の語彙の特徴

黒島方言と石垣方言とは語彙の面で違いが見られる。人称代名詞の一人称「私」は石垣方言と同じだが、二人称「あなた」は異なっている。また、三人称代名詞「彼・彼女」は、指示代名詞の遠称を代用するが、黒島では、/ka/は/ha/に変わるため、音声としては/hari/となる。他にも基本的な単語でも異なる。「言葉」は、石垣方言では/muni/だが、黒島方言では/munui/となる（表7）。

表7 石垣方言と黒島方言の名詞の相違

	私	あなた	彼・彼女	言葉
石垣	バー	ワー	カリ（アリ）	ムニ
黒島（東筋）	バー	ウヴァ	ハリ	ムヌイ

また、黒島の集落ごとに異なる語彙もある。東筋に対して保里・宮里・仲本の三集落が似た形式を持つ語が多い。ただし、保里・宮里・仲本でも表8のように全く同じではない。動詞の活用と同様、集落間の語彙の違いにも、今後留意する必要がある。

表8 集落間の名詞の相違

	家の周囲の石積み	畑の境界の石積み	門の所の目隠し石	ご飯
東筋	アザ	マシ	マヤーキー/マヤハキ	ンバン
保里	グスク	アザ	ナハグスク	ンボン
仲本・宮里	グスク	アザ	ナハグスク/マイグスク	ンボン

3 人口構成からみた黒島方言

2013年現在、黒島の人口は209名である（平成25年11月末）⁶。年齢別人口一覧は図3の通りである。図3を見ると30才までの人口が少ないことがわかる。島内に高等学校がなく、進学を希望する場合は、石垣島や石垣島以外の高校に行くことになる。そのため、高校生以上になると島を離れることが多い。

この中で、黒島方言を話せるのは現在70歳～75歳以上の人である（戦後生まれは方言が話せないというのが話者の共通認識である）。70歳以上の話者人口は約40人である。70歳以上の人同士が会えば、お互いに黒島方言で話をするが、相手が60代や50代になると、共通語で話しかけている。石垣市内に黒島出身者の郷友会があるので、実際の話者人口は40名以上いるわけだが、それでも決して多いとは言えない状況である。

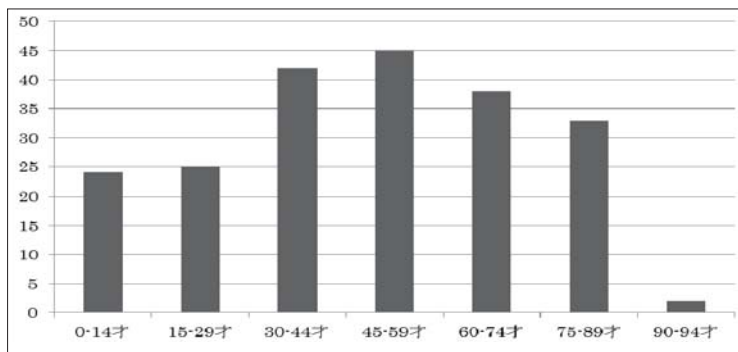


図3 黒島の年齢別人口構成

過去にさかのぼって黒島の人口動態を調べると、もともと黒島は人口が多く、江戸時代の1857年には黒島の人口は1500人を越えていたという。

表9 黒島の人口動態（1）

人口動態	1899年 (明治32) ⁷	1914年 (大正3) ⁸	1929年 (昭和4) ⁹	1945年 (昭和20) ¹⁰	1955年 (昭和30) ¹¹	1964年 (昭和39) ¹²
黒島	706名	916名	1251名	1584名	1242名	770名

このため、石垣の名蔵村へ200名、梶海村へ50人、西表の上原村に150人、合計400人の

⁶ 竹富町役場の竹富町地区別人口動態表と年齢別人口一覧表より（平成25年11月末）

⁷ 『沖縄県統計書』より（明治三十四年版に、明治三十年から三十四年までの黒島の人口がまとめて掲載されている）

⁸ 『沖縄県統計書』大正三年より

⁹ 『先島朝日新聞』昭和五年二月二十八日より 「八重山郡現在戸数表（昭和四年十二月三十一日現在）」 再掲『竹富町史』第十一巻 資料編 新聞集成Ⅱ 平成七年

¹⁰ 『竹富町史』第十二巻 資料編戦争体験記録より 平成八年

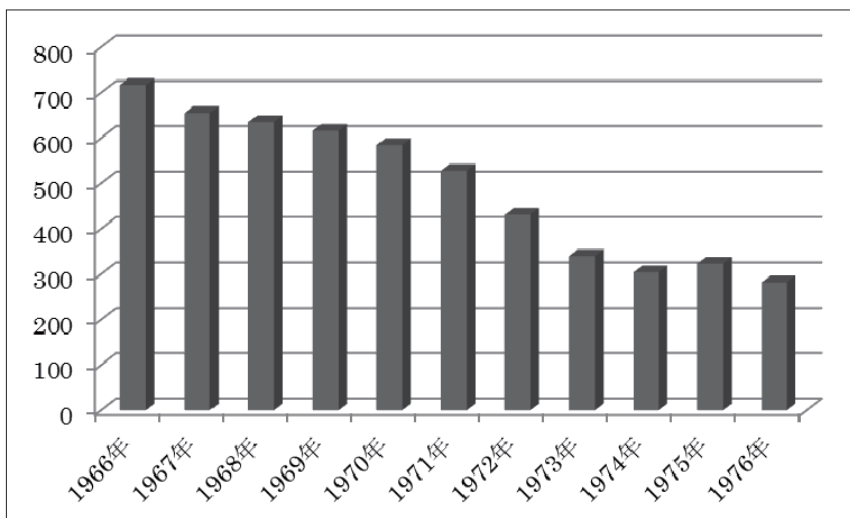
¹¹ 『八重山タイムス』昭和三十年六月二十八日より 再掲『竹富町史』第十一巻 資料編 新聞集成Ⅳ 平成十三年

¹² 竹富町役場 HP 統計情報より

強制移住が行われたとされる¹³。表9を見ると、明治半ばから昭和30年までは人口が増加していることが分かる。しかし、昭和30年から人口流出が始まり、次第に過疎化が進行した。

これに追い打ちをかけたのが1971（昭和46）年の大干ばつである。黒島では7ヶ月の間、雨が降らなかった。さらに同じ年の台風でも壊滅的な被害を受け、島民は次々に島外へ移り住み、過疎化が一気に進んだ。1966（昭和41）年から1976（昭和51）年までの人口を図4で示す。1971（昭和46）年から1973（昭和48）年にかけて、人口が著しく減少していることが分かる。このような極端な人口減少が、方言の衰退にもつながったと考えられる。

図4 黒島の人口動態（2）



4 共通語教育と方言教育

70歳以上の黒島方言話者の全員が共通語とのバイリンガルであり、自分たちと同年代の人とは黒島方言で話しているが、60代以下の人とは共通語で話している。話者の話によると、昭和30年ごろまで方言札による共通語教育が行われていたという。家庭でも方言を話さなくなり、そのため、戦後生まれの人は方言が話せないという。

現在、竹富町立黒島小中学校には、小学生6名、中学生8名の合計14名が在籍している。小中学校に黒島出身の教員はいないため、教員が黒島方言を教えることはできない。児童・生徒も学校では共通語を話している。これまで老人会に協力を求めて単発的に方言教室を開いたことはあったが、方言継承のための持続的な取り組みは行われてこなかった。小中学校の児童・生徒数もここ4、5年は15名程度であり、島外出身者の児童・生徒もいる。教員の数は少なく、学校現場で方言教育を行うには負担が重すぎる状況である。

¹³ 喜舎場永珣（1977）『八重山民俗誌』 上巻・民俗篇 沖縄タイムス社

その中で、2013（平成 25 年）度は、文部科学省・厚生労働省連携支援の「放課後子ども教室」の予算を運用し、小学校で方言と三線の教室を開くこととなった。当初は、小学校 1 年生のみしか時間が確保できず、1 年生 2 名を対象として秋から 10 回程度を目安として行われる予定であった。しかし、校長や教員の熱意によって、2013 年 10 月から 2014 年 1 月にかけて「放課後子ども教室」だけではなく、総合学習の時間も使用し、小学校全体で方言劇の取り組みが行われた。教員が『野底マーペー』の話を台本にし、それを老人会の協力により黒島方言に翻訳し、方言劇の台本を完成させた。劇終了後には、児童が黒島方言で自己紹介をするため、黒島方言でのスピーチの練習も行ったという。練習の成果は、1 月の学習発表会で披露された。校長は、今後もこのような取り組みを継続したいと話している。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

黒島は、芸能が盛んな島である。豊年祭や結願祭で舞踊が重視され、熱心に練習が行われる。しかし、舞踊の中で自分たちが謡うことはないので、芸能が盛んなことが方言を話す契機にはなっていない。現在、方言での挨拶が必要なのは、豊年祭で「さーしきとらし（さかしきとらし）」の役を担う人だけである。黒島のパーライの勝負（ハーリー競争）は他の地域にはないウーニ（一）と呼ばれる走者がおり、走者が砂浜から走って船に乗り込んでから船漕ぎの競争が始まる。ウーニ（一）に、酒と塩を授け、祝辞を述べるのが「さーしきとらし」の役目である。この場面以外に、方言が必要となる場面はない。「さーしきとらし」は少人数でよいとため、特に方言保存活動が地域としても必要となるわけではない。よって、地域コミュニティにおいて、方言保存活動の必然性は乏しく、散発的な取り組みがあるぐらいである。

現在も個別に行っている取り組みはある。黒島保育所ではデイケアのお年寄りとの交流会を年に 2 回行っているという。デイケア利用者の中に方言話者が何人もいる。2013 年は、方言話者から子供達に黒島の方言を伝えたいという提案が出され、童謡「大きな栗の木の下で」が黒島方言に翻訳された。11 月に、保育所にて黒島方言版「大きな栗の木の下で」の歌と手遊びが実演された。子ども達も一緒に楽しく遊んだという話である。次は方言でのかるたを作るという企画が持ち上がっているという。

6 方言資料の作成

2013 年度に黒島小学校で作られた『野底マーペー』の台本は、共通語と黒島方言の両方で本文が書かれている。しかし、このような資料は少ない。

黒島にて、最も黒島の文化を書き留めていると評価されているのが、幸地厚吉氏が著した『さふじま 黒島の民話・謡・諺集』である。漢字とひらがな・カタカナ交じり表記で、黒島の謡や子守歌や諺などを黒島方言で記している。しかし、民話や歴史は共通語のままである。

また民話採集の分野から、狩俣恵一・丸山顕徳編(2003)『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』が出されている。この中に黒島の民話も収録されているが、ほとんどが共通語で書かれており、方言と共通語が対訳で載っている話は一話のみである。

7 危機の度合いの判定

黒島方言の危機の度合いはかなり高いと考えられる。

判定の理由

- (1) 70代以上の人は、日常的な会話を黒島方言で行うが、60代の方は共通語での会話が多い。50代半ばから60代の方は、方言を聞けば分かるというが、40代ではほとんど聞き取れないという。
- (2) 黒島在住の黒島方言話者は70歳～75歳以上であり、約40名である。
- (3) 黒島方言話者は約40名程度であり、黒島の人口209名に対して約20%である。石垣市内の黒島郷友会には黒島方言話者がいるが、70代前半の方でも日常会話に不安があるという。黒島内と同じように、70歳～75歳以上の方しか話せないとなると、石垣市内に居住する黒島方言話者数も、それほど多くないのではないかと予測する。
- (4) 70代以上の話者同士は、日常会話を黒島方言で行っている。つまり、祖父母世代では方言での会話が保たれている。しかし、話す相手が60代以下になると、共通語に変える。祖父母世代から親世代へ話すとき、また親世代同士で話すときは共通語を使用している状況である。
- (5) 黒島方言が新たな生活の場で使用されることはない。黒島方言で書かれた新聞や黒島方言で話されるテレビやラジオ放送は存在しない。
- (6) 2013年度に黒島小中学校にて、新しく『野底マーペー』の台本が作られた。今後、このような資料が増えれば、教育現場で利用ができるのではないかと考える。現在のところ、黒島方言の辞書やテキストのようなものは存在していない。狩俣恵一・丸山顕徳氏採集の民話の中に、黒島話者が語った昔話が一話のみ黒島方言で掲載されている。上段に平仮名表記で黒島方言を書き、下段に共通語の訳を書いている。平仮名表記での黒島方言を見る限り、音韻・語彙・形態素等の面で厳密な言語記述にはなっていない。また、幸地厚吉氏が採集した諺など昔ながらの言い回しは、記録としては重要なものではあるが、子ども達への黒島方言教育という面からみると難しい本であると言える。
- (7) 政府として標準語励行が行われていたのは、昭和30年ぐらいまでである。その後、政府は標準語を勧めてはいないのだが、学校の教育現場において方言が禁止されてから、家庭で親が子供に方言を話さなくなった。その影響は未だに続いている。逆に黒島方言を保護する政策は施行されていないため、家庭においても公共の場においても共通語が主たる言語となっている。

- (8) 個別のインタビューの結果では、黒島方言が継承されることを望みつつも現実には厳しいと感じている人が多い。八重山諸方言においては石垣方言が中心となるため、石垣方言が強く、離島の黒島方言はマイノリティーの立場に置かれる。その結果「黒島方言がなくなるのは残念だが仕方がないこと」としてとらえている感がある。
- (9) 地域で作成された録画・録音資料として、芸能の録画やCDはあるが、方言研究としては利用されていない。幸地厚吉氏の著書では、民謡・歌・アユウ・諺・呪い等が豊富に記されており、文化史としての価値は高いが、方言資料としては、現在の黒島方言の実情をどこまで反映しているのかが不明であり使用が難しい。他に、語彙を集めた本・資料や文法記述の資料はない。

表 黒島方言の危機の度合いの判定

	黒島方言
(1) その言語がどの程度次の世代に伝承されているか	2
(2) 母語話者数	40名
(3) コミュニティー全体にしめる話者の割合	2
(4) どのような場面でその言語が使用されているか	2
(5) 伝統的な場面以外で新たにその言語が使用されている場面がどの程度あるか	0
(6) 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか	1
(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）	2～3
(8) コミュニティー内でのその言語に対する態度	1～2
(9) 言語記述の質と量	1～2
平均	1.38～1.75

引用文献

- 平山輝男(1967)「竹富町のアクセントー竹富・西表祖納・古見・黒島・新城・波照間・小浜・鳩間ー」『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 平山輝男(1967)「竹富町の音韻ー西表祖納・竹富・黒島・鳩間・小浜ー」『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 平山輝男(1967)「竹富町の文法ー竹富・西表祖納・黒島・波照間・小浜・鳩間ー」『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 宮良照子(1968)「黒島方言」『八重山文化 No.1』石垣中学校歴史クラブ
- 宮良當壯(1980)「八重山語彙」『宮良當壯全集』第8巻 第一書房
- 加治工真市(1983)「黒島の方言」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス社
- 幸地厚吉(1987)『さふじま 黒島の民謡・謡・諺集』（私家版）

- 狩俣恵一・丸山顕徳編(2003)『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』三弥井書店
- 野原三義(2001)「八重山竹富町黒島方言の助詞」『八重山、竹富町調査報告書』3 地域研究シリーズ No.29 沖縄国際大学南島文化研究所
- 内間直仁(2004)「沖縄県宮古・八重山方言の調査研究－宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に－」『平成 14・15 年度 科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書』
- 狩俣繁久(2010)「八重山黒島東筋方言と黒島仲本方言」『平成 19・20・21 年度科学研究費補助金(基盤研究 B)研究成果報告書 琉球八重山方言の言語地理学的な研究』(代表・高橋俊三)

第2部

危機的な状況にある言語

・方言の保存継承に関するインタビュー

しまくとぅばの復興に向けた取組みと課題

親川 志奈子

1. はじめに

琉球の島々で伝統的に話されてきたしまくとぅば¹は、琉球処分、方言札、沖縄戦、「復帰」など、時代の流れの中で、時に差別や矯正の対象となり、次世代への継承が阻まれ、言語シフトが起こった。しかしながら伝統文化や行事の中で使用されてきたしまくとぅばが消滅することに対する危機感から、しまくとぅばを再活性化させようと各地でさまざまな草の根の運動が展開されるようになった。2006年3月には、議員立法によりしまくとぅばの普及、継承をはかることを目的に「しまくとぅばの日沖縄県条例」が制定された(表1)。沖縄県議会の議員発動による条例制定は「復帰」後3件目であり、全会一致での可決となった。

しまくとぅばの日に関する条例

平成18年3月31日 条例第35号

しまくとぅばの日に関する条例をここに公布する。

しまくとぅばの日に関する条例

(趣旨)

第1条 県内各地域において世代を越えて受け継がれてきたしまくとぅばは、本県文化の基層であり、しまくとぅばを次世代へ継承していくことが重要であることにかんがみ、県民のしまくとぅばに対する関心と理解を深め、もってしまくとぅばの普及の促進を図るため、しまくとぅばの日を設ける。

(しまくとぅばの日)

第2条 しまくとぅばの日は、9月18日とする。

(事業)

第3条 県は、しまくとぅばの日の啓発に努めるとともに、その日を中心としてしまくとぅばの普及促進のための事業を行うものとする。

2 県は、市町村及び関係団体に対し、しまくとぅばの普及促進のための事業が行われるよう協力を求めるものとする。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

表1 しまくとぅばの日に関する条例

¹ 沖縄では「しま」とは、地理的な「島」に加えて集落・コミュニティを意味する。沖縄島周辺のしまくとぅばは「うちなーぐち」と呼ばれる。インタビューでは調査協力者の語彙をそのまま反映している。

しかし2009年には、ユネスコが世界危機言語地図に消滅の危機に瀕した言語として奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の6言語が危機言語レッドブックに記載されるまでに至っている。2013年、沖縄県はしまくとぅばを「沖縄文化の基層であり、いわば沖縄県民のアイデンティティの拠り所でもある」として10年間のしまくとぅば普及推進計画を打ち出した。

本研究では、しまくとぅばの復興に向けたさまざまな取り組みについてインタビュー調査(2013年12月～2014年2月実施)を行い、活動内容や活動の理念、活動の担い手や、直面している課題や目標についてまとめ、言語復興の現状について分析を行う。なお、インタビューは沖縄県文化協会主催のしまくとぅば交流会(2013年)参加団体と、しまくとぅば連絡協議会の参加団体の中からお協力いただいた沖縄島の10団体(個人、企業を含む)に対して行った。

2. インタビュー調査

しまくとぅばの復興に向けた取り組みを行っている団体として以下の10カ所の団体、企業を訪問してインタビューを行った。対象となった団体の基本情報は表2の通り。

	団体名	団体形態、所在地	調査協力者
1	沖縄県文化協会	任意団体、那覇市	宮里友三
2	NPO 沖縄県沖縄語普及協議会	NPO、宜野湾市	大城勇氣
3	NPO 法人うちなあぐち会	NPO、沖縄市	桑江常光、桑江テル子
4	じんぶん孝房	一般社団法人、那覇市	大谷高子
5	宜野湾市うちなあぐち会	任意団体、宜野湾市	與儀清子
6	ていーだぬふぁー童唄会	任意団体、うるま市	宮城葉子
7	沖縄ハンズオンNPO	NPO、沖縄市	石嶺美晴
8	くとうば・すりーじゃ☆にぬふぁぶし	任意団体、宜野湾市	金城有紀
9	REGION	株式会社、那覇市	屋宜宣寿
10	しまんちゅスクール	株式会社、宜野湾市	照屋みどり

表2 インタビュー調査対象団体の基本情報

インタビュー調査には半構造化インタビューを用いた。聞き取りのポイントとして以下の4点とした。インタビューはICレコーダーで記録し、全時間をテキストデータに起こした。次節にて上記調査結果を示していく。

- a) しまくとぅばの復興に向けた活動に取り組むきっかけとは何か。
- b) 活動の理念や活動内容について。
- c) 活動の担い手や対象者は誰か。
- d) 活動を通して見えてきた課題やこれからの活動について。

2.1 沖縄県文化協会の取り組み

沖縄県文化協会のしまくとぅば復興への取り組みについて宮里友三会長にインタビューを行った。沖縄県文化協会は1995年3月に設立、現在沖縄県内26の市町村の文化協会により構成されている(宮里氏

の会長就任は2013年)、主たる事業としてしまくとぅば語やびら大会がある。1996年にスタートした同事業は2014年には20回目を迎える。

沖縄県文化協会の大きな二つの柱として沖縄県文化功労の顕彰事業としてしまくとぅば語やびら大会があります。国頭から離島まで含めて多くの市町村の代表が集い、しまくとぅばのステージに集まって年に一度大会をやりましょうということで19年間毎年欠かさず開催しています。

2013年に開催された第19回しまくとぅば語やびら大会(読谷村文化センター鳳ホール)には、県内各地から34組49名が登壇し、それぞれのしまくとぅばによる発表が行われた。出場者の年齢は5歳から77歳と幅広く、地域に伝わる民話や戦争体験、わらび唄やなど多様なテーマで発表が行われ、詰めかけた観客のために日本語の対訳が舞台上に映し出すという工夫も行っていると言う。しまくとぅば語やびら大会を続けることの意義や直面している課題については、

経費の問題がある。県文化協会独自の予算では「しまくとぅば語やびら大会」開催経費を捻出することが難しい。各市町村の文化協会ではしまくとぅばだけを行っているわけではないので大会開催の費用を徴収するにも限界がある。会場費や音響機器、広報、などしまくとぅば語やびら大会だけに使える予算があればいい。

と語り、会場費などの基本的なイベント開催経費の問題は緊急に解決されるべき問題であるとした。また大会は多くのボランティアに支えられ開催されているとのことであった。各島々の代表者が登壇するにあたっては、舞台に字幕(日本語の対訳)投影させることで、しまくとぅばに馴染みがない世代への配慮や、地域間の言葉の違いを乗り越え会場が一体となり楽しむ工夫もされている。これからの展開や、次世代へしまくとぅばを継承することについての想いとして宮里氏は以下のように述べた。

沖縄県、行政の施策を具体的に下ろしていく時にタイアップして文化協会としてしまくとぅばを広めていくための運動を共にやって行きたい。しまくとぅば部未組織の協会には、これから部を誕生させていただきたい。そのことによってその地域のしまくとぅばが再認識され、その言葉の良さ、ウチナーンチュのアイデンティティとしてのチムグクルが認識される。郷土の言語に脈々と流れるあったかい血であるしまくとぅばが見直されて、文化協会の中にあってもより広がって行くことを希望します。そのことにより一言でも多くのしまくとぅばが子ども達の口から出るようになれば、これは幸いだなと思っています。それを側面から支えていくのが文化協会の役目だと思っている。しまくとぅばに対する愛着が持てるだろうし、そして私たちが本当の意味でのウチナーンチュとしての誇りに広がっていけば沖縄の古典芸能、芝居、琉球舞踊を鑑賞するにしても歌詞の意味が分かるからこそ、その素晴らしさを感じられる、そのためにもしまくとぅばは勉強ではなくお互いに使い合うことで自然と理解できるという世界になっていけばいいなと思っています。

各市町村が連携し民間の団体とも連携を計ろうと、沖縄県文化協会はしまくとうば語やびら大会の他に2012年よりしまくとうば交流会を開き、しまくとうばの普及に取り組む個人や団体を集め交流会も開催している。

2.2 NPO 沖縄県沖縄語普及協議会

NPO 沖縄県沖縄語普及協議会のしまくとうば復興への取り組みについては、大城勇氣理事にインタビューを行った。沖縄語普及協議会（前身は沖縄方言普及協議会、宮里朝光会長）は、沖縄語の普及を目的に2000年に発足し、現在はNPO法人である。年に4回全編沖縄語で書かれた「沖縄語新聞」を発行している。会員数は約300名。主な活動として、那覇市を中心に保育園や幼稚園、小学校、中学校、高校へのボランティア講師の派遣を行っている。保育園や幼稚園では、お遊戯会の際にわらべ歌の指導や、小中学校のクラブ活動でしまくとうばクラブへ講師として挨拶や自己紹介などを教えている。また、継続して講師派遣を行えるよう、沖縄語講師養成講座も開いている。2013年度は全16回の講座を開講。他にも繁多川公民間講座（16回）、那覇市金城老人憩いの家講座（16回）などを行い幅広い年齢層を対象に活動を行っている。また同協議会は、これまでに沖縄語初級編「はじめらなうちな一ぐち」と中級編「沖縄ぬ暮らしとう昔話」の二冊を発行し、講師派遣と教員養成講座の開設から、見えてきた教材開発という課題についても取り組んでいる。表記法については沖縄語普及協議会が制定した(2001)沖縄語の仮名表記法が採用されている。大城氏は、

沖縄語普及協議会はこれまでも継続的に講師派遣や講師養成講座、そして教材開発を行ってききましたが、他にもシンボルバッジの作成やコースターの作成など、遊び心を持って、「ふいるみらなしまくとうば」と視覚的に訴えるような活動も行っています。バッジをつけていると知らない方がしまくとうばで話しかけてきますし、しまくとうばのコースターで泡盛を飲めばしまくとうばでの会話も弾みますよ。

と語り、一般向けのしまくとうば講座の解説や保育園や学校現場に講師を派遣する事業の他にも、しまくとうばを話すきっかけ作りについて語った。また課題として、

しまくとうばを伝えたい、残したいと考え行動するのしまくとうばを話せる世代、つまり年配の方々为主となります、私は一番若い方です。そうするとほとんどの方がパソコンを使わず文書作成や教材作りが手作業になってしまいますし、文書の送信作業が煩雑になってしまうことがあります。本当は今うちにしまくとうばの音声をたくさん記録していくという取り組みも必要だと感じていますが、予算的にも人材的にも限界があります。また、メールやインターネットを駆使する若い人達とのツールの違いなどが出てきてしまいう点も表面化してきています。年配の世代を支えながら、若い人たちに興味を持ってもらえるようにするという点ではなかなか難しいのが現実です、私は自身の仕事としてその間に立って橋渡しをする必要性を感じています。

と述べ、各世代がそれぞれの役割を担い、連携して進められるしまくとうば復興のあり方を模索していると語った。

2.3 NPO 法人うちなあぐち会の取り組み

NPO 法人うちなあぐち会のしまくとぅば復興への取り組みについては、桑江常光代表と桑江テル子氏にインタビューを行った。NPO 法人うちなあぐち会は、1990年に発足、沖縄市を中心に小中学校での学習支援という形でしまくとぅばクラブの講師派遣を行っている。同時に会としてしまくとぅば講座の開催や講師養成講座の開催も行っている。また、年に一度機関誌「ゆんたくひんたく」の発行も行い2013年で20年目に突入している。「ゆんたくひんたく」にはしまくとぅばで書かれたエッセイが載っており、表記法としては船津好明の沖縄文字が採用されている。

2013年度はうちなあぐち教本と初級編うちなあぐち指導書の編纂と発行を行っている。これまでの講師派遣事業を通して、直面してきた、「何を教えるか」「どう教えるか」という課題を全10回のカリキュラムと単元事の指導案と資料がクリアファイルに収められている。すぐに取り出しコピーすることが出来るようにという講師目線の工夫である。指導案にはDVDがついていて、指導の風景や歌や手遊びなどが収録されている。桑江常光氏は、

講師として派遣している会員は23名いるが、どの順序でどういう風に教えたらいいかというのは誰もが直面する課題なので、最低限の資料をまとめてみようということになった。これまでは活動する度、教材を作ってコピーしていたので一冊の形にしてみようと考えた。何度も編集委員会を持ち作ることができたが、予算もない中、資料集めや入力や校閲など全て自分たちでやらなくてはならなかったもので、まだまだ足りないことがたくさんあると感じている。

と語り、この取り組みをきっかけに那覇市のしまくとぅば読本の様なものが沖縄市でもできたらいいと希望を述べた。また桑江テル子氏は子ども達への指導を通して気が付いたこととして次の点をあげた。

沖縄市では9つの小学校で活動していますが、先生方がうちなあぐちをあまり知らない。だから、先生方を教えることが出来ないだろうかと考えるようになった。私たちがいくらクラブ活動で子ども達を教えても、家庭や学校で使えないと言う現状をどうにか変えたい。行政の協力が必要な所です、ボランティアだけでは限界があると感じている。せめて沖縄の大学を出た教員達にはうちなあぐちを分かるようになってほしい。

と語り、しまくとぅば復興に不可欠なクラス外での言語使用や行政や教師などが一体となってしまうとしまくとぅばの復興に取り組む必要性について述べた。しまくとぅば復興を志す理念については桑江常光氏が、

理屈じゃないと思うんだよ。アイデンティティだよ。うちなあぐちだからうちなあぐちを話したいし歴史を学びたい。内面においては誰しもが持っている沖縄の海や自然や言葉に対する気持ちを大切にしたいという気持ちと同じだと思う。若い人には誇りと自信を持ちなさいと言いたい、エイサーも、空手もやりなさいと言いたい。しかしエイサーでも歌詞の意味を分からないで踊っている意味がない、形だけの文化ではないのだから。うちなあぐちを通して、胸を張ってうちなあぐちと言えようようになってほしい、沖縄に生まれて良かったと思えるようになってほしい。

と述べ、しまくとうばの活動は単に言語教育として捉えられるべきではなく、しまくとうばを通して沖縄の自然や文化を学び自己肯定感を上げることに繋げてほしいと語った。

2.4 じんぶん孝房の取り組み

じんぶん孝房のしまくとうば復興への取り組みについては大谷高子氏にインタビューを行った。じんぶん孝房では大谷氏が陽明高校(浦添市)と嘉手納高校(嘉手納町)の福祉科にてしまくとうばの指導を行っている。介護について学び実際に介護現場に研修に行く高校生にとって、コミュニケーションに必要なしまくとうばを学ぶ意義は大きい。自己紹介や身体の名前などすぐに使えるしまくとうばに触れることで利用者との良い関係を築く糧とする。大谷氏は、

うちなーぐちは死語だとか消滅の危機にあると言う方がいるがとんでもない、私たちの生活はしまくとうばで出来ているんですよ。生活も環境も昔はやまとぐちじゃなかったわけですから、うちなーぐちで表せるんですよ。そしてうちなーぐちで生活されてきたお年寄りの方にとっては、うちなーぐちが一番伝わる言葉ですよ。介護する時に苦しんでる人が「ちぶるやむん」ってせつかく訴えているのに「頭痛い」って言い直させるんじゃないくて、うちなーぐちで通じた方がいいということです。でもしまくとうばというのは島々で異なるから私は全てを教えられるわけではない、私は基本的な、あるいは私のうちなーぐちを教えるから、それをもとに自分の地域ではどう言うかということを考えなさいと学生には伝えていきます。

と述べた。高校の福祉科の先生達はしまくとうばを教えることが出来ないため、特別授業ということで年に数時間、実習前に招かれる。高校の他には船越小学校で読み聞かせや「しまくとうば語やびら大会」出場の生徒への指導を行っている。またFM21(浦添市)で月に一度ラジオ番組を持つ。

「しりとりやってみようか」と言ってラジオでしりとりをしたりする。皆すぐ「うちなーぐち出来ません」と言うけれど知ってることを一つでも二つでも身体から取り出して口に出してみることで、そして聞くことです。知らなかったらメモをする。でも単語を覚えることはゴールではない、知ってる単語を並べて文書を作ってみる、例えば「んむ」を使って何か文章を作ってみるといいんです、「くぬ んむ いっぺーまーさいびーんどー」でもいい、自分の周りの世界をうちなーぐちで洗わせるということに気付くことが大切です。

2.5 宜野湾うちなーぐち会の取り組み

宜野湾うちなーぐち会のしまくとうば復興への取り組みについての興儀清子会長にインタビューを行った。宜野湾うちなーぐち会は2008年設立。宜野湾中央公民館を中心にサークル、しまくとうば語やびら大会出場者への指導、宜野湾小学校でのうちなーぐち指導、くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶしへの講師派遣、敬老会や身にデーサービスでの交流会、公民館祭りやライブへの出演、ボランティアで玩具作りなどを行っている。

前に宜野湾小学校で指導した子が、自信がついて生徒会の副会長にまでなった子がいて、しまくとうばを通しての教育効果というか、子どもがこんな風に成長するんだということを見て嬉しく思いました。ある時この子が学校から推薦を受けて、今度はしまくとうばの県大会にも出ることに

なったので、また指導することになりました。イントネーションがいまいちだなど感じたので、お家でも練習できるよにとこの子の母親も誘って一緒にやってみようということになったら、母親はやっぱりうちなーんちゅだから最初はぎこちないけど2、3回練習したらすぐ出来るようになりました。こういうチャンスがないだけで皆やったら出来るかもしれない。そしてやったら楽しくなるんです。

與儀氏は、しまくとぅばの指導を通して子どもたちに自信を与えることが出来る手応えを感じ、また学校や家族を巻き込んで進めていくことの大切さを学んだと語ると同時に指導する中で今ではもう使われていないと考えていたしまくとぅばを家庭で使っている子どもと出会って鳥肌が立つ程嬉しかったエピソードについて語った。また、

「ぬくさびらな しまくとぅば」とか「うちなーぐち やーんち つくわんまがとぅ ちゅくとぅばやていん たくとぅばやていん ちかていいちゃびらやー」とか言いながら、公民館を中心に、地域からやっぺいこうと一生懸命やっている所です。今はなるべく日常的にしまくとぅばを使うように心がけている、年賀状もうちなーぐちで書いたし、しまくとぅばちかれーやーんでい うむとーいびーしが、相手があるからね、相手によりけりですが家ではだいたい使っていますよ。

と述べ、しまくとぅばの活動を通して地域の活動を活発化させ、自身の言語使用にも変化が表れていることを共有してくれた。

2.6 ていーだぬふぁー童唄会の取り組み

ていーだぬふぁー童唄会のしまくとぅば復興への取り組みについて主宰の宮城葉子氏にインタビューを行った。ていーだぬふぁー童唄会は、1991年に結成、童唄と民話を通して子どもたちにしまくとぅばや沖縄の行事を伝えている。ゆっかぬひーにはいちゃりば祭を開き琉球の玩具をうちなーぐちで展示し童唄のコンサートを開いている。紙芝居の作成や八重山や離島での講演も行っている。これまでに「今！子どもたちに伝えたい 沖縄の昔あそびうた～そこには小さな愛がいっぱい～」や「沖縄の行事うたあそび」など童唄のCDも出している。

精神文化を、沖縄の心を子どもたちに伝えたい、その次にうちなーぐちなんですよ。それはわらびうたの中にあり、また生活の中にあるものです。環境づくりが大切です。例えば私の孫は胎教からうちなーぐち聞いています、生きていく環境にうちなーぐちがあるという沖縄の生活を子どもには与えたい。だから海を見せる、音楽を聴かせる、沖縄を伝えることの中にうちなーぐちを伝えるということがあります。

幼児教育が専門の宮城氏は保育園での実践の後、現在は先週が校育成保育カレッジ学院の講師を務め講義の中で童唄を教えている。

私は幼児教育が専門で、保育園で20年ほどの実践した後、今は専門学校で教鞭をとっています。毎年学生に講義を受けての感想文書かせると99%くらいの学生が「私は沖縄のこと知らなかった」と書いてきます。沖縄のことを知らなかった学生達が沖縄のことを学ぶことの大切さに気がつき

始め「自分が保育士になったら沖縄のことを伝えて行きたい」という想いを持つようになる。沖縄のことを保育士自身が大切だと考えないと保育に取り入れて実践することは出来ない。

しまくとぅばを次世代に伝えるための行政レベルでの取組みがない中、その仕組みづくりを念頭に置きながら活動を行っている。活動する中での課題として、

私はうるま市の人間なので本当はうるま市に貢献したいと言う想いがありますが、うるま市は他の市町村と比べて取組みは遅い気がします。それでもボランティアで、勝連図書館や与勝中学校や具志川中学校へ通い読み聞かせなどを行い、少しずつ地域の活動に力を入れて、しまくとぅばの大切さを伝えている所です。けれどもしまくとぅばの活動は皆ボランティアベースだと思っているとところは問題点も有ります。瓦家を改修し活動拠点を作り光熱費や教材開発費などさまざまな出費があるけれども会費は月に1500円ずつしかとりきれない。ほとんど持ち出しでやっている状態です。赤字運営ですが、必要だと思うので地道に出来る限り続けているのです。

と述べ、しまくとぅばへの取組みの地域格差と、しまくとぅば復興に向けた取組みがボランティアに頼っていて、しまくとぅばのボランティア講師が交通費やコピー代さえも持ち出している現状について共有してくれた。

2.7 沖縄ハンズオンNPOの取組み

沖縄ハンズオンNPOのしまくとぅば復興への取組みについて石嶺美晴理事にインタビューを行った。沖縄ハンズオンNPOは2002年設立。主な活動内容として、しまくとぅば話者と行く民話発祥地巡り、歌碑めぐり、シニアしまくとぅば伝承伝言ポートフォリオ事業、しまくとぅば紙芝居の公演、しまくとぅばオンステージ、しまくとぅば語やびら大会での字幕協力、などがある。その中でも特徴的なものはコミュニティラジオでの番組だ、FMやんばる(名護市)、FMニライ(北谷町)、FMよみたん(読谷村)、などでしまくとぅばの番組を持ち、しまくとぅば学習中の若者としまくとぅばスピーカーと一緒にラジヲ放送を行っている。

中高生が活動を通してしまくとぅばをどうにかしなければということで頑張ってくれているのだけれども、案外、地域のしまくとぅば話者の方々が、自分の話すしまくとぅばが他者と比べて劣っているのではないか、表現が間違っていないか、あるいは失礼になっていないかとうとうるさしてしまくとぅばを話してくれないことが多々ある。

これまでコミュニケーションの言語として世代間で使われてこなかったしまくとぅばをもう一度日常会話の中に取り戻して行くと言うことの難しさについて課題をあげた。また紙芝居や演劇に取り組む中でしまくとぅばと向き合う時の様子をこう描写した。

紙芝居から始まって、今演劇という所まで来て、紙ベースだったのが今度は自分たちの身体を使って表現する。そしてしまくとぅばでやるので地域の先輩方から意味や発音、当時の歴史的背景や話者の経験などしまくとぅばをおして多くのことを学ぶことが出来る、うちなーぐち

を話すことで自分たちは誰なのかということを考える、その中で自分たちがどうありたいかということを考え始める。ある意味、まぶいぐみされているという感覚です。

しまくとぅばは言葉を覚え話せるようになるという語学の側面がある一方、ハンズオンでは体験し、五感で感じることに趣が置かれる。ハンズオンのしまくとぅば継承への取り組みは県内外でも高く評価され、2014年2月には「第7回未来を強くする子育てプロジェクト」（主催・住友生命保険）の未来大賞・文部科学大臣賞にも選ばれている。ハンズオンの活動を通してしまくとぅばに興味を持ち、しまくとぅばに触れながら沖縄の文化を学び、うちなーんちゅとしての感覚を取り戻すと石嶺は述べている。

2.8 くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶしの取り組み

くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶしのしまくとぅば復興への取り組みについて金城有紀氏にインタビューを行った。くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶしはうないフェスティバル2011で開かれた緊急集会「しまくとぅばイマージョンスクール設立に向けて」をきっかけにOkinawan Studies 107を中心に設立された。未就学児を対象にしまくとぅばでしまくとぅばを学び、遊べる空間作りを目指し0～2歳児のえんちゅクラスと3～5歳児のまやークラスがある。親子で学ぶイマージョン教育講座の開設、遠足の実施、ライブへの出演などを行っている。

日常生活の中でしまくとぅばを使う、小さな子どもと自然の中に行く、そこでもしまくとぅばを使う、そういう当たり前のことを実践していきたい。そのためには、「こっちおいで」「靴はいて」「ご飯粒ついてるよ」など子どもへの声かけなどがしまくとぅばで出来るようにする。例えば1,2,3など数字を教える時に、日本語を経由しないでしまくとぅばで教えてみるということも出来るだろう、カードなどの教材があればすぐに実践できることはたくさんある。

金城は言語習得の過程にある未就学児の子どもたちに母語としてしまくとぅばに触れさせたいと語る。また課題としては、家庭と仕事と子育ての両立の中で週に一度以上集まるということが親にとっても子どもにとっても負担が大きいため週に一度の実践でどの程度しまくとぅばを定着させるかと言う点を述べた。

子どもたちが週に一度集まって一緒にしまくとぅばで遊んだものを一週間後まで覚えているには、CDやアプリなど家に帰っても遊べる補助教材が必要。カセットテープやICレコーダーで録音して家でも親子でしまくとぅばで遊べる様な工夫があるといいかもしれない。また、今は人数が少ないので中南部各地から集まってきてやっと運営しているが将来的には各地で活動できるようになるのが理想だと思う。地域密着で言葉を残すというところまでいけるように仕組みづくりを頑張りたい。また子どもの成長に応じてそのノウハウが次の後輩達へ引き継がれる様なバトンタッチも行っていけたらと思う。

金城はしまくとぅばの活動を通して人々が集まり、出会い、学び合うことで今度は地域に帰って地域でしまくとぅばの復興活動をスタートさせることの大切さについて述べると同時に、子どもの成長に併せてその時々で必要な学びについて、また遊びや学びが次の子どもたちへ受け継がれることの重要性を述べた。

2.9 REGIONの取り組み

REGIONのしまくとうば復興への取り組みについて屋宜宣寿氏にインタビューを行った。REGIONは子どもたちに、楽しみながら沖縄のことばを学んでもらおうと、映像の制作などを手がける。「ポパイ」「スーパーマン」「トムとジェリー」のうちな一ぐち吹き替え版がそれぞれ二話ずつDVDに収録されている。

しまくとうばを守ろうというようなことで始めたわけではないが縁があって手がけることになった。逆にこの仕事を始めておふくろとかと「ほうれん草って何て言うんだっけ」と話したりすることで、「あれ、昔おば一とこういう話をした」ということが思い出されたりした。自分で翻訳し那覇市文化協会うちな一ぐち部会の宮良信詳先生に監修してもらい、吹き込みも自分たちで行った。

英語を初めとする語学教材が氾濫する中、しまくとうばの音声教材、特に子どもが楽しめる教材は稀少である。また勉強の教材としてではなく娯楽のなかでもしまくとうばに触れる機会を持つということは大切だ。今後の展望について屋宜氏は、

これからもシリーズ化して行きたい。本当はブラジルのうちなーんちゅにも見てほしい、でも希望としては向こうに届けたいと言うよりもブラジルで録音したいですね。噂によると昔ながらのうちなーぐちが残っているとされているのでぜひ向こうの発音で入れてみたい。またうちなーぐちだけでなく宮古の言葉でも録音したい。現在は子ども向けにアプリ開発なども行っていきたいと考えている。中小企業なので予算など厳しい面も多いが取り組んで行きたい。

と述べた。しまくとうばを楽しむ作品作りを通し、しまくとうばの復興に取り組む団体との連携が生まれ、しまくとうばの多様性にどう対応するかというチャレンジや、アプリ開発など新たなツールの検討、世界のウチナーンチュと繋がって行く作業など様々なビジョンが生まれていることが分かった。

2.10 しまんちゅスクールの取り組み

しまんちゅスクールのしまくとうば復興への取り組みについて照屋みどり氏にインタビューを行った。しまんちゅスクールはうちなーんちゅが生き生きと学ぶスクールとして2012年宜野湾市に設立された。沖縄語練習帳の高良勉氏を講師に招いたうちなーぐち講座、ブラジル3世うちなーんちゅから学ぶうちなーぐち講座などを開設する他、くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶしの活動拠点ともなっている。2013年からはむるうちなーぐちシリーズが始まり、しまくとうばっし平和学(安良城米子氏、沖縄国際大学講師)などの講座が提供されている。企画を担当している照屋氏は、

琉球の文化の基本は言葉、そこからうやふあーふじの感性や考え方を取り戻したい。しまくとうばを復興させようと言う機運が高まり、日頃からしまくとうばを使う重要性は、すでに私たちの共通認識になっていますが、一方で学問をしまくとうばで、という取り組みはまだまだこれからだと思います。沖縄と類似した歴史を持つハワイでは1980年代頃か

らハワイ語復興運動の高まりのよってハワイ語で教育を受けられる小中高が設立され、今ではハワイ大学においてハワイ語で学びハワイ語で書いた論文で博士号が授与されるようになってきました。沖縄でもそのような日が訪れることを期待し、しまんちゅスクールではしまくとうばで平和学を学ぶ講演会を開催しました。

と語る。他にも山之口獏誕生 110 年祭や、「吉屋チルー物語」や「しまくとうばで語る戦世の記憶」の上映会など、しまくとうばで描かれた作品について触れる機会を数多く提供し続けている。さらに今後の展望として、

うちなーぐちは死んではいません。今なら復活できると思います。そして言葉を学ぶことが、沖縄へ近づく近道になると信じています。これからもしまんちゅスクールをベースに沖縄にこだわりを持った人たちともっと繋がって行きたい。

と述べた。

3. おわりに

本稿で述べたように、危機的な状況にあるしまくとうばの復興に向けた取り組みは、任意団体、NPO 法人、一般社団法人、株式会社などさまざまな分野で展開され、未就学児から高齢の方まで幅広い年齢層が関わり、それぞれの実践成果が表れている。このような取り組みが継続されるために、沖縄県文化協会やしまくとうば連絡協議会などのネットワークがさらに充実し、人的交流が活発となり、教材開発や講師派遣などにおいて協力関係を結ぶことが出来るようになることが期待される。また、共通の課題としては予算の問題が浮き彫りになった。しまくとうば復興に向けた取り組みはボランティア活動に大きく依存しており、しまくとうばの活動／教育だけで生計を成り立たせることは出来ない、これは日本語や英語など他の語学の講師との比にならない。これまで「学ぶ」価値がないとされ、話すことを禁止し奨励されてこなかったしまくとうばをもう一度生活の中に取り戻そうという取り組みをする作業とは、単に教室内での語学学習／教育から、しまくとうばの価値を見直し、しまくとうばに他の言語と同様の価値を与えることに繋がっていくだろう。しかしながら、現実においては、しまくとうばを教える講師が教材開発費、印刷代、会場代、通信費、交通費など全てを持ち出して活動を行っていることが明らかになった。それぞれの団体や企業が活用できる補助金や研究助成金がさらに充実することが期待される。また、しまくとうばの多様性を維持しながら言語復興が行われるべく、多くの小さな団体や企業が活動できる環境づくりが大切になってくる。島や地域、集落ごとにしまくとうばの復興に取り組む団体が必要であり、さらには、未就学児向け、児童向け、生徒向け、学生向け、大人向け、聞けるけれど話せない中高年向け、ネイティブスピーカー向けなどさまざまな教育や活動の場が必要となってくる。また、教育や活動のノウハウ、開発された教材やカリキュラムが広く共有され、それぞれの地域で実践される様な仕組みづくりも同時に必要になってくると感じた。沖縄県は2014年度の一般会計予算案としてしまくとうばの普及継承事業に2600万円を計上している、しまくとうばの復興にとりくむ個人や団体、企業からのヒアリングや連携事業が展開されることも望まれる。

参考資料：

沖縄県(2013)「しまくとぅば」普及推進計画

<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/documents/hukyusuisinkeikaku.pdf> (閲覧日：2014年1月30日)

沖縄県文化協会(2013)「平成25年度しまくとぅばの普及等に取り組む団体・個人の現況等アンケート集計結果」

第3部

危機的な状況にある言語・方言に関する文献資料

危機的な状況にある言語・方言に関する文献資料一覧

一八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言一

石原昌英

ここでは、第1部で見た危機的な状況にある八丈方言、国頭方言、沖縄方言及び八重山方言に関する文献資料の一覧を示す¹。本リストの作成に当たっては、かりまたしげひさが作成したデータベース（未公開）をベースに、筆者が作成した社会言語学関連のデータを追加し、さらに木部暢子が関連する文献資料を追加した。また、方言教材、方言で書かれた小説等についても一覧に含めた。

文献資料の提示については、著者名・発行年・「論文名」『書誌名』巻（号）、出版社（者）のように示してある。

八丈方言

(1335-1653)『八丈島年代記』

(1604-1782)『八丈島年曆抜書』

(1660-1718)『八丈島日記並に日記』

池則満(1745-1746)『八丈島漂渡記』

木村某(1751)『八丈物産誌』

大田南畝(1779-1820)「八丈島方言」「八丈島俗通志」『一話一言』

佐藤行信(1782)『海島風土記』

(1789-1801)『八丈島』

田村元長(1793頃)『豆州諸島物産図説』語彙が載る可能性あり

応齋(1796)『七島日記』

古河正辰(1797)『八丈島筆記』内閣文庫

三島正英(1801)『伊豆七島風土細覧』

高橋与一(1802)「八丈島語集」『園翁交語』

松田兵右衛門(1804-1817)『八丈島流人之咄』

大原正矩(1811)『八丈誌』

服部義高(1811)『八丈裁衣織』

(1822)『八丈島々日記』

(1831-1847)『三宅島新島八丈島三ヶ島刑法大秘鑑』

伴信友(1841)『八丈島謡詞』（伴信友校蔵書第54冊）語彙が載る可能性あり。

井上正文(1848)「天下太平風雨時順五穀成就村内安全 - - 拓虫除祈祭文」語彙が載る可能性あり。

鶴窓帰山(1848)『やたけの寝覚草』

鶴窓帰山『八丈島言語集』筑波大国書

¹ 本一覧は完全なものではない。筆者の調査不足でここに含まれていない関連する文献資料があるであろう。とくに、国頭方言（沖縄県内）、沖縄方言、八重山方言 2005年以降の方言文献については調査不足である。

- F.V.Dickens&E.Satow(1878)「Notes of Visit to Hachijo in 1878.-Dialect」『日本アジア協会会報 6』
- 曲直瀬愛(1883)『小笠原島物産誌略』小笠原村教育委員会蔵
- 永井塾石(1894)「八丈島の嫁娶」『風俗画報』(75), 4-5,語彙が載る可能性あり。
- 浅沼禎一(1898)「八丈島俚諺」『東京人類学会雑誌』13(148),420-421,語彙が載る可能性あり。
- 保科孝一(1899)「八丈島見聞録」『太陽』5巻4,5,6,7号,語彙が載る可能性あり。
- 保科孝一(1900)「八丈島方言」『言語学雑誌』1巻2,3,4,7,10号
- 坂本正行(1900)「近藤富蔵が“告白”英国外交官アーネスト・サトウに」「八丈島のヤマモモ」『南海タイムス』第2518
- 国語調査教育会編(1905)『音韻調査報告書』
- 国語調査教育会編(1906)『口語法調査報告書』
- 八丈島教育会編(1909)『口語取調書』『音韻取調書』
- 八丈島教育会編(1911)「八丈島方言」『島教育会雑誌』1,2,3,4,5,6
- 薄恕一・青木秀虎(1914)『八丈ヶ嶋』国文館
- (1916)「船木口祭司」
- 三島正英(1919)「伊豆七島風土細覧」『飛騨史壇』4-11____語彙が載る可能性。
- 大脇繁吉(1921)『八丈島仙郷誌』大脇商店
- 一洲生(1925)「国語教授の参考」『八丈島教育会誌』
- 小寺融吉(1926)「八丈島の話」『民俗』1-6
- 東条操(1927)『国語の方言区間』育英書院
- 永久保満(1927)『趣味の東京府 八丈島誌』南日本新聞社
- 田村栄太郎(1928)『八丈島方言 上』『国語国文の研究』20
- 望月誼三(1930)「八丈島方言」稿本
- 丸尾芳男氏調査、国学院方言研究会(1931)『八丈島方言』(方言誌第一輯)(ト), 国学院大学方言研究会
- 吉田貫三(1932)『八丈島方言集と八丈節』大賀郷仙郷堂
- 本山桂川(1933)「八丈島における村別方言異同に関する二三の報告」『国学院雑誌』39-2
- 菊池治可編(1933)『八丈島方言集』
- 本山桂川(1934)『海島民族誌 伊豆諸島編』一誠社
- 橘正一・東条操(1934)「伊豆諸島方言」「本州東部の方言」『国語科学講座』7、明治書院
- 東条操(1934)「関東方言」「本州東部の方言」『国語科学講座』7、明治書院
- 靱山徳太郎(1934)『伊豆七島八丈島動物方言』靱山鳥学研究所
- 橘正一(1935)「月経方言考」『旅と伝説』8(5/89),89-95
- 国井末吉編(1936)『八丈之現勢 上巻』八丈島文化協会(大賀郷村)
- 橘正一(1936)「摺粉木と摺鉢の方言」『旅と伝説』9(2/98),87-91
- 橘正一(1936)「八丈島方言の系統」『国語教育・方言研究』1
- 宮本馨太郎(1936)『八丈島三ツ(趣味叢書)根村方言集第二十二編』土俗趣味社
- 中山周平(1940)「八丈島の伝説と方言など」『昆虫界』8(80), 731-737.
- 平山輝男(1941)「言語島八丈島と黒潮」『コトバ』3-4、国語文化研究所

- 平山輝男(1941)「豆南諸島のアクセントとその境界線」『音声学協会会報』67,68
- 松尾捨次郎(1942)『国語教学の体験』 ---- 伊豆諸島と関係があるか不明
- 金田一春彦(1943)「伊豆諸島の音韻とアクセントところどころ」『方言研究』8
- 北条忠雄(1948)「八丈島方言の研究－特に上代性の遺存について－(一)(二)」『日本の言葉』6,7
- 菊池正文(1950)『八丈島方言の概観(M)』国研報告書
- 国立国語研究所(1950)『八丈島の言語調査』国立国語研究所
- 瀬川清子(1950)「女性と祭り」『民間伝承』14-7
- 大間知篤三(1951)「島の人口問題 -八丈島の事例」『民間伝承』15-7
- 大間知篤三(1951稿本,1960出版)『八丈島-民俗と社会-』創元社
- 吉町義雄(1951)『園翁交語』と『八丈実記』の島言葉『文学研究』42,九州大学
- 榎垣実(1952)「三宅島・八丈島の方言を探る「ことば」の資料収集第1回」『文研月報』14
- 吉町義雄(1952)「八丈八村方言の文例」『音声学会会報』80、全日本音声学者総合学会
- 酒井卯作(1952)「青ヶ島巫女の祭文」『民間伝承』16(6), 305-309
- 金田一春彦(1953)「辺境地方の言葉は果たして古いか」『言語生活』
- 浅沼悦太郎(1953)「八丈島の女の名前(ことば風土記)」『言語生活』18
- 柴田武(1953)「これからの方言研究」『国語学』11
- 北条忠雄(1953)『上代東国方言と八丈方言(ト)』私家版
- 染木煦(1954.09)「八丈島の小民具について」『日本民俗学』2-2
- 青ヶ島学術調査団(1955.01)『青ヶ島調査報告』第一集
- 金田一春彦(1955)「八丈島方言」『世界言語概説 下』研究社
- 後藤興善(1955)「東歌研究」『万葉集大成 11(特殊研究篇)』
- 都竹通年雄(1955)「万葉集の民謡と方言」『国語学研究』
- 服部四郎(1955)『日本語の系統』岩波書店
- 福田良輔(1955)「奈良時代東国方言の周辺・言語基層・八丈島方言・補説・」『文学研究』53,九州大学大学院人文科学研究院
- 金田弘(1955)「東国語脈で書かれた抄物二三 - 江戸初期東国方言研究資料 - 」『国語学』20
- 岡野徳之助(1956)「三根永郷地区に於ける島言葉の研究」プリント
- 北条忠雄(1956)「係結法管見-コソ係結の本質と八丈島方言の係結法-」『秋田国語国文』1
- 金田一春彦(1956.07)「方言の旅 奥地・離島の方言 関東地方 伊豆七島」『NHK 国語教育講座』2-4、宝文館
- 山階芳正・竹田且(1957)『日本のはなれ島』青葉書房
- 小川武(1958)『黒潮圏の八丈島(風俗と慣行)』八丈島新聞社
- 小川武(1958)「八丈島方言の類型と系統」『新地理』7(2), 56-59
- 酒井卯作(1958)「八丈島の隠居沢」『民間伝承』22-4,5
- 平山輝男(1958)「青ヶ島方言の所属」『国学院雑誌』59-10・11 合併号
- 飯豊毅一(1959)「八丈島方言の語法」『国立国語研究所論集 1 ことばの研究』
- 浅沼悦太郎(1959)「海島一夕話(2) 八丈島の女の名前」『民間伝承』244
- 浅沼良次(1959,1968改訂版)『流人の島-八丈風土記-』日本週報社

- 金田一春彦(1959)「方言の文法」「口承文芸」『日本民俗誌大系』10、平凡社
石原憲治・中村・福地・伊藤(1959)「八丈・小島の民家調査」『民俗建築』25,26
北条忠雄(1959,1961)「八丈島方言の国語学的研究(一)(二)」『秋田大学学芸学部研究紀要』
9,11
小川武(1960)「八丈島方言の一考察」『郷土教材資料集』東京都教育庁八丈出張所
平山輝男(1960)「八丈方言の特殊性」『東京都立大学創立十周年記念論文集』(『日本の言語
学 6 方言』所収)
馬瀬良雄(1961)「八丈島方言の音韻分析」『国語学』43, 国語学会
柴田武(1961)「関東・東海東山」『方言学講座 第 2 巻 東部方言』東京堂(柴田武(1978)
『方言の世界』平凡社に再録)
大島一郎(1962,1963)「伊豆利島方言の語法」『国語学』48,49
加藤信昭(1962)「八丈島方言における動詞の音便形に対する私見」『徳島大學學藝紀要・人
文科学』12
浅沼良次(1962)「八丈島の方言」プリント
浅沼良次(1963.01)「八丈島民話選」『八丈文化』第 1 号、八丈島文化会
近藤富蔵(1964)『八丈実記 1~7』緑地社
日本方言研究会編(1964)『日本の方言区画』東京堂出版
福田良輔(1965)『奈良時代東国方言の研究』風間書房
平山輝男編(1965)『伊豆諸島方言の研究』明治書院
大間知篤三・金山正好・坪井洋文(1966)『八丈島』角川書店
日本放送出版協会(NHK)(1966)『全国方言資料 7-へき地・離島編(1)東北・関東-』(1981
カセット版・1999CD-ROM 版) 「東京都八丈町大賀郷」、「東京都八丈町中之郷」、
「東京都八丈町宇津木」
北条忠雄(1966)『上代東国方言の研究』日本学術振興会、丸善
浅沼悦太郎(1967.10,12,1968.04)「伊豆諸島魚介類名雑記(1)-(3)」『民間伝承』278-280
大島一郎(1967)「伊豆諸島方言における意志と推量の形」『日本方言研究会 第 5 回研究発
表会 発表原稿集』
金田一春彦(1967)「東国方言の歴史を考える」『国語学』69, 国語学会
澤瀉久孝ほか編(1967)『時代別国語大辞典上代編』三省堂
大岩正伸(1968)「展望・方言」『国語学』73
平山輝男(1968)「3.全国方言の諸特徴(1)奈良朝の面影を残す八丈方言」『日本の方言』講談
社現代新書
服部四郎(1968)「八丈方言について」『ことばの宇宙』3-11
加藤宣彦(1969)『「語い」を中心とした八丈島方言の分布的考察』私家版
山正好(1969 冬)「八丈島系統の祭事祈祷伝書」『民俗芸能』35
宮尾しげを(1969 冬)「青ヶ島祭文」『民俗芸能』35
渡辺従義(1969)「八丈島のわらべ歌(古謡を尋ねて)」プリント
伊川公司(1970)「高校生の方言理解と八丈島方言の源流」『教育研究紀要』東京都教育庁八
丈出張所
加藤宣彦(1970.03)「八丈島方言の特殊性と共通語教育」『都教育参考研究物 44 年度』

- 大島一郎(1970)「文法的事実の衰退と交替」『方言研究の問題点』平山輝男博士還暦記念会編、明治書院
- 馬淵和夫(1971)『国語音韻論』笠間書院
- 東京都八丈支庁編(1972.03)『青ヶ島 現況と問題点、施策とその展望』東京都八丈支庁
- 平山輝男(1972)「日本語アクセントの将来」『金田一博士米寿記念論集』三省堂
- 青柳精三(1972.09)「ことばの“重み”と“深さ”-八丈語の二、三の語をめぐって-」『フィールドの歩み』1
- 村上昭子(1972.09)「八丈島の風と潮-三根の会話資料より-」『フィールドの歩み』1
- 金山正好(1972)「八丈島系統の祭事祈祷伝書(二)」『民俗芸能』(49), 44-50.
- 青柳精三(1973.03)「八丈島の自然会話(1)」『フィールドの歩み』2
- 青柳絢子(1973.03,11,1974.03)「八丈島の自然会話(2)(3)(4)」『フィールドの歩み』3,4,5
- 青柳精三(1973)「八丈島の潮流語彙」『東京教育大学文学部紀要』93
- 東京都八丈島八丈町教育委員会(1973・1983改訂版)『八丈島誌』八丈島誌編纂委員会
- 金山正好(1973)「八丈島系統の祭事祈祷伝書(三)」『民俗芸能』(53), 46-53.
- 原田満彦(1974.03)「八丈島樫立の日常表現」『フィールドの歩み』5
- 青柳精三(1974.12)「八丈島の風の語彙」『フィールドの歩み』6
- 矢口裕康(1974)「八丈島中之郷の伝承 - 昔話を中心に (資料報告)」『日本民族学』96
- 上村幸雄(1975)「八丈島の方言 東京都八丈島中之郷」『方言と標準語-日本語方言学概説』筑摩書房
- 大島一郎(1975)「八丈方言」『新・日本語講座 3 現代日本語の音声と方言』汐文社
- 菊池一男・青柳精三(1976.10)「八丈島の自然会話(5)」『フィールドの歩み』9
- 青柳精三(1976)「本州東部沿岸および伊豆諸島地域の方位潮流名」『日本方言研究会 第22回 発表原稿集』
- 小林亥一(1976)『浄土宗 和讃 青ヶ島』
- 磯崎乙彦(1977)『八丈回顧』私家版
- 服部四郎(1978)「日本語祖語について・3」『月刊言語』
- 内藤 茂(1979)『八丈島の方言』私家版
- 青柳精三(1980)「八丈島樫立方言の母音の無性化と脱落」『音声学会会報』163
- 大島一郎ほか(1980)『八丈島方言の研究』東京都立大言語学研究室
- 馬瀬良雄(1980)「生きている東歌の語法」『言語生活』342、筑摩書院
- 大橋勝男(1981)「関東地方域方言分派論」『藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢 1』三省堂
- 内藤 茂(1981)「あいさつお国めぐり - 9 - 八丈島の巻」『言語生活』359, 筑摩書房
- 女子聖学院短大方言ゼミナール(1982)『三宅島八丈島の探歩(第3回)』女子聖学院短大方言ゼミナール
- 馬瀬良雄(1982)『秋山郷のことばと暮らし - 信越の秘境』第一法規出版
- 馬瀬良雄(1983)「長野県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会
- 野沢勝夫(1985)「<資料紹介>筑波大学図書館蔵「八丈島言語集」」『昭和学院短期大学紀要』21
- 内藤 茂(1985)『古語に学ぶ 1 八丈島方言を中心として』私家版

- 中村 規(1985)「八丈島の歌と踊り」『民俗芸能』66, 民族芸能刊行委員会
- 青柳精三(1985)「八丈島樫立方言の記述その1」『Contexture:教養紀要』3, 埼玉工業大学
- 落合基久(1986)「<録音器>各地の若者の会話 - 9 - 女子高生のおしゃべり(東京都八丈町)」
『言語生活』418, 筑摩書房
- 東京都教育庁社会教育部文化課(1986)『八丈小島方言調査報告書 昭和60年度』東京都
教育委員会
- 青柳精三(1986)「八丈島樫立方言の記述その2」『Contexture:教養紀要』4, 埼玉工業大
学
- 青柳精三(1987)「八丈島樫立方言の記述その3」『Contexture:教養紀要』5, 埼玉工業大
学
- 大島一郎(1987)『八丈島方言における言語変化共通語化の側面を中心として』東京都立大
学人文学部国語学研究室
- 大橋勝男(1989)『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』桜楓社
- 奥山熊雄, 金田章宏(1990)「八丈島三根方言動詞の形態論アスペクトをめぐって」『国文学
解釈と鑑賞』55(7), 至文堂
- 日本方言研究会(1990)「方言区画論の歴史」(一部)『日本方言研究の歩み - 論文編 - 』
- 奥山熊雄, 金田章宏(1991)「八丈島三根方言動詞の形態論 - 過去の「き」をもつテンス形
式」『国文学 解釈と鑑賞』56(1), 至文堂
- 金田章宏(1992)「各地録音紹介 - 文字化と解説 八丈島の民話と談話」『国文学 解釈と鑑
賞』57(7), 至文堂
- 山口幸洋(1993)「八丈島方言のアクセント分析-2-」『人文論集』44(1), 静岡大学人文学部
- 山口幸洋(1993)「八丈島方言のアクセント分析-1-」『人文論集』43(2), 静岡大学人文学部
- 金田章宏(1993)「「二重」表示現象をめぐって - 八丈島三根方言を例に - 」『日本語の格を
めぐって』くろしお出版
- 金田章宏(1993)「八丈島方言の音韻(三根地区)おぼえがき」『千葉大学留学生センター雑誌』
1
- 山口幸洋(1994)「八丈島方言のアクセント分析-3-」『人文論集』45(1), 静岡大学人文学部
- 伊豆山敦子(1994)「琉球・八丈島両方言における2種の1人称代名詞」『独協大学教養諸
学研究』28(2)
- 金田章宏(1995)「保科孝一著「八丈島方言」をよみなおす(1)」『千葉大学留学生センター
紀要』1
- 金田章宏(1996)「<研究ノート>連用形の終止用法をめぐって八丈方言の文法現象から」『千
葉大学留学生センター紀要』2
- 金田章宏(1996)「感情・感覚における局面のとらえかた 八丈島三根方言を例に」『国文学
解釈と鑑賞』61(1)
- 山口幸洋(1996)「類似語アクセントの意味するもの八丈島方言を中心に」『言語学林
1995-1996』
- 金田章宏(1996)「八丈方言うちけし動詞の成立をめぐって」『日本語文法の諸問題 高橋太
郎先生古希記念論文集』ひつじ書房
- 金田章宏(1996)「連用形の終止用法をめぐって:八丈方言の文法現象から」『千葉大学留学

生センター紀要』2

- 山口幸洋(1997)「八丈島方言のバイリンガルについて(1)」『静岡・ことばの世界』1, 静岡県方言研究会
- 金田章宏(1998)「現代日本語のなかの係り結び—八丈方言の例を中心に」『言語』27(7), 大修館書店
- 金田章宏(1998)「待遇表現とやりもらいについてのおぼえがき—八丈方言の例から」『国文学 解釈と鑑賞』63(1), 至文堂
- 金田章宏(1998)『八丈方言談話資料(1)青ヶ島方言』千葉大学留学生センター
- 浅沼良次(1999)『八丈島の方言辞典』朝日新聞出版サービス
- 金田章宏(1999)「八丈方言から古代語をさぐる」『日本語学』18(1), 明治書院
- 金田章宏(1999)「八丈方言談話資料(2)中之郷方言」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究—周辺諸方言との比較研究も含めて』(千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 第2集)
- 工藤真由美(2000)「八丈方言のアスペクト・テンス・ムード」『阪大日本語研究』12
- 金田章宏(2000)「保科孝一「八丈島方言」の百年」『国文学 解釈と鑑賞』65(1), 至文堂
- 金田章宏(2001)「方言文法研究におけるテンス・アスペクト研究—八丈方言の現在進行と同時性をめぐって」『国文学 解釈と教材の研究』46(2), 学灯社
- 金田章宏(2001)「方言研究の今後—八丈方言」『国文学 解釈と鑑賞』66(1), 至文堂
- 金田章宏(2001)『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 金田章宏(2001)「八丈方言」『国文学 解釈と鑑賞』66(1), 至文堂
- 金田章宏(2001)「八丈方言の現状といくつかの文法現象について」『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』(真田信治編 文部省特定領域研究(A)報告書)
- 金田章宏(2002)「東国方言の文法と八丈方言—オ連体形の広がり」『国文学 解釈と鑑賞』67(11), 至文堂
- 金田章宏(2002)『八丈方言のいきたことば』笠間書院
- 金田章宏(2002)「八丈方言の民話資料と文法解説」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(2)』(真田信治編 文部省特定領域研究(A)報告書)
- 馬瀬良雄(2002)『信越国境秋山郷方言談話資料』大阪学院大学情報学部
- 金田章宏(2003)「八丈方言、奥山熊雄さんとのこと」『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型的研究』(工藤真由美編: 科学研究費報告書 No.2 東日本編)
- 小林 隆(2004)「書評論文—金田章宏著『八丈方言動詞の基礎研究』」『日本語文法』4(1), 日本語文法学会
- まつもとひろたけ(2004)「書評—金田章宏著『八丈方言動詞の基礎研究』」『国語学』55(1), 国語学会
- 金田章宏(2004)『奥山熊雄の八丈島古謡』笠間書院
- 金田章宏(2005)『CDブック—八丈島古謡—奥山熊雄の歌と太鼓』笠間書院
- 金田章宏, ホウダ・マーチン(2005)「The Tense-Aspect System and Evidentiality in The Hachijo Dialect」『LINGUA POSNANIENSIS』Wydawnictwo Poznanskiiego Towarzystwa Przyjaciol Nauk
- 矢野準(2005)「<報告>『敵討賽八丈』会話部分のことば」『香椎潟』(福岡女子大学) 51

- 金田章宏(2006)「東京都八丈町三根方言の形容詞」『方言における述語構造の類型的研究Ⅱ』
(工藤真由美編：科学研究費報告書)
- 竹村和子(2006)「麗沢大学「八丈島言語調査」(1991)のアクセント資料とその分析(1)」
『ことばと文化』(長野・言語文化研究会) 03
- 金田章宏(2007)「特集；言語研究と文学研究——口承文芸の言語民話の文法 八丈島の<一文だけの民話>」『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂) 72-01
- 久野マリ子(2007)「特集；日本語アクセントの獲得・習得研究——八丈方言若年層における共通語アクセントの習得の実態」『音声研究』(日本音声学会) 11-03
- 久野マリ子(2007)「八丈方言若年層における共通語アクセントの習得の実態」『音声研究』
11(3), 日本音声学会
- 金田章宏(2007)「民話の文法—八丈島の<一文だけの民話>—」『国文学 解釈と鑑賞』
72(1), 至文堂
- 金田章宏(2009)「八丈方言における古典語文法“以前”」『国語と国文学』86(11), 東京大学国語国文学会
- 金田章宏(2009)「【寄稿】千数百年前の関東周辺の言葉「八丈語」は国際標準で独立言語」『南海タイムス』
- 金田章宏(2009)「八丈方言にみる古典語文法“以前”」『国語と国文学 特集：古典語のテンス・アスペクトを問いなおす』86-11
- ロング, ダニエル(2010)「小笠原諸島の日本語変種」『日本語学 特集：言語接触の世界』29-14
- 山本 節(2010)「東京都八丈島八丈町におけるタナバ(丹椰婆)の伝承」『西郊民族』210, 西郊民族談話会
- 金田章宏(2012)「八丈方言における新たな変化と上代語」『言語研究 特集：日本の危機言語・危機方言』142

沖永良部方言

- 安藤住翠(1934)『南島方言えらぶ語の研究』自費出版
- 柏常秋(1954)『沖永良部島民俗誌』弘凌宵文庫刊行会
- 甲東哲(1955)『沖永良部民俗語彙』
- 徳川宗賢(1958)「与論と沖永良部の方言について」『人類科学(10)』九学会連合
- 上村孝二(1960)「奄美方言のアクセント—沖永良部島・徳之島の部—」『鹿児島大学文学部文科報告(8)』鹿児島大学文学部文科
- 京都府立大学編(1961)『沖永良部のことば』(手書き調査報告)
- 久保けんお(1969)『えらぶ・よろん民謡辞典』
- 西江雅之(1969)「エラブの一断面—アシキヨラ村での生活と言葉の資料—」『共和国(1)』
- 永吉毅(1970)「沖永良部島方言の口蓋化について」『奄美郷土研究会報(11)』奄美郷土研究会
- 先田光演(1971)「沖永良部の神話」『沖縄文化(33・34)』沖縄文化協会
- 宗岡里吉(1971)「沖永良部島の伝説」『沖縄文化(35)』沖縄文化協会

- 永吉毅（1976）「沖永良部島方言の口蓋化について」『奄美の文化総合的研究』法政大学出版会
- 中松竹雄（1976）「与論島・沖永良部のことば」『琉球大学教育学部紀要（20-1）』琉球大学教育学部
- 先田光演（1977）「沖永良部島の百合騒動」『沖縄文化研究（4）』法政大学沖縄文化研究所
 知名町教育委員会（1977）『えらぶのてーき』
- 野原三義（1978）「沖永良部島知名町田皆方言の助詞文例」『琉球の方言（4）』法政大学沖縄文化研究所
- 高橋俊三・野原三義（1981）「沖永良部島の方言」『沖永良部調査報告書（地域研究シリーズNo. 2）』沖国大南島文化研究所
- 中本正智（1982）「沖永良部島方言の語彙」『琉球の方言（7）』法政大学沖縄文化研究所
 中本正智（1982）「沖永良部島方言の動詞活用」『琉球の方言（7）』法政大学沖縄文化研究所
- 野原三義（1982）「沖永良部島方言の文例」『琉球の方言（7）』法政大学沖縄文化研究所
 奥間透、真田真治（1983）「沖永良部における口蓋化音の分布域」『琉球の方言（8）』法政大学沖縄文化研究所
- 宗岡里吉（1983）『知覧町知名町瀬利覚における昔ばなし』南日本開発センター
- 久野眞（1984）「奄美諸島方言の概観」『国学院大学日本文化研究所報』21-02、国学院大学日本文化研究所
- 沖縄国際大学高橋ゼミ（1984）「沖永良部方言調査報告」『沖縄方言研究（第6号）』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 高橋ゼミグループ（1984）「沖永良部方言調査報告—言語地理学的研究—」『沖縄言語研究センター資料50』沖縄言語研究センター
- 東條恒雄（1984）『沖永良部方言考』青葉印刷
- 岩倉市郎（1984）『沖永良部島昔話』知名町教育委員会
- 東條恒雄（1986）『沖永良部方言地図』自費出版
- 高見栄沖（1986）「沖永良部知名町の諺と農家の歩み」『南島研究（26）』南島研究会
- 崎村弘文（1986）「沖永良部方言のアクセント体系」『鹿児島大学南方海域研究センター紀要（第7巻第2号）』鹿児島大学南方海域研究センター
- 永吉毅（1986）「馬鹿村から正名村へ（地名をあらためねばならない場合もある）」『奄美郷土研究会報（26）』奄美郷土研究会
- 木川行央（1986）「沖永良部島における関西方言と全国共通語の影響 アンケート調査の結果から」『都大論究』23、東京都立大学
- 久野マリ子（1986）「語彙記述の意味の史的変遷—沖永良部・徳之島方言の人体語彙を中心として—」『國學院大学日本文化研究所（57）』國學院大学日本文化研究所
- 木川行央（1987）「沖永良部島・徳之島方言における次元形容詞」『人文学報』192
- 甲東哲（1987）『島のことば—沖永良部—』三笠出版
- 中田敏夫（1987）「奄美沖永良部島知名方言における天候に関する語彙」『金沢大学教育学部紀要人文・社会』36、金沢大学
- 加藤和夫（1988）「奄美沖永良部島方言における親族語彙」『和洋女子大学紀要 文系編 第

28集』和洋女子大学

- 中本正智(1988)「沖永良部島ことばの分布と歴史」『日本語研究』10
- 東野東風盛(新城老人クラブ)編(1989)『ニシミの話』安田印刷(共通語)
- 木川行央(1989)「語形の共通語化と意味の共通語化 沖永良部島和泊方言の場合」『静大
国文』34、静岡大学
- 久野マリ子(1989)「沖永良部島和泊町のアクセント資料 体言・用言・助数詞その他 国
学院大学日本文化研究所紀要」64、国学院大学日本文化研究所
- 中本正智(1989)「沖永良部島方言の分布と歴史」『日本語研究(10)』東京都立大学日本
語研究会
- 言語地理学定例研究会(1990)『奄美諸方言の言語地理学的研究一徳之島・沖永良部島に
関する言語地理学的調査の報告一』沖縄言語研究センター
- 和泊町老人クラブ連合会(1990)『むんがたい』安田印刷(共通語)
- 久野マリ子(1991)「沖永良部島和泊方言のアクセント一長さがアクセントの型を示す方
言一」『日本語論考』桜楓社
- 永吉堅吾代表 畦布字有志(1992)『畦布誌ふるさとあぜふ』安田印刷
- 久万田晋(1994)「沖永良部島和泊町手々知名の遊び踊り」『沖縄芸術の科学 第7号』沖
縄県立芸術大学附属研究所
- サラ・アン・ニシエ(1995)「沖永良部島芦清良村の方言の研究」『琉球の方言(20)』法
政大学沖縄文化研究所
- 上野善道(1998)「沖永良部島諸方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研
究』26、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 上野善道(1999)「沖永良部島諸方言の活用形のアクセント資料」『琉球の方言(23)』法
政大学沖縄文化研究所
- 上野善道(1999)「沖永良部島諸方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研
究』27、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- かりまたしげひさ(2000)「奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ」『琉球大学
法文学部紀要 日本東洋文化論集 第6号』
- 上野善道(2000)「沖永良部島諸方言の活用形のアクセント資料(2)」『琉球の方言(24)』
法政大学沖縄文化研究所
- 松本幹男(2000)「<研究ノート>沖永良部島方言と喜界島方言における中舌母音について」
『語学研究』95、拓殖大学
- 松森晶子(2000)「琉球の多型アクセント体系についての一考察 琉球祖語における類別語
彙3拍語の合流の仕方」『国語学』201(51-01)、国語学会
- 松森晶子(2000)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発 沖永良部島の調査から」
『音声研究』04-01、日本音声学会
- 永吉敏人編(2005)『いらぶぬくとうば』トモエ
- 上野善道(2005)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(1)」『琉球の方言』29、法政大
学沖縄文化研究所
- 上野善道(2005)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(2)」『アジア・アフリカ文法研究』
33、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

- 上野善道(2006)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(3)」『琉球の方言』30、法政大学沖縄文化研究所
- 上野善道(2006)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(4)」『アジア・アフリカの言語と言語学』1、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 上野善道(2006)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(5)」『東京大学言語学論集』25、東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室
- 上野善道研究代表(2006)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料」科学研究費補助金(基礎研究C)研究成果報告書平成15年度-17年度
- 上野善道(2007)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(6)」『琉球の方言』31、法政大学沖縄文化研究所
- 上野善道(2008)「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(7)」『琉球の方言』32、法政大学沖縄文化研究所
- 上野善道(2008)「<資料>沖永良部島方言語彙のアクセント資料(8)」『東京大学言語学論集』27、東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室
- 杉村孝夫(2009)「沖永良部島方言動詞の形態音韻論」『福岡教育大学紀要 第1分冊 文科編』58、福岡教育大学
- 福島光義(2010)『なちかしゃ国頭の方言(しまヌムニ)』
- 甲東哲編著(2011)「分類沖永良部島民族語彙集」先田光演編集、南方新社
- 徳永晶子(2012)「沖永良部島におけるオノマトペの言語地理学的研究」『若手研究者育成セミナー：消滅危機言語としての琉球語研究の意義と目的』琉球大学国際沖縄研究所、沖縄言語研究センター
- 徳永晶子(2012)「沖永良部・国頭方言の動詞の構造(中間報告)」『若手研究者育成セミナー：消滅危機言語としての琉球語研究の意義と目的』琉球大学国際沖縄研究所、沖縄言語研究センター

与論方言

- 山田実(1956-1957)『与論島語と上代国語との比較研究』
- 山田実(1957)『与論島の習俗と言語の研究』
- 徳川宗賢(1958)「与論と沖永良部の方言について」『人類科学(10)』九学会連合
- 山田実(1958)「与論島語と上代国語との比較研究」『国語学(34集)』国語学会
- 浦部重雄(1959)「歌垣私見」『解釈』05-08
- 川内且昭(1963)「南島のあいさつことば一鹿児島県大島郡与論町朝戸地方一」『方言研究年報(6)』広島大学国語学研究室
- 平山輝男(1965)「国語史と琉球方言」『人文学報』45、東京都立大学人文学部
- 川内且昭(1966)「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の程度副詞」『方言研究年報』09
- 山田実(1967)『南島方言与論語彙』武蔵野書院
- 栄喜久元(1971)「与論島の民謡と生活」『沖縄文化(33・34)』沖縄文化協会
- 山田実(1971)「与論語文法の特質」『沖縄文化(35)』沖縄文化協会
- 山田実(1972)『与論島豊年舞踊詞と研究』山田実
- 後藤一日(1973)「与論方言音韻上の特色」『國學院雑誌(74-5)』國學院大学

- 山田実(1973) 「混効験集と与論語との語彙の研究」『沖縄文化 (40)』沖縄文化協会
- 後藤一日(1975) 「与論島の言語—地名の由来・家名・代名詞について—」『國學院雑誌 (76-5)』國學院大学
- 後藤一日(1976) 「与論島の古語」『國學院雑誌 (77-1)』國學院大学
- 山田実(1976) 「奄美与論方言の存在詞」『日本方言研究会 第 22 回 研究発表会 発表原稿集』日本方言研究会
- 山田実(1976) 「『おもろさうし』の「ゑり」「ゑむ」について」『沖縄文化』45
- 中松竹雄(1976) 「与論島・沖永良部のことば」『琉球大学教育学部紀要 (20-1)』琉球大学教育学部
- 町博光(1976) 「与論島朝戸方言の文末詞—資料報告—」『方言研究年報 (続 1)』広島大学国語学研究室
- 中松竹雄(1977.) 「基礎語彙の研究 (2) —与論島と伊是名島の比較—」『琉球大学教育学部紀要』21-01、琉球大学
- 町博光(1977) 「与論島朝戸方言における体言化表現法」『国文学攷 (74)』広島大学国語国文学会
- 町博光(1980) 「与論島朝戸方言の係助詞[d u]について」『広島女子大学文学部紀要(15)』広島女子大学文学部
- 野原三義・高橋俊三(1980) 「与論島の方言」『与論国頭調査報告書 (地域研究シリーズ No.1)』沖縄国際大学南島文化研究所
- 山田実(1980) 「与論島神話の研究」『沖縄文化 (53)』沖縄文化協会
- 菊千代・松本泰丈(1980) 「琉球方言の動詞の活用体系与論方言の動詞形態論序説」『言語生活 (342)』筑摩書房
- 町博光(1981) 「与論島朝戸方言の形容詞[san][j an]両活用語の意味・用法差」『広島女子大学文学部紀要 (16)』広島女子大学文学部
- 町博光(1981) 「与論島朝戸方言における動詞[najun]の意味記述」『方言研究年報 (続 5)』広島大学国語学研究室
- 山田実(1981) 『与論方言体言の語法』第一書房
- 町博光(1982) 「与論島方言」『国文学 解釈と鑑賞 (第 47 卷 9 号)』至文堂
- 町博光(1983) 「対他的条件法と対自的條件法—与論島朝戸方言・国頭村宇嘉方言を例として—」『広島女子大学文学部紀要 (18)』広島女子大学文学部
- 野口才蔵(1983) 「与論島古方言」『奄美郷土研究会報』23、奄美郷土研究会
- 菊千代・松本泰丈(1984) 「与論島方言の文法」『国文学 解釈と鑑賞 (第 49 卷 1 号)』至文堂
- 山田実(1984) 「奄美与論方言の第一人称代名詞の語法」『現代方言学の課題 (第 2 卷)』明治書院
- 菊千代(1985) 『与論方言集』与論民俗村
- 菊千代(1985) 『与論のしまがたり』はる書房
- 崎村弘文(1986) 「与論島方言のアクセント」『鹿児島大学文科報告 (22)』鹿児島大学文科
- 崎村弘文(1986) 「与論島方言のアクセント体系」『鹿児島大学文科報告 (22)』鹿児島大

学文科

- 菊千代(1988)「与論町大字麦屋の地名考」『沖縄文化(70)』沖縄文化協会
- 中本正智・篠崎晃一(1989)「与論島方言におけるアクセント変化」『人文学報(207)』東京都立大学
- 町博光(1988)「方言接辞の研究——与論島方言の接頭辞」『方言研究年報』30
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1990)『沖縄方言研究 第10号 与論方言の動詞』沖縄国際大学文学部 国文学科 高橋ゼミ
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1990)「与論方言の動詞」『沖縄方言研究(第10号)』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 町博光(1991)「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の祝言のあいさつ」『方言資料叢刊 第1巻』方言ゼミナール
- 町博光(1992)「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言における身体感覚を表すオノマトペ」『方言資料叢刊 第2巻』方言ゼミナール
- 町博光(1993)「与論島朝戸方言音節一覧」『琉球列島における音声の収集と研究Ⅱ』沖縄言語研究センター
- 町博光(1994)「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言のアスペクト」『方言資料叢刊 第4巻』方言ゼミナール
- 町博光(1995)「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の否定表現」『方言資料叢刊 第5巻』方言ゼミナール
- 町博光(1996)「奄美諸島与論島方言の否定表現—*nu* (<ヌ) と *dʒi* (<ズ) の用法差を中心に」『言語学林 1995~1996』三省堂
- 山田実(1996)「与論方言の上から奈良朝語の可能動詞の推定」『日本語研究諸領域の視点』上、明治書院
- 町博光(1997)「奄美諸島与論島朝戸方言の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
- 町博光(1998)「奄美諸島与論島朝戸方言のヤ行音文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』、三弥井書店
- 上野善道(1999)「与論島東区方言の用言のアクセント一付 体言のアクセント資料」『東京大学言語学論集 18』東京大学
- 上野善道(1999)「与論島東区方言の多型アクセント体系」『国語学(199集 1-15)』国語学会
- 高橋俊三・菊千代(2001)「与論町東区方言の漁業語彙」『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-001 (Endangered Dialects of Japan(ELPR Publication Series A4-001))、宮岡伯人
- 高橋俊三・菊千代(2002)「与論町東区方言の海洋動物語彙」『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-019 (Preliminary Research on Endangered Ryukyuan Language)、宮岡伯人
- 前田晶子(2004)「離島における地域の人間形成と学校—沖永良部島・国頭小学校の1970年代—」『AMAMI News Letter』No.8
- 菊千代・高橋俊三(2005)『与論方言辞典』武蔵野書院

- 工藤真由美・仲間恵子・八亀裕美(2007)「与論方言動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティ」『国語と国文学』84-03、東京大学国語国文学会（編）
- 菊秀史(2006)『与論の言葉で話そう(1) 挨拶、名詞、こそあど言葉・感動詞・副詞』与論民俗村
- 野原三義(2007)「与論島方言助詞の研究」『南島文化』29、沖縄国際大学南島文化研究所
- 仲間恵子(2007)「鹿児島県大島郡与論町麦屋方言の形容詞」『日本語形容詞の文法 標準語研究を超えて』ひつじ研究叢書（言語編）63、ひつじ書房
- 鄭相哲(2007)「YORON 方言の時相法体系についての研究 言語類型論の観点から」『日本研究』34、韓国外國語大學校日本研
- 菊秀史(2007)『与論の言葉で話そう(2) 動詞の文型・文法』与論民俗村
- 町博光(2008)「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の立ち上げ詞」『広島大学日本語教育研究』18、広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座
- 鄭相哲(2009)「韓国済州方言の述語構造について」『日本研究』41、韓国外國語大學校日本研究所
- 菊秀史(2009)『与論の言葉で話そう(3) 活用種別動詞単語集』与論民俗村
- 鄭相哲(2010)「未来テンスについて」『日本語文學』48、日本語文學會
- 重野裕美(2010)「奄美諸島方言の敬語法—敬語形式の分布とその展開に着目して—」『国文学攷』208、広島大学国語国文学会

国頭方言

- 仲宗根政善（1932）「今帰仁方言に於ける語頭母音の無声化」『南島談話（第5号）』
- 仲宗根政善（1934）「国頭方言の音韻」『方言（4-10）』春陽堂
- 島袋源七（1937）「今帰仁を中心とした地名の一考察」『南島論叢（伊波普猷先生還暦記念）』
沖縄日報社
- 島袋全発（1937）「伊平屋島を通して観たる年頭の行事」『南島論叢（伊波普猷先生還暦記念）』
沖縄日報社
- 仲宗根政善（1937）「加行変格「来る」の国頭方言の活用に就いて」『南島論叢（伊波普猷先生還暦記念）』
沖縄日報社
- 宮城真治（1937）「山原の御嶽」『南島論叢（伊波普猷先生還暦記念）』沖縄日報社
- 屋比久浩（1962）「Studies on Soke Dialect(I)」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第6号』
琉球大学文理学部
- 崎浜秀樹（1963）「<南島のあいさつことば>沖縄国頭郡名護町名護地方」『方言研究年報（6）』
広島大学国語学研究室
- 屋比久浩（1963）「イッターとワッター—接尾形式の一考察—」『沖縄文化（13）』
- 仲原善忠（1964）「田名文書試解（上）」『沖縄文化（14）』沖縄文化協会
- 屋比久浩（1964）「Studies on Soke Dialect(II)」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第8号』
琉球大学文理学部
- 仲原善忠（1964）「田名文書試解（下）」『沖縄文化（16）』沖縄文化協会
- 常見栄一（1966）「沖縄の親族名称とその社会的側面（1）—沖縄本島・国頭村安波の事例から—」
『沖縄文化（21）』沖縄文化協会

- 内間直仁(1967)「沖縄北部・瀬底方言の動詞活用体系」『都立大学方言学会会報(20)』
都立大学方言学会
- 日下部文夫(1968)「沖縄北部方言アクセント調査語彙について—「水」と「氷」—」『言語研究 第52号』日本言語学会
- 須藤利一 1968「沖縄のわらざん」『日本民族と南方文化』
- 常見純一(1969)「沖縄本島北部におけるヒガシを指す方言語彙」『上智史学(14)』
琉球大学方言研究クラブ(1969)「東京方言の一音節名詞に対応する沖縄北部諸方言のアクセント・資料」『琉球方言(9・10)』琉球大学方言研究クラブ
- 生塩睦子(1970)「琉球伊江島方言の実態」『方言研究の問題点』明治書院
- 内間直仁(1971)『<方言録音資料シリーズ12> 沖縄・瀬底島方言』国立国語研究所
- 生塩睦子(1972)「単純過去と確信過去—沖縄伊江島方言の場合—」『琉球の言語と文化』
仲宗根政善先生古希記念論集刊行委員会編
- 成田義光(1972)「沖縄北部方言アクセントの一傾向」『現代言語学(服部四郎先生定年退官記念論文集)』三省堂
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1973)「恩納村の方言について」『沖縄方言研究(第2号)』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 中松竹雄(1973)「琉球語音韻組織の対比的研究—沖縄県国頭村字奥方言を中心に—」『琉球大学教育学部紀要(17)』琉球大学教育学部
- 中本正智(1975)「言語学」『沖縄県史 第5巻 文化編1』沖縄県教育委員会
- 仲宗根政善(1975)「与那嶺方言の撥音「ン」と促音「ツ」」『琉球大学国文学・哲学論集(第19号)』琉球大学法文学部
- 安次富八重子(1975)「今帰仁方言・金武方言」『昭和学院国語国文 8』昭和学院
- 仲宗根政善(1975)「今帰仁方言」『今帰仁村史』今帰仁村役場
- 生塩睦子(1975)「沖縄伊江島方言の文末表現」『広島方言研究所紀要 方言研究叢書5』
三弥井書店
- 小川徹(1975)「沖縄本島北部地域における「引」・「親類」・「一門」」『沖縄文化研究(2)』
法政大学沖縄文化研究所
- 田中真砂子(1976)「親族関係語彙と社会組織—沖縄県本部町伊野波の場合—」『民族学研究(41-2)、(43-1)』民族学振興会
- 琉球大学方言研究クラブ(1977)「沖縄県伊平屋島我喜屋方言の音韻体系」『琉球方言(14)』
琉球大学方言研究クラブ
- 天野鉄夫(1978)「国頭郡内主要御嶽の植物方言名」『沖縄県社寺・御嶽林調査報告 1』
沖縄県教育委員会
- 実広慶三(1980)「神歌から琉歌へ—舞の供応性に関する一考察・本部町具志堅の事例を中心に—」『沖縄文化(53)』沖縄文化協会
- 仲宗根政善(1983)「解説・文法」『沖縄今帰仁方言辞典』
- 内間直仁(1983)「沖縄県本部町方言」『全国方言辞典1』
- 仲宗根政善(1983)『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
- 上村幸雄(1983)「単語のリズムアクセント的構造の分析方法—今帰仁村与那嶺方言を例として—」『沖縄言語研究センター会報39』沖縄言語研究センター

- 津波古敏子(1983)「国頭方言の文法をいかに記述すべきか—今帰仁村与那嶺方言の動詞のばあい—」『沖縄言語研究センター会報 40』沖縄言語研究センター
- 仲原弘哲(1983)「今帰仁村の村落(字)変遷—主として文献資料からみて—」『沖縄言語研究センター資料 37』沖縄言語研究センター
- 津波高志(1983)「沖縄本島北部における二村落連称」『南島の地名(1)』南島地名研究センター
- 内間直仁(1983)「沖縄本部町瀬底方言の助詞」『琉球の方言(8)』法政大学沖縄文化研究所
- 野原三義(1983)「沖縄国頭村辺野喜方言の助詞」『琉球の方言(8)』法政大学沖縄文化研究所
- 内間直仁(1984)「沖縄本島の方言の文法—記述とその目的—」『国文学 解釈と鑑賞(第49巻 1号)』至文堂
- 生塩睦子(1984)「複合名詞のアクセント—沖縄伊江島の場合—」『現代方言学の課題(第2巻)』明治書院
- 新里幸昭(1984)「国頭郡の文学—古謡(オタカベ・キューナ・ウムイ)の世界—」『沖縄本島北部の国語教材開発と実践』(研究集録・教第97号)沖縄県立教育センター
- 平山良明(1984)「国頭おもろの性格」『沖縄本島北部の国語教材開発と実践』(研究集録・教第97号)沖縄県立教育センター
- 吉川安一(1984)「沖縄本島北部の文学材への視点」『沖縄本島北部の国語教材開発と実践』(研究集録・教第97号)沖縄県立教育センター
- 上村幸雄(1984)「[書評] 仲宗根政善著『沖縄今帰仁方言辞典』」『言語研究 第85号』日本言語学会
- 崎村弘文(1984)「沖縄今帰仁方言のアクセント体系」『文献探究(14)』文献探究の会
- 田名真之(1984)『南島地名考—おもろから沖縄市誕生まで—』ひるぎ社
- 仲宗根政善(1985)「今帰仁方言について」『学士会会報 766』学士会
- 生塩睦子(1985)「沖縄伊江島方言の語アクセント」『沖縄文化研究(11)』法政大学沖縄文化研究所
- 崎村弘文(1985)「今帰仁方言のアクセント体系・追考」『沖縄文化研究(11)』法政大学沖縄文化研究所
- 曾根信一(1985)「多幸山の地名」『南島の地名(2)』南島地名研究センター
- 玉城三郎(1985)「今帰仁の地名から」『南島の地名(2)』南島地名研究センター
- 渡久地正清(1985)「伊平屋地名探訪」『南島の地名(2)』南島地名研究センター
- 野原三義(1986)「宜野座村漢那方言の助詞」『琉球の方言(10)』法政大学沖縄文化研究所
- 新里幸昭(1986)「大宜見村喜如嘉の屋号—その成り立ちと特徴」『名護博物館紀要 2 あじまあ』名護市立博物館
- 渡久地伸・比嘉久(1986)「山のくらしと地名—羽地大川流域について」『名護博物館紀要 2 あじまあ』名護市立博物館
- 島袋幸子(1987)「今帰仁方言の動詞のテンスとアスペクト」『琉球方言論叢—琉球方言研究クラブ創立30周年記念論集—』

- 宮城真治『山原 その村と家と人と』（名護市史叢書・3）名護市役所
- 新里幸昭(1987)「大宜見村喜如嘉方言の音韻の研究」『名護博物館紀要 3 あじまゝ』名護市立博物館
- 大城昌代(1987)「今帰仁村与那嶺方言における単語アクセントの体系について—『今帰仁方言辞典』を資料として—」『沖縄言語研究センター資料 No.70』沖縄言語研究センター
- 仲原弘哲(1987)「笹森儀助・山原関係資料目録」『沖縄県地域史協議会誌 (10)』沖縄県地域史協議会
- 生塩睦子(1987)「伊江島方言の音韻対応」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
- 島袋幸子(1987)「今帰仁方言における動詞のテンス・アスペクト」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
- 末吉武光(1987)「金武方言特徴の概要—音韻を中心に—」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
- 新里幸昭(1988)「沖縄本島方言形容詞の言い切りの形—その成り立ちと分布について—」『名護博物館紀要 4 あじまゝ』名護市立博物館
- 中本正智・篠崎晃一(1988)「沖縄本島首里と恩納のアクセント—聴覚的特徴と音響的特徴の対比分析—」『琉球の方言 (13)』法政大学沖縄文化研究所
- 島袋幸子・狩俣繁久(1989)「今帰仁方言の動詞の文法的なカテゴリー—アスペクトとヴォイス—」『ことばの科学 第2集』むぎ書房
- 池宮正治翻字(1989)『宜野座村字松田（古知屋）の組踊集』宜野座村教育委員会
- 島袋幸子(1989)「今帰仁方言動詞のアスペクトとヴォイス」『沖縄言語研究センター資料 80』沖縄言語研究センター
- 上村幸雄(1990)「単語のリズム・アクセント的構造の分析方法—今帰仁与那嶺方言を例にして—」『国文学論集（琉球大学法文学部紀要）33』琉球大学法文学部
- 長元朝浩(1991)「相思樹に吹く風—仲宗根政善と時代—」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社
- 島袋幸子(1992)「沖縄北部方言」『言語学大辞典（第4巻）』三省堂
- 狩俣繁久(1992)「沖縄・戦後の知的所産—『今帰仁方言辞典』—」『新沖縄文学』沖縄タイムス社
- 内間直仁(1992)「瀬底島方言」『国文学 解釈と鑑賞（第57巻 7号）』至文堂
- 生塩睦子(1992)「伊江島方言」『国文学 解釈と鑑賞（第57巻 7号）』至文堂
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1993)「伊是名方言における副詞・助詞の研究」『沖縄方言研究（第13号）』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 名嘉真三成(1993)「伊是名諸見方言の音韻と語法」『島の文化と社会—伊平屋村・伊是名村—』ひるぎ社
- 長元朝浩(1993)「相思樹に吹く風—仲宗根政善と時代—（第2部）」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1994)『沖縄方言研究 第13号 伊是名方言における副詞・助詞の研究』
- 生塩睦子(1994)『伊江島のはなしことば』伊江村教育委員会

- 小林公江(1994)「国頭村安波の臼太鼓一歌の伝承に関する一考察」『沖縄芸術の科学 第7号』沖縄県立芸術大学附属研究所
- 岡村トヨ(1994)『金武ことば』岡村トヨ
- 橋尾直和(1995)「Some Observation on Tense and Aspect in Iejima Dialect」『琉球の方言 (18・19)』法政大学沖縄文化研究所
- 沖縄文化研究編集部(1996)「仲宗根政善先生略年譜」『沖縄文化研究 (22)』法政大学沖縄文化研究所
- 新里幸昭 他(1996)『喜如嘉の方言』喜如嘉誌刊行会
- 生塩睦子(1997)「沖縄伊江島方言の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
- 宮城さつき(1998)「名護市真喜屋の屋号」『方言 第6号 上巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 末吉節子(1998)「方言札・伊是名共通語」『EDGE No.7』APO
- 生塩睦子(1999)『沖縄 伊江島方言辞典』伊江村教育委員会
- 生塩睦子(1999)『沖縄 伊江島方言辞典 索引編』伊江村教育委員会
- 仲間恵子(2000)「沖縄本島北部金武方言—その位置づけ—」『琉球アジア社会文化研究 第3号』琉球大学大学院人文社会科学研究科地域文化専攻アジア社会文化領域
- 内間直仁・新垣公弥子(2000)『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房
- 宮城信八(2000)『シマフトゥバ 大宜味村 田嘉里の方言』
- 生塩睦子(2001)「沖縄伊江島方言の格助詞」『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究「環太平洋の言語」日本班成果報告書』
- 島袋かおる(2001)「今帰仁村字諸志方言の音韻研究」『方言 第9号』沖縄国際大学野原ゼミ
- 島袋幸子(2001)「沖縄今帰仁方言のアスペクト」『言語』大修館書店
- 生塩睦子(2002)「沖縄伊江島方言のとりたて助詞」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究「環太平洋の言語」日本成果報告書』
- 津波古敏子(2002)「屋我地方言の助詞の概観」『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』
- 仲里長和(2002)『本部町字具志堅の方言 附 具志堅の小地名・屋号等』沖縄高速印刷株式会社
- 運天成(2003)「琉球方言の形容詞～今帰仁方言を中心に～」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 島袋沙季(2003)「宜野座村字漢那の方言語彙」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 玉城祥子(2003)「源河と真喜屋の敬語表現の比較」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 内間早俊他(2003)「国頭村字宇嘉方言の音韻」『沖縄本島国頭方言の調査報告』
- 宮平圭一郎他(2003)「国頭村字佐手方言の音韻」『沖縄本島国頭方言の調査報告』
- 山口栄臣(2003)「惣慶方言の音韻」『沖縄本島国頭方言の調査報告』
- 生塩睦子「沖縄伊江島方言の動詞の活用」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院
- 橋尾直和「伊江島方言のテンス・アスペクトに関する一考察」『人文学報 (243)』東京国立大学
- 松田美由紀「本部町字備瀬方言における動詞の活用形について」『方言 第5号 上巻』

沖縄国際大学野原ゼミ

- かりまたしげひさ (2008) 「沖縄県名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたて ga 格、nu 格、ハダカ格、ja のとりたて形」『日本東洋文化論集』〈琉球大学法文学部紀要〉14
- 狩俣繁久 (2008) 「リレー連載；私のフィールドノートから…発見とときめきのフィールド言語学(22)—幸喜方言」『言語』(大修館書店) 37-10
- かりまたしげひさ (2012) 「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要』18
- (2012) 「世富慶誌」世富慶区字誌編集委員会

沖縄方言

- 金城朝永 (1934) 「首里・那覇方言における親族関係の語に就いて」『方言 (4-1)』春陽堂
- 大湾政和 (1937) 「アクセントに現れた東京語と那覇語」『南島論叢 (伊波普猷先生還暦記念)』沖縄日報社
- 島袋盛敏 (1937) 「首里の物語」『南島論叢 (伊波普猷先生還暦記念)』沖縄日報社
- 金城朝永 (1944) 『那覇方言概説』三省堂
- 東恩納寛惇 (1949) 「那覇の町」『沖縄文化 (5)』沖縄文化協会
- 東恩納寛惇 (1951) 「首里古図の作成年代につき追補」『沖縄文化 (24)』沖縄文化協会
- 宮良当壮 (1951) 「人間一生の行事—首里の民俗—」『沖縄文化 (24)』沖縄文化協会
- 島袋盛敏 (1952) 「沖縄のわらべ言葉 (下) —沖縄語辞典より (5) —」『沖縄文化 (26)』沖縄文化協会
- 島袋盛敏 (1952) 「沖縄のわらべ言葉 (上) —沖縄語辞典より (4) —」『沖縄文化 (25)』沖縄文化協会
- 仲原善忠 (1955) 『注記 君南風由来並位階且公事 (稿本)』
- 堀井度 (1955) 「沖縄島尻郡久米島のユタ」『山陰民俗 (5)』
- 中本正智 (1958) 「奥武方言の動詞の活用」『琉球方言 (創刊号)』琉球大学方言研究クラブ
- 大藤時彦 (1960) 「久米島見聞記」『伝承文化 創刊号』
- 琉球大学方言研究クラブ (1960) 「東京方言における 1 音節名詞に対応する沖縄南部方言のアクセント」『琉球方言 (2)』琉球大学方言研究クラブ
- 鈴木重幸 (1960) 「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学 (41 集)』国語学会
- 中本正智 (1960) 「沖縄南部の 1・2 音節語のアクセント」『国語学 (41 集)』国語学会
- 比嘉政夫 (1960) 「旧那覇市垣花方言のアクセント体系」『国語学 (41 集)』国語学会
- 嘉味田宗栄 (1962) 「真謝・首里方言と標準日本語—比較考察の地ならしの一例として—」『沖縄文化 (6)』沖縄文化協会
- 大城健 (1962) 「糸満方言概説」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第 6 号』琉球大学文理学部
- 嘉味田宗栄 (1962) 「真謝・首里方言と標準日本語 (その 2)」『沖縄文化 (7)』沖縄文化協会
- 嘉味田宗栄 (1962) 「とらえ方による表現美の類型—首里方言動詞を中心に—」『沖縄文化 (9)』沖縄文化協会

- 仲原善忠（1962）「たまおどん（玉陵）の碑文」『沖縄文化（9）』沖縄文化協会
- 上村幸雄（1963）「首里方言の文法」『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 大城健（1963）「糸満方言のアクセント・文法・語彙」『琉球大学文理学部紀要（7）』琉球大学文理学部
- 嘉味田宗栄（1963）「比較考察の一観点（1）—首里方言の語詞—」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第7号』琉球大学文理学部
- 伊豆山敦子（1963）「首里語彙研究」『国語学（53集）』国語学会
- 嘉味田宗栄（1963）「比較考察の一観点—首里方言を中心に—」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第7号』琉球大学文理学部
- 徳川宗賢（1963）「沖縄の親族語彙—首里土族の用語—」『沖縄文化（13）』沖縄文化協会
- 石川友紀（1963）「<南島のあいさつことば>沖縄那覇市首里赤田町地方」『方言研究年報（6）』広島大学国語学研究室
- 兼島恵紀（1963）「<南島のあいさつことば>沖縄島尻郡糸満町糸満地方」『方言研究年報（6）』広島大学国語学研究室
- 嘉味田宗栄（1963～1967）「比較考察の一観点 首里方言を中心に」『琉球大学文理学部紀要（7-11）』琉球大学文理学部
- 沖縄大学学生文化協会（1964）「久米島調査特集」『郷土（創刊号）』
- 嘉味田宗栄（1964）「首里方言における性状表現の構造」『国語学（56集）』国語学会
- 野原三義（1964）「那覇方言動詞の活用」『琉球方言（6）』琉球大学方言研究クラブ
- 嘉味田宗栄（1964）「比較考察の一観点（2）—首里方言と古典語との比較—」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第8号』琉球大学文理学部
- 嘉味田宗栄（1965）「比較考察の一観点（3）—首里方言を中心に—」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第9号』琉球大学文理学部
- 嘉味田宗栄（1966）「比較考察の一観点（4）—首里方言を中心に—」『琉球大学文理学部紀要人文篇 第10号』琉球大学文理学部
- 武永睦子（1966）「沖縄久米島真謝方言の程度副詞」『方言研究年報（9）』広島大学国語学研究室
- 桜井満（1967）「イザイホーの意義」『南と北（40）』南方同胞援護会
- 仲原善秀（1967）「久米島の「わらべうた」から」
- 沖縄学生文化協会（1968）「栗国島・久米島具志川村調査報告」『郷土（7）』
- 仲宗根政善（1968）「沖縄久高方言の閉鎖音について」『都立大学方言学会会報（25）』都立大学方言学会
- 池口権一郎（1969）『久米島事情』
- 内間直仁（1969）「沖縄久米島仲里村儀間方言の音韻体系」『都立大学論究（8）』都立大学国語国文学会
- 野原三義（1970）「沖縄那覇方言の助詞」『方言研究の問題点』明治書院
- 後藤剛（1971）「鳥島方言雑考」『中央大國文（14）』中央大学
- 比嘉春潮（1972）「首里ことばあれこれ」『言語生活（251）』筑摩書房
- 宮里朝光（1973）「首里語のはなし」『琉球の文化（4）』
- 中松竹雄（1973）「ことばの地理学—久米島におけるカタグルマの言語地図とその解釈—」

『琉球の文化 (3)』

- 中本正智 (1973) 「動詞語彙の意味記述—琉球奥武方言例を中心に—」『人文学報 (96)』
東京都立大学
- 湧上元雄 (1973) 「日本文学発生史と沖縄の呪術文学 (2) —久高島のイザイホーのテイルル考—」『琉球大学国文学論集 (第17号)』琉球大学法文学部
- 高橋俊三 (1973) 『久米仲里旧記神名・歌謡索引 (自家謄写版)』自家謄写
- 湧上元雄 (1974) 「糸満の年中行事」『糸満の民俗<糸満漁業民俗資料緊急調査>』沖縄県教育委員会
- 沖縄大学沖縄学生文化協会 (1975) 「久米島・中島村謝名堂部落調査報告」『郷土 (14)』
- 上江洲均 (1976) 「池口権四郎の報告書「久米島事情」」『沖縄県立博物館紀要(2)』沖縄県立博物館
- 野原三義 (1976) 「沖縄那覇方言の動詞の活用 (1)」『沖縄国際大学文学部紀要 (国文学篇) 4-2』沖縄国際大学文学部
- 野原三義 (1976) 「沖縄那覇方言の動詞の活用 (2)」『沖縄国際大学文学部紀要 (国文学篇) 5-1』沖縄国際大学文学部
- 望月真澄 「『日本風土記』の表わす首里語について (1977)」『山梨県立女子短期大学紀要 (10)』山梨県立女子短期大学
- 菊山正明 (1977) 「久米具志川間切公事帳について」『沖縄文化研究 (4)』法政大学沖縄文化研究所
- 野原三義 (1977) 「沖縄那覇方言の音韻」『沖縄国際大学文学部紀要 (国文学篇) 6-1』沖縄国際大学文学部
- 田中真治 (1978) 「渡嘉敷島における墓制について—特に親族組織との対応において—」『地域文化研究 第2・3合併号』甲南大学地域文化研究会
- 中沢章浩 (1978) 「座間味島における御嶽登りに関して」『地域文化研究 第2・3合併号』甲南大学地域文化研究会
- 平野祐二 (1978) 「「沖縄島並慶良間島座間味邑創立当時の事蹟」—資料紹介と注釈及び解説—」『地域文化研究 第2・3合併号』甲南大学地域文化研究会
- 中本正智 (1978) 「首里王朝の言語 (1) —人称代名詞の形成と発展—」『琉球の方言 (4)』法政大学沖縄文化研究所
- 湧上元雄 (1979) 「イザイホーを位置づける民俗概観」『イザイホー調査報告』県教育委員会
- 多和田真一郎 (1979) 「十五・六世紀首里語の音韻 (上) —「語音翻訳」にみる—」『沖縄文化 (51)』沖縄文化協会
- 多和田真一郎 (1979) 「十五・六世紀首里語の音韻 (下)」『沖縄文化 (52)』沖縄文化協会
- 湧上元雄 (1979) 「イザイホーの神歌」『国文学 解釈と鑑賞 (第44巻 8号)』至文堂
- 言語地理学定例研究会 (1979) 『琉球列島の言語研究』第1調査票用参考資料 (首里方言)』
『沖縄言語研究センター資料 18』沖縄言語研究センター
- 言語地理学定例研究会 (1979) 『琉球列島の言語研究』第2調査票用参考資料 (首里方言)』
『沖縄言語研究センター資料 19』沖縄言語研究センター
- 中本正智 (1979) 「首里王朝の言語 (2) —人間関係の性・年齢・親疎等を基準とする語彙

- 一」『琉球の方言（5）』法政大学沖縄文化研究所
湧上元雄（1979）「久高島のハンザナシーのアラシヘー」『沖縄民俗研究（2）』沖縄民俗研究会
琉球大学方言研究クラブ（1980）「久高島方言—音韻を主として—」『沖縄言語研究センター資料 27』沖縄言語研究センター
琉球大学方言研究クラブ（1980）「久高方言の音韻と語彙」『琉球方言（15）』琉球大学方言研究クラブ
沖縄国際大学高橋ゼミ（1981）「渡名喜方言調査報告」『沖縄方言研究（第3号）』沖縄国際大学高橋ゼミ
内間直仁（1981）「久米島鳥島方言の文法」『琉球の方言（6）』法政大学沖縄文化研究所
内間直仁（1981）「久米島仲里村儀間方言の文法」『琉球の方言（6）』法政大学沖縄文化研究所
中本正智（1981）「鳥島方言の語彙」『琉球の方言（6）』法政大学沖縄文化研究所
野原三義（1981）「久米島具志川村鳥島方言の文例」『琉球の方言（6）』法政大学沖縄文化研究所
小玉正任（1981）「奥武島考」『沖縄文化（55）』沖縄文化協会
武藤美也子・平野祐二・中沢章浩・中村照明（1981）「沖縄の祭祀—渡名喜村「島直シ」祭祀—」『地域文化研究 第4号』甲南大学地域文化研究会
西表宏・波照間永吉・安里秀正・島尻克美 など（1982）「久米島御嶽・拝所・旧跡・古島地図」『沖縄久米島』弘文堂
湧上元雄（1982）「南島の聖域とイザイホー」『日本の聖域 7 沖縄の聖なる島々』佼成出版社
内間直仁（1982）「ハ行・ラ行四段動詞の活用—久米島具志川村鳥島方言を中心に—」『沖縄久米島』弘文堂
名嘉真三成（1982）「久米島西銘方言の形容詞」『沖縄久米島』弘文堂
中本正智（1982）「沖縄久米島における国語教育」『沖縄久米島』弘文堂
野原三義（1982）「久米島方言の助詞」『沖縄久米島』弘文堂
藤原敬治（1982）「久米島方言の音韻—西銘方言を中心に—」『沖縄久米島』弘文堂
外間守善・西表宏・島村幸一・安里秀正・波照間永吉（1982）「久米島オモロの解釈」『沖縄久米島』弘文堂
屋比久浩（1982）「久米島方言の動詞・形容詞の構造について」『沖縄久米島』弘文堂
当山昌直（1983）「阿嘉島の動物の方言について」『県立博物館総合調査報告書—座間味村—』沖縄県立博物館
高橋俊三（1983）「渡名喜の方言」『渡名喜村誌』渡名喜村
加治工真市（1983）「首里方言入門」『月刊 言語（第12巻4号）』大修館書店
新垣源勇（1983）「知念村の海岸地名」『南島の地名（1）』南島地名研究センター
久手堅憲夫（1983）「首里の地名のなかから」『南島の地名（1）』南島地名研究センター
知念融（1983）「知念行」『南島の地名（1）』南島地名研究センター
比嘉松吉（1983）「渡名喜村の陸と海の地名」『南島の地名（1）』南島地名研究センター
西表宏・波照間永吉・安里秀正・島尻克美・島村幸一 など（1983）「久米島仲里間切各諸

- 村公事帳」『沖縄久米島 資料篇』弘文堂
- 西表宏・波照間永吉・安里秀正・島尻克美・島村幸一 など (1983) 『琉球国由来記』所載久米島御嶽の現状」『沖縄久米島 資料篇』弘文堂
- 仲村正昌・西表宏・波照間永吉・安里秀正・島尻克美など (1983) 「久米島各集落民俗遺跡地図」『沖縄久米島 資料篇』弘文堂
- 言語地理学定例研究会 (1983) 『琉球列島の言語研究』第3 調査票用参考資料 (首里方言) 『沖縄言語研究センター資料 48』沖縄言語研究センター
- 言語地理学定例研究会 (1983) 「琉球列島の言語の研究」第3 調査票用参考資料 (首里方言) 『沖縄言語研究センター資料 49』沖縄言語研究センター
- 野原三義 (1984) 「沖縄那覇方言の係助詞・副助詞—琉球方言の鳥瞰を含む—」『現代方言学の課題 (第2 卷)』明治書院
- 比嘉実 (1984) 「君南風之始祖伝記一」『沖縄研究資料 (5)』法政大学沖縄文化研究所
- 比嘉実 (1984) 「君南風之始祖伝記二」『沖縄研究資料 (5)』法政大学沖縄文化研究所
- 上原孝三 (1985) 「久高島研究文献目録」『沖縄久高島調査報告書』法政大学
- 上原孝三 (1985) 「久高島の地名」『沖縄久高島調査報告書』法政大学
- 内間直仁 (1985) 「久高島方言の文法とその特性」『沖縄久高島調査報告書』法政大学
- 大城学 (1985) 「久高島の祭祀」『沖縄久高島調査報告書』法政大学
- 外間守善・波照間永吉 (1985) 「久高島及び周辺聖域の神歌—オモロの解釈を中心に—」『沖縄久高島調査報告書』法政大学
- 内間直仁 (1985) 「久米島仲里村儀間方言の語彙」『琉球の方言 (9)』法政大学沖縄文化研究所
- 野原三義 (1985) 「久米島仲里村真謝方言の助詞・助動詞」『琉球の方言 (9)』法政大学沖縄文化研究所
- 中村昌尚 (1985) 「久米島における地名」『琉球の歴史と文化 (山本弘文博士環暦記念論集)』山本弘文博士環暦記念論集編集委員会
- 川平朝申 (1985) 「沖縄の地名・区画の変遷—とくに旧那覇市の町名—」『南島の地名 (2)』南島地名研究センター
- 知念融 (1985) 「那覇市泉崎付近の地名」『南島の地名 (2)』南島地名研究センター
- 宮城幸吉 (1985) 「久米島の地図にみる地名」『南島の地名 (2)』南島地名研究センター
- 南部振興会 (1985) 『島尻郡誌 (復刻版)』南部振興会
- 津波古敏子 (1986) 「沖縄南部方言における形容詞形態論の輪郭 (上)」『沖縄大学紀要第5 号 (通巻 25 号)』沖縄大学
- 久手堅憲夫 (1986) 「「しより・シュイ・首里」考」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社
- 下地恵三 (1986) 「私見 「首里の地名」」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社
- 言語地理学定例研究会 (1986) 「沖縄南部言語地図—1986 年 5 月沖縄南部全集落調査票から—」『沖縄言語研究センター資料 61』沖縄言語研究センター
- 金城誠 (1986) 「星の方言名—糸満市字糸満—」『やちむん (9)』
- 下地恵三 (1987) 「首里・那覇の地名由来」『宮古毎日』宮古毎日社
- 比嘉成子 (1987) 「<資料紹介> 首里方言自由会話「旧正月と大晦日の思い出」」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会

- 比嘉政夫（1987）「那覇市垣花方言におけるアクセントの統一成功的機能—シシヌシルーとシシヌーシルー」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
- 比嘉政夫（1987）「那覇市垣花方言におけるアクセントの統制的機能」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
- 仲井間八重子（1987）『なくなりつつある 那覇の方言 その表記についての私案』
- 笠原政治（1988）「内なる神祭り、外への先祖拝み—沖縄渡名喜島にみる祭祀世界の構図—」『沖縄文化研究（14）』法政大学沖縄文化研究所
- 名嘉真三成（1988）「沖縄糸満方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要（33）』琉球大学教育学部
- 中本正智・篠崎晃一（1988）「沖縄本島首里と恩納のアクセント—聴覚的特徴と音響的特徴の対比分析—」『琉球の方言（13）』法政大学沖縄文化研究所
- 津波古敏子（1989）「不完成相につきまとう臨場性—首里方言の場合—」『ことばの科学 第 2 集』むぎ書房
- 真喜志瑤子（1989）「幾内としての首里みしまについて」『沖縄文化研究（15）』法政大学沖縄文化研究所
- 大城学（1989）「沖縄久高島のティルル」『文学（第 57 巻 11 号）』岩波書店
- 中本正智（1991）「沖縄奥武方言の表現法」『日本語論考』桜楓社
- 沖縄国際大学高橋ゼミ（1991）『沖縄方言研究 第 11 号 久米島方言の言語地理学的研究』
- 沖縄国際大学高橋ゼミ（1991）「久米島方言の言語地理学的研究」『沖縄方言研究（第 11 号）』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 川平朝申（1991）「沖縄の地名・区画の変遷—とくに旧那覇市の町名—」『神・村・人』第一書房
- 森みどり・梅沢薫・大藤トヨコ・高村智子 他（1991）「琉球語首里方言調査に基づく音韻体系と形態分析についての一考察」『琉球の方言（15）』法政大学沖縄文化研究所
- 東喜望（1991）「渡名喜島の民間伝承」『沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究』法政大学沖縄文化研究所
- 中本正智（1991）「沖縄渡名喜島のことば」『沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究』法政大学沖縄文化研究所
- 津波古敏子（1992）「首里方言の擬音・擬態を表現する文法的なかたち」『沖縄大学紀要 第 9 号(通巻 29 号)』
- 真喜志康忠・山田尚子・月野美奈子（1992）『那覇の方言（那覇市方言記録保存調査）』沖縄言語研究センター
- 仲村昌尚（1992）『久米島の地名と民俗』久米島の地名と民俗刊行委員会
- 野原三義（1992）「那覇方言敬語論ノート」『沖縄国際大学文学部紀要（第 21 巻第 1 号通巻第 33 号）』沖縄国際大学文学部
- 宮良信詳（1993）「沖縄本島首里方言における複合語と連濁について」未公刊論文
- 狩俣繁久（1993）「久高島方言—その音声的な特徴からみた位置づけ—」『沖縄・久高島のイザイホー』砂子屋書房
- 久万田晋・寺内直子（1993）「座間味村阿嘉の年中行事—ハマウリ（浜下り）を中心にし

- て一』『沖縄芸術の科学 第6号』沖縄県立芸術大学附属研究所
- 上原孝三(1993)「イザイホー—聖地籠りに関する覚え書」『沖縄久高島のイザイホー』砂子屋書房
- 大城学(1993)「イザイホーの儀礼と歌謡」『沖縄久高島のイザイホー』砂子屋書房
- 狩俣繁久(1993)「久高島の方言」『沖縄久高島のイザイホー』砂子屋書房
- 宮里千里(1993)「回想のティルルー久高島祭祀採音紀行」『沖縄久高島のイザイホー』砂子屋書房
- 野原三義(1994)「那覇方言語彙稿」『沖縄国際大学文学部紀要』22 沖縄国際大学文学部
- 宮良信詳・新川智清(1994)「沖縄本島与那原方言における中舌高母音音素*i*/について」『言語研究 第105号』日本言語学会
- 沖縄言語研究センター(1994)『那覇の方言 那覇市方言記録保存調査Ⅰ 沖縄言語研究センター研究報告4』
- 沖縄言語研究センター(1994)『那覇の方言 那覇市方言記録保存調査Ⅲ 沖縄言語研究センター研究報告5』
- 外間美奈子(1994)「那覇方言の音声資料の収集とテキスト化」『那覇の方言(那覇市方言記録保存調査)Ⅰ』沖縄言語研究センター
- 石原昌英(1995)「沖縄本島首里方言の基底表示と子音の口蓋化」『Southern Review』10
- 仲原穰(1996)「久米島関連オモロにあらわれる人物」『沖縄文化(83)』沖縄文化協会
- 加治工真市(1996)「久高島方言音韻論序説」『日本語研究諸領域の視点 下巻』平山輝男博士米寿記念会
- 仲里真由美(1998)「南風原町方言の動詞の活用」『方言 第6号 上巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 名護千晶(1998)「那覇方言における音韻の研究」『方言 第6号 上巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 宮城亮子(1998)「首里方言における動詞の意味論的研究」『方言 第6号 上巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 高江洲頼子(1999)「琉球語・首里方言」『世界のことば100語辞典アジア編』三省堂
- 中松竹雄(1999)『新版 沖縄語の文法』沖縄言語文化研究所
- 宮良信詳(2000)『うちなーぐち講座—首里ことばのしくみ』沖縄タイムス社
- 内間直仁・新垣公弥子(2000)『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房
- 狩俣繁久(2001)「[書評]『首里ことばの入門』宮良信詳著」『沖縄タイムス』
- 新垣郁恵(2001)「具志頭村字仲座方言の音韻研究」『方言 第9号』沖縄国際大学野原ゼミ
- 親川聖子(2001)「知念村字久高・志喜屋の屋号について」『方言 第9号』沖縄国際大学野原ゼミ
- 久志貴子(2001)「首里方言と糸満方言の違い」『方言 第9号』沖縄国際大学野原ゼミ
- 国吉伸朗(2001)「与那原方言の音韻」『方言 第9号』沖縄国際大学野原ゼミ
- 普天間春奈(2001)「佐敷町字富祖崎の屋号」『方言 第9号』沖縄国際大学野原ゼミ
- 宮平由希代(2001)「座間味村字座間味の屋号について」『方言 第9号』沖縄国際大学野原ゼミ

- ARAKAKITomoko (2002) 「The Study of Grammar in Luchuan:Focusing upon the verb from in Shuri dialect」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (2)「環太平洋の言語」日本成果報告書』
- 高江洲頼子 (2002) 「ウチナーヤマトウグチをめぐって」『国文学解釈と鑑賞』67-7 至文堂
- 米須瑠衣子 (2002) 「那覇方言における植物方言語彙」『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』
- 高江洲頼子 (2002) 「渡名喜島方言の音韻」『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』
- 西岡敏 (2002) 「沖縄語首里方言の終助詞付き用言語彙資料」『琉球の方言 (26)』法政大学沖縄文化研究所
- 我如古朋子 (2003) 「首里方言のなかの中国語」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 漢那崇友 (2003) 「首里方言と具志頭方言の身体に関する語彙の比較研究」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 高江洲頼子 (2003) 「琉球語・首里方言」『世界のことば・出会いの表現辞典』三省堂
- 石垣輪子 (2003) 「石垣市石垣方言と那覇市楚辺方言の敬語表現」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 金城亜希 (2003) 「南風原町字津嘉山の屋号～方角のつく屋号について～」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 玉城慎哉 (2003) 「大里村で話される若者言葉」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 平良美樹 (2003) 「沖縄県糸満市字大里の屋号の構造」『沖縄本島国頭方言の調査報告』
- 宮平圭一郎 (2003) 「沖縄県玉城村字中山の一家族における方言継承度の実態～60代、40代、20代から～」『沖縄本島国頭方言の調査報告』
- 西岡敏 (2003) 「沖縄語首里方言の敬語付き動詞」『琉球の方言 (27)』法政大学沖縄文化研究所
- 仲原穰 (2004) 「久米島真謝方言動詞の活用」『琉球の方言 (28)』法政大学沖縄文化研究所
- かりまたしげひさ (2005) 「特集；音声データの保存・公開——「琉球語音声データベース」消滅に瀕する琉球語の記録・保存」『音声研究 (日本音声学会)』09-03
- 崎村弘文 (2006) 「沖縄首里方言における複合名詞音調規則について」『筑紫語学論叢 2 日本語史と方言』
- 鄭相哲 (2006) 「首里方言の述語構造について動作性述語を中心に」『日本研究』29
- 西岡敏 (2006) 「『遺老説伝』の沖縄語テキスト化首里地域に関わる冒頭部の首里方言訳」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』11-01
- 工藤真由美；高江洲頼子；八亀裕美 (2007) 「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンスシャリティー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47
- 梶茂樹 (2007) 「<新刊紹介>伊豆山敦子編『放送録音テープによる琉球・首里方言—服部四郎博士遺品』」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信 (東京外国語大学)』119
- 高江洲頼子 (2007) 「沖縄県那覇市首里方言の形容詞」『日本語形容詞の文法標準語研究を超えてひつじ研究叢書 (言語編)』63

- 高江洲頼子(2007)「沖縄県那覇市首里方言の形容詞」『日本語形容詞の文法標準語研究を超えてひつじ研究叢書(言語編)』63
- 野原三義(2010)「那覇方言・首里方言, 沖縄方言」『国文学解釈と鑑賞特集: 危機言語としてのアイヌ語と琉球語』75-01
- 仲間恵子(2010)「首里那覇方言音声データベース」『国文学解釈と鑑賞特集: 危機言語としてのアイヌ語と琉球語』75-01
- 津波古敏子(2010)「首里方言の文法—研究史と文法的な特徴—」『国文学解釈と鑑賞特集: 危機言語としてのアイヌ語と琉球語』75-01
- 本永清(2010)「ロシアの東洋学者ニコライ・A・ネフスキーが書き遺したものの人頭税関連語彙」『沖縄文化玉城政美先生追悼号』44-02
- 服部且; 上村幸雄(2011)「服部四郎昭和30('55)年12月18日琉球大学送別会演説草稿—昭和30('55)年当時の“正調”沖縄首里方言の記録—」『大妻女子大学紀要—文系—』43
- 永野マドセン泰子(2011)「首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション」『琉球の方言』35
- 仲原穰; 比嘉恒明; 仲里政子; 新垣恒成; 国吉朝政(2012)「現代首里方言訳『沖縄対話』(1) —「第一章四季の部」(春・夏)—」『沖縄芸術の科学沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』24

奥武方言

- 中本謙(2007)「沖縄奥武方言の助詞〔ガ〕〔ヌ〕と〔ガー〕〔ノー〕」『琉球の方言』31 2006年度

久米島方言

- 仲原穰(2006)「久米島真謝方言の名詞のアクセント—「類別語彙」1・2音節名詞を中心に—」『琉球の方言』30 2005年度
- 野原三義(2009)「旧久米島具志川村上江洲方言の助詞」『南島文化』 沖縄国際大学南島文化研究所紀要 31

八重山方言

- 田代安定(1888)「八重山郡島住民ノ言語及び宗教」『東京人類学会雑』東京人類学会
- 宮良当壮(1922)「琉球八重山の名の研究」『史学(第1巻4号)』
- 宮良当壮(1930)「八重山語彙論」東洋文庫
- 喜舎場永殉(1937)「パイフタ・フンタカ・ユングドゥー—黒島の寿詞—」『南島論叢(伊波普猷先生還暦記念)』沖縄日報社
- 宮良当壮(1947)「八重山を憶ふ」『沖縄文化叢説』中央公論社
- 金関丈夫(1955)「八重山群島の古代文化—宮良当壮博士批判に答う—」『民族学研究(19-2)』民族学振興会
- 柴田武(1959)「琉球・与那国方言の音韻」『ことばの研究(国立国語研究所論集1)』国立国語研究所

- 秋永一枝(1960) 「八重山アクセントの概観」『沖縄八重山』校倉書房
- 瀬名波長宜(1960) 「八重山の藁算について—天気俚諺—」『沖縄八重山』校倉書房
- 滝口宏(1960) 『沖縄八重山』校倉書房
- 南 不二男(1960) 「日本語 hu・ho と八重山・石垣方言 fu・pu の対応」『ことば (22)』ことばの会
- 喜舎場永殉(1960) 「八重山民謡の史的考察」『月刊 琉球文学 (4~8)』武蔵野女子短期大学琉球文学講座
- 宮良当壮(1960) 「八重山のあがろうざあ節」『月刊 琉球文学 (7)』武蔵野女子短期大学琉球文学講座
- 秋永一枝(1960) 「<寄せ書き> 八重山方言 1・2 音節名詞のアクセントの傾向」『国語学 41』国語学会
- 宮良当壮(1961) 「方言の実態と共通語の問題点—沖縄先島—」『方言学講座 (4)』東京堂
- 加治工真市(1961) 「鳩間方言の音韻体系について」『琉球方言 (3)』琉球大学方言研究クラブ
- 伊藤幹治(1962) 「八重山群島における兄弟姉妹を中心とした親族関係」『民俗学研究 (27-1)』民族学振興会
- 高橋俊三(1963) 「<南島のあいさつことば> 沖縄八重山郡与那国町祖納地方」『方言研究 年報 (6)』広島大学国語学研究室
- 上村幸雄(1964) 「[書評] 平山輝男・中本正智『琉球与那国方言の研究』」『言語生活 一五四号』筑摩書房
- 平山輝男(1964) 「琉球与那国島方言の特色」『音声学会会報 115』
- 平山輝男・中本正智(1964) 『琉球与那国方言の研究』東京堂
- 平山輝男(1965) 「琉球与那国方言アクセントの研究」『音声の研究 (11)』
- 永山勇(1965) 「先島(宮古・八重山)方言覚え書 (1)」『国語研究 (16)』山形大学
- 平山輝男(1966) 「琉球先島方言の研究」『都立大学方言学会会報 (16)』都立大学方言学会
- 永山勇(1966) 「先島(宮古・八重山)方言覚え書 (2)」『国語研究 (17)』山形大学
- 平山輝男(1966) 「琉球先島方言のアクセント体系」『国語学 (67 集)』国語学会
- 平山輝男(1967) 「琉球西表祖納方言のアクセント体系」『音声の研究 (13)』
- 平山輝男(1967) 「琉球石垣方言のアクセント体系とその系譜」『人文学報 (56)』東京都立大学
- 喜舎場永殉(1967) 『八重山民謡誌』沖縄タイムス社
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 寺田透(1968) 「八重山の歌と踊り」『文学 (第 36 卷 1 号)』岩波書店
- 加治工真市(1968) 「鳩間島古歌の一つ・新室寿「アーパーレー」について歌」『沖縄文化 (26・27)』沖縄文化協会
- 北川宏(1969) 「琉球方言の収録から—八重山諸島—」『文献月報 (19-6)』
- 琉球大学方言研究クラブ(1969) 「小浜方言の調査報告—音韻・文法・語彙—」『琉球方言 (9・10)』琉球大学方言研究クラブ
- 宮良安彦(1970) 「平得部落ギシュク御嶽の年中の願いごと」『沖縄文化 (29)』沖縄文化

協会

- 柴田武(1970)「与那国方言における兄弟姉妹の呼称の構造」『民族学研究(35-1)』民族学振興会
- 喜舎場永殉(1970)『八重山古謡 下』沖縄タイムス社
- 喜舎場永殉(1970)『八重山古謡 上』沖縄タイムス社
- 当間一郎(1970)「沖縄の狂言文学(1)―八重山・竹富島の狂言を中心に―」『国際大学国文学(1)』国際大学国文学研究室
- 柴田武(1971)「与那国方言に関する若干の報告」『金田一博士米寿記念論文集』
- 金関丈夫(1971)「波照間―波照間通信4―」『叢書わが沖縄 第三巻 起源論争』木耳社
- 金関丈夫(1971)「八重山群島の古代文化―宮良博士の批判に答う―」『叢書わが沖縄 第三巻 起源論争』木耳社
- 湧上元雄(1971)「西表島の古見村のプルー黒マタ・白マタ・赤マタの祭礼―」『まつり17号』まつり同好会
- 当間一郎(1971)「沖縄の狂言文学(2)―八重山・竹富島の狂言を中心に―」『国際大学国文学(2)』国際大学国文学研究室
- 石垣繁(1971)「八重山・白保方言の研究―その音韻・アクセントについて―」『沖縄文化(36・37)』沖縄文化協会
- 加治工真市(1971)「八重山地方に流布する念仏歌について」『沖縄文化(36・37)』沖縄文化協会
- 宮良安彦(1971)「石垣島・川平諸御嶽の由来と群星御嶽の神口」『沖縄文化(36・37)』沖縄文化協会
- 湧上元雄(1971)「日本文学発生史と沖縄の呪術文学―八重山川平の「マユンガナシの神口」考―」『琉球大学国文学論集(第15号)』琉球大学法文学部
- 加治工真市(1972)「八重山歌謡におけるトゥバラマー節の発生」『文学(第40巻 4号)』岩波書店
- 宮良高弘(1972)『波照間島民俗誌<叢書わが沖縄別巻>』木耳社
- 宮良安彦(1972)「八重山歌謡―原歌とその解説―」『言語生活(251)』筑摩書房
- 宮良高弘(1972)「八重山郡島におけるいわゆる秘密結社について」『沖縄学の課題<叢書わが沖縄第五巻>』木耳社
- 加治工真市(1972)「鳩間方言形容詞の活用について」『都立大学方言学会会報(48)』都立大学方言学会
- 宮城文(1972)『八重山生活誌』宮城 文
- 加治工真市(1973)『<方言録音シリーズ15> 沖縄県八重山鳩間島方言』国立国語研究所 話ことば研究
- 湧上元雄(1973)「南島の訪問者儀礼と仮面―八重山のマユンガナシと赤マター・黒マター―」『青い海(24)』青い海出版社
- 加治工真市(1973)「言語―八重山方言について―」『八重山の社会と文化』木耳社
- 黒島寛松(1974)『植物の西表方言調べ』
- 湧上元雄(1974)「八重山川平村の村落構造と年中行事」『人類科学(26)』九学会連合
- 浦崎永太郎(1974)「土佐方言のミドゥ(水)という発言と八重山方言の親縁性をめぐって」

- 『八重山文化 (1)』東京・八重山文化研究会
当間一郎(1974) 「宮良当壮の人と業績」『八重山文化 (2)』東京・八重山文化研究会
高橋俊三(1975) 「沖縄県八重山郡与那国町の方言の生活語彙」『方言研究叢書 (第4巻)』
三弥井書店
加治工真市(1975) 「波照間の音韻・語彙」『波照間の方言』(琉球方言緊急調査第2集) 沖
縄県教育委員会
名嘉順一(1975) 「波照間の地名・屋号・人名」『波照間の方言』(琉球方言緊急調査第2
集) 沖縄県教育委員会
野原三義(1975) 「波照間の助詞・魚類語彙」『波照間の方言』(琉球方言緊急調査第2集)
沖縄県教育委員会
比嘉政夫(1975) 「波照間の親族語彙・および民族語彙」『波照間の方言』(琉球方言緊急調
査第2集) 沖縄県教育委員会
中本正智・内間直仁・野原三義(1975) 「八重山石垣島川平方言」『琉球の方言 (1)』法政
大学沖縄文化研究所
宮良泰平(1975) 『八重山方言の素性』宮良 作
中沢新一(1975) 「赤マタ・黒マタ」祭祀の構造」『沖縄文化研究 (2)』法政大学沖縄文化
研究所
田中真治(1975) 「八重山地方の宗教形態と機能—特に川平・比川を中心として—」『地域
文化研究 第1号』甲南大学地域文化研究会
中本正智・内間直仁(1975) 「牛の判型・屋判—八重山川平の例—」『沖縄文化 (44)』沖
縄文化協会
中松竹雄(1976) 「八重山方言の文法—竹富町黒島方言の助詞の形態と用法—」『琉球大学
教育学部紀要 (19)』琉球大学教育学部
宮良安彦(1976) 「八重山諸島の古代文芸の概観」『鑑賞日本古典文学第25巻) 南島文学』
角川書店
加治工真市(1976) 「沖縄県八重山鳩間方言動詞の活用」『人文学報 (117)』東京都立大学
当間一郎(1977) 「宮良当壮論」『新沖縄文学 (33)』沖縄タイムス社
宮良安彦「喜舎場永・の人と業績—『八重山古謡』と『八重山 (島) 民謡誌』」『新沖縄文
学 (33)』沖縄タイムス社
喜舎場永殉(1977) 『八重山民俗誌』沖縄タイムス社
鈴木正崇(1977) 「八重山の時間感覚」『沖縄文化 (47)』沖縄文化協会
宮城信勇(1977) 『八重山ことわざ辞典』沖縄タイムス社
宮城信勇(1977) 「八重山語「しら」から「さ」への音韻変化」『沖縄文化 (48)』沖縄文
化協会
高阪薫・秋山紀子・中林照明(1978) 「「いなくに」考」『地域文化研究 第2・3合併号』
甲南大学地域文化研究会
宮城信勇(1978) 「八重山方言と琉球方言古語」『八重山文化 (8)』東京・八重山文化研究会
植松明石(1978) 「八重山の年中儀礼—考察への予備的覚書 (1)」『沖縄文化研究 (5)』法
政大学沖縄文化研究所
狩俣恵一(1978) 「竹富島の種子取祭と芸能」『沖縄文化研究 (5)』法政大学沖縄文化研究

所

- 高良倉吉(1978) 「八重山キリシタン事件について」『沖縄文化研究 (5)』法政大学沖縄文化研究所
- 当間一郎(1978) 「与那国島に存する組踊写本の考察」『沖縄文化研究 (5)』法政大学沖縄文化研究所
- 宮良安彦(1978) 「八重山歌謡ゆんたの特質」『沖縄文化研究 (5)』法政大学沖縄文化研究所
- 当間一郎(1978) 「日本方言学の先駆者宮良当壯の生涯」『沖縄言語研究センター資料 1』沖縄言語研究センター
- 宮城信勇(1978) 「古事記の《あまひ》の解釈」『沖縄文化 (50)』沖縄文化協会
- 加治工真市(1978) 「八重山の親族語彙」『日本方言の語彙』三省堂
- 外間守善・宮良安彦(1979) 『南島歌謡大成 4 (八重山篇)』角川書店
- 西表宏(1979) 「ユンタのジャンル展開史上の位相」『沖縄文化 (51)』沖縄文化協会
- 狩俣恵一(1979) 「奄美諸島と八重山諸島のユングトゥをめぐって」『沖縄文化 (51)』沖縄文化協会
- 宮城信勇(1979) 「老岐方言と八重山方言の対照」『沖縄文化 (52)』沖縄文化協会
- 宮良泰平(1979) 『続八重山方言の素性』宮良 作
- 宮良当壯(1980) 『宮良当壯全集 8 八重山語彙 (乙編)』第一書房
- 内間直仁(1980) 「与那国方言の活用とその成立」『黒潮の民族・文化・言語』角川書店
- 加治工真市(1980) 「与那国方言の史的研究」『黒潮の民族・文化・言語』角川書店
- 宮良当壯(1980) 『宮良当壯全集 11 八重山古謡 歌謡論考』第一書房
- 宮良当壯(1980) 『宮良当壯全集 8 八重山語彙 (甲編)』第一書房
- 中松竹雄(1980) 「基礎語彙の比較的研究 (5) —八重山諸方言・その 1—」『琉球大学教育学部紀要 (24)』琉球大学教育学部
- 久倉京子(1981) 「私の南島方言打診—宮良当壯「南島語彙稿」の分布から—」『奄美郷土研究会報 (21)』同研究会
- 吉元政吉(1981) 『いつまでも残したい 与那国のことば』吉元政吉
- 加治工真市(1981) 「<研究ノート> 『宮良当壯全集』の編集に参加して」『都立大学論究 (18)』都立大学国語国文学会
- 中松竹雄(1981) 「基礎語彙の比較的研究 (6) —八重山諸島方言・その 2—」『琉球大学教育学部紀要 (25)』琉球大学教育学部
- 上村幸雄(1982) 「解題 宮良當壯「琉球諸島言語の国語学的研究」」『宮良當壯全集 第九卷』第一書房
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1982) 「与那国方言調査報告」『沖縄方言研究 (第 4 号)』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 宮城信勇(1982) 「『図説琉球語辞典』を読んで—石垣方言に関して—」『沖縄文化 (58)』沖縄文化協会
- 星勲(1982) 『西表島の村落と方言』友古堂
- 石垣繁(1982) 「与那国島比川村の「天人女房譚」—銘苧口説を中心に—」『琉球の言語と文化—仲宗根政善先生古稀記念—』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会

- 加治工真市(1982) 「琉球小浜方言の音韻研究序説」『琉球の言語と文化—仲宗根政善先生古稀記念—』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
- 上勢頭亨(1982) 「竹富島の鍛冶伝承」『沖縄文化研究 (9)』法政大学沖縄文化研究所
- 新城敏男(1982) 「八重山の家譜覚書」『沖縄文化研究 (9)』法政大学沖縄文化研究所
- 波照間永吉(1982) 「八重山歌謡の歌形の諸相」『沖縄文化研究 (9)』法政大学沖縄文化研究所
- 名嘉順一(1982) 「小字名の研究のころみ—石垣島のばあい—」『沖縄言語研究センター会報 33』沖縄言語研究センター
- 加治工真市(1982) 「宮良当壮論 (序)」『国文学 解釈と鑑賞 (第 47 巻 9 号)』至文堂
- 宮良安彦(1982) 「八重山歌謡「稲が種あよう」の形態」『国文学 解釈と鑑賞 (第 47 巻 9 号)』至文堂
- 大城学(1982) 「八重山民謡の「裏声」について」『沖縄文化 (59)』沖縄文化協会
- 中松竹雄(1983) 「基礎語彙の比較的研究 (7) —八重山諸島方言・その 3—」『琉球大学教育学部紀要 (26)』琉球大学教育学部
- 玉城政美(1983) 「八重山歌謡の歌形 1」『国文学論集 (琉球大学法文学部紀要) 27』琉球大学法文学部
- 上村幸雄(1983) 「八重山石垣方言の音声資料」『沖縄言語研究センター資料 42』沖縄言語研究センター
- 言語地理学定例研究会(1983) 「「琉球列島の言語の研究」全集落調査票用参考資料 (八重山方言)」『沖縄言語研究センター資料 44』沖縄言語研究センター
- 宮良安彦(1983) 「八重山諸島の民話 (1)」『琉球方言と周辺のことば (講義 Manual 3)』千葉大学教養部
- 言語地理学定例研究会(1983) 「『琉球列島の言語研究』全集落調査票用参考資料 (八重山方言)」『沖縄言語研究センター資料 43』沖縄言語研究センター
- 嵩西昇(1983) 「与那国島の「比川」の地名について」『南島の地名 (1)』南島地名研究センター
- 嵩西昇(1983) 「与那国の「比川」の地名について」『南島の地名 (1)』南島地名研究センター
- 加治工真市(1983) 「鳩間島の方言」『鳩間島誌』沖縄在鳩間郷友会
- 大城学(1983) 「鳩間島の祭祀と文芸—結願祭を中心に—」『沖縄文化研究 (10)』法政大学沖縄文化研究所
- 宮良当壮(1983) 『宮良当壮全集 18 八重山諸島物語・日本方言叢書・琉球文学選』第一書房
- 崎村弘文(1983) 「琉球先島方言のアクセント体系・再考」『鹿児島大学南方海域研究センター紀要 (第 4 巻第 1 号)』鹿児島大学南方海域研究センター
- 加治工真市(1983) 「八重山鳩間方言の助詞」『琉球の方言 (8)』法政大学沖縄文化研究所
- 宮良安彦(1984) 「方言資料をあつめて—「石垣方言文法形態論」の用例資料—」『国文学 解釈と鑑賞 (第 49 巻 1 号)』至文堂
- 吉元政吉・初枝(1984) 『続いつまでも残したい 与那国のことば』吉元政吉
- 玉城政美(1984) 「八重山歌謡の歌形 2」『琉球大学国文学論集 (第 28 号)』琉球大学法文

学部

- 町博光(1984)「西表島船浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要(19)』琉球大学法文学部
- 加治工真市(1984)「八重山方言概説」『講座方言学10—沖縄・奄美地方の方言—』国書刊行会
- 波照間永吉(1984)「八重山歌謡の形態—“場”と歌唱方法を中心に—」『文学(第52巻6号)』岩波書店
- 安溪遊地(1984)「与那国島関係文献目録」『南島の稲作文化—与那国島を中心に—』法政大学出版局
- 三木健(1984)「宮良当壮と言語研究—風雪の軌跡とその背景—」『南島地域史研究(1)』文献出版
- 上村孝二(1985)「宮良当壮の語源論について」『国語国文 薩摩路(第29号)』鹿児島大学国文学研究室
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1985)「与那国方言調査報告2」『沖縄方言研究(第7号)』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 石垣市史編集室(1985)『八重山関係文献目録』石垣市史編集室
- 玉城政美(1985)「八重山歌謡の歌形3」『国文学論集(琉球大学法文学部紀要)29』琉球大学法文学部
- 玉城政美(1985)「八重山歌謡の歌唱法—石垣市大浜の事例を中心に—」『国文学論集(琉球大学法文学部紀要)29』琉球大学法文学部
- 西表宏(1986)「沖縄・八重山歌謡「いきぬぼうじい」系歌謡の伝承の系譜」『香蘭女子短期大学研究紀要(28号)』香蘭女子短期大学
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1986)「与那国方言調査報告3」『沖縄方言研究(第8号)』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 加治工真市(1986)「鳩間方言の漁業語彙」『琉球の方言(10)』法政大学沖縄文化研究所
- 牧野清(1986)「「八重山」の島名起源考」『琉球新報』琉球新報社
- 新里孝和(1986)「竹富島の植物民俗資料」『名護博物館紀要2 あじまあ』名護市立博物館
- 山田武男著、安溪遊地・安溪貴子編(1986)『わが故郷(シマ)アントゥリ』ひるぎ社
- 西表宏(1987)「八重山歌謡の類歌の分類」『香蘭女子短期大学研究紀要(29号)』香蘭女子短期大学
- 牧野清(1987)「信覚(しがき)考—「石垣」の語源について—」『八重山日報』八重山日報
- 青山隆(1987)「琉球八重山方言における母音推移の言語学的分析及び琉球八重山方言、日本語祖語の音韻再建」『手塚山短期大学紀要(24)』手塚山短期大学人文・社会科学
- 高橋俊三ゼミ(1987)「与那国方言の語彙(上)」『琉球の方言(11)』法政大学沖縄文化研究所
- 高橋俊三ゼミ(1987)「与那国方言の語彙(下)」『琉球の方言(12)』法政大学沖縄文化研究所
- 新崎善仁(1987)「八重山歌謡の一考察—ユンタ・ジラバの違いについて—」『八重山文化

- 論叢〈喜舎場永殉生誕百年記念論文集〉』喜舎場永殉生誕百年記念事業期成
石垣繁(1987)「八重山諸島の古代歌謡—ユンタとジラバの異相について—」『八重山文化
論叢〈喜舎場永殉生誕百年記念論文集〉』喜舎場永殉生誕百年記念事業期成
加治工真市(1987)「鳩間節考」『八重山文化論叢〈喜舎場永殉生誕百年記念論文集〉』喜
舎場永殉生誕百年記念事業期成
宮城信勇(1987)「オヤケアカハチ・ホンガワラは同一人の呼称」『八重山文化論叢〈喜舎
場永殉生誕百年記念論文集〉』喜舎場永殉生誕百年記念事業期成
宮良安彦(1987)「八重山諸島の狂言」『八重山文化論叢〈喜舎場永殉生誕百年記念論文集
〉』喜舎場永殉生誕百年記念事業期成
崎村弘文(1987)「波照間島方言のアクセント体系」『南海研紀要 (8-1)』鹿児島大学南方
海域研究センター
西表宏(1987)「八重山・登野城方言の研究」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周
年記念』琉球方言論叢刊行委員会
加治工真市(1987)「八重山方言の比較音韻論序説」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ
30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
波照間永吉(1988)「八重山の信仰習俗覚書」『沖縄芸術の科学 第 1 号』沖縄県立芸術大
学付属研究所
波照間永吉(1988)「八重山の信仰習俗関係文献目録」『沖縄芸術の科学 第 1 号』沖縄県
立芸術大学付属研究所
牧野清(1988)「信覚(しがき)考—石垣の語源について—」『南島研究 (29)』南島研究
会
大野真男(1988)「西表島祖納方言における音対応と音変化」『琉球の方言 (13)』法政大
学沖縄文化研究所
加治工真市(1988)「鳩間方言の農業関係語彙」『琉球の方言 (13)』法政大学沖縄文化研
究所
久野真(1988)「西表島祖納方言の音韻体系」『琉球の方言 (13)』法政大学沖縄文化研
究所
波照間永吉(1989)「八重山の風土・歴史・文化」『沖縄芸術の科学 第 2 号』沖縄県立芸
術大学付属研究所
宮城信勇(1989)「あやごとアヨー」『沖縄文化 (72)』沖縄文化協会
名嘉真三成(1989)「八重山大浜方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要 (34)』琉球
大学教育学部
野原三義(1989)「竹富町祖納・古見方言の助詞研究」『南島文化 (第 11 号)』沖縄国際大
学南島文化研究所
加治工真市(1989)「八重山のユングトゥ」『文学 (第 57 巻 11 号)』岩波書店
大野真男(1990)「音対応と音変化」『琉球竹富島の方言』國學院大学日本文化研究所
大野真男(1990)「竹富の昔話」『琉球竹富島の方言』國學院大学日本文化研究所
久野真(1990)「竹富島方言の音韻体系」『琉球竹富島の方言』國學院大学日本文化研究所
久野マリ子(1990)「アクセント」『琉球竹富島の方言』國學院大学日本文化研究所
杉村孝夫(1990)「動詞・形容詞の活用」『琉球竹富島の方言』國學院大学日本文化研究所

- 加治工真市(1990) 「鳩間方言の住関係語彙」『琉球の方言 (15)』法政大学沖縄文化研究所
- 大野真雄(1990) 「波照間方言の助数詞—その形態と意味構造—」『琉球の方言 (14)』法政大学沖縄文化研究所
- 大野真男(1990) 「琉球波照間方言の助数詞—その形態と意味構造—」『琉球の方言 (14)』法政大学沖縄文化研究所
- 加治工真市(1990) 「鳩間方言食関係語彙」『琉球の方言 (14)』法政大学沖縄文化研究所
- 加治工真市(1991) 「鳩間方言の住関係語彙」『琉球の方言 (15)』法政大学沖縄文化研究所
- 狩俣恵一(1991) 「八重山諸島の物語的歌謡」『沖縄文化 (74)』沖縄文化協会
- 狩俣恵一(1991) 「異郷の神と神酒の歌」『沖縄文化 (75)』沖縄文化協会
- 波照間永吉(1991) 「[資料紹介] 昭和十五年八重山石垣小学校における「不正語調査表」」『沖縄文化 (75)』沖縄文化協会
- 宮城信勇(1991) 「『混効験集』の疑問語と石垣方言」『沖縄文化 (75)』沖縄文化協会
- 狩俣繁久(1992) 「八重山方言」『言語学大辞典 (下巻)』三省堂
- 高橋俊三(1992) 「与那国方言」『言語学大辞典 (第4巻)』三省堂
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1992) 「登野城・大川方言の助詞の研究」『沖縄方言研究 (第12号)』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 波照間永吉(1992) 「小浜島の御嶽の神歌」『沖縄芸術の科学 第5号』沖縄県立芸術大学附属研究所
- 加治工真市(1992) 「鳩間方言の祭祀関係語彙 (1)」『琉球の方言 (16)』法政大学沖縄文化研究所
- 大野真男(1992) 「新城下地島方言の音対応」『南琉球新城島の方言』國學院大学日本文化研究所
- 久野マリ子(1992) 「新城下地島の地名」『南琉球新城島の方言』國學院大学日本文化研究所
- 大野真男(1992) 「新城下地島の民俗に関する語彙」『南琉球新城島の方言』國學院大学日本文化研究所
- 久野真(1992) 「新城下地島方言の音韻」『南琉球新城島の方言』國學院大学日本文化研究所
- 久野マリ子(1992) 「新城下地島方言のアクセント」『南琉球新城島の方言』國學院大学日本文化研究所
- 杉村孝夫(1992) 「新城下地島方言の文法」『南琉球新城島の方言』國學院大学日本文化研究所
- 宮城信勇(1992) 「沖縄・石垣方言の助詞「ユ」」『沖縄文化 (76)』沖縄文化協会
- 宮良安彦(1992) 「石垣方言」『国文学 解釈と鑑賞 (第57巻 7号)』至文堂
- 小川学夫(1992) 「『南島雑話』所出の民謡と唄の場」『沖縄文化研究 (19)』法政大学沖縄文化研究所
- 山下欣一(1992) 「「根原金殿」をめぐる伝承—八重山諸島・竹富島の事例を中心に—」『沖縄文化研究 (19)』法政大学沖縄文化研究所

- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1993)『沖縄方言研究 第12号 登野城・大川方言の助詞の研究』
波照間永吉(1993)「小浜島の結願祭と狂言」『沖縄芸術の科学 第6号』沖縄県立芸術大
学附属研究所
- 加治工真市(1993)「鳩間方言の祭祀関係語彙(2)」『琉球の方言(17)』法政大学沖縄文
化研究所
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1994)「竹富島方言における助動詞・語彙の研究」『沖縄方言研究
(第14号)』沖縄国際大学高橋ゼミ
- 波照間永吉(1994)「西表島古見の結願祭と狂言」『沖縄芸術の科学 第7号』沖縄県立芸
術大学附属研究所
- 沖縄国際大学高橋ゼミ(1995)『沖縄方言研究 第14号 竹富島方言における助動詞・語
彙の研究』
- 内間直仁(1995)「著書紹介『琉球先島方言の総合的研究』」『琉球の方言(18・19)』法政
大学沖縄文化研究所
- 加治工真市(1995)「鳩間方言の人体関係語彙」『琉球の方言(18・19)』法政大学沖縄文
化研究所
- 野原三義(1995)「著書紹介『琉球与那国方言の研究』」『琉球の方言(18・19)』法政大学
沖縄文化研究所
- 宮城信勇(1995)「八重山石垣方言の文法—1.名詞 代名詞」『沖縄文化(81)』沖縄文化協
会
- 崎村弘文(1995)「沖縄県八重山郡竹富町方言の音調」『沖縄言語研究センター資料 123』
沖縄言語研究センター
- 宮良信詳(1995)『南琉球・八重山石垣方言の文法』くろしお出版
- 宮城信勇(1996)「八重山石垣方言の文法—2.動詞①—」『沖縄文化(83)』沖縄文化協会
- 加治工真市(1996)「波照間方言の音韻研究」『沖縄文化研究(22)』法政大学沖縄文化研
究所
- 波照間永吉(1996)「祭祀と歌謡—八重山」『岩波講座『日本文学史』第15巻 『琉球文
学、沖縄の文学』』岩波書店
- 宮城信勇(1996)「八重山石垣の文法—2.動詞②—」『沖縄文化(84)』沖縄文化協会
- 伊豆山敦子(1997)「琉球・石垣宮良方言の動詞語形変化」『獨協大学教養諸学研究 第31
巻第2号』
- 加治工真市(1997)「沖縄八重山鳩間方言の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井
書店
- 狩俣繁久(1997)「琉球列島の言語(八重山方言)」『言語学大辞典セレクション 日本列島
の言語』三省堂
- 宮城信勇(1997)「八重山石垣方言の文法—2.動詞④—」『沖縄文化(第86号)』沖縄文化
協会
- ウェインローレンス(1997)「鳩間方言のアクセント—名詞」『沖縄文化(85)』沖縄文化
協会
- 宮城信勇(1997)「八重山石垣の文法—2.動詞③—」『沖縄文化(85)』沖縄文化協会
- 加治工真市(1997)「琉球・竹富島方言の基礎語彙 分野 1、天地、気候の部」『琉球の方

- 言(21)』法政大学沖縄文化研究所
- 比嘉るり実(1998)「八重山・浦添における畳語の変化について」『方言 第6号 上巻』
沖縄国際大学野原ゼミ
- 加治工真市(1988)「琉球・竹富方言の基礎語彙 分野2、動物」『琉球の方言(22)』法政
大学沖縄文化研究所
- 池間苗(1988)『与那国ことば辞典』
- 有元光彦(1999)「琉球諸方言の動詞活用形の研究データ篇 与那国方言」『九州・沖縄方
言の動詞活用形を対象とした「方言差」の理論的解明 平成10(1998)年度安田
女子大学学術研究助成費 研究成果報告書』安田女子大学
- 加治工真市(1999)「竹富方言の基礎語彙一分野3、植物」『琉球の方言(23)』法政大学
沖縄文化研究所
- ローレンス・ウェイン(1999)「竹富島方言のa／・について」『琉球の方言(23)』法政
大学沖縄文化研究所
- 新垣公弥子(2000)「沖縄県石垣市宮良方言の活用体系」『日本文化論叢 創刊号』千葉大
学文学部日本文化学会
- 伊豆山敦子(2000)「琉球・八重山・石垣(宮良)方言の動詞言い切りの形」『アジア・ア
フリカ文法研究 29』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
- 加治工真市(2000)「竹富方言の基礎語彙一分野4、人体」『琉球の方言(24)』法政大学
沖縄文化研究所
- 西岡敏(2000)「石垣島北部方言の体言基礎語彙」『琉球の方言(24)』法政大学沖縄文化
研究所
- 狩俣繁久(2001)「石垣方言の位置づけ」『琉球八重山方言の動詞の研究』
- 狩俣繁久(2001)「二一世紀によむ宮良当壮」『宮良当壮全集 第21巻 月報』
- 伊豆山敦子(2001)「琉球・八重山(石垣宮良)方言条件表現とアスペクト・モダリティー
的側面」『獨協大学外国語学部言語文化学科 マテシス・ユニヴェルサリス 第5
巻 第2号』
- 加治工真市(2001)「竹富方言の基礎語彙一分野5、衣」『琉球の方言(25)』法政大学沖
縄文化研究所
- 鈴木重幸(2001)「琉球八重山方言の動詞の研究—石垣方言の動詞のアスペクトとテンス
(中間報告)—」『文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 平成11年度～平
成12年度研究成果報告書』
- 久野眞(2001)「日本の方言探訪[与那国編]」『言語』大修館書店
- 伊豆山敦子(2001)「八重山(石垣宮良)方言の「過去」をめぐる問題点」『獨協大学外国
語学部言語文化学科 マテシス・ユニヴェルサリス 第3巻第1号』
- 伊豆山敦子(2002)「琉球・八重山(石垣宮良)方言の文法」『消滅に瀕した方言語法の緊
急調査研究(1)「環太平洋の言語」日本成果報告書』
- 伊豆山敦子(2002)「琉球・八重山(与那国)方言の文法基礎研究」『消滅に瀕した方言語
法の緊急調査研究(2)「環太平洋の言語」日本成果報告書』
- 新垣公弥子(2002)「八重山宮良方言の活用」『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—伊良
部島長浜・西表島祖納方言を中心に—』

- 内間直仁(2002)「沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に—」『平成12年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書』
- 内間直仁(2002)「八重山西表島祖納方言」『平成12年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書』
- 内間直仁(2002)「八重山西表島祖納方言」『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に—』
- 中本謙(2002)「八重山白保方言の音韻」『平成12年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書』
- 加治工真市(2002)「竹富方言の基礎語彙—分野6(食)、7(住居)—」『琉球の方言(26)』法政大学沖縄文化研究所
- 加治工真市(2002)「与那国方言について」『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』
- 仲原穰(2002)「小浜島方言の音韻的特徴と問題点—概説と基礎語彙資料—」『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』
- 宮良安彦(2002)「石垣島川平村の民話」『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』
- 宮城信勇・加治工真市・波照間永吉・西岡敏(2002)『文部科学省特定領域研究環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 石垣方言語彙一覧』
- 宮城信勇(2003)『石垣方言辞典』沖縄タイムス社
- 石垣輪子(2003)「石垣市石垣方言と那覇市楚辺方言の敬語表現」『方言 第11号 下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 加治工真市(2003)「竹富方言の基礎語彙—分野8(民俗)、分野9(遊戯)—」『琉球の方言(27)』法政大学沖縄文化研究所
- 仲原穰(2003)「石垣島宮良方言の音韻研究序説」『琉球の方言(27)』法政大学沖縄文化研究所
- 狩俣繁久(2003)「[書評]『沖縄石垣方言辞典』宮城信勇著」『沖縄タイムス』
- 内間直仁(2004)「古代日本語のワ行子音の[b]音化について—宮古・八重山方言を中心に—」『国語学(第55巻2号)』
- 伊豆山敦子「琉球・八重山(石垣宮良)方言の条件表現」
- 狩俣繁久「[書評]『宮良當壮生誕百年記念論集』記念行事実行委員会」『沖縄タイムス』
- 久野真「波照間方言の音韻」『日本語論究1』和泉書院
- 宮里真紀「竹富町字竹富の音韻論的研究」『方言 第5号 上巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 伊豆山敦子(2005)「琉球語*i-(自動詞する)の文法化—文字資料の無い言語の研究例」『日本語の研究』(日本語学会)01-03
- 村上呂里(2006)「宮良当壮と柳田国男の間—言語教育論をめぐって—」『琉球大学教育学部紀要』68
- 宮良安彦(2007)「特集;方言と方言研究の現況—方言の現況点描石垣方言動詞論—動詞基本相・終止形」『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂)72-07
- 近藤健一郎(2009)「宮良長包作詞作曲「発音唱歌」(1919年)とその周辺(下)—発音矯正教育に関する歴史的視点から—」『南島文化』沖縄国際大学南島文化研究所紀要31

- 加治工真市 (2010) 「八重山方言研究史の二人・宮良當壯と宮城信勇 (とその母)」『国文学 解釈と鑑賞 特集：危機言語としてのアイヌ語と琉球語』75-01
- 下地賀代子 (2010) 「石垣・宮良方言の係助辞“-du”の文法的意味役割」『日本語文法 時空間に架ける日本語文法研究—内と外と過去と未来と—』10-02
- 荻野千砂子 (2010) 「琉球八重山地方の授受動詞の二方面敬語—宮良方言のウヨーホールンを中心に—」『国語の研究』36
- 呉屋孝治 (2010) 「八重山方言助詞「ガ」「ヌ」の研究」『琉球大学言語文化論叢』7
- 山田 真寛(2010-2012) 「事象複数性と述語構造の理論的・通言語的研究」
- 山田 真寛(2011) "消滅の危機の程度に係る判断基準・根拠について" 文化庁委託事業危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書.
- 宮良婦人会「宝ぬ島言葉 (タカラヌ シィマムニ)」宮良婦人会

その他 (関連文献)

- 東恩納寛惇 (1949) 「伊波君の想出」『沖縄文化 (10)』沖縄文化協会
- 金城朝永 (1950) 「沖縄の出来る話」『沖縄文化 (16)』沖縄文化協会
- 島袋源七 (1950) 「沖縄小話帳」『沖縄文化 (17)』沖縄文化協会
- 金城朝永 (1950) 「沖縄関係図書目録」『民族学研究 (15-2)』民族学振興会
- 金城朝永 (1950) 「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績—」『民族学研究 (15-2)』民族学振興会
- 金城朝永 (1953) 「地名「沖縄」の起源について」『<金田一京助博士古稀記念>言語民俗論叢』三省堂
- 服部四郎 (1955) 「沖縄方言の言語年代学的研究」『民族学研究 (19-2)』民族学振興会
- 塩田紀和 (1958) 「オキナワのことばの問題」『地名学研究 (7)』
- 東恩納寛惇 (1958) 『沖縄今昔』南方同胞援護会
- 仲原善忠 (1959) 「沖縄の口承文芸」『育英会報』
- 仲原善忠 (1959) 「沖縄の民俗—口承文芸—」『日本民俗学体系 (12)』平凡社
- 奥里将建 (1960) 「地名から観た古代沖縄」『南と北 (12)』南方同胞援護会
- 金田一春彦 (1960) 「東京方言における 1 音節名詞に対応する沖縄方言のアクセントについて」『琉球方言 (2)』琉球大学方言研究クラブ
- 仲原善忠 (1960) 「沖縄の民話 1」『育英会報』
- 仲原善忠 (1960) 「沖縄の民話 2」『育英会報』
- 仲宗根政善 (1960) 「沖縄方言の動詞の活用」『国語学 (41 集)』国語学会
- 成田義光 (1960) 「沖縄における Bilingualism について」『国語学 (41 集)』国語学会
- 外間守善 (1961) 「沖縄における外来語 (1)」『沖縄文化 (1)』沖縄文化協会
- 上村幸雄 (1961) 「方言の実態と共通語化の問題点—沖縄本島—」『方言学講座 (4)』東京堂
- 山口隆俊 (1961) 「沖縄での彼岸花の里呼び名」『言語生活 (120)』筑摩書房
- 松田正義 (1962) 「古音の宝庫沖縄—特に p・F・h について」『教室 (6-1)』大分大学
- 松田正義 (1963) 「沖縄ことばのユーモア—共通語で話す時にも出る方言的要素—」『教室 (7-1)』大分大学

- 屋比久浩（1963）「沖縄における言語転移の過程について」『人文社会科学研究（1）』
- 外間守善（1963）「沖縄における言語教育の歴史（正篇）」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社
- 岡本太郎・比嘉春潮 他（1963）「＜座参会＞沖縄のことばはどこへ行く」『言語生活（142）』筑摩書房
- 新里恵二（1963）「沖縄における標準語政策の功罪」『言語生活（142）』筑摩書房
- 成田義光（1963）『言語生活（142）』「沖縄の国語と外国語」筑摩書房
- 外間守善（1963）「沖縄における言語教育の歴史（続篇）」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社
- 成田義光（1964）「沖縄の言語生活」『人文社会科学研究（2）』
- 永積安明・外間守善（1965）「＜座談会＞沖縄学の今日的課題 近代文学と言語」『文学（第40巻 4号）』岩波書店
- 比嘉春潮（1965）「沖縄文学研究の歴史」『文学（第33巻 7号）』岩波書店
- 仲宗根政善（1965）「仲原先生をしのぶ」『沖縄文化（17）＜仲原善忠先生追悼特集号＞』
＜仲原善忠先生追悼特集号＞沖縄文化協会
- 上村幸雄（1965）「沖縄の方言」『文学（第33巻 7号）』岩波書店
- 石川清治（1966）「沖縄問題と研究の動向—1965年の沖縄関係書を通して—」『沖縄文化（20）』沖縄文化協会
- 蛭原秀夫（1967）「沖縄本島を訪ねて—方言収録の旅—」『文研月報（17-11）』
- 与儀利夫（1967）「沖縄における共通語の指導」『教室の窓中学国語（90）』
- 石川清治（1967）「沖縄研究の成果と展望—1966年—」『沖縄文化（23）』沖縄文化協会
- 外間守善（1967）「沖縄の古典「おもろさうし」—おもろさうしの仮名遣い—」『文学（第35巻 6号）』岩波書店
- 森岡健二（1967）『沖縄の文学』東海大学出版会
- 小嶺幸祺（1967）「変形文法とその適用—沖縄方言—」『北九州大学外国学部紀要（14）』北九州大学外国学部
- 都竹通年雄（1967）「「沖縄」の語源」『沖縄文化（25）』沖縄文化協会
- 真喜志興雄（1968）『沖縄語の音韻』比嘉興文堂
- 比嘉春潮（1968）「沖縄研究の本のことなど」『文学（第36巻 1号）』岩波書店
- 外間守善（1968）「沖縄の言語史」『文学（第36巻 1号）』岩波書店
- 外間守善（1968）「沖縄の言語史序説」『都立大学方言学会会報（27）』都立大学方言学会
- 大津不二也（1968）「国語と沖縄語の関係—主として動詞・形容詞について—」『国文学研究（4）』梅光女学院大学
- 比嘉春潮（1969）「私の沖縄」『北海道新聞』北海道新聞社
- 高橋俊三（1969）「「比嘉姓考」を批評する」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社
- 大津不二也（1969）「沖縄語における「語の活用」」『国文学研究（5）』梅光女学院大学
- 瀬川清子（1969）『＜民俗民芸双書47＞沖縄の婚姻』岩崎美術社
- 外間守善（1970）「沖縄方言と方言小辞典」『ワイドカラー日本（20）』
- 東京湾子（1970）「沖縄の共通語—バラエティーに富む構成—」『朝日ジャーナル』
- 大津不二也（1970）「沖縄語における造語法」『宇部短大学術報告（6）』宇部短期大学

- 大城立裕（1970）「沖縄で日本人になること—こころの自伝風に一」『叢書わが沖縄 第一卷 わが沖縄』木耳社
- 谷川健一（1970）『わが沖縄<叢書わが沖縄第一卷>』木耳社
- 柳宗悦（1970）「沖縄人に訴ふるの書」『叢書わが沖縄 第一卷 わが沖縄』木耳社
- 谷川健一（1970）『沖縄学の課題<叢書わが沖縄第二卷>』木耳社
- 外間守善（1970）「沖縄の古代とエサオモロ」『沖縄文化（29）』沖縄文化協会
- 内間直仁（1970）「沖縄方言における人称代名詞について」『都立大学方言学会会報（33）』都立大学方言学会
- 永積安明（1970）『沖縄離島』朝日新聞社
- 琉球大学方言研究クラブ（1970）「沖縄本島南部北部方言の境界を見つけるために」『琉球方言（11）』琉球大学方言研究クラブ
- 安部勇（1970）「沖縄人の祖国語音調」『音声学会会報 134』
- 新里金福（1970）「方言絶滅運動による差別—沖縄解放の未来像（上）—」『朝日ジャーナル』
- 安部勇（1970）「沖縄と方言のこと（雑見）」『音声学会会報 135』
- 湧上元雄（1970）「沖縄の年中行事と祭り」『日本の文化地理（17）』講談社
- 松本雅明（1971）『沖縄の歴史と文化』近藤出版社
- 高橋俊三（1971）「言語より見た沖縄の文化圏」『沖縄歴史研究（9）』沖縄歴史研究会
- 仲井真元楷（1971）『沖縄ことわざ全集』沖縄文教出版
- 谷川健一（1971）『村落共同体<叢書わが沖縄第四卷>』木耳社
- 古川満（1971）「沖縄地方における蛇蛸入譚と民俗」『国際大学国文学（3）』国際大学国文学研究室
- 外間守善（1971）『うりずんの島—沖縄文学と思想の底流—』沖縄タイムス社
- 谷川健一（1971）『起源論争<叢書わが沖縄第三卷>』木耳社
- 友寄英一郎（1971）「沖縄考古学文献解題」『叢書わが沖縄 第三卷 起源論争』木耳社
- 宮城栄昌（1972）「沖縄の教育について」『作文と教育（23-6）』
- 柴田武（1972）「沖縄方言をたずねて」『放送文化（27-2）』日本放送協会
- 柴田武（1972）「沖縄方言の特色」『放送文化（27-3）』日本放送協会
- 外間守善（1972）「沖縄方言形容詞の史的変遷」『現代言語学（服部四郎先生定年退官記念論文集）』三省堂
- 琉球政府文化財保護委員会監修（1972）『沖縄文化史辞典』東京堂
- 柴田武（1972）「沖縄方言から日本の将来を考える」『放送文化（27-4）』日本放送協会
- 多和田真一郎（1972）「沖縄本島方言の音韻」『都立大学方言学会会報（45）』都立大学方言学会
- 岡本恵徳（1972）「近代沖縄における文学活動」『文学（第40巻 4号）』岩波書店
- 霜多正次（1972）「沖縄方言と日本語—そこには七島灘が横たわっているか—」『文学（第40巻 4号）』岩波書店
- 仲程昌徳（1972）「沖縄の戦記文学」『文学（第40巻 4号）』岩波書店
- 比嘉実（1972）「十八世紀における沖縄文学の動向と展開」『文学（第40巻 4号）』岩波書店

- 日下部文夫 (1972) 「沖縄のことば」『国際文化 (215)』
- 森崎和江 (1972) 「民衆ことばの発生—沖縄植民地化の文化構造より—」『月刊 百科 (116)』
- 名嘉順一 (1972) 「沖縄の琉歌」『言語生活 (251)』筑摩書房
- 仲程昌徳 (1972) 「文学作品における沖縄の言葉」『言語生活 (251)』筑摩書房
- 喜舎場順 (1972) 「「沖縄の文学」の実践」『国語通信 (148)』筑摩書房
- 名嘉順一 (1972) 「沖縄の国語教育雑感」『国語通信 (148)』筑摩書房
- 中松竹雄 (1972) 「沖縄の民話と言語研究—質問に答えて—」『琉球の文化 (2)』
- 伊藤清司 (1972) 「沖縄の兄妹婚説話について」『沖縄学の課題<叢書わが沖縄第五巻>』
木耳社
- 窪徳忠 (1972) 「沖縄と中国文化—比較研究の必要性—」『沖縄学の課題<叢書わが沖縄第
五巻>』木耳社
- 桜井徳太郎 (1972) 「沖縄シャマニズムの原点—ヌジファと霊魂観」『沖縄学の課題<叢書
わが沖縄第五巻>』木耳社
- 谷川健一 (1972) 『沖縄学の課題<叢書わが沖縄第五巻>』木耳社
- 野口武徳 (1972) 「沖縄人による沖縄研究の提案—私の沖縄調査の反省から—」『沖縄学の
課題<叢書わが沖縄第五巻>』木耳社
- 外間守善編 (1972) 『沖縄文化論叢 5 言語篇』平凡社
- 仲松弥秀 (1973) 「村落の社会構造と祭祀的世界 (本島の部)」『沖縄の民俗学的研究—民
俗社会と世界像』民俗学振興会
- 幼方直吉 (1973) 「沖縄方言論争と柳宗悦」
- 沖縄県図書館協会 (1973) 『沖縄県郷土資料目録』新星図書
- 多和田真一郎 (1973) 「沖縄本島方言の動詞」『都立大学論究 (11)』都立大学国語国文学
会
- 外間守善 (1973) 「沖縄の辞書」『学燈 (70-6)』
- 外間守善 (1973) 「沖縄の文化と文化財」『世界 (第 331 号)』岩波書店
- 仲程昌徳 (1973) 「言葉のかげ—沖縄をうたった二つの詩集から—」『言語 (2-8)』大修館
書店
- 屋比久浩 (1973) 「沖縄の方言について」『月刊 言語 (Vol.2 No.8)』大修館書店
- 中松竹雄 (1973) 「原語による沖縄の民話 (1) —やま亀がまのユガタイ他—」『青い海 (28)』
青い海出版社
- 大城宜武 (1974) 「沖縄における高校生の情緒的意味に関する基礎的研究 (1)」『計量国語
学 (69)』
- 内間直仁 (1974) 「沖縄本島方言における動詞及び複合・派生用語の文法的カテゴリー」『都
立大学方言学会会報 (59)』都立大学方言学会
- 中松竹雄 (1974) 「原語による沖縄の民話 (2) —猫のユガタイ—」『青い海 (30)』青い海
出版社
- 湧上元雄 (1974) 「沖縄の民間信仰」『沖縄・奄美の民間信仰』明玄社
- 比嘉政夫 (1974) 「「門中」研究をめぐる諸問題—小川徹氏の論考を中心に—」『沖縄文化
研究 (1)』法政大学沖縄文化研究所
- 鴻山俊雄 (1974) 「沖縄の姓名」『日華月報 (93)』

- 琉球政府文化財保護委員会（1974）『沖縄の民俗資料 第1集』根元書房
- 大城立裕（1975）「民族と言語 沖縄で日本語の小説を書くこと」『国語の授業（11）』
- 大城宜武（1975）「沖縄における高校生の情緒的意味に関する基礎的研究（2）」『計量国語学（72）』
- 上村幸雄（1975）「＜各地方言のテキスト＞沖縄の方言」『方言と標準語—日本語方言学概説—』筑摩書房
- 外間守善（1975）「沖縄文化論—文学を中心として—」『世界（第351号）』岩波書店
- 金城朝永（1975）「沖縄県人著者目録」『沖縄文化（43）』沖縄文化協会
- 金城朝永（1975）「郷土趣味講座（1）」『沖縄文化（43）』沖縄文化協会
- 金城朝永（1975）「郷土趣味講座（2）」『沖縄文化（43）』沖縄文化協会
- 金城朝永（1975）「明治以降沖縄関係図書目録」『沖縄文化（43）』沖縄文化協会
- 沖縄県庁（1975）『沖縄対話（復刻版）』国書刊行会
- 仲本政世（1975）『沖縄語典（復刻版）』国書刊行会
- 仲程昌徳（1975）『山之口貌 詩とその軌跡』法政大学出版局
- 大城宜武（1975）「沖縄における高校生の情緒的意味に関する基礎的研究（3）」『計量国語学（74）』
- 岡本恵徳（1975）「沖縄における戦後の文学活動」『沖縄文化研究（2）』法政大学沖縄文化研究所
- 九学会連合沖縄調査委員会編（1976）『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂
- 仲程昌徳（1976）「『焰』について—原民喜ノート（1）』『琉球大学国文学論集（第21号）』琉球大学法文学部
- 比嘉政夫（1976）「沖縄民俗学の課題と伊波普猷」『沖縄学の黎明』沖縄文化協会
- 外間守善（1976）「伊波普猷の沖縄文学研究」『沖縄学の黎明』沖縄文化協会
- 土橋寛（1976）「日本文学と沖縄文学」『（鑑賞日本古典文学第25巻）南島文学』角川書店
- 仲程昌徳（1976）「抒情の変容」角川書店『（鑑賞日本古典文学第25巻）南島文学』
- 外間守善（1976）「沖縄文学の発生—呪言と叙事詩をめぐって—」『＜岩波講座 文学6＞文学の表現法』岩波書店
- 仲程昌徳（1977）「インフェリオリティ・コンプレックスからアイデンティティーへ—金城朝永私論—」『新沖縄文学（33）』沖縄タイムス社
- 仲松弥秀・谷川健一（1977）「沖縄地名考」『月刊 百科（177）』
- 仲程昌徳（1977）「『幼年画』について—原民喜ノート（2）』『琉球大学国文学論集（第21号）』琉球大学法文学部
- 田畑千秋（1977）「沖縄の古典にみる動物・植物」『沖縄文化（48）』沖縄文化協会
- 外間守善（1977）「沖縄の言語とその歴史」『岩波講座 日本語（11）』
- 本永守靖（1977）「沖縄県における児童の言語能力の分析的研究（1）」『琉球大学教育学部紀要（21-1）』琉球大学教育学部
- 大津不二也（1978）「沖縄語の統語法」『宇部短大学術報告（14）』宇部短期大学
- 仲程昌徳（1978）「『死と夢』について—原民喜ノート（3）』『琉球大学国文学論集（第22号）』琉球大学法文学部
- 本永守靖（1978）「戦後沖縄の教育復興と国語教育の出版」『沖縄言語研究センター資料5』

沖縄言語研究センター

- 桜井徳太郎（1978）「沖縄本島の冥界婚姻巫俗—ユタの関与するグソー・ヌ・ニービチ—」
『沖縄文化研究（5）』法政大学沖縄文化研究所
- 外間守善（1978）「沖縄の言語史」『日本の言語学 6 方言』大修館書店
- 中本正智（1978）「沖縄の親族語彙」『日本方言の語彙』三省堂
- 石川清治・本永守靖・大城宜武・東江平之（1978）「沖縄の児童の言語能力の分析的研究
（2）」『琉球大学教育学部紀要（22-1）』琉球大学教育学部
- 湧上元雄（1978）「沖縄の御嶽と伝承」『沖縄民俗研究（創刊号）』沖縄民俗研究会
- 仲程昌徳（1979）「『夏の花』について—原民喜ノート（4）」『琉球大学国文学論集（第23号）』琉球大学法文学部
- 湧上元雄（1979）「沖縄の御嶽と祭祀伝承」『沖縄地方の民間伝承』三弥井書店
- 島袋善光（1979）「近世沖縄の言語事情」『文献史料による近世沖縄の社会・文化史的研究』
琉球大学・短期大学部
- 岡本恵徳（1979）「沖縄の近代文学」『沖縄文化研究（6）』法政大学沖縄文化研究所
- 桜井徳太郎（1979）「沖縄民俗宗教の核—祝女イズムと巫女イズム—」『沖縄文化研究（6）』
法政大学沖縄文化研究所
- 中村哲（1979）「月と日と天上神座—沖縄での思考—」『沖縄文化研究（6）』法政大学沖縄
文化研究所
- 外間守善（1979）「沖縄文学の全体像」『沖縄文化研究（6）』法政大学沖縄文化研究所
- 屋比久浩（1979）「沖縄方言の動詞活用の記述から」『沖縄文化研究（6）』法政大学沖縄文
化研究所
- 外間守善（1979）『伊波普猷論』沖縄タイムス社
- 外間守善（1979）『沖縄文学の世界』角川書店
- 本永守靖（1979）「沖縄における児童生徒のことば」『琉球大学教育学部紀要（23-1）』琉
球大学教育学部
- 玉置和夫遺稿集刊行会（1979）『沖縄の植物と民俗—玉置和夫遺稿集—』玉置和夫遺稿集
刊行会
- 仲程昌徳（1980）「『原爆以後』について—原民喜ノート（5）」『琉球大学国文学論集（第
24号）』琉球大学法文学部
- 田港朝昭・比嘉政夫（1980）『文化系文献目録 25（沖縄に関する人文・社会科学の文献資
料目録）』日本学術会議第1部
- 玉栄清良（1980）「苔の下 通釈」『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）8-2』沖縄国際
大学文学部

社会言語学・言語教育・言語政策関連

- 青水生（1904）「近時の琉球教育を讀みて」『琉球教育』第99号 復刻版第10巻
- 篠原一三（1904）「普通語の普及について」『琉球教育』100号
- 伊波普猷（1911）『琉球語便覧』『伊波普猷全集』第一巻 平凡社
- 宮良長包（1916）「初学年児童の普通語につき」『沖縄教育』第106号 沖縄県教育会
- 伊波普猷（1930）「琉球と大和口」『文藝春秋』8巻3号、『伊波普猷全集』第八巻

- 伊波普猷(1930)「方言と国語政策 国語の南島への宏通」『早稲田大学新聞』12月11日、
『伊波普猷全集』第三卷
- 比嘉春潮(1935)「琉球語とその変化」『比嘉春潮全集』第三卷 沖縄タイムス社
- 安里彦紀(1937)『沖縄の近代教育』亜紀書房
- 山城宗雄(1939)「標準語励行の問題」『沖縄教育』第273号
- 寿岳文章(1940)「標準語と方言—沖縄口問題に関して」『月刊 民芸』月刊民芸
- 相馬貞三(1940)「方言の問題—沖縄の美しき魂達に捧ぐ」『月刊 民芸』月刊民芸
- 日本民芸協会同人(1940)「我等はこの目的のために特輯する」『月刊 民芸』月刊民芸
- 東恩納寛惇(1940)「沖縄県人の立場より」『月刊 民芸』月刊民芸
- 柳田国男(1940)「沖縄県の標準語教育」『月刊 民芸』月刊民芸
- 柳宗悦(1940)「国語問題に関し沖縄県学務部に答ふるの書」『月刊 民芸』月刊民芸
- 清水幾太郎(1940)「沖縄標準語励行に関して」『東京朝日新聞』東京朝日新聞社
- 柳宗悦(1940)「沖縄語の問題」『東京朝日新聞』東京朝日新聞社
- 田中俊雄(1940)「第2次沖縄県学務部の発表を論駁す—標準語の問題について—」『月刊
民芸』月刊民芸
- 杉山平助・田中俊雄(1940)「沖縄方言論争終結について」『月刊 民芸』月刊民芸
- 田中俊雄(1940)「沖縄県の標準語励行の現況」『月刊 民芸』月刊民芸
- 日本民芸協会(1940)「沖縄言語問題に対する意見書」『月刊 民芸』月刊民芸
- 島袋源七(1947)「阿兒奈波の人々」『沖縄文化叢説』中央公論社
- 安里延(1941)『日本南方発展史』三省堂
- 垣花良香(1943)「言語の戦時体制を叫ぶ」『沖縄教育』318号
- 上原秀雄(1943)「標準語励行に関する一考察」『沖縄教育』318号
- 桑江良行(1954)『改定 標準語対応 沖縄語の研究』崎間書店
- 服部四郎(1959)『日本語の系統』岩波書店
- 上沼八郎(1963)「戦後沖縄教育の歴史と現状—本土との比較を通して—」『教育学研究』
第30巻第1号 日本教育委員会
- 新里恵二(1963)「沖縄における標準語政策の功罪」『言語生活』1963年7月号
- 比嘉春潮(1963)座談会「沖縄のことばはどこへ行く」『言語生活』142号 pp.2-12 筑摩書房
- 成田義光(1964)「沖縄の言語生活」『人文社会科学研究』第2号 琉球大学人文社会科学研究所
- 上沼八郎(1966)『沖縄教育論—祖国復帰と教育問題—』南方同胞援護会
- 森田俊男(1967)『沖縄問題と国民教育の創造』明治図書
- 安里彦紀(1968)「沖縄教育の近代化を阻んだ歴史的要因についての研究」『琉球大学教育
学部紀要』第十一集別冊
- 那覇市役所 総務部市史編集室(1970)『那覇市史 資料篇 第二巻中3』
- 帆足登桅(1970)「言語ニ就イテ」那覇市役所総務部市史編集室編『那覇市史』資料篇第2巻中
の3 pp.124-5 琉球新報社
- 外間守善(1970)「沖縄における言語教育の歴史」谷川健一編『わが沖縄方言論争』叢書わが沖
縄第2巻 pp.187-216 木耳社
- 比嘉春潮(1971)「琉球語とその変化」『比嘉春潮全集(全4巻)』第3巻、文化・民族篇 沖縄タイ

ムス社

- 辺士名朝有（1971）「明治中期における沖縄教育政策（試論）」『沖縄歴史研究』第9号 沖縄歴史研究会
- 外間守善（1971）『沖縄の言語史』法政大学出版局
- 亀井孝（1973）『日本語系統論への道』吉川弘文館
- 上沼八郎（1976）「沖縄教育史—独自性の確認過程—」『世界教育史大系』 梅根悟監修・世界教育史研究会編 講談社
- 上沼八郎（1976）「沖縄の「方言論争」について—沖縄教育史の遺産と決意—」『地方史研究』第141号 地方史研究協議会
- 石川友紀（1977）「第二次世界大戦前の沖縄県における海外移民教育について」『海外教育』第六号 沖縄県高等学校海外教育研究協議会
- 藤原与一（1977）「方言と標準語」『岩波講座 日本語』第11巻 岩波書店
- 外間守善（1977）「方言札」『沖縄県史』別巻 沖縄近代史辞典 沖縄県
- 浅野誠・佐久川紀成（1978）「沖縄における廃藩置県後の小学校設立普及に関する研究—地方役人層の動向を中心に—」『琉球大学教育学部紀要』第20集第1部
- 阿波根直誠（1978）「「琉球処分」と教育政策—琉球藩時代の「留学生」と置県後の小学・師範教育に関連して—」『新沖縄文学』第三八号 沖縄タイムス社
- 佐竹道盛（1978）「沖縄近代教育の特質」『北海道教育大学紀要 第1部C 教育科学編』第二九巻第一号
- 阿波根直誠（1979）「沖縄における教育意識の変遷についての試論的研究—1870年代から1890年代における教育意識の史的分析—」『琉球大学教育学部紀要』第23集第1部
- 阿波根直誠（1980）「沖縄尋常師範学校時代における同化・臣民化教育—特に明治二十年代における軍事教育に関連して—」『沖縄県の戦前における師範学校を中心とする教員養成についての実証的研究』1979年度科学研究費補助金報告書
- 儀間園子（1984）「明治中期の沖縄教育界—本土出身教師と沖縄出身教師—」『史海』創刊号 史海同人
- 本永守靖（1984）「沖縄における児童生徒のことば」『琉球大学教育学部紀要』第27
- 船津好明（1986）「よみがえれ地方語 1～15」『琉球新報』(6/6～7/16)
- 赤嶺守（1987）「琉球復旧運動の一考察」『琉球・沖縄—その歴史と日本史像—』地方史研究協議会編 雄山閣
- 高島伸欣（1987）「皇民化教育と沖縄戦」藤原彰編著『沖縄戦と天皇制』立風書房
- 船津好明（1987）「沖縄文化のなかの方言の役割」『自主の道』第26号
- 屋比久浩（1987）「ウチナーヤマトゥグチとヤマトゥウチナーグチ」『国文学解釈と鑑賞』第52巻7号
- 船津好明（1988）『伝統文化の真髄 美しい沖縄の方言（ことば）①』技興社
- 屋嘉比収（1989）「可能性としての「方言論争」—柳宗悦の言説を読む」『新沖縄文学』第80号 沖縄タイムス社
- 近藤健一郎（1990～2005）「近代沖縄における方言札（1）～（7）」『愛知県立大学文学部論集（児童教育学科編）』第47～53号
- 又吉盛清（1990）『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房

- 村上呂里(1990)「今帰仁村における標準語教育—兼次小学校の場合—」『両輪』第四号 両輪の会
- 富山一郎(1990)『近代日本社会と「沖縄人」』日本経済評論社
- 浅野誠(1991)『沖縄の教育史』思文閣出版
- 永田高志(1991)「沖縄に生まれた共通語(文法編)」『琉球の方言』15
- 西岡敏(1992)「うちなー口をワープロする→沖縄方訓辞典の必要性」『沖諸言語研究センター資料』No.101
- 永田高志(1993)「沖縄に生まれた共通語(音韻・アクセント編)」『琉球の方言』17
- 高江洲頼子(1994)「ウチナーヤマトウグチ」沖縄言語研究センター報告 3
- 村上呂里(1994)「沖縄における「国語学力」に関する研究(一)」『教育方法学研究』第20巻 日本教育方法学会
- 本永守靖(1994)『琉球圏生活語の研究』春秋社
- 比屋根照夫(1995)「解説 同化論の成立と展開」比屋根照夫・伊佐眞一編『太田朝敷選集』中巻 第一書房
- 駒込武(1996)『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
- 野原三義(1996)「沖縄の若者方言」『沖縄文化研究』22
- 仲嶺政光(1997)「『方言講演』考 近代沖縄・伊波普猷と比嘉春潮と地域文化」『教育学年報 6 教育史像の再構築』世織書房
- ましこひでのり(1997)「国語の発明、方言の発明、国史の発明」『沖縄文化研究 23』法政大学沖縄文化研究所
- 島袋勉(1998)「近代沖縄教育における同化政策の展開」『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所 研究年報』第二二号
- 小熊英二(1998)『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社
- 長志珠絵(1998)『近代日本と国語ナショナリズム』吉川弘文館
- 真久田正(1998)「『沖縄語裁判闘争』から『おもろ』まで」『EDGE NO.7 特集・サツタルバスイ!?!/ウチナーグチの地政と時政』APO
- 中村淳(1999)「『うちなーぐち』の現状と展望」『ことばと社会』1号 三元社
- 西岡敏(1999)「琉球弧の言語①」『ことばと社会』1号 三元社
- 原聖(1999b)「少数言語の権利としての街頭地名表示」『言葉と社会』1号 三元社
- 安田敏朗(1999)『〈国語〉と〈方言〉のあいだ』人文書院
- 原聖(2000)「琉球弧の言語③」『ことばと社会』3号 三元社
- 比嘉清(2000)「琉球弧の言語④」『ことばと社会』4号 三元社
- 桑原真人・我部政男(2001)『蝦夷地と琉球』吉川弘文館
- 西村浩子(2001)「方言禁止から方言尊重へ、そして方言継承へ」『ことばと社会』5号 三元社
- 比嘉清(2001)「琉球弧の言語⑤」『ことばと社会』5号 三元社
- ましこひでのり(2001)「沖縄方言論争というアリーナのゆくえ」『環』2001年春号 藤原書店
- 山岡寧子(2001)「多言語社会研究会 第3回沖縄研究会報告」『ことばと社会』5号 三元社
- ましこ・ひでのり(2002)『ことばの政治社会学』三元社

- 梶村光郎 (2004) 「沖縄の標準語教育史」『沖縄県の国語教育史に関する実証的研究』2001～2002年度科学研究費補書
- 近藤健一郎 (2004) 「学校記念誌にみる近代沖縄における方言札」『南島史学』南島史学会
- 近藤健一郎 (2004) 「『沖縄県用尋常小学校読本』使用期 (1897～1904年度) の沖縄における標準語教育実践とその論理」『国語科教育』第五六集 全国大学国語教育学会
- 梶村光郎 (2005) 「『児童の産業』における地域語復権の試みと標準語教育」『琉球大学 言語文化論叢』第二号
- 近藤健一郎 (2006) 『近代沖縄における教育と国民統合』北海道大学出版会
- 井谷泰彦 (2006) 『沖縄の方言札』ボーダーインク
- 井谷泰彦 (2006) 『沖縄の方言札 さまよえる沖縄の言葉 (ウチナーグチ) をめぐる論考』ボーダーインク
- 近藤健一郎 (2006) 『近代沖縄における教育と国民統合』北海道大学出版会
- 花田俊典 (2006) 『沖縄はゴジラか— (反)・オリエンタリズム/南島/ヤポネシア—』花書院
- 古川ちかし、林珠雪、川口隆行 (2007) 『台湾韓国沖縄で日本語は何をしたのか—言語支配のもたらすもの』三元社
- 近藤健一郎 (2006) 『沖縄・問いを立てる - 2 方言札 言葉と身体』社会評論社
- 村上呂里 (2008) 「小学校「国語科」成立と沖縄地域—「普通語」概念に注目して」『日本・ベトナム比較言語教育史—沖縄から多言語社会をのぞむ』第二章 明石書店
- パトリック・ハインリッヒ+松尾慎 (2010) 『東アジアにおける言語復興 中国・台湾・沖縄を焦点に』三元社
- 沖縄大学地域研究所 (2013) 『琉球諸語の復興』蓉書房出版

沖縄方言辞典テキスト等

- 国立国語研究所編 (1966) 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 仲本政世 (1986) 『沖縄語辞典』国書刊行会
- 半田一郎 (1999) 『琉球語辞典: 那覇・首里を中心とする沖縄広域語準拠』大学書林
- 伊芸弘子編 (1992) 「沖縄 首里の昔話—小橋川共寛翁のチティバナシー—」三弥井書店
- 玉城雅巳 (1997) 『マンガから学ぶ沖縄語 (うちなーぐち)』南風社
- 仲村優子 (1997) 『黄金言葉 (くがにくとば) ウチーンチュが伝える ことわざ 200 編』琉球新報社
- 吉屋松金 (1999) 『実践うちなあぐち教本』南謡出版
- 沖縄文化社 (2001) 『ひとことウチナーグチ』沖縄文化社
- 長田昌明 (2002) 『沖縄方言 使えるうちなー口』わらべ書房
- 玉城雅巳 (2004) 『4コマ漫画で学ぶ沖縄語 (うちなーぐち)』南風社
- 高良 勉 (2005) 『ウチナーグチ (沖縄語) 練習帖』NHK 出版
- 長田昌明 (2005) 『沖縄の昔話 「うちなー口」で語り聞かせる ふる里の民話』わらべ書房
- 比嘉清 (2006) 『うちなあぐち賛歌』三元社
- 西岡敏 仲原穰 (2006) 『沖縄語の入門 (CD 付改訂版)—たのしいウチナーグチ—』白水社
- 金城春子 磯崎主佳 (2006) 『しまくとばであそぼうなんよう文庫』なんよう文庫
- 下川裕治 (2008) 『沖縄 ことば絵ブック』角川書店

屋比久壮実(2008)『沖縄の方言で楽しむ生き物 いちむし』アクアコーラル企画
儀間進(2009)『楽しいウチナーグチ』沖縄文化社
船津好明(2010)『沖縄口(うちなーぐち)さびらー沖縄語を話しましょう』琉球新報社
比嘉 清(2013)『分でおぼえるうちなーぐち』南謡出版
八木政男(2013)「うちなーぐちラーニング」メイドインオキナワドットコム

小説等(沖縄方言・国頭方言)

夏目漱石 宜志政信:訳(2001)『吾んねー猫どうやる』新星出版
夏目漱石 宜志政信:訳(2003)『沖縄方言版 坊っちゃん』新星出版
目取真俊(2009)『眼の奥の森』影書房
大城立裕(2011)『真北風(まにし)が吹けばー琉球組踊続十番』K&K プレス
夏目漱石 宜志政信:訳(2013)『吾んねー猫どうやる 完結編』新星出版
大城立裕(2013)『命凌じ坂(ぬちしぬじびら)』沖縄タイムス社

あとがき

石原昌英

本事業でフィールド調査等を実施した方言は、危機的な状況にある八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言の一部にすぎない。これらの諸方言については市町村で区切られる数多くの下位方言があり、さらにその下位に集落で話される方言がある。例えば、名護市の幸喜方言は、国頭方言の下位方言である名護方言のさらに下位方言（集落）となる。この最下層の方言は、距離的にわずかに離れた集落の語彙・発音等が微妙に異なるということが知られている。

八丈島及び奄美・琉球諸島には、数多くの集落が存在し、それぞれが独自の方言を有している。近年、これらの方言間に不均衡が見られるようになってきたと指摘されている。例えば、沖縄県においては、那覇・首里の方言がいわゆる「標準」方言とされ、地域集落の方言があまり重視されなくなっている。これらの地域集落で話されている方言は、危機的な状況がより深刻である。今回の事業で実施したように、地域集落の方言の実態を調査することは喫緊かつ重要な課題である。

執筆者紹介 (50 音順)

研究代表

石原 昌英 (琉球大学法文学部・国際沖縄研究所教授)

研究分担者

荻野 千砂子 (大分大学教育福祉学部准教授)

金田 章宏 (千葉大学人文社会科学研究科教授)

狩俣 繁久 (琉球大学法文学部・国際沖縄研究所教授)

木部 暢子 (国立国語研究所時空間変異研究系教授)

クリストファー・デイビス (琉球大学法文学部講師)

中本 謙 (琉球大学教育学部准教授)

仲原 穰 (琉球大学法文学部非常勤講師)

研究協力者

親川 志奈子 (琉球大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程)

當山 奈那 (琉球大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程)

文化庁委託事業

危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書

平成 26 年 3 月 10 日発行

国立大学法人琉球大学国際沖縄研究所

University of the Ryukyus International Institute for Okinawan Studies

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地

電話 : 098-895-8475
